
テイルズオブグレイセス＋α ～守る強さを炎と共に～

雪龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブグレイセス＋α　　＼守る強さを炎と共に＼

【Nコード】

N5820R

【作者名】

雪龍

【あらすじ】

タイトル通りTOGにオリキャラが登場します。

オリジナル展開もたまにあり。

現在フェンデルで実験止める為に頑張ってます。そして何やら波乱の展開…？

オリキャラ紹介／パーティ編／（前書き）

少しネタバレが含まれています。

ここを見るのは少し読み進めてからにした方が良いでしょう。

オリキャラ紹介くパーティー編く

ルイス・ラグゼリア

R u i s . L a g z e l i a

「大切な友達だから……お前を止める為に！俺は刀を振るんだ！！」
> i 3 8 6 0 2 — 3 6 6 6 <

ラント出身の17歳。黒髪。174?。63?。クラスは剣士。

一人称は『俺』。

アスベル達とは幼馴染。

他人の色恋沙汰は大好きでかなり鋭い。しかし自分の事になるとアスベル並みに鈍感。

特技(?)は忍び込む事。

武器は刀で、右利きだが、左手で刀を振っている。

六年間、ユイゴスという男の下で修行していた。

ヒューバートと一緒に闘技島で戦った時の事を『黒と青の閃光』と

呼ばれ、伝説となっている。

黒色が好きだが暗い所は苦手。

口より手が先に出てしまうタイプで、度々事件を起こしている。

上記の性格のせいで傷害罪でウィンドルで指名手配されているが、本人に反省の色は見えない。

エリス・ライレージ

E l i c e . L a i r e a g e

「私だって辛かったよ。でもルイスが、皆がいたから、今の私があ
るんだ」

ラント出身の17歳。長い銀髪。愛称はエリー。158?。45?。

クラスは治療銃士。

一人称は『私』。

明るく、元氣だが涙もろい。

ルイスには積極的にアプローチするものの氣付いてもらえない。

武器は槍で、回復術も使える。

大きな虫が苦手。(小さい虫なら大丈夫)

結構行動力がある。(ラントから一人でルイスを追ってグレルサイドに来るほど)

メイリ・アル・スロットス

Mayli. al. Srottes

「何や何や！兄ちゃんイケメンやな！！めっちゃタイプやわ。名前なんて言うん？」

緑色の肩ほどもである髪の20歳。160?。46?。クラスは？銃士。

関西弁で、一人称は『ウチ』。

イケメン好きの面食い。(特にルイスがお気に入り)

二丁拳銃使いで、術も使える万能型。

パスカル友達で、奔放過ぎる彼女を抑える役目を果たす。

しかしノリが良い為、メイリ自身も一緒にはしゃいでしまう事がある。

パスカルの友達だが、アンマルチア族という訳ではない。

マリクは『マリクはん』、ヒューバートは『ヒューやん』と呼んでいる。

フェザント・エドセル

Pheasant. Edsel

「失敗作でも何でも良い。僕は生きたいように生きるから」

茶髪のパ。19歳。177?。67?。クラスは?術弓士。

岡山弁で、一人称は『僕』。

パスカルと同等、或いはそれ以上に奔放で、ムードメイカー兼トラブルメイカー。

リチャードとは二年前に出逢い、友達になった。

武器は弓で、攻撃術も使える。

理解に苦しむ言動をとるが、パーティ内では日常茶飯事となっている。

リバインと面識があるようで、『失敗作』と呼ばれている。

ライトルーン

Lightloon

「あたしの事何も知らないくせに、何でそんな事言えるかなあ…!!」

オレンジ色の髪で、赤いバンダナをしている。19歳。165?。49?。クラスは召喚士。

一人称は『あたし』。

一行に出逢う直前まではストラタでスリをしていた。(ウィンドルへの逃亡資金を稼ぐため)

ヒューバートとは5年前に初めて出逢った。

本から動物を呼び出して戦う。正確には戦わせる。

因みに本で殴って戦う事も出来るが、滅多にしない。

ヒューバートの事を『ヒュー』と呼んでいる。

オリキャラ紹介／パーティ編／（後書き）

随時追加更新予定。

何か知りたい事があれば感想に書いてください。
その度に追加していこうと思っています。

術技紹介

ルイス・ラグゼリア

A技はアスベルと同じ。

B技？2

・魔神剣
まじんけん

テイルズシリーズお馴染の技。

・火斬衝
かざんしょう

雷斬衝の火バージョン。暴星バリアを破れる。

・火弾衝
かたんしょう

刀を振り下ろし敵に火の弾をぶつける技。暴星バリアを破れる。

火斬衝とは違う。

・衝皇震
しょうおうしん

アスベルと同じ。

B技？3

・紅蓮剣
ぐれんけん

これもお馴染の技。（強いて言うならフレンと同じ）

・烈壊桜
れつかいおう

アスベルと同じ。

・炎烈牙
えんれつが

炎を纏わせた刃で斬りつけた後、右足で蹴り飛ばす技。

・響風閃
きょうふうせん

素早く横に一閃しそのまま風と共に吹き飛ばす技。

・翔風輪
しょうふうりん

風を纏わせた刃で敵を打ち上げる技。

第一秘奥義

・紅蓮爆鎖塵
ぐれんばくさじん

炎の鎖で縛り、すれ違い様に斬りつけ爆発を起こす秘奥義。
秘奥義中の台詞は

『次で詰みだ！この技で塵と化せ！紅蓮！爆鎖塵！！』

エリス・ライレージ（エリー）

A技？1

・裂瞬^{れっしゅん}

槍で突く技。

台詞は『えいっ！』

？2

・閃華^{せんか}（ニュートラル）

槍で二度突く技。

台詞は『やあっ！』

・月影刃^{げつえいじん}（上下スティック）

鋭い突きを二発放つ技。（名前だけジュデイスのものと同じ）

・崩蹴月^{ほうしゅうげつ}（左スティック）

回し蹴りをした後、横から薙ぐ技。（名前だけジュデイスのものと
同じ）

A技？3

・真戒^{しんかい}（ニュートラル）

体の前で槍を回し攻撃する技。

台詞は『そこだっ！』

A技？4

・ 衡漸 こうぜん

槍に力を為一氣に突撃し、貫く技。

台詞は『突撃い！！』

B技？2

・ フォトン

テイルズシリーズおなじみの術。

詠唱は『煌めく光』

第一秘奥義

・ 冥王槍武閃 めいおうそうぶせん

槍を地面に突き刺し、相手の地面を盛り上がらせて浮かせ、その後槍で地面に撃ち落とす秘奥義。

秘奥義中の台詞は

『一氣に決めるよ！行くぞー！冥王槍武閃！！』

メイリ・アル・スロツテス

A技はパスカルと同じ。

？1は名前は一緒だが、弾を撃つ技となっている。

B技？2

・ エアーブルーム

黄色い弾を発射し、敵に被弾した時、花のような爆発を起こすメイリの術。

詠唱は『咲き狂う空の生命よ』
いのち

・ パドルブレイク

青い弾を発射し、敵に被弾した時、地面から水飛沫を上げる術。

詠唱は『出でよ、蒼穹の海神よ』
わだつみ

・ボムロック

炎の弾で敵を挟み撃ちにする術。

詠唱は『燃やして燃えろ、聖なる炎』

B技？4

・セイクリッドブレイカー

光と闇のレーザーを同時に放つ術。

詠唱は『悪しき魂破滅を齎し、聖なる魂浄化せよ』

第一秘奥義

・トリプルシューティング

最初に二発弾を発射し、最後にレーザーを撃ち、同時にぶつける

秘奥義。

秘奥義中の台詞は

『この技からは逃げ出せへんで！もう終いや、ふっ飛べ！トリプルシューティング！！』

フェザント・エドセル

A技？1

・矢響
しきやう

矢を放つ技。

台詞は『行けっ！』

A技？2

・連叉れんさ（ニュートラル）

スピードの違う二本の矢を放つ技。

遅い方の矢は敵を追跡し、突然速くなる。

台詞は『二発！』

・連舞爪れんぶそう（左スティック）

重ねた矢に爪の形をした力を纏わせ、引っ搔く技。

A技？3

・輝蒼天涯ライズアップ（上下スティック）

地面に矢を放ち、敵の足元から出し敵を浮かせる技。

名前の元ネタは『奇想天外』

・暴雀武刃アンチキラー（左スティック）

矢を滅茶苦茶に放つが途中で全て敵に軌道修正し、貫く技。

名前の元ネタは技の通り『傍若無人』

A技？4

・刺矢墳塵ヴァイオレット（上下スティック）

空中にいる敵に容赦なく矢を放つ技。

空中にいないと当たらないので輝蒼天涯などで浮かせないといけない。

名前の元ネタは『獅子奮迅』

B技？3

・ダークスリヴァー

二つの黒い刃が弧を描くように地を走り、対象を切り裂く術。

詠唱は『斬り裂け、闇の牙』

・ヒートクリスタル

マリクのアイシクルペインの火属性版。

詠唱は『天駆け急ぐ炎の結晶』

B技？4

・クレードルアロー

魔法陣に矢を放ち、幾つもの（10発）矢を放つ術。
因みに敵が一匹の場合、矢はその一匹に全て行く。

二匹の時は五本ずつ、三匹の時は三、三、四本ずつ。

詠唱は『闇を運ぶ暗黒の矢よ、仇なす者を虚空へ連れ去れ』

第一秘奥義

・アウェイクンスピリッツ

敵を数発殴り最後に蹴り飛ばし、黒い気を纏わせた矢を投げつけ貫く秘奥義。

秘奥義中の台詞は

『まだまだ終わりじゃねえで！はああああ！！アウェイクンスピリッツ！！』

第二秘奥義

・スペースエレメンツ

八つの流星と太陽を思わせる火球を投下する秘奥義。

秘奥義中の台詞は

『蒼穹に瞬く流星を見よ、遙か彼方の栄光を見よ！撃ち砕け、八つの生命、一つの創世！スペースエレメンツ！！』

ライトルーン

A技は少し特殊で、？がある限り本で殴る。

B技？3

・鋭鮫漠流えいこうばくる

鮫を呼び出し、噛みつかせた後、水となり弾けさせる技。

呼び出す時の詠唱は『流動する水よ、唸れ』

・豪散鳥
ごうさんちょう

鳥を呼び出し、放射状に弓矢のように飛ばし、攻撃する技。

呼び出す時の詠唱は『飛び立て』

B技? 4

・獅子嚇し
ししおび

獅子を呼び出し、噛み砕く技。

呼び出す時の詠唱は『夕闇喰らう咎めの牙で噛み砕け』

第一秘奥義

・王魔熊掌拳
おうまゆうしょうけん

熊を呼び出し、爪で切り裂いた後、上空に投げ、殴り飛ばす秘奥義。

秘奥義中の台詞は

『その一撃は破壊の力、全身全霊の力を掛けろ！王魔熊掌拳！！』

術技紹介（後書き）

こちらも随時追加更新予定。

プロローグ

俺の名前はルイス・ラグゼリア。

アスベル達とは幼馴染にあたる。

出逢ったのは確か俺が7歳の時だったから、11年前だな。

いつも元気で皆を振り回すアスベル。

弱気だが優しくて頭の良いヒューバート。

病弱でも人一倍がんばっていたシエリア。

そして皆のお姉ちゃん的存在（年下だが）エリー。

花畑で出逢って友達になったソフィ。

王都から来た時に友達になったリチャード。

そんな皆が俺は大好きだった。

アストン様の言いつけを破って勝手に裏山に行ったり、友情の誓い
をしたりと、とにかく楽しかった。

こんな毎日がずっと続くと思っていた。

だがそれは叶わぬ夢だった。

ソフィが死んだんだ。

得体の知らない魔物^{モンスター}によって。

誰もが事故だったからしょうがないと言った。

でもアスベルは自分のせいで死んでしまったんだと言った。

本当なら自分達も死んでいた。

でも生きていた。ソフィが命懸けで守ってくれたんだと皆思った。

そして、それに引き続きヒューバートがストラタのオズウェルという家に養子に出されたのだ。

そのことでアストン様に反発しアスベルまでもが家を出て行ってしまった。

俺は無力だった。

何も守れやしなかった。

そして俺は強くなると決意した。

数ヵ月後、俺は木刀の素振りをしていた。

そんな所へ世界中を旅しているという男性——ユイゴスに出逢った。

ユイゴスは俺を一目見て俺の弟子にならないかと言ってくれた。かなり嬉しかった。

強くなったらもう何も失わずに済む。そう思っていたから。

ある時、師匠ユイゴスがこんな事を聞いて来た。

「戦いにおいて何が一番必要か…分かるか？」

俺には正直さっぱりだった。

「その答えを見つけた時、お前は誰よりも強くなれる」

俺は毎日その答えを考えるようになった。

師匠に弟子入りしてから6年、師匠がまた旅立つと言った。
俺はそれに着いて行こうとしたが却下された。
でもその代りに俺は、あの時の答えを言った。

「師匠は俺に戦いにおいて何が一番大事か。聞きましたよね」
「ああ、答えは見つかったか？」

「はい、それは何かを守ろうと思う事だと俺は思います」
「…良い答えを見つけたな。その言葉を絶対に忘れるなよ」

そう言い残して、師匠は旅立った。
それから数ヵ月後俺達は、思いもよらない形で旅に発つ事になる。

プロローグ（後書き）

新連載始めちゃった。
でもまあ、もうひとつの方を優先して書くのでご了承ください。
とりあえずキャラ紹介します。

ルイス・ラグゼリア

R u i s . L a g z e l i a

ラント出身の18歳。黒髪。

アスベル達とは幼馴染。

他人の色恋沙汰は大好きでかなり鋭い。しかし自分の事はアスベル並みに鈍感。

武器は刀で、技は大体アスベルと同じ。

エリス・ライレージ

E l i c e . L a i r e a g e

ラント出身の17歳。銀髪。愛称はエリー。

明るく、元気だが涙もろい。

ルイスには積極的にアプローチするものの気付いてもらえない。
武器は槍で、回復術も使える。

的な感じです。

次回はアスベルとの再開です！
お楽しみに。

第1話 再会

「何っ！フレデリックさんが攫われた！？」

ルイスはバリーから聞いて、すぐさま飛び出した。

北ラント道に出て少し行くとフェンデル兵とフレデリックの姿があった。

「待てっ！フレデリックさんを返せ！！」

ルイスは九人のフェンデル兵に向かって啖呵を切った。

フェンデル兵は一斉にこっちを見て笑みを浮かべる。

一人で何が出来るとかとも思っているのだろう。

銃を持った二人がこちらに歩み寄ってくる。

片方が撃ってくるが、それをすんでの所で避け

「魔神剣！^{まじんけん}！」

刀を振り上げると、赤色の衝撃波が地を走り、撃ってきた方を倒す。もう一人も撃ってくるが、先程と同じように倒してやった。

「俺を舐めんなよ！」

フレデリックを捕まえている奴以外の六人がこちらに来る。

「∴1対6は卑怯だろ」

問答無用とでも言わんばかりに一斉に撃ってくる。

正直避けるので精一杯だ。
だがそこに

「魔神剣!!」

後ろから先程放った衝撃波と同じ物が、一人を倒す。

すぐさま振り返るとそこには、シェリア、エリー、ラントの兵の先頭に白い影が。

「アスベル!!」

「ルイス！心配したぞ。一人で出て行ったと聞いたから」

あっという間にフェンデル兵は倒され、フレデリックは救出された。だが向こう側から、大きな砲台を積んだ、機械を連れてフェンデル兵がやってきた。

「フェンデルはあんな物まで持ち込んでいるのか!？」

「やべえな、向こうも本気って事だろ」

「あんな物が街になだれこんだら、大変な事になる。何としてもここで食い止めないと」

「でも、あんなのどうやって倒すんだ?」

「地形を利用するのはどうだろう。例えば崖から落とすとか」

「そんなのどこに…あっ」

アスベルは正面に向きなおして言った。

「裏山の花畑ならそう遠くない」

アスベルは皆にラントへ戻るよう言うと、前に出て

「聞け、フェンデル兵！我はウィンドル王国騎士にして、ラント領主の子、アスベル！」

アスベルは剣を抜き、フェンデル兵に向けると続けた。

「そちらに真の勇気を持ち主あらば、出てきて我と戦え！」

アスベルは剣を構えなおす。

「ルイスも行け。ここは俺が何とかする」

「一人でかっこつけんなよ。それに…ほら」

そう言って後ろを指差す。

そこにはエリーと、シェリアが走って来ていた。

「…皆、花畑まで走るぞ！」

「追いつかれる！」

「後少しだ！皆がんばれ！」

花畑まで着くと、アスベルは崖まで寄って一体落とす。

「上手いじゃん！なら俺も」

そう言ってルイスも一体落とす。残りは四体。
だが

「ちょっと、ヤバいわよ！」

四人全員が崖まで追い込まれてしまった。
すると一体が、砲弾を撃ってくる。

何とか皆避けられたようだ。
だがどんどん迫ってくる。

とうとう一步も引けない状況になってしまった。

「俺はまた何も守れないで終わるのか？」

その言葉に、ルイスは驚いた。
全く同じ事を自分も考えていたからだ。

「そんなのは……嫌だあああっ！！！！！！」

そう叫んだ途端、全員の身体が光り出し、砲弾を弾く。
やがてその光は一点に集まり、柱の様になり、機械を吹き飛ばす。
その光がやむと、少女が姿を現した。

「まさか…あれって…」

「いや、でもそんな筈は…」

「ソフィー!？」

驚くのも束の間、生き残っていた一体がソフィに似た少女へと向かっていく。

「まずい！」

アスベルは少女の前に、庇うように立ち

「しょうおうしん衝皇震！」

横に一閃させて、衝撃を起こす。

「れっかいおう裂壊桜！」

「この名を以ちて裁け！リリジャス！」
「ほうしゅうげつ崩蹴月！」

それぞれが技を繰り出し最後に

「ようそうしゅうげき鷹爪襲撃！」

ソフィの一撃で機械は壊れた。

少女とアスベル達は向かい合っている。
何から聞けば良いのか分からないので、沈黙が続いている。
だがシェリアが前に出て

「ソフィ…なの？」

と聞いた。

だが少女は何も答えず、じっとこっちを見ているだけ。

「…ソフィの筈がない」

全員がアスベルの方を向く。

「そんな事があるわけがない…ソフィはあの時…七年前に死んだんだ」

「……ソフィ？」

少女は首を傾げながら聞いてくる。

「でも…まさか…記憶を失っているのか…？」

全員が目を見合わせる。

そしてアスベルが少女の前まで行き

「見て欲しいものがある。こっちへ来てくれ」

と言うと、大きな樹の前まで連れて行く。

そこにはアスベル、リチャード、ルイス、そしてソフィとエフィネア文字で書かれていた。

「七年前にリチャードが来た時、ここでソフィも交えて四人で友情の誓いをやったんだ」

樹を撫でながら言う。

「この木の幹を見てくれ。どうだ？何か思い出さないか？」

少女は樹の幹をじっと見た後、アスベルの方に向きなおして

「わからない」

と首を横に振りながら言った。

分かるはずがない。そう思っているのも心のどこかで期待をしていた。

「でも…」

「！」

「この樹を見ていると不思議な気持ちになる」

少女は樹をじっと眺めながら言った。

「とても大切な物を見ているような、そんな気になる」

「どういう…事？」

ずっと後ろで黙ってやり取りを見ていたルイスが、入ってきて

「常識的に考えるとソフィ本人って事はない。でも赤の他人って言うのはあまりにも…」

ソフィの顔を見ながら続ける。

「あまりにも、似過ぎてる」

その言葉の後また沈黙が数秒続いた。
だがアスベルが少女に近づき

「なあ、これからどうするんだ？良かったら一緒に来ないか？」

そう言いながら手を少女の頭に乗せるが、すぐに離す。
離された後少女は頭に自分の手を乗せる。

「私もそうした方が良いと思う。ここに一人じゃ危ないし」

エリーも続けて言う。

「じゃあ、急いで街に戻ろうぜ」

「ああ、あれから皆がどうなったかも心配だ」

「さあ、行きましょう」

シェリアが歩き出した後ろを少女が頭に手を乗せたまま、着いて行く。

アスベルも着いて行こうとすると、足元に何かが落ちているのが分かった。

「クロソフィの種……」

クロソフィと言うのは、ソフィの名前の由来となった花だ。
その種を拾い

「これは、ソフィが導いてくれた縁なのか…？」

「おーい、何やってるんだー？早くしろよー」

「あっ、今行く！」

ルイスの呼びかけに反応して、アスベルが走って追いかける。
クロソフィの種を握りしめて。

第1話 再会（後書き）

（雪龍）「いやー、この手があったかー」

（ルイス）「どんな手何だ？」

（雪）「うおっ！びっくりしたー。まさかこっちでもここに来る奴がいるとは」

（ル）「？ 何の事だ？」

（雪）「いや、何でもない」（カイン達もだけど、こっつて楽しいのか？）

（ル）「で、どんな手なんだ？」

（雪）「ああ、なんとね、台詞とかの事なんだけどさ」

（ル）「それがどうしたんだ？」

（雪）「プレイ動画見ながらだと正確な台詞が使えるんだよ！」

（ル）「：当り前だろ」

（雪）「えっ？」

（ル）「まあ、こんな感じで行くんでよろしく」

（雪）「ちよっ、待ってよ！！」（こっちでも強制終了かよっ！！）

第2話 長男として（前書き）

考えてみたけど、主人公はやはりアスベルですかね。
……じゃあ、ルイスの立場って一体…

第2話 長男として

ラントに戻るとバリーが泣いている男の子を連れてやってきた。

「皆は無事に逃げられたか？」

「はい、お陰様で全員無事に帰還出来ました。負傷者は何人か出ましたが…」

そう言うバリーは男の子に目をやる。

「お父さんが…ぼくのお父さんが…」

男の子は泣きながら、ゆっくりと呟く。

するとシェリアが、男の子の頭に手を置いて優しく話しかける。

「安心して。お父さんの事はお姉ちゃんが治してあげるから」

男の子は泣きやみ、シェリアを見上げる。

それを笑顔で返し、バリーの方を向く。

「負傷した人達はどこ？」

「広場にいる」

それを聞いてシェリアはアスベル達の方を向く。

「私は怪我をした人達の所に行きます」

「あっ、じゃあ、私も行くね」

二人はアスベルに礼をした後、男の子に着いて行った。

そして行っただのを確認すると、パリーが口を開く。

「彼女達は本当によくやってくれています」

そしてシェリア達が行った方向に振り返って、続ける。

「奇跡の力で俺達を癒してくれる。今のラントには天の使いの様な存在です」

「天の使い、ねえ：シェリアはそうでもエリーはおてんば過ぎるっしょ」

ルイスがいらない事を言ったがバリーはそれを無視する。

「フエンデル軍の状況は？」

アスベルも無視し顎に手をやりながら、バリーに尋ねる。

「ひとまず後退はしましたが、依然としてラントの領内に入り込んでます」

俯いていた顔を上げて続ける。

「奴らは、国境砦の手前に野営地を築いております」

国境砦と言うのは、その名の通りウィンドルとフエンデルの国境を結ぶ橋の様なものだ。

「そこを叩かない限り、本当に奴らを撤退させる事は出来ないと思います」

「野営地の詳しい位置は分かるか？」

「はい。以前アストン様にも詳しい報告書を提出しています」

「そうか。屋敷へ戻ったら調べてみよう」

アスベル達が歩き出そうとした時、バリーが何かを思い出したように呼び止めた。

「ケリー様とフレデリックさんがお屋敷でお待ちです」

「わかった。すぐに行く」

それを聞いてバリーは深くお辞儀をし、踵を返し歩き出す。

「七年ぶりか…まさかこんな形で戻ってくる事になるとはな」

「ほらほら、感傷に浸ってないでさっさと行こうぜ」

「そうだな。よし、行こうか」

屋敷に行くとケリーとフレデリックが庭で待っていた。

「アスベル！」

ケリーはアスベルの顔を見ると、口に手を当て、今にも泣きそうな

顔で話しかけてきた。

「母さん…ただいま戻りました」

「良かった…！あなたが帰ってきてくれて本当に良かった」

ケリーは遂に泣き出してしまった。

「お父様があんな事になってこれからどうなるのかと心配で心配で…」

「心細い思いをさせてすみませんでした」

アスベルは深々と頭を下げ詫びる。

「フレデリックも無事でよかった」

「助けていただいたご恩は一生忘れません」

「…父の葬儀は終わったのか？」

「はい。アスベル様の帰りを待たず、申し訳ございません。アストン様は最期までラントを思い、勇敢に戦い抜かれました」

「そうか…父の最期を看取ってくれてありがとう。フレデリック」

「もったいないお言葉でございます」

今更ながら、こんな口調で喋っているアスベルを見ると、七年前のアスベルしか知らないルイスにとって、かなり違和感があった。

「アスベル、もうどこへも行かないわね？」

ケリーは顔を上げ、涙を拭いてアスベルに尋ねる。

「お父様の後を継いでくれるわね？もう頼りはあなただけなのです

から」

「：俺が帰ってきたのは、母さんやラントの様子を見るためで：」

「アスベル、あなたまさかこんな状況だと言うのにまた王都へ戻るというのですか」

「母さんの言いたい事はもちろん分かっています。でも少しだけ時間を下さい」

アスベルは申し訳なくなってきたのかだんだん俯いていく。

「考えを：整理する時間を：」

それを聞いてケリーはまた俯いてしまう。

その様子を見て、フレデリックは話を変える。

「アスベル様のお部屋は以前のままにしております。今までの様にお使いください」

「ありがとうございます、フレデリック。ソフィ、俺は部屋へ行くが来るか？」

それにソフィは無言で頷いて答える。

それを見てアスベルは自分の部屋に行こうとする。

「アスベル：」

「すみません、母さん」

「で、どうするんだ？」

「！　ルイスか」

ルイスは壁にもたれかかって腕を組んでいる。

「まだちょっと悩んでるんだ」

「俺は好きにしても良いと思うぜ。夢だったんだろ？」

「だが…」

「まあ、街の皆は許さないだろうけどな。良く考えとけよ」

そう言うと、ルイスは部屋から出て行った。

「アスベル様、お茶をお持ちしました。それとルイスさんと何かお話でも？」

「ああ、フレデリックか。まあ、少しな。ところで今手紙を書いたので出しておいてくれないか？」

「これは…！ 騎士学校の退学届ではありませんか」

「俺は父の跡を継ぐ。俺はラント領主アストンの息子で長男なんだから」

「ケリー様にご報告いたします。きっとお喜びになるでしょう」

「ああ、それとフレデリック」

アスベルは先程バリーから聞いた事を思い出した。

「フェンデル軍の野営地に関する報告書があると聞いたんだが」

「それでしたら執務室にございます。よろしければ一緒に行ってお

出させていただきますか？」

「そうだな。よろしく頼む」

そして二人は執務室に向かった。

第2話 長男として（後書き）

（ル） 「何で強化月間駄目なんだよー」

（雪） 「てか何で許されると思ったの」

（ル） 「てか良いのか？」

（雪） 「何が？」

（ル） 「本編の台詞まんな上に、俺アスベルの台詞奪ってんだけど」

（雪） 「良いの良いの。その内オリジナルストーリーも入れようと思ってるから」

（ル） 「それより、俺の秘奥義考えとけよ」

（雪） 「任せとけ！！」

（ル） 「ホントに大丈夫か？」

（雪） 「次回はあのブラコンツンデレ眼鏡野郎が出てきます！」

（ル） 「すごい言い様だな」

（雪） 「では、お楽しみにー」

第3話 海辺の洞窟より（前書き）

オリジナルチャットなる物に挑戦してみました。
では、お楽しみください。

話の後半をを大きく変えました。

第3話 海辺の洞窟より

（親父もここでよくこうして書類を読んだっけ…）

アスベルは執務室の椅子に座って書類に目を通していた。

「フレデリック。ここに書かれている内容は今もその通りか？裏山の先にある海辺の洞窟を通れば、フェンデル軍の野営地の近くまで迫れると書いてあるが」

問いに対しフレデリックは無言で頷き答える。

「うまく洞窟を利用すれば野営地に奇襲をかける事もできそうだな…」

その時部屋にコンコンと言う音が響いた。

「失礼しますアスベル様」

声の主は部屋に入ってきてアスベルに近づいた。

「そのご様子だと新しいご領主様におなりになったのですか？」

「若輩者ではあるが、精一杯ラントの為に尽くそうと思う。バリー、よろしく頼む」

「こちらこそよろしく願います」

声の主——バリーは頭を下げ言った。

「早速ですがアスベル様。騎士団は動いてくれそうですか？今とな

つてはそれが頼りで…」

「残念ながら、難しそうなんだ…自分達の力で今の状況をなんとかしなければ」

「そうですか…」

バリーは不安になり俯いた。

「もちろんフェンデルへの対策は考えている」

「何かお考えがあるのですか？」

「フェンデル軍に対し攻勢に転じようと思う。海辺にある洞窟を使って敵の前線基地に夜襲をかけるんだ」

「なるほど。あの洞窟なら人目につかずに動けるかも」

「行動は少人数に分かれて行い、洞窟の出口の手前で集合する。そこで夜を待ち、奇襲をかける。攻撃の指揮は俺が執る」

「それ俺も行って良い？」

アスベルとバリーは急に話しかけられて驚く。

アスベルは隣に置いてあった自分の剣を取り構えた。

後ろの窓のサッシに座っている黒い影。

だがそれは、二人の見知った顔だった。

黒い髪で、服はアスベルと似ているが、地の色は黒く縁は黄色くてそれ以外の模様はなかった。

「ルイス!!」

「ルイス…何処から入って来たんだ？」

「何処からって…ここから」

そう言い開け放っている窓を指差す。

アスベルはまだしも、正面から見えるはずのバリーにさえ気付かれ

ないように入って来たらしい。

「ちゃんとドアから入ってきてくれ」

「俺にはこっちの方が合ってる気がしてな」

ルイスはサッシから降り、机の横にあった椅子に座る。

「で、俺も行って良いの？」

「いや、もしも俺達が失敗した時の為にラントにいてくれ」

「そんなに失敗するような作戦なのか？」

「どんな作戦でも絶対は無理」

「まあ良いや。そういう役も必要だろうしな」

「よろしく頼む」

ルイスは納得したのか、立ち上がり部屋から出ていく。

「ドアから出ろよ！」

ルイスはそんな事は気にせず、窓から出て行った。
空気を変えようとバリーは咳払いする。

「すいません。あいつには後でよく言っておきますので」

「いや、必要ないよ。ルイスは昔からああいう奴だったから」

「そうですか：ところで作戦はいつ決行ですか？」

「決行は今夜だ」

「そんな急にですか！？」

「激しい戦いの直後こそ敵に隙が生まれるんだ。今は好機だと思う」

アスベルは立ち上がり、続ける。

「この作戦を絶対に成功させ、フェンデル軍の脅威を取り除く！」
「了解しました。直ちに準備に取りかかります」

バリーは深々と一礼した後部屋を出て行った。
するとバリーと入れ替わり今度はシェリアとエリーが入って来た。

「その奇襲作戦に私達も加えてください」

「私達もフェンデル軍をなんとかしたいんだよ」

「シェリア…エリー…」

そしてソフィも近づいてきて

「……わたしも行く」

「ありがとう。皆、よろしく頼む」

「ちょっと待ったあ……!!」

またもや後ろから今度は大声で話しかけられた。と言うより怒鳴りこんできた。

やはりルイスだ。

「ちよっ！ルイス！！どこから入ってんの！？」

「そんな事はどうでも良い！何で三人は良くて俺は駄目なんだよ！お前はハーレムでも作る気か！？」

「ハーレム？何だそれ？」

アスベルの言葉にルイス、シェリア、エリーの三人は沈黙する。
一応アスベルは18歳だ。

「まあそんな事は良いとして、三人が行くなら俺も行くぞ！」
「アスベル。こうなったらルイスは曲げないよ」

「はあ…分かった。ルイスもよろしく頼む」

「サンキュー」

「よし。準備ができ次第出発しよう。昼の間に現地に到着して、そこで夜を待ちたい」

「わかりました」

一行は今北ラント道を歩いていった。

「ソフィ、あまり離れるなよ」

「うん」

そう言いながらソフィは側にあった花の所に走って行った。

「ホントに分かったのかね…」

「まあ、ちょっと位活発な方が良いのよ」

ルイスとエリーはソフィを見ながら話している。
シェリアはアスベルの方に近づいて

「どうしてその子をソフィって呼ぶの…？」

「どうしてって…名前が無いと不便だからな」

「まだ、あのソフィだとはっきりしていないのに…？」
「それは…」

先程からアスベルは少女をソフィと呼んでいるが、ソフィは七年前死んでしまっているのだ。

「あなたは現実を見ていないのよ…」

その言葉にアスベルは心を殴られた気分になった。

「あの頃とは…何もかも…違う…なのに…」

シエリアは消え入りそうな声で呟いた。

「…確かにあの頃とは色々変わってしまった」

アスベルは俯いて続ける。

「ソフィが死んで、ヒューバートがストラタへ行って、親父も死んでしまった。久しぶりに会った幼馴染はすっかりよそよそしくなっ
て昔のように笑ってくれない」

「あ…」

「分かってる！全部俺の責任だ！…分かっているからここに残ると決めたんだ」

「ねえ、このお花はなんて言うの？」

ソフィが走ってきて尋ねる。

手にはここにいる全員にとって、最も大切な花を握っていた。

「…クロソフィだ」

「ソフィと言う名前はこのクロソフィから取ったのよ」

「ソフィ：アスベルがわたしの事そう呼んでる」

「ごめん、勝手に…」

「いいよ。ソフィって呼んで。このお花、好き。あったかくて懐かしい感じ。このお花から取った名前とっても嬉しい」

「そんなに好きなら育ててみるか？」

そう言ってアスベルはポケットから種を取り出す。

「ほら、クロソフィの種だ。これをやるよ」

「これがクロソフィのお花になるの？」

「屋敷に戻ったら花壇に植えるといい」

「わかった」

「まーまー、こんな所で立ち話もあれだしさっさと行こうぜ」

ルイスがそう言うときアスベル、ソフィ、エリーの三人は洞窟に向かって再度歩き出した。

そしてシェリアも着いて行こうとするとルイスに止められた。

「全部俺の責任だ！なんてまだ全然分かってないよな…」

「………」

「俺達にも多少なりにも責任はある。それなのに…」

「それ以上は言わないでも分かっている。けど…」

「大丈夫だって。ちゃんと分かりあえるよ」

そう言うときシェリアは先に行った三人の所に走って行った。

「…たく、二人共不器用だったらありやしねえ」

ルイスもその後を追いかけるように走って行った。

「ここが洞窟の中か。ラントの領内だというのに来るのは初めてだな」

「ここまでは見つからなかったね」

「この先もそうだと良いが。よし、奥へ進もう」

洞窟に入って少し進むと、大きな水溜りの様なものがあつた。

「どうすんのこれ」

「泳ぐしかないようだな」

大体はそれに賛成していたが一人だけ反対している者がいた。

「わ、私…無理泳げない…」

エリーだ。

「えっ？お前って泳げなかったの？」

どうやらルイスやシェリアも知らなかったらしい。

「ごめん。私ここまでみたい…」

「しょうがねえなあ。ほら」

そう言っつてルイスはエリーの前で、しゃがみこみ乗るように言う。

「えっ!？」

「ここで帰るわけにもいかないし、一人だけ残していくのも駄目だろ」

「俺もそれが良いと思う…どうしたエリー、顔赤いぞ？」

「何だっつて？熱でもあるんじゃないか？」

本編をご覧になった事がある人は分かるだろうが、アスベルはかなり鈍感だ。

そしてルイスは他人の事はかなり鋭いが、自分が関係してくると途端に鈍感になる。

そう、グレイセス一番の鈍感と作者のオリキャラ一の鈍感の夢の共演しているのだ。

「じゃあ……」

エリーは押し負けてルイスの背中に乗った。

「お、重くない…?」

「ぜーんぜん」

こうして全員水の中を通る事が出来た。

オリジナルチャット—————恐ろしいほど—————

(アス) 「大丈夫か？皆」
(ルイ) 「俺は大丈夫だけど…エリーは大丈夫か？」
(エリ) 「うん…」
(ルイ) 「まだ顔が赤いぞ？やっぱり熱が…」
(エリ) 「だ、大丈夫だから！」
(ルイ) 「そうか。なら良いんだけど」
(シェ) 「鈍感が揃うと手がつけれないわ…」

オリジナルチャット————『ゆーわく』って？————

(ルイ) 「水に入ったり出たりと忙しいな」
(シェ) 「確かに…？」
(エリ) 「はー、ホントにびしょびしょになってもう嫌！」
(ルイ) 「とか言いながら人の前で服脱ぐのやめてもらっていい？」
(エリ) 「あ、あんたが向こう向きなさいよ！」
(ルイ) 「あっちはシェリアとソフィがいるし…」
(エリ) 「私は別に良いと？」
(ルイ) 「そう言うわけではなくて…」
(ソフ) 「あの二人仲良いね」
(シェ) 「そうね」(エリーまた失敗ね)

一行は何度か水の中を通過して少し広い場所に出た。

「もう少しで出口か？」

ルイスがそう言った次の瞬間、上から大きな緑色のスライム、クイーンスライムが現れた。

「何だこいつ！？」

「わあ、剣がたくさん刺さってるー」

「そんな事言ってる場合じゃない！皆構えろ！！」

ここからはしばらく声だけでお楽しみください。

「雷斬衝！」
らいざんしょう
ぐれんけん

「紅蓮剣！」

「この名を以ちて裁け、リリジャス！」

「仁麗閃！」
じんれいせん
げつえいじん

「月影刃！うっ、キモチワル…」

「大丈夫？ファーストエイド」

「ソフィ、使っても意味ないと思うぞ」

「ちよっ！皆前見ろ！」

「えっ？うわっ増えた！」

「俺が周りのちっこい奴相手するから皆はでっかい奴を！」

「「「分かった！！！！」」」

ここからは普通に行きます。

ルイスは一人で周りのスライムを相手し、残りの者はクイーンスラ

イムを相手した。

柔らかいので中々攻撃が通じないが少しずつダメージを与え、ようやく倒す事ができた。

所要時間はおよそ8分。

「やっと倒せたね……」

「ああ、てかコイツ何なんだ？」

「たぶん、ここに棲み付いてたんだろうな」

「じゃあ、私達が来なければこの魔物モンスターは……」

シェリアの言葉で空気が重くなる。

「だけどやらなきゃ俺達がやられてた」

「……………うん」

一行は勝利したが、良い気分ではなかった。
そんな気分の中で一行は夜が来るのを待った。

第4話 まさかの救援

数時間経って、ラント兵が全員集まった。

広場から外に出て、岩陰に身をひそめる。

アスベルが後ろを向いて頷く。

それが合図で、全員フェンデル軍の野営地に走った。

だが、そこはもぬけの殻だった。

「誰もいない…？　どういう事だ…？」

そこにいる誰もが驚いた。

その時ラントのある方角から、一人の兵が走って来た。

「アスベル様！　大変です！」

「どうした…？」

兵は息を少し整えると、報告を始めた。

「フェンデル軍の夜襲です！　敵は既に野営地を後にし、街へと迫っています！」

「何っ…？」

「行き違いになったの？　それともこちらの動きが向こうに気付かれたから？」

「くそっ…！！！」

ルイスは齒軋りして、一人で走っていく。

「俺達も早く戻ろう…！」

あの時無理を言って着いて行かなければこんな事には…!!

ルイスは道に倒れている兵を見る度に、自分を心の中で責めた。街の中に入ると、既にフェンデル軍が街の人を襲っていた。兵たちも応戦しているが、全くと言っていいほど歯が立たない。血が飛び交い、家は燃え、道にはひびが入っている。ルイスは刀を抜き、フェンデル兵に向かっていった。その時、ルイスの手が光り出した。

「これは…!!」

手が光り出してから体の奥底から、力が湧いてくる。そんな気がしていた。

「行ける!!」

止まっていた足を再度動かし、フェンデル兵に接近し

「火斬衝!!」
かざんしょう

刀を振り下ろすと、斬撃と共に火が噴き出し、フェンデル兵を襲う。

「しまった！もう街の中に！」

どうやらアスベル達も戻ってきたようだ。

シェリアは怪我人の手当てをしている。

突然一人のラント兵が叫ぶ。

「西ラント道の方からも軍勢が来たぞ！！」

その言葉にその場にいる全員が、そちらを向く。

そこには青い服に青い旗を持った軍勢——ストラタ軍がいた。

「全軍展開して攻撃開始。フェンデル軍を掃討せよ！」

先頭に立っている、隊長らしい男は眼鏡を元の位置に戻し、部下に命令した。

あっという間にストラタの軍勢が、次々にフェンデル兵を倒していく。

アスベルが隊長らしい男に近づこうとすると、フェンデル兵が立ちふさがる。

「くっ！こいつら！」

「ぐあっ！！」

後ろにいたフェンデル兵が、吹っ飛ぶ。

隊長らしい男が、両方に刃が付いている、両剣を振り回していた。

「あいつは…！？あそこにいるのは、もしかして…」

顔を見た途端昔の記憶が甦る。

背や顔つきが変わってはいるものの、確かに見覚えがある、否、アスベルにとって忘れるはずがない人物が立っていた。

「ヒューバート!!」

アスベルはヒューバートの横に立ち、戦いに加わる。

フェンデル兵を全て倒したのを確認して、アスベルはヒューバートの方を向く。

「ヒューバート…帰ってきてくれたんだな」

「少佐。掃討が終わりました」

「少佐!? お前そんなに偉くなったのか?」

ヒューバートは何も言わずに、住民がいる階段の方へ向かう。

階段を登り終え、住民の前に立つと、演説のように話し始めた。

「ラントの皆さんご安心ください! 皆さんの仇敵のフェンデル軍は我らストラタ軍の手により、この街から駆逐されました!」

ヒューバートは顎に手を当て続ける。

「皆さんは何故我々が来たのか、疑問に思われている事でしょう。私自身がその答えとなります」

顎に当てていた手を胸の前に持っていき、更に続ける。

「私の名はヒューバート・オズウェル。かつての姓はラントでした。先の戦いで戦死した領主アストンの息子です!!」

住民達から歓声上がる。
それを左手で制止させる。

「私は今はストラタの人間ですが、故郷ラントに関しては常々格別の思いを抱いてきました。ですからラントの苦境を知り、いてもたってもいられず、こうして助けに来たのです!」

またもや住民達から歓声上がる。

「ここで皆さんにご報告する事があります」

「ストラタとウィンドルはこの度同盟を締結いたしました。我々は皆さんの味方です!!」

第4話 まさかの救援（後書き）

（ル） 「さて、とうとう始めやがったな……!!」

（雪） 「げっ、ルイス……」

（エ） 「まあまあ、良いじゃん♪」

（ル） 「いや、今回で俺に恥かかせやがった！絶対^{ぜって}え許さねえ」

（エ） 「それはあんたの勘違いでしょーが!!」

（雪） 「では、今回出てきたオリ技紹介で今回は終わります」

火斬衝^{かざんしょう}

B技 ? 2 威力210 ヒット数2

有効特性…暴星，火傷

使用者…ルイス

雷斬衝の火バージョン。

暴星バリアを破れる。

（雪） 「では次回もお楽しみに！」

（ル） 「待てえええええ!!!!」

第5話 追放（前書き）

アスベルとヒューバートの決闘の所は飛ばすので、少しと言うより、結構短いです。

第5話 追放

ラントを出た所で立ち止まると、ストラタ兵に背中を押された。アスベルはヒューバートとの決闘に敗れ、ラントを追放されたのだ。一度振り返って、ラントを見た後再度歩き始めたら、後ろから聞きのれた声に呼び止められた。

「ソフィ：俺についてきたら駄目だ。街へ戻るんだ。シェリアの所へ行くと良い。彼女ならきつと：」

ソフィは首を傾げる。

ストラタ兵はぐずぐずするな！と怒鳴る。

アスベルは何も言わず、歩き始めたが、ソフィが小走りになってついて来た。

「アスベル、ヒューバート：こんな事になってしまふなんて」

屋敷の庭でシェリアは一人佇んでいた。するとそこにシェリアの祖父である、フレデリックがやって来た。

「雨が降りそうだ。中に入っていないさい」

「もう私は昔の私じゃないわ。心配しなくても大丈夫よ」

「たとえばお前の体が丈夫になったとしても心配は尽きんよ」

シェリアは俯く。

「…みんな…変わってしまったのね」

それを聞いてフレデリックは、いつものように微笑みながら話す。

「お前たちはまだ若い。これからより良い方向へ変わっていけばいい。たとえ今が苦しくても、立ち向かう事を恐れてはいかんのだよ」

「おじいちゃん…」

「ぐす…さすがフレデリックさん…良い事言うなあ」

ルイスが何処からともなく、泣きながらやって来た。

「ルイス！？何で此処に！？」

「いやあ、アスベルとヒューバートの決闘をちよつと見てたんだよね」

「じゃあ、何故止めなかったの？」

「止める必要が無いと思ったから。いやあ、それにしてもアスベルはてんで駄目だったね」

ルイスが涙をようやく止め、言った。

「どういう事？」

「ヒューバートに挑発されて、全く集中できてなかった。挑発に乗ってさえいなければ、もうちょいマシだったろうに…」

ルイスは少し笑みを浮かべながら言う。
シェリアは何も言わない。

「…今のあいつを一人にしたら、何しでかすか分かんねえ。だから俺もちよっと思って来るわ」

そう言うと、ルイスは走って行ってしまった。
シェリアはその背中をただ見守ることしかできなかった。

（ルイス、アスベル様を頼みましたぞ）

その頃、アスベルとソフィは小屋の手前まで来ていた。

「ソフィ、もういい。ラントへ戻るんだ」

「…守る」

ソフィはじつとアスベルを見つめ、そう言った。

その言葉にアスベルは、目を見開いて驚く。

「はは…懐かしいな。そう言えば昔、そんな事を言われたのもこの辺りだったか。女の子に守るって言われて悔しくて…守るのは俺だ、

って張りきったけど結局駄目だった。そして、今も…」

アスベルはその場に崩れ落ちる。
そして無情にも雨まで降りだす。

「何一つ出来やしないんだ！俺は…！あの頃も、今も…！」

アスベルは悔しそうに眼を閉じる。

そして、頭に何かとても優しく、温かい物が乗せられた。
ソフィの手だ。

雨はまだやむ気配が無い。

その雨は全てを流してしまいそうだった。

いっそ、流れてしまえば良いのに。

痛みも、苦しみも、憎しみも――――

悲しみも…

第5話 追放（後書き）

（ル）「何最後の。なんかかつこよさげじゃね？」

（雪）「でしょ！春休み明けの僕は一味違うよ！」

（ル）「でも短かったけどな。いつもの半分位だよ」

（雪）「…それ言っちゃう？」

（ル）「それは置いて、たまにはちゃんと次回予告やってみようかな」

（雪）「おっ、頼んだよ！」

（ル）「次回はいいよりチャード登場！」

（雪）「新オリキャラも出るかもね」

（ル）「マジか!？」

（雪）「多分!!」

（ル）「…お前作者だろ？」

第6話 死の疑惑

アスベルとソフィは小屋で雨がやむのを待っていた。

「取り乱して悪かった。俺相当に見苦しかったな…」

二人は暖炉の火で温まっていた。

アスベルは胡坐をかいたままソフィに尋ねる。

「ソフィ…このまま俺と一緒に来る気か？」

ソフィはただ黙って頷いた。

「そうか…だったらせめてソフィだけは守らないとな。それだけは…なんとしても…」

アスベルの声がだんだん弱弱しくなってくる。

アスベルは頭に手を当てる。

「…おかしいな。さっきから頭がぐらぐらする」

こんどはソフィが手を当てる。

「あたま、あつい」

「くそっ！こんな時に…」

アスベルは立ち上がろうとするが、後ろに倒れてしまう。ソフィが思わず「アスベル！」と叫ぶ。

「はあ…はあ…み、水…」

「おみず、持って来る！待ってて」

ソフィは急いで小屋を出て行った。

アスベルはそれを止めることもできず、目を閉じた。

「はあ…何やねん。雨が降るなんて聞いてへんで」

アスベルは声に反応して、目を開けた。
声からして女性の様だ。

「あれ？誰か倒れとるわ。大丈夫か？」

「あ……」

何か言おうとしたが、声が出ず、体も動かなかった。

「喋れへんの？…こら大変やな」

「アスベル？」

またもや小屋の扉が開き、今度は聞きなれた声がアスベルの耳に届いた。

「あなた、誰？」

「ウチ？ウチはメイリ。メイリ・アル・スロツテスや。それよりこの子風邪ひいとるみたいやけど…水持って来たんか」

ソフィは黙って頷く。

「水飲めそうか？…無理か。しゃーないなあ」

メイリはアスベルに手をかざした。

すると、メイリの手から光が出てきて、アスベルの身体を包む。

「これでだいぶマシになるやろ」

「うっ…ん…」

アスベルは上半身を起こした。

すると、メイリが突然叫んだ。

「何や何や！兄ちゃんイケメンやな！！めっちゃタイプやわ。名前なんて言うん？」

「アスベル・ラント…そっちはソフィだ」

「アスベルにソフィね。覚えてたわ」

メイリが足を伸ばして座る。

その瞬間外から声が聞こえた。

「おい、この小屋怪しくないか？」

「中を調べてみるか」

どうやら二人、もしくはそれ以上いるようだ。

「ん？何かあったの？」

「ルイス！？」

次に聞こえてきたのは、紛れもないルイスの声だった。

「一般人には関係ない！どっか行つてろ！！」

「いや、俺もこの部屋の中を確認したいんだけど」

「何故だ？」

「友達がラント追放されちゃってさ…もしかしたらここにいるかな
あと思つて」

「そいつの名は？」

「何で言わないと駄目なの？」

「言わない場合公務執行妨害として牢屋にぶち込んでやる！！」

「あんたらさあ…こんなん公務執行妨害になったら滅茶苦茶理不
尽じゃねえか。ちゃんと勉強しろよ」

「貴様、舐めた態度をとるのもいい加減にしろよ！！」

剣を抜いた音が聞こえてきた。

それに合わせて、もう一人も剣を抜く。

「あんたらそれでも騎士か？一般人に剣を向けるなんて正気か？」

「騎士！？」

それを聞いてアスベルは急いで外に向かった。

「どうしたんだ!? ルイス!」

「おっ、アスベ——」

「アスベル・ラント!!」

二人いる騎士の片方が、剣を向けながら叫ぶ。

「我々と来てもらおうか」

「お前達、誰だ…?」

「何や? 急に飛び出して」

「アスベル、どうしたの?」

「二人とも! 出てきちゃ駄目だ!!」

アスベルが二人に向かって言う。

その瞬間二人の騎士は倒れる。

「…ルイス?」

「いや、何もしてないのに公務執行妨害なんて言われたからさ。どうせなら本当にやっちゃおうかと…」

「わあ!!!!」

後ろにいたメイリがルイスを見て、叫ぶ。

「何や! そっちの兄ちゃんもイケメンやな! 名前は?」

「ルイスだ」

「やーん、メツチャタイプやわ〜♪」

ルイスは苦笑しながらメイリを見ている。

「そういえば、ソフィも一緒だったんだな」

「一緒に来るって聞かなくてな。それよりこいつらの目的は何だったんだ？」

「アスベル、大丈夫？」

ソフィがアスベルに尋ねる。

「何だ？怪我でもしてんのか？」

「いや、何でもない。ソフィ、ありがとう」

ルイスはアスベルの態度に違和感を感じたが、深くは聞かなかった。

「それよりこれからどうするんだ？」

「とりあえず、ここにこれ以上留まるのは危険だ。港へ行こう」

「ウチもついて行ってエエか？」

「良いけど…何処かへ行く途中ではなかったのか？」

「エエねん。別にまた来ればいいだけやし」

「そうか。じゃあ行こう」

こうしてアスベルは新たな仲間と共に、バロニアへ向かうのだった。

オリジナルチャット———何だったんだ？———

(メイ) 「さっきの奴ら何やったんや？」

(アス) 「あれはウィンドルの騎士だよ。でも何故…」

(ルイ) 「おい、早くしないと船が行っちゃまうぞ」

(アス) 「そうだな。急ごう」 (バロニアに何かあったのか…?)

一行は何とかバロニアまで来ていた。

「よし、バロニア城へ行こう」

「バロニア城に行って何す————」

「やはりか」

後ろから声がして、振り返ってみると先程の騎士がいた。

「バロニア城へ行ってどうするつもりだ！」

「リチャード殿下に会いに行くのかな？」

「あんたらなんなん。鬱陶しいで」

メイリが邪魔くさそうに言う。

それを無視して、騎士は笑みを浮かべアスベルを見る。

「凶星か。死んだはずのリチャード殿下にどうしたら会えるというのだ？アスベル」

「死んだ…？リチャードが！？どういう事だ！？」

「猿芝居をしても無駄だ。お前がとぼけているのは百も承知だ。さ

あ、お前の知っている事を話してもらおう」

「…いい加減にしろよ…!!」

先程まで黙っていたルイスが騎士を睨む。

「リチャードが死んだ？ しかもアスベルを疑ってる？ ふざけんのもいい加減にしろよ…!!」

「黙れ！ 犯罪者共め!!」

「ふざけんなっつったろうが…!!」

ルイスは一気に刀を抜き、騎士を斬りつける。

そして、もう一人の騎士も剣を抜かせる前に斬る。

「急所は外してる。二度とさつきみてえな事言うなよ…!!」

「ぐ…くそっ…!」

「ルイス…」

「ちよお、ヤバいで!! 騎士に手え出したらアカンやん!! まあ、スッキリしたけど…」

「確かに…逃げるぞ…!!」

一行はとりあえず走った。

（リチャード…本当に死んでしまったのか？）

オリジナルチャット————ヒーローは手を汚しても…————

（メイ）「いやあ、ルイスかっこよかったなあ」

（ルイ）「そんな事は…」

(ソフ) 「うん、かつこ良かった」

(ルイ) 「ソフィまで…」

(メイ) 「もう、さっきの調子でどんどん騎士を倒してってや」

(ルイ) 「…俺にそこまでの罪を被れと？」

一行は聖堂に辿りついていった。

「アスベル、この建物に何かあるの？」

「…昔この聖堂の中に隠し通路の入り口があった。今はどうなんだろうな」

「ほな、行ってみるか？」

「…そうだな」

アスベルは頷く。

此処に来たのも、何かある気がしたからだ。

アスベルが扉に近づこうとすると、ソフィが思い切り扉を殴って破った。

「おいおい、また扉を破ったのか」

「…また？」

ソフィは首を傾げながら尋ねる。

「あ、いや、そうじゃないか。ごめんごめん間違えた」

「それにしてもソフィは凄いな。扉を素手で破ってもうたで」
「とにかく中に入ってみよう」

一行は聖堂に入って行った。

隠し通路に入って、少し進むと金髪の青年が蹲っていた。

「あれは…!」

アスベルとルイスは青年の元に走る。
それは、二人の良く知る人物だった。

「リチャード!?」

「無事だったか。良かった!」

「君達は…」

「アスベルとルイスだ!」

「アスベル…ルイス…本当に君達なのかい?」

リチャードは赤い左目でアスベル達を捉えて、嬉しそうに優しく微笑んだ。

第6話 死の疑惑（後書き）

（ル） 「本当に出したな」

（雪） 「はい。とりあえず紹介でもしときましようか」

メイリ・アル・スロツテス

Mayli.al.Srotes

緑色の肩ほどもである髪の20歳。

関西弁で、一人称は『ウチ』。

イケメン好きの面食い。

武器は二丁拳銃で、A技は拳銃技（パスカルのA技と同じ）で、B技は万能術（ほぼオリジナル）。

（メイリ） 「ほな、次回もお楽しみに」

（雪） 「自分の紹介だけさせて終わらせやがった!!」

第7話 玉座での真相（前書き）

少し小説版の話が混じっています。

第7話 玉座での真相

「こんな所で君達とまた会えるとは思わなかったよ」

リチャードは嬉しそうに微笑む。

「それはこっちの台詞だ！お前が死んだと聞かされて驚いたんだぞ」
「僕が…死んだ…」

リチャードの顔が一瞬曇る。

その瞬間アスベルは自分達の立場を思い出したのか、敬語に直して話す。

「無事で本当に良かったです。お立ちになれますか？リチャード殿下」
「下」

リチャードの腕を首の後ろに回し、立ち上がらせる。

「アスベル…君は…」

「やはり生きていましたか。リチャード殿下」

格好は違うが、二人の騎士が現れる。
どちらもウィンドルの騎士だろう。

「…セルディクの手の者たちか」

騎士たちは何も言わずに剣を構える。

アスベルもいつでも抜刀できるように構えるが、ルイスが前に立つ。

「お前はリチャードを守ってろ」

「いや、俺も——」

「病み上がりはすっ込んでろっての」

「…分かってたのか」

ルイスは当然と言って、刀を構える。

メイリもルイスの横で両手に一丁ずつ銃を構える。

「お前銃なんて使うのか？」

「せやないとこんなもん出してへんて。それに…」

メイリはリチャードの方を見て、笑みを浮かべる。

「リチャードイケメンやもん！絶対守ったる！！」

「おいおい…」

そんな話をしていると、騎士は二人に向かっていく。

「騎士学校で何習ってたの？そんな真っ直ぐ来て攻撃が当たるとでも？」

ルイスは騎士の攻撃を避け、刀を振り上げ——

「かだんしょう火弾衝！！」

一気に振り下ろし、火の弾を出現させる。

その火の弾は騎士に直撃し、騎士は倒れる。

「ほんならウチも…咲き狂う空の生命よ！」

詠唱を終え、銃を騎士に向ける。

「エアームーム!!」

銃から黄色い弾が発射され、騎士に当たった途端、花の様な爆発を起こした。

「思い知ったか！」

「これがウチとルイスの連携や！」

ルイスとメイリが何もない方に、掛け合いをしている間にリチャードはアスベルに話しかけていた。

「アスベル：君達は本当に僕を助けに来てくれたんだね。君達が来てくれなかったら僕は本当に死んでいたと思うよ：ありがとう。アスベル」

「はっ。間に合ってよかったです！」

アスベルはリチャードに向かって敬礼をする。

「そんな他人行儀な話し方をしないでくれ。君と僕の仲じゃないか」

「しかし、立場がごきますので」

「僕がこうやって頼んでもかい？」

「殿下：」

アスベルは困ったように頭を？く。

「：わかった。それなら昔の通りする。それでいいか？」

「ありがとう。やはり君にはそうやって話しかけてもらうのが一番しっくり来るよ。おや？この子は…」

リチャードはソフィの方を見る。
ソフィはそれに首を傾げる。

「ソフィ、リチャード殿下だ。ご挨拶を」

「ソフィ：死んでしまったと聞かされたが…」

「例の花畑で会ったのでそう呼んでいるんだが、本人かどうかはわからないんだ」

「…本人だろう。ソフィと同じ雰囲気を感じるよ。君もそれがわかってるからソフィと呼ぶんじゃないのかい？」

「それは…」

その時、リチャードが突然苦しそうに蹲る。

それに気付いたルイスとメイリも駆けつける。

「大丈夫か？リチャード」

「わからない…急に胸が…」

「向こうから声がするぞ…!!」

姿は見えないが誰かがこちらに向かってきている。

恐らく、先程の騎士の仲間だろう。

「詳しい話は後にして、さっさとここ出るぞ！」

「ここを進んだ先に外へ通じる通路がある。そこから街道を真っ直ぐ行くとグレルサイドに至る。僕はそこを目指していたんだ」

リチャードが言うには、グレルサイドのデール公という人なら、味方になってくれるかもしれないらしい。

それを聞くと、一行は急いで外に向かった。

オリジナルチャット———再会した者と再会を望む者———

(メイ) 「もう何や」

(アス) 「どうしたんだ？」

(メイ) 「このパーティーイケメン多いやんか」。リチャードも入って更に増えたわ」

(リチ) 「それはありがとう。メイリさん」

(ルイ) 「それはそうと、メイリはこんな事してて大丈夫なのか？する事あるんじゃない？」

(メイ) 「あゝエエねんエエねん。探しとる人ならおるけどそいつメツチャしぶといから」

(ルイ) 「へー、その辺で死んでるって心配はないわけか。一回会ってみてえな」

(メイ) 「せやなあ。ウチも早く会いたいわあ」

一行はようやく外まで出てくる事ができた。

「メツチャ明るい」

リチャードは先程よりも苦しそうだ。

「リチャード、大丈夫か」

「心配はいらない：ちょっと疲れただけだよ」

「少し休もう。どこか一息つける場所はあるか？」

「街道沿いに小屋があったはずだよ。でも、僕の事を心配して立ち寄のならその必要は：」

「まあまあ、俺も疲れたしその小屋行こうぜ」

そう言って小屋がある方に歩いて行った。

小屋はすぐ近くに会った。

リチャードは小屋の手前で、ここで良いと言ってその場に座った。アスベルもソフィに遠くに行かないよう注意し、リチャードの近くに座った。

ルイスとメイリもそれに続いた。

「リチャード。王都で何があったのか教えてもらえないか？」

「父上を殺したのは：王家に忠誠を尽くすべき、騎士団の一隊だ」

「何だって!？」

ある時、セルディクがフェンデルの新兵器を一部極秘入手した、ついでにはそれを見て欲しいという事でファーディナント四世に報告し

てきた。

そして、半日ほど前セルディクがかなり大きな箱を持ってやって来た。

リチャードが箱の中身を確認したところ、仲に入っていたのはただの剣や槍だった。

「これのどこが新兵器なのだ!!」

ファーディナント四世はセルディクに聞いた。だした。
すると、セルディクは箱の中から剣を握り――――

「これはこうして使うんですよ…兄上！」

刹那、セルディクは剣を鞘から引き抜き、ファーディナント四世を突き刺した。

刃は腹から背まで貫通していた。

そして、ファーディナント四世が倒れる前に、剣を引き抜き振り下ろし、ファーディナント四世の首を落とした。

「叔父上…!! よくも…!!」

リチャードと周りにいた護衛の兵士は、全員剣を鞘から引き抜きセルディクに向かって行った。

セルディクはリチャードの攻撃を受け流し、部下に命令した。

「武器を取れ! 片を付けるぞ!!」

セルディクの部下たちは、すぐさま剣を引き抜き、護衛の騎士が動揺している間に斬りつけた。

「よくも父上を…っ！！！！」

リチャードとセルディクの剣が交わった。

リチャードは何度も何度も剣を振るが、セルディクには掠り傷すら付けられない。

逆にセルディクの振るった剣が、リチャードを無情にも斬り裂いた。即死には至らなかったものの、リチャードはあまりの痛みに膝をつく。

すぐ側には、先程セルディクによって落とされたファーディナント四世の首が転がっていた。

まるで、仇を、復習をとでも言わんばかりに焦点の合っていない目が、こちらを捉えているような気がした。

「ふん。大人しくしていれば、苦しまず逝けたものを」

セルディクは止めを刺そうと、振りかぶる。

リチャードは無我夢中で、空の木箱をセルディクの足元へ押しやっ
た。

箱は、セルディクの足に当たり、セルディクはよろめいた。

その隙を見計らって、リチャードは相手の利き手目掛けて渾身の一撃を放った。

セルディクはかわそうと身をよじったが、かわせず、刃がセルディクの腕を掠めた。

しかし、致命傷を負わせることはできず、部下に守られながら引き下がった。

「…この手で打ち取れないのは口惜しいが、仕方あるまい。後は任せた。王子を討ち、末代までの手柄にせよ！！」

セルディクと入れ替わりに、槍を持った部下がリチャードを囲む。

「殿下、お覚悟を！！」

リチャードは唇を噛み、セルデイクの部下達を睨みつけた。
深く息を吐く。

その時、左目の色が黄金の様な色から、周囲と同じような赤色になった。

その瞬間、バロニア城の玉座に無数の断末魔が轟き、周りはセルデイクの部下達の鮮血が舞った。

第7話 玉座での真相（後書き）

（ル） 「おい、最後の方、ほとんど小説のパクリじゃねえか」

（雪） 「失礼いたしました。気を取り直して、オリ技紹介に行ってみましょう」

火弾衝かだんしょう

【B技／？2／威力…210／クリティカル率…40／ヒット数…2】

その名の通り、刀を振り下ろし敵に火の弾をぶつける技。
暴星バリアを破れる。

エアブルーム

【B技／？2／威力…410／クリティカル率…120／ヒット数…5】

黄色い弾を発射し、敵に被弾した時、花のような爆発を起こすメイリの術。

詠唱は

『咲き狂う空の生命よ』

（雪） 「オリ技が増えたら技紹介だけの回とか作ってもいいかも」

（ル） 「何回も更新する事になるぞ？」

（雪） 「その位やるよ」

（ル） 「まあ、頑張れ」

第8話 やつと会えました(前書き)

小説の台詞が
一か所だけあります。

第8話 やつと会えました

「――そして、わずかな隙を衝いてあの通路へ逃げ込み脱出の機会を疑っていたんだ」

「：騎士団が、国王陛下を手にかけた：」

「父上が死んだ事ももちろんだが騎士団に裏切られたという事実も僕にとっては衝撃だった」

「俺も騎士学校の生徒だったんだ：」

アスベルは申し訳なさそうに俯く。
それに優しくリチャードは微笑む。

「話には聞いていたよ。家を出て騎士学校に入ったって」

「親父が死んで跡を継ぐ事になったので辞めたんだ。もしあのまま騎士学校にいたら今頃俺も：」

「お前を狙ってたかもしれないってか？」

「アスベルはそんな事せえへんやろ。命令でも無視する思うわ」

ルイスが苦笑しながら言うと、続けてメイリはとてもにこやかに言った。

「そうだよ。君達は僕を助けてくれたじゃないか。七年前のように。暗い地下通路に身を潜めている間、君の事を考えていたよ。ここに君がいてくれたら、と。そうしたら本当に君が現れた。僕がどれだけ嬉しいと思ったかわかってもらえるだろうか」

「：そーいやアスベルはこれからどうするんだ？ ラントには：戻らないよな」

「どういう事だい？」

リチャードが先程とは一転、真面目な表情に戻し尋ねる。

「戻れなくなったんだ。例のストラタの同盟のせいで」

「ストラタとの同盟？それは何の話だ？」

アスベルはリチャードの返答に驚き、「知らないのか！？」と尋ねる。

もちろんリチャードは知らないと答える。

リチャードによると、ファードイナント四世はストラタに対し強硬姿勢を貫いていた。故にストラタとの同盟などあり得ないらしい。

「しかし現に今、俺の故郷はストラタに進駐されている。そうなったのはつい最近だが」

「王都の反乱と時期が同じ…という事は…」

「セルディク…だろうな」

四人が話しあっているとソフィが走ってきて言った。

「アスベル大変！誰か来る！」

四人は立ち上がりソフィの走って来た方向を見る。

すると剣や弓を持った騎士が五人現れた。

「見つけたぞ！殿下だ！」

「しまった…もう追っ手が」

「リチャード、無理すんなよ」

ルイスが言うと、リチャードは何も言わずに剣を抜いた。

「しつこい奴は嫌われるって親に習わなかったかよ！！」

ルイスが剣を持った騎士に対し、魔神剣、衝皇震、裂壊桜の順に技を繰り出し倒す。

他も丁度倒したところらしかった。

「この兵たちは…」

「叔父のセルディク大公…今や国王を騙^{かた}るあの男の手の手者だよ」

リチャードは剣を納める。

「皆、聞いてくれ。デールの元に辿り着いたら僕はすぐに兵を挙げる。父上の敵を討つためだ！」

リチャードは玉座の間での惨状を思い出していた。

彼は絶対にセルディクを許さないだろう。

目の前で殺されたのだから。

「皆、僕と共に戦ってくれないか？僕にはこれからも君達の力が必要なんだ。頼む」

「…わかった。どこまで出来るかわからないが俺に出来る限りの事はしよう」

「まあ、俺はアスベルについて行くだけだから」

「ウチも行くで！お城かぁ、楽しみやわぁ」

「早速目的忘れてないか？」

アスベルはリチャードに手を差し出す。

それはアスベルなりの、これからもよろしくという意味なのだろう。

「ああ…ありがとう。ありがとう、皆！」

リチャードは差し出された手を握り返す。

「こうしていると七年前の友情の誓いを思い出すな…」

アスベルとリチャードの横にソフィが寄ってくる。

「ソフィもやりたいのか？」

ソフィは何も言わずにただ頷く。

そして手を重ねた。

その瞬間、リチャードが突然ソフィの手を弾いた。

「二人とも…急にどうしたんだ!？」

「へ、変だな…急に悪寒が…」

ソフィはおびえてアスベルの後ろに隠れる。

「リチャード、大丈夫か？体の具合が良くないんじゃないか？」

「僕なら大丈夫だ。それよりもすぐにグレルサイドへ向かおう」

オリジナルチャット————男勝り…?————

(ルイ) 「そういやさ。メイリが捜してる人って他にはどんな特徴があるの?」

(メイ) 「一言で言うとな変人やな」

(アス) 「他には?」

(メイ) 「えー…天然やけど頭は良いんよ」

(ルイ) 「ふむふむ」

(メイ) 「それから研究が大好きで…」
(アス) 「頭が良くて、研究が大好き…」
(メイ) 「後風呂が嫌いで下手したら一週間入らんねん」
(アス) 「それって…女性か？」
(メイ) 「せやけど？」
(ルイ) 「…言っとくけど男でもどうかと思うぞ」

一行はウォールブリッジを見つけた所で岩の陰に隠れる。

「橋がそのまま砦になっているのか…」
「警備しているのは叔父の軍勢かい…？」

アスベルは黙って頷く。

「リチャード、別の道はないのか？」
「うーん…他の行き方もあるにはあるけれどどれも王都を経由しない…」

ソフィがふと気配に気付き、後ろに振り返る。

「今王都へ戻るのには危険過ぎる。弱ったな…」

ソフィは気配がした方に歩く。

そこにいたのは先端が赤い、白い髪で動きやすそうな服を着た少女だった。

気にもたれ掛かって寝ている。

少女は目を擦り、ゆっくりと瞼を開く。

そして立ち上がり、ゆっくりとソフィに歩み寄る。

少女はしっかりとソフィの確認した後、目を見開きソフィの肩に触れる。

「…!!」

「……………ぐぼぁ!!」

肩に触れた瞬間、少女はソフィに思い切り吹き飛ばされる。

音に気付いて全員駆けつける。

「ソフィ!? どうした! 何があった!？」

ソフィはアスベルの後ろに隠れる。

「あの人が…触った」

「何っ! 触っただって!?!…えっ? 触った?」

吹き飛ばされた少女は右手を見て呟く。

「さ、触れた…今触れたよね…」

少女はもの凄いスピードで腕を回しながら走って帰って来た。

「もう一回! お願い! もう一回触らせて」

「何者だっ!？」

アスベルはいつでも剣が抜けるように構える。

「あたし? パスカル! ぴちぴちの二十二歳! よろしく」

「えっ? 二十二歳!？」

「問題点そこ!？」

「ん? パスカル!？」

「その声は…メイリ!？」

二人は姿を確認すると抱き合おうとする。
だが、メイリは直前でパスカルの肩を掴む。

「あんたまた風呂入ってへんやろ!」

「いやゝ入ったよ。一週間前に」

「それは入ったって言わんねん!」

「まさか…メイリの捜してた人って…」

「うん————」

メイリはパスカルの肩を軽くたたく。

「パスカルや」

第8話 やつと会えました(後書き)

(メ) 「やつと会えたわあ」

(雪) 「そうだねえ」

(メ) 「次回は地下遺跡やな」

(雪) 「そうだねえ」

(メ) 「…次回もお楽しみに」

(雪) 「そうだねえ…ってあっ! ごめん! ちゃんと話聞くからああ
!」

第9話　また置いていかれた？

「メイリ」

「ちよっ！やめえ！あんた風呂入ってへんのやろ！？」

「いや、だから一週間前に…」

「せやからそれは入った言わんねん！！」

パスカルが抱きつこうとするのを必死に食い止めるメイリ。

「あの…あなたがメイリの捜してた人？」

「うん、そだよ！…いや、メイリがこのパーティにいた理由がわかったよ」

パスカルが満面の笑みでメイリを見る。

メイリは何の事かあまり分かっていない。

「このパーティ、メイリの好きそうなイケメンばかりだもん」

「せやろ！せやろ！ウチもう感激やで！！」

メイリはテンション高めでパスカルの手を掴み上下に振る。

「…じゃあ、俺達は行くんで…」

「ちよい待ちいな！このままお別れなんか！？そうなんか！？」

「いや、そう言われましても…」

ルイスが行こうとすると、メイリが半泣き状態で止める。

そして、二人は何かゴチャゴチャやっている。

「あの二人は仲が良いね」

「そうだな」

リチャードとアスベルが子を見守る親の様な眼で見る。

その時パスカルがソフィもルイス達の方を見ている事に気付き、これはチャンスとばかりに触ろうと近付く。

しかし、後少しという所でソフィに気付かれ、またもや吹っ飛ばされる。

「いたたたた…」

「そう言えばパスカルは何故ソフィを触ろうとしたんだ？」

「いやゝ、まさか触れるとは思ってなくてさゝ」

「どういう事だ？」

パスカルは戻ってきながら説明する。

「ほんのついさっき、その子の幻を見たんだよね」

「幻…？それはどういう意味だ？ソフィの事を何か知っているのか！？」

「うゝん、口で説明してもわかんないんじゃないかなゝ」

パスカルは何かを考えるように頭を掻く。

そして、思いついたように目を見開く。

「実際に見た方が早いと思うよ。すぐそこだし」

そう言ってアスベル達の後ろ側を指差す。

行ってみると、その地面に不思議な模様が描かれた台座があった。

「これは…？」

「これを使うと地下にある遺跡に行けるんだけどね。幻があるのは

そこ」

「遺跡だって…?」

リチャードが興味ありげに尋ねる。

「期待しないで潜ったんだけど、結構面白かったよ!」

パスカルは笑顔で感想を述べた。

「結果的に塞がってる端を通らずに反対側にも来られたしね」

アスベルとリチャードは顔を見合わせる。

「遺跡の中に兵士はいたかい?」

「いなかったよ。あたしの他はだれも」

パスカルは右手を大きく振り否定する。

「どうする?アスベル」

「行ってみよう。このままここにいてもどうにもならない。ソフィの幻の事も気になるし…」

そう言い、アスベルはソフィを見る。

「わかった。君がそう言うなら僕に異存はないよ」

「決心ついた?そんじゃ、一つ皆で潜るとしますか!」

「…一緒に行くのか?」

「うん」

「パスカルさんに遺跡を案内してもらおうと言う事で良いのかな?」
「もちろん!」

「…そうだな。わかった。一緒に行こう」

という事でアスベル、リチャード、ソフィ、パスカルの四人は遺跡に入った。

その時ルイスとメイリはというと…

「あれ？アスベル達どこ行った？」

「パスカルもおらへん…まさか」

「置いてかれた！！？」

二人は見事にハモる。

「おい冗談じゃねえぞ！あいつらマジで何処行きやがったんだ！？」

「もしかしたらウォールブリッジか！？」

二人は急いでウォールブリッジに走る。

門の前まで来ると当然ながら兵士に止められた。

「おい！貴様ら何者だ！！」

「いや、ちょっと友達を捜してるんだけどここに誰か来てないか？」

「誰も来ていないが…？」

「ここ来てへんのか！参ったな…パスカル達どこ行ったんやろ」

「一体誰を捜しているんだ？」

「えーとな。美男美女が揃った四人組や」

メイリが真面目に言うのと、ルイスと兵士はそんなので分かるはずがないだろう…と訴えるような眼でメイリを見る。

「あれ？わからへん？どう言えばエエかな…」

「もう良いよ。あの、すいませんでした。行くぞ」

ルイスはメイリの首根っこを掴み引きずっていく。

「もしかしたら向こう岸に向かったんちゃう？」

「どうやって？」

メイリは周りを見る。

そして、川を指差した。

「泳いで」

「行けるわけねーだろ！！」

「人間諦めたらアカンで！どんな困難にも…」

「分かった！ちょっと黙っててくれ」

ルイスは顎に手を当てて考える。

メイリを見た後、川を見る。

ルイスは何か閃いたように目を見開く。

「どしたん？」

「泳ぐか」

「…ほんの冗談やったんやけど」

「人間諦めたらアカン、だろ？」

「そうは言うてもやなあ…」

「……………」

二人は顔を見合ったまま動かない。

「やっぱ今の無しな」

「せやな」

その後、ルイス達がない事に気付いた四人が戻ってきて、一緒に遺跡に向かった。

オリジナルチャット————結局ね————

(メイ) 「ウチら置いてくなんて酷いやんか」

(ルイ) 「滅茶苦茶焦ったんだぞ」

(パス) 「ごめん、二人とも！」

(アス) 「ごめん」

(リチ) 「すまなかった」

(ソフ) 「ごめんね」

(メイ) 「ちよっ、そんな謝られたら言いたい事も言えへんやんか」

(ルイ) 「そうだ！そうだ！」

(パス) 「そんな事言われてもさあ」

(メイ) 「大体前も急におらんかったやんか！！」

(パス) 「いや、何か面白そうなのがあったからさあ……」

(メイ) 「今回に関してはウチら川泳ぐ事になりかけてんぞ！！」

(アス) 「結局言いたい事言ってるな……」

(ルイ) 「……そうだな」

台座に乗った瞬間光に包まれたかと思うと、一瞬で見知らぬ場所に着いていた。

「ここはどこだ!？」

「遺跡の中だよ」

「遺跡? 何の話や？」

「あゝそっか。二人は聞いてなかったんだっけ」

パスカルは先程言った事をルイスとメイリに説明した。

「なるほど…ソフィの幻か」

「しかもここは地面の中なんか…」

「てか、どうやってここまで来たんだ？」

「別に大した事してないよ。適当にチャカチャカポンっただけ」

「全然分かれへん」

メイリがパスカルの意味不明な言葉にツツコミをいれる。

だが、当の本人は全く気付かずに続ける。

「ね! ね! 凄いでしょ! 地面の下にこーんな広い所があるんだよ?

驚きだよね!!!」

「これが遺跡か…僕達の街の様子とはまるで違ったものに見えるね」

「遺跡を作ったのは大昔のアンマルチャ族だからね。違ってるのは当然でしょ」

「アンマルチャ族…?」

「アンマルチャ族ってのはこうやって世界各地に残っている遺跡を作った種族の事ね」

「もしかしてパスカルさんは考古学者なのかな?」

「んゝまゝそんなところかもね。参考になった？だったらお礼に触らせて！ねえねえ！」

パスカルはソフィに手を伸ばす。

しかし、ソフィはアスベルの後ろに隠れる。

そして――――

「さわるの、だめ」

その言葉でパスカルは少し拗ねる。

「むゝ、けちんぼめゝ」

「∴早く先へ行かないか？」

「はいはゝい」

パスカルは右手と右足を上げて返事をした。
一行の遺跡探索が始まった。

第9話　また置いていかれた？（後書き）

（雪）「今度からこれの更新スピードを上げた方が良いかもしれない」

（メ）「何で？」

（雪）「今回でも分かるように全然進まないんだもん」

（メ）「確かに。今回は遺跡入る所までしかいかんかったもんなあ」

（雪）「てか、10話にしてまだ地下遺跡だよ！？『未来への系譜編』までいけるだろうか？」

（メ）「話数制限無いんやからいけるやろ？」

（雪）「いや、気分的に」

（メ）「それは頑張れや！！」

第10話 ウォールブリッジ地下遺跡より

一行は地下遺跡攻略を頑張っていた。

「いや、こっちだよ」

「そっちは来た方向やんけ！」

「こっちじゃねえ…の…？」

ルイスは移動する床に乗り、一人見当違いな方に行ってしまう。

「こっちか？…うおっ！！！」

ルイスが移動した先は魔物モンスターが大量にいた。

「ヤベッ！ちよつ、うわあっ！！！」

ルイスはまた別の床に乗り移動してしまう。
そして、また大量の魔物に襲われた。

「ルイス！？何やってるんだ！？」

「助けてくれええ！！！！」

「でも、床が無い」

「そんなああ！！！！」

ルイスは必死に逃げ回り、何とか床に乗って戻って来た。

「はあ…はあ…」

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃ…ない…」

ルイスは袋に入れていたアップルグミを食べる。

「さて、進むか」

「あっちだよ！」

パスカルはルイスが行ってしまった方を指差す。
ルイスは冷たい目でパスカルを見る。

「またあっちに行くのか？」

「大丈夫！今度は皆行くから！」

パスカルは親指を立ててウインクする。

ルイスも腹を括り、行く事にする。

まあ、行かなければ進むも何もないのだが。

「あつた〜！これこれ！これが幻を映す装置だよ」

アスベル、リチャード、ルイスの三人は興味深そうに装置を見る。
その時、ソフィが何かに気付き振り返る。

「何かがこっちに近付いてくる。変な足音が…聞こえる」

すると、青いトカゲのような魔物、メルクリウスが現れる。

「うわっ、何これ！」

「襲ってくる！」

ルイスが刀を抜き、火弾衝を浴びせる。

するとメルクリウスは後ろを向き、ルイスに尻尾を叩きつける。それをガードすると、後ろからアスベルが魔神剣を放つ。

その後、リチャードが甘言、雷神剣、秋沙雨の順に素早く斬りつける。

それを全て食らったメルクリウスは体を回転させ、全員を吹き飛ばす。

だが、パスカルがウィンドニードル、メイリがエアーブルームを食らわせる。

「なんや、まだ倒れへんのかいな！」

「来たれ安息無き剣、連なるは悲痛！レストレスソード！！」

リチャードのレストレスソードでメルクリウスの体力がかなり減る。

「後少しだ！」

ソフィは刀輝、鷹爪襲撃、双月の順に拳や蹴りを叩きこむ。

すると、メルクリウスは赤い光を出し、ソフィを石化させてしまう。そしてメルクリウスの長い尻尾が石化したソフィを襲う。

「やらせへん！そや！氷霧^{フリージング}の白薙！！」

メイリの流転からの氷霧の白薙によってメルクリウスは倒れた。

「ふいー、危なかったなー」

「でもま、流石俺達ってとこかな」

「1対6できつかったんだよ？」

「…それを言うなよ」

ルイス、メイリ、パスカルが何やらやっているがそんなことは放っておく。

「この装置はどうやれば動く？」

アスベルはパスカルに尋ねる。

それに気付いたパスカルは近寄ってきて答える。

「簡単だよ。横の所にあるのをパカパカってやって最後に大きいのをピコってやれば良いの」

「わかったか？アスベル」

「悪いが…全然」

アスベルは手を横に広げる。

「まあ、やってみればわかるって。簡単だから」

アスベルは一通りボタンを見た後、適当に一つ押してみる。すると、横に浮いている物が暴走し出す。

驚いたアスベルは（全員驚いていたが）急いで、先程と同じボタンを押して止める。

「しょ〜がないね。あたしが模範を見せますか」

アスベルとパスカルは入れ替わる。

（最初からパスカルがすれば良かったんじゃないか？）

（…確かに）

パスカルが操作すると、装置は正常に動き出した。

「動いた…」

思わずリチャードはそう言ってしまった。

装置は幻を映す。

すると、そこにはソフィと瓜二つの少女が映しだされた。

「これは…」

「わたし…？」

「これがパスカルさんの言っていたソフィの幻なのかい？」

リチャードの問いにパスカルは黙って頷く。

アスベルはソフィと幻を見比べる。

「確かに…ソフィとよく似ている…」

「ね？本物そっくりでしょ。あたしがソフィを見て思わず触っちゃったのも頷けるでしょ？」

パスカルは指を動かし、ソフィを触ろうとする。

しかし、パスカルはメイリに後頭部を叩かれる。

「頷けへんわ！」

「いたたたた…」

「…この装置もアンマルチア族が大昔に作った物なのかい？」

「たぶんね。まあ、その辺は色々調べ中なんだけど」

その時、装置の幻が消える。

「あゝあ。消えちゃった」

「ソフィ、今の幻を見て何か思い出したりしたか？」

ソフィは首を横に振る。

「駄目か…」

「まあ、気長に行こうぜ」

「ソフィと関係があるのかどうかも、あれだけではなんとも言えないね」

「説明書きでもあれば良かったんだけどね。ここんどこに書かれてる文字も消えちゃってほとんど読めないんだよね。かろうじて読めるのが…」

パスカルは装置を見る。

「ラ：ムダ：って書かれている所だけど…その先が…」

「ラムダ：？　どういう意味だ？」

パスカルは手を横に振る。

要するにわからないという事だろう。

「ラ：ムダ：昔どこかで…聞いた事があるような…」

「ラムダ：パスカル、他にも何か分からないのか？」

「んー、今のところはそれだけだね」

「とりあえず先へ進もう。ここでこうして考えていてもすぐに答えは出ないだろう」

一行は出口に向かう事にした。

オリジナルチャット—————もう二度と—————

(ルイ) 「いやあ、驚いたなあ」

(メイ) 「めっちゃ似とったもんなあ」

(リチ) 「とりあえず出口に向かおう。話はそれからだ」

(ルイ) 「そうだな：今度は気をつけないとな」

(メイ) 「え？何に？」

(ルイ) 「あの動く床だよ」

(パス) 「そうだよ。一人で行っちゃったらあたし達は助けに行けないんだからね」

(ルイ) 「：左様でございますね」

入って来た時と同じ様な台座に乗り、一瞬で外に出ると、そこは先程とは別の場所だった。

「どうやら無事に対岸へ渡れたようだ」

「これで予定通りグレルサイドへ向かえるね」

その言葉に反応したパスカルが振り向く。

「お、グレルサイドへ行くんだ」

「ん？言っただけ」

「パスカルさん、遺跡の中では色々とお世話になったね。ありがとう」

「あたしも一緒にグレルサイドに行こうかな」

それを聞いて、少し低めだったメイリのテンションが一気に上がる。

「せや！行こう！グレルサイド！！いやあ、ウチも行きたかったんだよなあ、グレルサイド！」

「…良からぬ目的があって付いて来ようとしているんじゃないだろうな？」

「ウチは別に…」

「くくくく…ばれたか…」

パスカルは笑みを浮かべる。

その場にいる全員が身構える。

「お前…！？」

「ズバリ！！あたしの目的はソフィと仲良しになる事だよん」

「はあ…？」

「ソフィの事もっと知りたいし、調べたいし、触りたいの！悪いけどあんたらには興味はないですよ」

ソフィはいつの間にかアスベルの後ろに隠れていた。

自己防衛本能というものが働いたのだろうか。

「アスベルと…えーと、何だっけ」

「リチャードだよ」

「ルイスだ」

「ん、ルチャードとリイスね」

「全然違うわ！！！」

ルイスとメイリのWツツコミが炸裂した。

「ねえソフィ、この中で誰が一番好き？」

「：アスベル」

「むお！悔しい！仲良くなりたいたい。ソフィと仲良くなりたいたいよ」

「その前にまず皆の名前を覚えよな」

メイリが悔しがるパスカルの肩を掴む。

「この人は：悪い人ではない気がするよ。一緒に行っても平気じゃないかな」

「リチャードが言うんだったら大体間違いないだろ。昔からリチャードの勘は結構当たるし」

「：そうだな。もうしばらくこのまま行こうか」

「ありがと。やっぱり旅は道連れって言うしね！」

その後ろでメイリが滅茶苦茶嬉しがっていたのは言うまでもない。

「それじゃ、グレルサイドへ向かうか」

一行は正式にパスカルとメイリを迎え、グレルサイドへ向かう事にした。

第10話 ウォールブリッジ地下遺跡より（後書き）

（雪）「いやあ、久々の二日連続投稿だね」

（ル）「それは俺達にとってもありがたいな」

（雪）「今回はウォールブリッジ地下遺跡からお送りしました」

（メ）「それは見てくれてるやろうから、わかるやろ」

（雪）「いや、そうは言うけど…」

（ル）「そうだぞ。こんな事より次回予告でもしたらどうだ」

（雪）「…明日天気予報雨だったっけ？」

（ル）「明日は那覇以外晴れか曇りだよ！！」

（雪）「そっか。じゃあ中国^{この辺}地方は雨は降らないと」

（メ）「それはエエから次回予告」

（雪）「えーと、今回はグレルサイドよりです！」

（ル）「それでは次回も」

（メ）「お楽しみに」

第11話 伝統の湖畔街―グレルサイド

「なんかさあ、遠くね？グレルサイド」

ルイスが誰にという訳でもないが、とりあえず愚痴ってみる。
それに言い返したのはリチャードだった。

「もうすぐだけど：確かに遠いね」

「だろ？しかもジャガイモなんてあそこだけで作ってるわけでもないのにわざわざデイスカバリーしなくてもなあ」

そう、ルイスとリチャードは少し離れた所で見ているが、アスベル、ソフィ、メイリ、パスカル四人はジャガイモをデイスカバリーしている。

何故ルイス達が離れているかと言うと、先程リチャードの体調が悪くなったようなので休んでいたところで、ソフィがジャガイモを見つけ、四人でデイスカバリーに行ってしまった、と言う事だ。簡単に言えば。

「しかし、どうしたんだ？さっきもソフィにあんな態度をとって」

「：僕にもわからないんだ。急に悪寒がして：」

「そうか：まっ、体調が悪いみたいだし、あんま無理すんなよ」

「そうだね。ありがとう」

そして、またアスベル達の方を見る。

今度はジャガイモを作っているらしい人と何か話しているらしい。

「：あいつら目的を忘れてないだろうな」

「：やはりアスベルは変わらないね」

「だな。まあ、昔のヤンチャっぷりはだいぶマシになったけどな」
「確かにね。でも君もあまり変わってないようで安心したよ」
「えっ！？俺も！？」

ルイスは驚いて目を丸くする。

「でも君の場合は少しヤンチャっぽくなってしまったかな？」
「要するにまだガキっぽいって言いたいわけだな」

ルイスはジト目でリチャードを見る。
それに対しリチャードは頬笑みを返す。

「でも、一番変わっていないのは…」
「ああ、ソフィだな」

リチャードは真剣な顔で頷く。

「彼女は昔と何も変わっていない。それに僕は死んでしまったと聞かされた」

「俺もそう聞かされたし、人間ならそんなこと絶対にありえない…」
「…もし彼女が人間でないとしたらどうする？」
「そんなの決まってんだろ？——」

ルイスはリチャードの方を向いて微笑む。

「今まで通りで何も変わんねえよ。ソフィはソフィだからな」
「フフ、本当に君も変わらないね」
「それは褒め言葉として受け取っておくよ」

そう言ってルイスは立ち上がり、リチャードに手を差し伸べる。

リチャードはその手を握り、立ち上がる。

「さ、行くか。おーい！お前らー、そろそろ行くぞー！」
「わかった！」

アスベル達と再度グレルサイドへと向かった。

オリジナルチャット——————決して違う——————

（ルイ） 「それにしてもお前マンガとかかなり読んでんだろ」

（リチ） 「おや、どうしてだい？」

（ルイ） 「普通の奴ならあんな所で『もし人間じゃなかったら——』なんて言わないだろ」

（リチ） 「先に『人間ならそんなこと絶対にありえない』と言ったのは君だよ？」

（ルイ） 「そりゃまあ、そういう流れだったからだろ？」

（リチ） 「でも、人間でないなんて発想は中々出てくるものじゃないと思うけど」

（メイ） 「何の話かわからんけど、要するに二人ともマンガオタクなんやな？」

（リチ&ルイ） 「オタクじゃない（ではない）！！！」

———伝統の湖畔街　グレルサイド

一行はようやくグレルサイドの入口に到着した。

「今は非常事態につき許可無き者を街へ入れる事はできぬ！」

門番らしき兵が言う。

すると、もう一人の兵がリチャードの顔を見て驚く。

「あ、あなた様はもしかや…王子殿下であらせられますか!？」

リチャードは黙って頷く。

すると兵達は敬礼した。

「少々お待ち下さい！公爵様にお知らせしてまいります！」

そう言うのと兵は街の奥まで走って行った。

「へえ、リチャードって王子様なんだ？偉かったんだね」

「リチャードは王子…ならアスベルは何？」

「俺は…今の俺は、何者なんだろうな…」

「アスベルはアスベルだ。リチャードも王子だけどリチャードって
いう一人の人間だ。そうだろう？」

ルイスは全員に問いかける。

その時知らせに行っていた兵が戻ってきて言った。

「お待たせいたしました。どうぞお通りくださいませ」

「ありがとう。デールは屋敷にいるのかな？」

「はっ！」

兵は敬礼をする。

「聞いての通りだ。まずはデールの下へ行って状況を確認しよう」

一行はデールがいる屋敷へと向かった。

「…屋敷って遠い？」

「歩いて5分位かな」

「そっか」

「ルイス…さっきはありがとう」

「はて、俺には皆目見当もつかないが何の事かな？」

そう言うルイスはまた前を向いて少し早めに歩き出した。

その背中を見たりチャードは微笑んだ。

「本当に変わって無いね」

十字路に差し掛かったところで、突然パスカルが立ち止まり左の方を見る。

「どないしたんや？」

「…誰かが走ってくる」

それを聞いて全員パスカルが向いている方を見る。
確かに誰かが手を振って走ってくるのが見えた。

「なあ、アスベル。すんごい見たことがある奴がこっちに向かってきてるんだけど」

「俺もだ。でも何でこんな所に…」

「ルイスー！アスベルー！」

「何でエリーがこんな所に！！？」

そう、走って来たのは紛れもなくエリーだった。

「なんや、知り合いか？」

「知り合いというか…幼馴染」

「ルイスー！！」

エリーは思い切りルイスに抱きつく。
ルイスはそのまま後ろに倒れる。

「心配したよう。てゆうか、何でこんな所にいるの？」

「それはこっちの台詞だ」

「えっ、心配してくれてたの？」

「その後の方だ！」

「あっ、何でここにいるか気になるの？」

エリーは立ち上がり、話し出した。

「えっとねえ。港に行ったらさあ、黒服の男が暴れ回って船は出せないって聞いて、たぶんルイスの事だろうなあと思って追いかけてよと思ったの。でもどこにいるかわかんなくてさ。よく考えたの。そしたらバロニアからだとグレルサイド以外に行ける場所が無いから、ラントを通ってここに来たの。その道の途中で山賊らしき人に会って、超古典的な脅し文句を言って来たんだ。で、鬱陶しいから倒したの。そしたらまた超古典的な捨て台詞吐いて逃げてったの。」

これが証拠ね」

そう言って緑色に輝く輝石クリアスを見せる。

「その後——」

「もうわかった」

「ねえねえ、ちょっとそれ見せて」

エリーはパスカルに輝石を渡す。

すると、輝石から風のエレスの精霊——グリムシルフィが現れた。
そしてなんやかんやで、パスカルと契約した。ぽい。

「今のは…何だったの？」

「…さあ？」

「てか、デールさん待たせてんだから早く行こうぜ」

一行はとりあえずエリーを含めて、デールの屋敷へと向かうのであった。

第11話 伝統の湖畔街―グレルサイド（後書き）

（雪） 「こっちも久々に投稿できたね」

（ル） 「そうだな。全然ストーリー進まなかったけどな」

（雪） 「良いの良いの。今やってる連載の中で一番長くなる予定はこれだから」

（ル） 「だいたいどの位続くんだ？」

（雪） 「えゝ、多分200話位じゃない？」

（ル） 「長ッ！！」

（雪） 「まあ、そんな先の事はさておき、次回もお楽しみに」

（ル） 「感想もよろしく！質問でも良いぜ！」

（雪） 「…敬語使わせるのはもう諦めようかな」

グリムシルフィの契約の所はいくら探してもなかったので適当にしています。

シアンディームとブラドフランムはたぶんやりません。

第12話 剣と風の導きを

「はぁ、全っ然寝れね〜」

ルイスは一人で散歩をしていた。

9時間ほど前にデール公の屋敷で作戦会議を開き、リチャード、アスベル、ソフィ、エリー、パスカル、メイリ、そしてルイスの七人でウォールブリッジを攻め落とすという作戦を立てた。

最初はリチャード、アスベル、ソフィ、ルイス、パスカルのメンバーで行くはずだったのだが：

「パスカルは目離したら何するかわからへんからウチもついていくわ」

「ルイスが行くなら私も行きたいなあ…」

という事でこの七人になったのだ。

「しかし、誰か一人でも起きてないもんかね…おっ！」

ルイスは橋の近くで見慣れた後姿を確認した。

長い紫色の髪を二つに束ねた少女、つまりソフィだ。

「おーい、ソフィ。何やってんだ？」

「！！
しー」

ソフィは人差し指を立てて、口の前まで持ってくる。

言わなくても分かると思うが、『静かに』や『黙りなさい』などという時に使うサインだ。

ルイスは黙ってソフィに近付く。

そして、先程ソフィが見ていた方を見ると、アスベルとリチャードが何かを話していた。

「何々？ソフィ盗み聞きしてたの？」

「それって…いけない事なの？」

「まあ、しない方が良くけど…いっか」

という事でルイスも一緒に様子を見ることにした。

だが途切れ途切れにしか声が聞こえず、何を話しているかは分からない。

「共に…覚悟は…しないでくれ…俺はリチャードの…存分に使ってくれればいい」

「…打ち明ける…本当は僕は…したくない…それでも僕は…選ばざるを得ないんだ」

「一日も早く…終わらせて…戻そう…そのための…いくらでもする」

「ありがとう…勝とう！アスベル」

二人は顔を見合わせて勝利を誓った。

その近くのルイスは。

「…全然わからねえ」

頭を抱えていた。

「…ソフィはわかったか？」

「………」

「ソフィ？」

「！何？」

ソフィは呼ばれていた事に気付いていなかったようで、少し驚いていた。

「何か悩み事か？そうだとしたら誰かに話した方が良いぞ？」

「じゃあ…良い？」

「ああ」

ソフィは俯いて胸に手を当てる。

「…不安なの」

「…何が？」

「アスベルとリチャードが一緒にいる事。リチャードはアスベルの友達なんだから…悪い事する筈…ないのに…」

最後はほとんど声にもならない位小さな声だった。
だが、ルイスはちゃんと聞きとっていた。

「そうか。確かにアスベルとリチャードは友達だ。でも、その事で心配なのは俺もなんだ」

「ルイスも…不安なの？」

「ああ。とてつもなく、な。特にリチャードの方だ。七年前のあいつの事も知ってるけど、何かが違うって感じかな」

「何かが違う？」

「そりゃまあ、アスベルだって成長はしてる。それは皆一緒だ。…！」

ルイスはそう言ってはっとする。

ソフィは昔から何も変わっていない。

もしその事を気にしているのであれば、ソフィを傷つけてしまった

だろう。

だが、ソフィには記憶が無い。

だから昔の事は何も覚えていない。

それどころか、本人かどうかもわかっていないのだ、という事に今気付いた。

今後は発言に注意しようと心に決めて話を続ける。

「でもな。リチャードは、よくわからねえけど何かが違うんだ。よくはわかんねえけどな」

「……………」

「ソフィにとっちゃアスベルもリチャードも友達だろ？」

ソフィは小さく頷く。

それを見てルイスは、子供をあやす様に微笑みながら頭を撫でる。

「ならそれだけで十分だ。お前は難しい事は考えなくていいんだよ」
「……………」

「それでも不安ならこの件が終わってから三人で話し合え。とりあえず今は明日に備えて寝ろ。な？」

「…ありがとう。ルイス」

「ああ」

そう言うとソフィは宿屋に帰って行った。

ルイスは周りを見回し、アスベルとリチャードがいない事を確認して自分も宿屋に戻った。

「若い者を見守る先生的なポジションの人って重要だよなあ…」

ルイスは軽く溜め息をついた。

———次の日 広場

広場には100人ほどの兵士が集まっていて、リチャードは全兵士の前に立っていた。

「勇敢なる兵士諸君！これより我々はリチャード殿下に付き従い王都へ向かう！」

デールが堂々とした態度で宣誓した。

「殿下、出撃のご合図をお願いいたします」

デールが小さい声でささやくと、リチャードは小さく頷いて数歩前に出る。

「これはウィンドル王国を我々の手に取り戻す正義のための戦いだ！兵士諸君の奮闘を期待する！」

リチャードは腰に差していた剣を抜き掲げる。
そして、ウィンドル王国に伝わる掛け声を口にした。

「剣と風の導きを!!」

兵士達もそれに続いて同じ掛け声を繰り返した。

「全軍！出撃!!」

『おおおー!!!!!!!!』

兵士達は歩幅をきっちりと合わせてウォールブリッジへ向かった。

「それでは僕達も潜入任務を開始しよう」

「殿下の事をくれぐれも頼むぞ。アスベル・ラント」

「はっ！かしこまりました!!」

アスベルは敬礼をする。

するとルイスがアスベルの肩を掴む。

「俺達もいるんだぜ？忘れてくれるなよ」

「そーだよ。私達だってリチャードの友達だもん」

ルイスとエリーが立て続けに言うものだから、アスベルも困った顔になる。

「ちよっ、二人とも！」

「良いのだ。頼もしい限りだ」

「それでは良いかな」

リチャードが真剣な表情に戻して話す。

「まずはあの遺跡に戻る。そこから上の砦を目指すんだ」

「りょーかいや！」

「メイリまで…」

一行はこんな感じでウォールブリッジに向かうのだった。
その後ろ姿を見送るデールは溜め息をつく。

「せいぜい口だけにはなるなよ。ラグゼリア」

第12話 剣と風の導きを（後書き）

（雪）「さて、次回から『王都奪還編』突入です！」

（ル）「あれ？ そんなの本編にあったっけ？」

（雪）「さあ？」

（ル）「さあって…」

（雪）「では、ネタが尽きたんで終了します」

（ル）「質問なんかあったらここで答えるんで」

（雪）「では、次回もお楽しみに」

（ル）「感想も待ってるぜ！」

早く教官パーティーインさせたいー！！！！

第13話 憎悪に満ちた…

「そう言えばさ。ルイスって昔は右利きじゃなかったか？」

アスベルが尋ねる。

先程戦っているときルイスが左手に刀を持っている事に気付いたのだ。

「ん？別に今でも右利きだが？」

「でも左手に刀を持って…」

「ああこれ？これは懂れてる人の真似だよ」

「その懂れてる人って……」

「さて、ウォールブリッジ潜入の前に手順を確認しておこうか」

リチャードの言葉によりアスベルは黙るしなくなる。

リチャードはその後説明を始めたが、ルイスは全くと言っていいほど聞いていなかった。

手順を知らない人に軽く説明しよう。

↓ウォールブリッジ攻略手順↓

？目的は南側の橋を下ろして門を開ける。

？ついでに北側の橋を上げてしまうとセルデイク側の増援を絶つことができる。

？セルデイク側の戦力を少しでも減らすためにまずは北側の橋を上げよう！

？その後南側の橋を上げよう！

？ウォールブリッジ攻略成功！！

…となっている。

「――説明は以上だよ」

いつの間にか説明が終わっていて、ルイスは少し驚いた。

「それじゃパスカルさん。動かすをお願いしていいかな？」

「了解、こんなのパカパカポコってやれば楽勝だよ」

これを聞いて誰もが思った。

（どう楽勝なんだ！？）

パスカルが装置を動かすと、いつの間にかどこかの部屋にいた。全員が周りを警戒する。

潜入に成功したとしても、いきなり見つかってしまっただけは元も子もない。

「ここがウォールブリッジの中か」

「潜入に成功したんなら早く行こうぜ」

「せやな。捕まってもうたら八つ裂きにされてまう…」

メイリは自分で言っておいて少し震えている。

「よし！そうしたらまずは北橋を上下させる装置の所を目指すしよう」

一行は装置のある場所へ向かう事にした…のだが。

「ちよつ、こつちだつて」

「何言うとんねん。どう考えたってあっちやろ」

「まあまあ、間をとってそっちに…」

「「なんでだよ（やねん）！！」」

若干迷子になりかけていた。
皆さんもなったのではないだろうか。

攻略本を見ても中々に難しかった。というより面倒臭かった。

「君達、こっちだよ」

リチャードがある扉を指差す。

それき、ルイス、メイリ、パスカルの三人の内誰も指していない扉だった。

「大体よお。ここ梯子多過ぎんだよ。砦の中で遭難でもさせる気か！」

「ホンマやで。リチャードがおらんかったら今頃ウチら…」

ガチャッ

「あ…」

「「あ…」」

ルイスとメイリが梯子を登る前に一人の兵士が入ってきて、目があつた。

一分ほど目があっていたが、ルイスが兵士を殴って気絶させ、メイリがどこからか出した縄で縛りつけた。

「悪く思うなよ」

「ウチらかてここでしくじるわけにはいかんねん」

「…行くか」

「せやな」

オリジナルチャット———最強コンビ?———

(ルイ) 「さっきの俺達完璧だったな」

(メイ) 「もうウチらに敵無しやな!」

(ルイ) 「最強コンビここに結成ってな」

(メイ) 「このままウチと夫婦という名のコンビに———」

(アス) 「何してるんだ?二人とも…ってうわっ!」

(メイ) 「人のプロポーズを邪魔して楽しいんか…?」

(アス) 「えっ!いや…何の事だ?」

(ルイ) 「…アスベル。ドンマイ」

(アス) 「えっ!?!どういうことだ!?!」

(メイ) 「ウチのプロポーズを返せええ!…!!」

(アス) 「ちよっ?うわあああ!…!!」

(ルイ) 「…あの二人仲良いな」

(エリ) 「ルイスにはそう見えるんだ…」

「これで、OKと」

ルイスは装置を動かす。

すると、北橋が上がる。

「次は…南側やったっけ？」

「ああ、でもその前に鍵を取りに行かないとね」

「鍵？」

「中央塔にあるはずだ。まずはそこに行ってみよう」

という事で一行は中央塔へ向かった。

そして、一行は兵を倒し、中央塔に辿り着いた。

「あった、鍵だ。これさえあれば…」

鍵はリチャードがすぐ見つけた。

リチャード以外は階段を上っていたが、見つかったとこのことで降りていく。

だが、突然ソフィが階段の上を見て言った。

「誰がいる…！」

「何っ!？」

リチャードも上を見る。

だがその時にはもう遅かった。

一人の兵が階段から飛び降りてリチャードに斬りかかっていたのだ。誰もが時がとまったように思えた。次の瞬間リチャードから鮮血が舞った。

「「「リチャード!!!」」」

アスベル、ルイス、メイリの三人が同時に叫んだ。

リチャードはその場に崩れ落ちた。

「大変!!」

「やった…やったぞ! この手で王子を…!!」

兵は部屋から出ようと走る。

誰かに報告でもされてはまずいと思い、ルイスは兵を捕まえ一発殴る。

「リチャード! しっかりしてくれ!」

アスベルはリチャードの体を揺する。

しかし、何の反応もなくただ血が床を満たしていった。

「くそっ! てめえ…!!」

ルイスはもう一度殴ろうと兵に近付く。

その時だった。

誰の耳にもわかるほど大きな心音が鳴った。

「え…?」

アスベルは驚いて思わずリチャードから離れる。

そう、心音はリチャードのものだった。

リチャードの体が小さく揺れる。

そしてゆっくりと体を起こし立ち上がる。

「リチャード…?」

「一体…どうしたんだ?」

リチャードが兵のいる方に振り返る。

リチャードの左目は床に溜まっている血のように真っ赤だった。

「下衆が……!!」

それは常人には耐えられないほどの憎悪に満ちた目だった。

第13話 憎悪に満ちた…（後書き）

（雪） 「人間って良いとこまで行っても結構失敗する生き物だよね」

（ル） 「どうしたんだ？急に」

（雪） 「今回そんな感じの話じゃん」

（ル） 「そうだな…」

（雪） 「ま、だから成功があるんだけどね」

（ル） 「それ誰の受け売りだ？」

（雪） 「こういう事って色んな人が言ってるでしょ」

（ル） 「まあ…な。てか話変わるけど今回はテンポ良かったな」

（雪） 「最近グツダグタだったから、たまには良いかなって」

（ル） 「なるほどな。では、次回もお楽しみに」

（雪） 「このタイミングで!？」

第14話 惨劇

「下衆が……!!」

その言葉を聞いた時ソフィは何かに気付いた。

「リチャード……?」

「無事だったか!良かった」

リチャードはふらふらとしながらも兵に近付く。

そして兵の胸倉を掴み、机に向かって投げ飛ばす。

リチャードも机に乗り、兵の上に立つ。

「よくも……!!」

リチャードは腰に下げている剣を引き抜く。

そして、その剣を思い切り振りかぶる。

「まさか……リチャード!やめろ……!!」

ルイスが叫ぶがもう遅かった。

「この下衆が……!!!!」

リチャードは振りかぶっていた剣をそのまま凄い勢いで振り下ろす。

兵は恐怖や痛みで絶叫する。

パスカルは反射的にソフィの目を手で遮る。

「貴様のしでかした事の報いだ……!!その身で思い知るがいい……!!」

リチャードは何度も何度も斬りつける。
その度に兵の血が飛び散る。
恐らくもう意識はないだろう。

「このっ…！このっ…！」

だが、まだ斬りつける。

「リチャード！もうエエやろ！やめえや…！」

メイリが見ていられなくなり叫ぶ。

「まだだ…こんなものじゃない。僕の受けた痛みはこんなものじゃないぞ…！！！」

「やめろ！リチャード…！！！」

「僕に命令するなあ…！！！！！」

リチャードは上を見上げて叫ぶ。

だがその後も、口を開けたままずっと上を向いている。

「リチャード…？」

アスベルは心配になり呼びかける。

するとリチャードは気が付いたように下を見る。

そこには先程自分が斬りつけていた兵の死体があった。

「僕は…一体…」

リチャードはその場でうろたえる。

「ごめんアスベル！僕は：君にこんな事を言うつもりじゃ：うぐっ！」

リチャードは突然苦しそうに胸を抑えて机から飛び降りる。

「胸が苦しいのか？大丈夫か！？リチャード！」

「平気だ：それよりも急いで南橋へ向かおう。折角鍵も手に入った事だ」

「おい、バカな事言うなよ。さっきやられた傷が：」

「僕なら何ともない。思ったよりも傷が浅かったようだ」

「はぁ！？だってあんなに血が——！！！」

ルイスはリチャードを見て驚く。

あんなにも大量の血が出ていたのにも関わらず今はもう止まっている。

「皆！何をしているんだ。早く門を開けよう！」

「あ、ああ。わかった」

一行は惨状となっている部屋を後にした。

オリジナルチャット————ずっと————

（ルイ）（さっきのリチャード：何かおかしかった：一体何が：）

（エリ）「どうしたの？そんな暗い顔して」

（ルイ）「エリーか：」

（エリ）「さっきのリチャードの事？」

(ルイ) 「ああ」

(メイ) 「確かにさっきのリチャードは何かおかしかったもんなあ…」

(ルイ) 「メイリ…」

(エリ) 「でもリチャードはリチャード！ 私達の友達。でしょ？」

(ルイ) 「友達…か。そうだな」

(メイ) 「さっ、そうと決まれば早よう行こうや」

(ルイ) (リチャード。俺達はお前がどうなってもずっと友達だからな！！！)

アスベルは装置を動かす。

すると外で橋が動く音がした。

「よし！ 後は門を開くだけだな」

「ほんなら早よう行こうや。敵がぎょーさんおる所にこれ以上おりと
うないで」

「確かに早くした方が良いな。ここまでは順調だったけどいつ見つ
かるか分からない」

「ということで次行こう！」

エリーの言葉で一行は門を開く装置のある部屋に向かった。

オリジナルチャット————スパイの秘密————

(エリ) 「そう言えば私達ってさっきの一回しか見つかってないよね」

(ルイ&メイ) 「……!」

(アス) 「確かに」

(パス) 「あたし達ってすごいよね〜! スパイになれちゃったりして」

(エリ) 「スパイってあの潜入とかするやつ?」

(パス) 「うん、それぞれ!」

(アス) 「潜入と言えばルイスってよくうちに忍び込んでたよな」

(ルイ) 「えっ!？」

(エリ) 「普通にドアから入ればよかったのにね」

(ルイ) 「そ、そういや、そんな事もあったかなあ…」

(パス) 「メイリも気配消すのは得意だよな〜」

(メイ) 「え!?! いや、ウチはそないな事…」

(パス) 「よし! この調子でどんどん行こう!」

(ルイ&メイ) (さっき見つかってただなんて絶対言えない…!
!)

アスベルは装置を動かした。

すると、外から門が開く音がして、兵達の掛け声が聞こえてくる。
これで一行の任務は完了した。

ここが制圧されるのも時間の問題だろう。

「歓声が聞こえるよ！うまく行ったみたいだね」

「僕達の役目は終わった。後は兵達の働きに期待しよう」
「そうだな…」

一行は外に出る。

すると目の前を何かが飛んで行った。

「ひゃあ！？な、何！？なんなの！？？」

「き、きっとアレや！と、鳥や！鳥！！」

「いや。今のは…剣か…？」

剣の様なものは弧を描いて一行の後ろに飛んでいく。

「この武器は…！」

「何だ？アスベル。心当たりでもあんのか？」

ルイスが尋ねると、アスベルはゆっくりと後ろを向く。

「物事は完全に終わるまで油断してはならない。オレはそう教えていた筈だ」

先程一行が出て来た塔の上には男が一人立っていた。
男はそこからジャンプして一行の前に降り立つ。

「あんた誰だ！」

「ほ、ホンマや！そんなもん放り投げて危ないやろ！！」

「マリク教官……！」

そう、その男とは騎士学校時代のアスベルの恩師である、マリク・シザースだった。

第14話 惨劇（後書き）

（雪龍）

「やっと教官来たあああああ……！！！！！！！！！！」

（ルイス）

「うるせえ！！」

（雪龍）

「ああ、ごめんね」

（ルイス）

「にしても最後のアレ誰だよ」

（雪龍）

「え？知らないの？皆の教官だよ！？」

（ルイス）

「知るか！」

（雪龍）

「まあ、良いや。今回はメイリやって」

（メイリ）

「りょーかいや！！では、次回もお楽しみに」

（ルイス）

「え？俺じゃないの？俺主人公でしょ？」

（雪龍）

「自惚れるな！！あくまで主人公はアスベルだ！！」

（ルイス）

「えええ……」

第15話 炎の鎖と三連弾

全員武器を構える。

だが、マリクは顎に手を当てて目を閉じる。

「少人数で砦の内部に潜入し、扉を開けて味方を引き入れる。そこまでの手際は見事だった」

マリクは目を開けてこちらを睨む。

「だが、最後の詰めが甘い。ここでオレがお前達を倒せば戦局は一気に逆転する」

「何だアンタ、随分偉そうじゃねえか」

ルイスが一步前に出る。

「渋くてカッコエエのに戦わなアカンなんて残念やわ」

「オレも残念だ。教え子やその仲間、そして陛下と戦わないといけないとはな」

「僕が誰かを知って尚、刃を向けるつもりか」

「数的に言うところちのが有利だぜ？そっちは三人、こっちは七人」

マリクはフツと鼻で笑う。

「数だけで勝敗は決まらない。それにこいつらは今までのオレの教え子の中でも優秀な奴らだ」

「じゃあ、一番足を引っ張るのはあんただろうな」

「何だと？」

ルイスの言葉に全員驚く。

それに対してルイスは笑っていた。

「それはどういう事だ？」

マリクは睨みをきつくしてルイスに尋ねる。

ルイスは「だってよ…」と言うが続きを言うのを渋る。

「ルイスどうしたの？」

「この続き言ったらあの人がかわいそうな気がする」

「安心しろ。オレは言葉などで心が折れるほどヤワじゃない」

「じゃあ言わせてもらおうけど…」

ルイスはビシッとマリクに人差し指を向けて言い放った。

「アンタ、メチャクチャ足震えてるぞ」

「!!!!」

その場にいた全員が固まる。

マリクの後ろにいた兵は二人でこそそと話し合っていた。

恐らく気付いていたのだろう。

「体調が悪いなら無理しない方がいいと思うぜ？」

「大丈夫だ。問題ない」

「せやかて体調悪い人と戦うのもなあ…」

「大丈夫だ。早く始めるぞ」

「もうちょっとゆっくり話し合おうや。騎士学校時代のアスベルの話とか聞きてえし」

「敵であるお前達と何かを話す義理はない」

「そないな事言わんというーな。ウチも気になるから頼むわ」

「早く下の加勢に行かないといけない。始めるぞ」

その後もルイスとメイリによるいじりは続く。

心なしか笑っているように見える。

そして遂にマリクは限界に達した。

「いい加減にしろ！！お前達はここへ何しに来たんだ！！！」

「えっ、いや、その…」

（（（そんなに怖いならここにいなきやいいのに…）））

ルイス、メイリ、パスカル、エリーの四人の心がシンクロする。

マリクは肩で息をしている。

「そろそろ始めるぞ…」

『…はい』

今度は全員（ソフィとリチャードを除く）の心がシンクロした。

（おい、始め辛^{づれ}えよ。何だよこの空気。出来る事なら今すぐにでも立ち去りてえよ…）

（こんな空気の中で戦う方が無理やわ。参ったなあ、皆やり辛そうやわ…）

二人がそんな事を考えていると、兵が向かって来た。

兵はルイスに向かって剣を振り下ろす。

それを刀を鞘に納めたまま受け止める。

「あつぶねえ、急にそんな物騒なもん振り回してんじゃねえよ」

「ここは戦場だ。剣を使って何が悪い」

「そんなご尤もな事言うなよ…」

ルイスはこの兵が自分の一番苦手な真面目・優等生タイプだと気付いた。

「メイリー、手伝ってくれー」

ルイスが振り返るがそこには誰もいない。

メイリはもう一人の兵と戦っていた。

ならばと思って他を見るが、他は全員マリクの方に行っていた。

「いや可笑しいだろ！！何で7対3なのに何で五人でそっち行ってるんだよ！！！」

「ルイスとメイリなら大丈夫かと」

「「それどういう事だ（やねん）！！！！」」

ルイスはマリクの方に集中して、自分の戦いを忘れてしまっていた。そこに兵が隙ありとみて、剣を左から右へ薙ぐ。

ルイスは反応が遅れ、右腕に掠る。

「なんとか利き腕は回避できたな」

「良い反応だ。犯罪者には勿体ない」

「俺は犯罪者なんかじゃねえっての」

「兵士二名に怪我を負わせた。しかも刃物でな。これを犯罪と言わず何を犯罪というんだ」

「兵士二名？…刃物…怪我…ああ、あれか！」

ついこの間自分がバロニアでした事を思い出した。

「あれはあいつらが悪いんだよ。あいつらも犯罪者って事でよろしく」

「舐めた事を……!!」

兵はルイスに向かって走る。

それに合わせてルイスは魔神剣を放つ。

だが、それは簡単に避けられ逆に攻撃される。

それを刀で受け止めた。

「へえ、この前の奴とは違って良い動きするじゃん」

「当たり前だ。舐めてもらっては困る」

「優秀ってのは本当だったんだな。火弾衝！」

至近距離で火の弾を放つ。

これはいったと思ったが、あまり傷を負わせることはできなかった。

「なら、これはどうだ！えんれっが炎烈牙！！」

ルイスは刀に炎を纏わせ斬りかかる。

それは躲されたが、次の蹴りはクリーンヒットして吹っ飛ぶ。

だが、兵はすぐに立ち上がり剣を構えなおす。

「蹴りなんかじゃ倒れないってのは流石ってところか」

「くっ……」

「でも安心しろ。今スゲエの思いついたから」

そう言うと、ルイスの周りの空気が変わる。

「行くぜ！」

ルイスは右手を前に出す。

すると、そこから炎でできた鎖を出す。

炎の鎖は兵に絡みつき動きを封じる。

「次で詰みだ！この技で塵と化せ！」

剣を横に構える。

「紅蓮！！」

ルイスは兵に一閃しそのまま後ろへ駆け抜けた。

「爆鎖塵！！！」

その掛け声と同時に右手から炎の鎖を切り離す。
すると、鎖は大爆発を引き起こした。

「どうだ…さすがにもう立ってねえだろ」

ルイスは後ろを振り返る。

そこにはうつぶせで倒れている兵がいた。

「あんま犯罪者を舐めてかかんねえ方が良いぜ…」

そこまで言っただけでルイスは気付いた。

「自分で犯罪者って言ってんじゃ世話ねえな」

———メイリサイド

「おお、流石ルイスやな。あんなスゴイ技初めて見たわあ」
「ラグゼリア：」

兵はルイスに向かって走り出す。
それをメイリは弾を放って止める。

「あんたの相手はウチやで？間違わんでほしいわ」
「・・・・・・・・」

兵は無言でメイリに向かって走る。

「なんや、偉い大人しいんやな。それっ、氷霧フリージングの白薙、悪運ガトリングイビルの連鎖
！！」

凍結の特性がある弾や、着弾すると減速する弾を放つ。
それを喰らっても兵は構わず向かってくる。

「なんや、何も喋らんと技喰らって走ってくるなんて不気味やで」

兵は剣を振り回す。

動きが変則的で躲し辛い。

「咲き狂う空の生命よ、エアールーム！」

銃から発射された銃弾は着弾して花の様な爆発を起こした。

しかし、兵は相も変わらずメイリに向かって行く。

「今ので駄目なら：出でよ、蒼穹の海神^{わだつみ}よ、パドルブレイク！！」

銃から蒼い弾を発射する。

その弾が着弾すると、それが合図となって下から水が吹きあがる。

「ちょっとは大人しくなってくれたか？」

兵は何事も無かったかのように立ち上がる。

「あら？あかんかったか。そら残念」

「今の程度ではオレは倒せない」

「やっと喋ってくれたか。無愛想やなあってずっと思ってたんやで」

「：ザコには用はない」

「無視かい。まあ、エエわ。そこまで言うなら見せたるわ」

兵は向かってくる。

「やったるで！」

メイリは両手の銃を斜め前に向ける。

そして放つ。

「この技からは逃げ出せへんで！」

今度は兵に向かって両方の銃を向ける。
そこから同時にレーザーを放つ。

「もう終いや」

斜め前に撃った銃弾も兵に向かって飛んで行く。

「ふっ飛べ！トリプルシューティング！！！」

二つの銃弾とレーザーが同時に兵に当たる。
兵はそのまま地に伏した。

「ウチの大勝利やな！」

メイリがそう言うのとルイスが近寄ってくる。

「こっちも終わったんだな」

「せやで！スゴイやろ。まあ、さっきのルイスには劣るけどな」
「そんなことねえよ。さっきのは驚いた」

二人は顔を見合わせて笑った。

「ほんでこれからどうしようか」

「先に下行こうぜ」

「エエンやろか…」

「大丈夫だって。あっち手伝うよりかは下手伝う方が良いだろ」

「…それもそうやな！」

という事でルイスとメイリは下へ降りる梯子へと向かった。

第15話 炎の鎖と三連弾（後書き）

（ルイス）

「今回はスゲェ良かったぞ！」

（メイリ）

「ウチらの秘奥義初お目見えやー！」

（エリー）

「私のは…？」

（雪龍）

「それはまだ…とりあえずオリ技紹介でもどうぞ！」

えんれつが
炎烈牙

【B技／？2／威力…230／クリティカル率…50／ヒット数…3】

有効特性…衝撃，火傷

使用者…ルイス

炎を纏わせた刃で斬りつけた後、右足で蹴り飛ばす技。

パドルブレイク

【B技／？2／威力…430／クリティカル率…130／ヒット数…4】

有効特性…水棲，鈍足

使用者…メイリ

青い弾を発射し、敵に被弾した時、地面から水飛沫を上げる術。スプレッドに似ている。

詠唱は『出でよ、蒼穹の海神よ』
わだつみ

ぐれんばくさじん
紅蓮爆鎖塵

【秘奥義／威力…2000／ヒット数…7】

有効特性…斬撃，火傷

使用者…ルイス

炎の鎖で縛り、斬りぬけて爆発を起こす秘奥義。

因みにルイスの秘奥義発動時の台詞は『行くぜ！』

秘奥義中の台詞は『次で詰みだ！この技で塵と化せ！紅蓮！！爆鎖塵！！！！』

トリプルシューティング

【秘奥義／威力…2000／ヒット数…8】

有効特性…衝撃，無機物

使用者…メイリ

最初に二発弾を発射し、次にレーザーを撃ち、同時にぶつける秘奥義。

因みにメイリの秘奥義発動時の台詞は『やったるで！』

秘奥義中の台詞は『この技からは逃げ出せへんで！もう終いや、ふっ飛べ！トリプルシューティング！！！！』

（ルイス）

「あんま説明になってねえな」

（雪龍）

「それは仕方ないよ。僕に国語力が無さ過ぎて…」

（ルイス）

「開き直んなよ」

（エリー）

「それより言っとかないといけない事があるんじゃないの？」

（雪龍）

「そうそう、前のオリ技説明で火斬衝と火弾衝を説明したんですがどちらも『ルイス版の雷斬衝』と書いていました」

（エリー）

「正確には火斬衝の方です。火弾衝は違います」

（ルイス）

「紛らわしい名前つけやがって」

（雪龍）

「ちゃんと直しておきましたんで」

（メイリ）

「今回は勘忍したってな」

（ルイス）

「随分優しいな（今回は）」

（メイリ）

「ウチはいつでも優しいやろ？」

（エリー）

「秘奥義出せて嬉しかったんだらうね…」

（雪龍）

「ちゃんとエリーのも出るから！」

教官のキャラが壊れてたって？

気のせいだと思うよ。

えっ、気のせいじゃない？

まあ、人間なんだもの。必死になるよ。

…僕も高所恐怖症だから。

第16話 唸る疾風 邪惡に満ちて

「あれ？二人ともどっか行っちゃったよ？」

パスカルがルイスとメイリの行った方を見ながら言う。
だが、全員集中していて誰一人として聞いていなかった。

「何これ、あたしだけ置いてけぼり？」

「パスカル！それとエリー！二人を追え！！」

「あ、気付いてたんだ」

エリーは渋々、パスカルはのほほんと頭の後ろで手を組んで、ルイス達の向かった方に行った。

「良かったのか？5人で来てくれても構わなかったが」

「いえ、1対5では卑怯ですから」

（1対3は卑怯とは言わないのだろうか…）

リチャードは心の中で思うだけにして、口には出さなかった。

「では、そろそろ本当に始めるか」

そう言うと同時にマリクが投刃を投げる。

「腐食、其は希望の終焉！サイフォンタングル！！」

マリクが詠唱を終えた瞬間、アスベル達の足元に黒沼が現れる。
アスベル達はそれを避けるが、アスベルの避けた先にマリクが投刃を投げてくる。

「はっ！^{ロールフレア}旋の炎！」

投刃は回転しながら燃え上がる。

アスベルはそれを剣で止める。

その時にはリチャードはマリクに近付き、細剣を振りかぶっていた。

「てやっ！雷神剣！斬り刻め！！」

剣を振り下ろし、突き刺すとマリクに雷が落ち動きを止める。

その後、連続突きをし、斬り抜けた。

「くっ…其は耐え無き息吹！フォトンブレイズ！！」

マリクは技を喰らいながらも瞬時に詠唱を済ませ、リチャードの目の前で炎の弾を爆発させる。

「ぐあっ！」

「快方の光よ宿れ、ファーストエイド！」

リチャードの体を光が包むと、傷を癒していった。

「流石に騎士学校で教官をしているだけはある…」

「お褒めにあずかり光栄です。其は猛き兵戟！ロックランス！！」

アスベルの足元に岩が突き上げて来る。

それを何とかアスベルは回避し、マリクにア라운드ステップで近付いて、剣を横に構えた。

「衝皇震！！」

マリクはそれを簡単に避けるが時間を稼ぐだけで十分だった。

「来たれ闇の眷属！開くは絶望の扉！シェイドインペリアル！！」

マリクは闇の球体に吸い寄せられる。

そして、その技を使った瞬間、リチャードの中で何かが目覚めるような感覚がした。

——何だ？この感覚…

——どこかで感じた事があるような…

——さっきだ、さっき感じたんだ…

——どうすればいいんだ…？

——何故僕は戦っているんだ…？

——僕が何かしたか…？

——僕は悪くない、悪いのは…

——ゼンブ、アイツラダ！！

「うおおおおお!!!!」

リチャードは上を向いて叫び出す。
左目は血のように真っ赤だった。
リチャードはとてつもない速さでマリクに近付く。

「一瞬で決める！」

リチャードは剣を振りかぶる。

「剣閃よ唸れ、疾風のように！」

秋沙雨の時よりも速く連続でマリクを突く。

「ヴァーテクス・ローズ!!」

その声と同時にリチャードは後ろを向き、手を振る。
するとマリクの後ろにバラが現れ、共に散っていった。

「リチャード…！」

「くっ…」

マリクはまだ立ち上がる。

それを見てリチャードは嘲笑う。

その時、マリクの後ろから兵が二人走ってくる。
グレルサイドの兵達だ。

「殿下！公爵様から伝令です。砦を無事制圧いたしました!!」
「…これ以上足掻いても仕方がないようだ」

そう言うともリクは投刃を地面に放り投げる。
リチャードは剣を構えてマリクに近付く。

「往生際だけは良いようだな。感心だ」

そう言って切っ先をマリクに向ける。

「待ってくれ！！教官はリチャードが憎くて齒向かった訳じゃない
！！！！」

アスベルは手を握る力を強くして言う。

「教官は…リチャードの目指す国家に必要な人物だ！だから…」

「必要かそうでないかは僕が決める」

「まあまあ、いっぺん落ち着いて。リチャード君」

「！ 誰だ…！！」

グレルサイド兵は頭を下げる。

その間から出て来たのは、茶髪の天然パーマの青年だった。

「フェザント…」

「久しぶり、何年ぶりだったか？」

「話はちよつと聞いてたけどこの人を殺す気か？」

そう言ってフェザントはマリクを指差す。

「…それがどうした」

「それがどうしたって…本気で言ってる？」

「…っ！ぐあっ…！！」

リチャードは左目を抑えてしゃがみ込む。

アスベルとフェザントは急いでリチャードに駆け寄る。

「リチャード！？どうした！！」

「違う…僕は…！！」

「リチャード！」

「大丈夫だ…心配には及ばない。少し気分が優れないだけだ」

リチャードはよろよろと歩きながらマリクの横を通り過ぎる。

「この者達の処分は後で決める。とりあえず逃げないように皆のどこかに放り込んでおけ」

兵は敬礼をして、マリク達を連れていこうとする。

「…先にデールの所へ行っている」

そう言い残すとリチャードは行ってしまった。

「どうやらここが最期の場所ではなくなったようだ」

口を開いたのはマリクだった。

「アスベル…卒業こそ叶わなかったがお前はもう立派な騎士だ…」

マリクは腕を組み、後ろを向いて歩きだした。

「殿下の力になってこの国を支えてくれ」

「教官…ありがとうございます。これもひとえにこれまでの教官のご指導のおかげです」

アスベルは敬礼をして見送った。

「…そう言えば、あの人が連れてた兵って二人じゃなかったか？」

「そうだったはずだが…？」

「いや、何でもない…」（逃げられたか…）

フェザントは振り返る。

するとそこにはたった今戻って来た、ルイス、メイリ、エリー、パスカルの四人がいた。

「おっ？ 友達か？」

「ん？ 誰だ？ こいつ」

「そういえばまだ名前を聞いていなかったな…えーと」

「^{わし}農か？ 農の名前はフェザント・エドセル」

「へえ、で、何でこんな所にいんだ？」

「そりゃあ、リチャード君の友達だからじゃ」

「そんなんで入れるもんなのか？」

フェザントは愉快そうに笑っている。

だが、密かに視線を感じていた。

「…どうだった？」

ウォールブリッジの上空を魔物に乗って話している男が二人。

「あのメイリとかいう女…まあまあできるな」

声からして先程メイリと戦っていた兵だろう。

誰にも気付かれないように変装し、誰にも気付かれないように姿を消していたのだ。

「それに…失敗作まで来るとはな」

「そんな奴らはどうでもいい。あいつはどうだった？」

「…実際やっていないからあまり分かんが…やはりあの力は侮れんな」

「そうか…」

一人の男が魔物に命令を出し、どこかへ飛んで行った。

もう一人の男はまだルイス達を見下ろしていた。

「いずれ我らのものにしてやる…」

そう言うとその男も魔物に命令を出し、どこかへ飛んで行った。

第16話 唸る疾風 邪悪に満ちて（後書き）

（雪龍）

「うーん…」

（ルイス）

「どうした？」

（雪龍）

「いやね、段々テイルズらしくなくなってきたるなあって思って」

（ルイス）

「俺達が入ってる時点でテイルズらしくなくなってるんだよ」

（雪龍）

「…それで君は良いのか？」

（ルイス）

「良くはない!!」

（雪龍）

「だよねー…」

（ルイス）

「いうことで会議だ！会議!!」

（雪龍）

「どうせ君達じゃまともにできないから認められないな」

（ルイス）

「頼む！この通りだ!!」

（雪龍）

「会話だけだからイケると思ったんだろうけど、そんな棒立ちでこの通りって言われても…」

（ルイス）

「頼むよ…」

（雪龍）

「分かったよ。ただし次回ね」

(ルイス)

「サンキュー！」

(メイリ)

「…次回とか言って忘れさせる気やろ。アレ」

(エリー)

「…そうだね」

第17話 友達に向かって

一行はまだペチャクチャ会話していた。
下に行っても何をすればいいのかわからないので、ここで会話しているのだった。

「そうかそうか、君達もリチャード君のお友達か」
「フェザントは貴族か何か？」

パスカルが尋ねる。

フェザントは少しパスカルの顔を見た後、おお！と言って目を見開く。

「君はフリー姉さんによく似てるな！」

「あれ？質問は無視なの？」

「フリー姉さん？それってフェザントのお姉さんなん？」

今度はメイリが尋ねる。

すると、メイリの顔を見て答える。

「いや、正確に言うとな命の恩人だ」

「メイリのは答えるんだ」

パスカルはふてた様に頬を膨らます。

そして、下を見ているソフィに近寄って抱きつこうとする。

だが、そう上手くいくものでもなく、パスカルはソフィに突き飛ばされ危うく川に落ちそうになった。

「いてて…」

「シェリア…」

「え？」

ソフィの呟きにアスベルが振り返る。

「シェリアが下にいる」

「何だって!？」

アスベルも下をしてみる。

そこには確かにシェリアがいた。

「何でこんな所にシェリアがいるんだ？」

「とりあえず下行ってみるか」

という事で一行はやっと下に降りる事になった。

オリジナルチャット—————小さい勘違いはやがて大きくなっていく—————

(メイ) 「なあなあ、シェリアって誰なん？」

(エリ) 「私とルイスとアスベルの幼馴染だよ」

(メイ) 「幼馴染…小さい頃から仲が良い…ライバルか！」

(ルイ) 「何のだ？」

(メイ) 「いや何でもないねん。別にその子が幼馴染やからってハ
ンデにはならへん」

(ルイ) 「…マジで何の話してんだろ」

(エリ) 「すごい勘違いをしてるみたいだね」

(ルイ) 「お前…意味分かってんのか？」

(エリ) 「ルイスと一緒にしないでよ」

(ルイ) 「え？それどういう事？」

(エリ) 「…やっぱ鈍感だなあ」

シェリアは最近使えるようになった光の力で傷付いた兵の手当てをしていた。

「はあ…」 (アスベル…今どこにいるのかしら)

「シェリア？」

シェリアは振り返る。

するとそこにはたった今頭の中にいた青年が目の前にいた。

「アスベル！？どうしてここに…？」

シェリアはアスベルの横にいるソフィを見つけると、傍まで歩み寄

って肩に手を掛けた。

「良かった…！あなたも無事だったのね」

横でパスカルが羨ましそうに見ているがそれは気にしない。

次にシェリアが見たのは後ろにいるメンバーだ。

白と赤の混じった髪の少女だったり、緑髪の少女だったり、茶髪の天然パーマの青年だったり、第一印象は全員髪だったが、とりあえず見た事のない人がたくさんいた。

「あの…あなた達は…」

「あたしはパスカル！よろしくシェリア」

「儂はフェザント・エドセルだ」（可愛い娘だなあ…）

「ウチはメイリ・アル・スロツテスや！皆の知っての通りルイスのフィアンセ婚約者や！」

「ええ！？」

「いや、違うから。知っての通りじゃないし、てか婚約者になった覚えがないし。あと、シェリアも普通に信じるな」

シェリアは苦笑する。

そして、一応よろしくと言っておいた。

「で、何でシェリアはこんな所にいの？」

「私はラント領の有志により結成された救護組織の一員として来たの。戦いで負傷した人々を助けたいと思って…」

「救護組織の一員…」

「立派だねえ。人助けの為に戦争してる場所にわざわざ来るなんて」

「ホンマやな。どっかの誰かさんとは大違いで人の事を考えて行動できるなんて立派やわ」

「どっかの誰かさんって誰の事だろ？」

パスカルは周りをキョロキョロ見渡す。
すると、メイリに後頭部を叩かれた。

「……そういう事なら今からリチャードに引き合わせよう。その方が今後の活動もしやすくなるだろう」

「確かデール公の所に行くつつつってたよな」

「なら早いところ行っちゃおう？」

「でもどこにいるんだ？」

「「あ……」」

アスベルの言葉により言葉を失う一行。
だが、そこに救世主がいた。

「リチャード君なら中央塔だよ」

その救世主とはフェザントだった。

「何で知ってたんだ？」

「さっき僕にそう言ってきた兵がいるんだよ」

「ナイスだフェザント！じゃあ、中央塔に行くか」

一声は中央塔へ向かった。

シェリアはソフィの髪を見て気付いた。

「あなた……髪が少しバサバサしてるわね。それに全体にほこりっぽく……お風呂はちゃんと入ってる？」

ソフィは少し考えて首を横に振り言った。

「入ってない」

「ええ!!?」

シェリアはソフィの言葉に目を丸くする。

それにつられてソフィも驚く。

シェリアはアスベルとルイスのいる方に向いて言った。

「この子の面倒…ちゃんと見てたの?」

「ほったらかしにはしていない!」

「まあ、俺達ができる事にも限界があるって事だ」

「それはそうかもしれないけど…」

困っているアスベルの隣で何故かパスカルは笑っている。

シェリアはニコツと微笑んでソフィに言った。

「後で私がきれいにしてあげるからね」

「うん」

ソフィは今度は首を縦に振った。

その時、愉快的音楽と共にパスカルがシェリアに歩み寄る。

「お風呂かあゝ。別に二、三日入らなくても死なないんじゃない?」

「死にます!!…もう、清潔は健康の第一歩なのよ。あとで二人ともキレイに洗いますからね」

「へいへーい」

パスカルは右手と右足を上げて言った。

それを見てソフィも真似して

「へいへーい」

「コラ！真似しないの！」

怒られた。

パスカルもギョツとしている。

「まるで母親だな…」

アスベルは両手を広げて苦笑する。

「それは良いんだが…メイリは何してるんだ？」

「コレか？コレはラジカセ言うてな。音楽流せんねん」

愉快的音の発生源はメイリだった。

一行は途中道に迷いかけながらもなんとか中央塔についた。
そして階段を上りリチャードに近付く。

「殿下の勝利を知った諸侯や兵が続々と集まってきております。もはや大公と言えど殿下の勢いを止める事は叶わないでしょう」

「偽王はまもなく滅びる…叔父セルディクよ。最期の時を震えて待つがいい」

「あれが…あのリチャード？」

シェリアは驚いたように言う。

だが、そんな事は気にせずフェザントはリチャードに話しかける。

「おい、リチャードくん、来たぞー」

「皆来たか…こちらにおいで」

そう言われたので全員リチャードに近付く。

「…ようやくここまで来た。後は王都を攻め落とせば戦いは終わるだ」

「見ている…正義が勝つという事を晴天の下に知らしめてやる」

その時、リチャードがシェリアに気付く。

「ん？君は…」

シェリアはリチャードの前まで寄り膝をつく。

「シェリア・バーンズです。お久しゅうございます。殿下」

「シェリアさんか！君も僕の発した檄に応じて馳せ参じてくれたのかい？」

「あ、私は…」

「シェリアは救護組織の一員として来とんのやって」

「そういう事なら頼むよ。傷つき苦しんでいる兵達を治してやってほしい」

「かしこまりました」

シェリアは一礼する。

「捕虜の治療はしなくていいから。味方を優先してやってくれ」

「え…？」

「叔父に手を貸すような連中は全て賊軍だ。負傷しようと慈悲を与える必要なんてない」

全員驚いてリチャードを見る中、一人リチャードの元に駆ける者がいた。

それはルイスだった。

ルイスはリチャードの胸倉を掴む。

それには兵やデールどころか、アスベル達も驚いていた。

「何をするんだ！ルイス！」

「お前…最近おかしいぞ！？」

「…どういう事だ」

「昔のお前は人の事を第一に考える優しい奴だったじゃねえか！！」
「聞いてなかったのか？賊に優しくしてやる必要はない」

ルイスは齒軋りし、手の力を強める。

「あいつらだってウィンドルの人間じゃねえか…！！」

「僕に敵対する人間など僕の王国の民ではない」

「リチャード…てめえ…！！」

「彼らは見せしめに処刑する。僕に逆らったらどうなるか思い知らせてやらなくてはね」

「なっ…！」

ルイスは絶句する。

明らかに昔のリチャードと違うからだ。

「しかも僕は奴らのせいで危うく死にそうな目にも遭った。絶対に許せない」

リチャードは胸倉を掴まれているにもかかわらず、淡々と続ける。

「とにかくそういう事だ。僕が奴らを処刑しようと思えるのも当然だろう？」

「それでも…あいつらは自分の意思で敵対してるわけじゃねえだろ！」

「そうだよ、リチャード君」

そこに入って来たのはフェザントだった。

「恐怖で人を縛る事は上に立つ者のする事じゃない」

「フェザント…君は僕に王の心得でも説いているつもりか？」

「違う！ 僕は…」

「うるさい！！ 黙れ！！！」

リチャードはルイスを撥ね退け、剣を抜き、フェザントに切っ先を向ける。

その場にいる全員が強張る。

「僕が目にかけているからと言って少しい気になっていないか？」

そう言った瞬間、ボゴツという音がしてリチャードが横に吹っ飛ぶ。

そしてその場に残ったのはルイスだった。
要するにルイスがリチャードを殴り飛ばしたのだ。

「何をする…!!」

「友達なんだろうが…」

ルイスの声が震えている。

「フェザントはてめえの友達だろうが!! 冗談でも友達に刃を向けるなんて真似すんじゃないか!!」

「き、貴様! 殿下! 大丈夫ですか!？」

デールはルイスを睨むと、リチャードを抱え起こす。

「…ぐっ! ぐあああああつ!!!!!!」

リチャードは頭を抱え、蹲る。

「殿下! 殿下を室内にお連れしろ!! それとすぐ医者だ!! そして…」

そして、デールは最後にこう言った。

「ルイス・ラグゼリアを牢屋に放り込んでおけ!!」

第17話 友達に向かって（後書き）

（雪龍）

「聞いて聞いて！！友達から『二つ名メーカー』って言うのが面白いって言うからやってみたんだ！」

（ルイス）

「へえ、で、どんなのなんだ？」

く皆の二つ名く

アスベル・ラント

デッドフアーザー
『火燐屍毒』

ソフィ

ディバインワルツ
『電波封神』

ヒューバート・オズウェル

フラクタルブレイン
『増殖妄想』

シェリア・バーンズ

サイレントファントム
『私の可愛い論理』

リチャード

ノイジーインモラル
『蠢く振動』

マリク・シザース

ノイジーワールド
『蠢く狂乱』

パ^oスカル
グロテスク
『殲滅』

ルイス・ラグゼリア
インスタントペナルティ
『壊滅定理』

エリス・ライレージ
カスケイドワルツ
『闇黒多面体』

メイリ・アル・スロツテス
デリートミラーージュ
『忘却消去』

フェザント・エドセル
カーニバル
『悪の華』

雪龍
パンタレイ
『残響』

作者の本名
カオティックチルドレン
『四重断片』

(メイリ)

「…ツツコミ所多過ぎるやろ」

(ルイス)

「カッコイイのもあるんだけど…てか、リチャードとマリクの似てね？」

(雪龍)

「それは僕も驚いたよ」

（ルイス）

「シェリアのは…全く意味分からん」

（フェザント）

「儂は悪の華だ！」
カーニバル

（エリー）

「なんの！私は暗黒多面体だよ！」
カスケイドワルツ

（雪龍）

「…えーと、面白いので皆さんもぜひやってみてください」

（メイリ）

「後書きで何の宣伝しとんねん！！」

第18話 友への想いを友へと繋ぐ

「さあ！さっさと入れ！！」

「何で俺が牢屋なんかに入んねえといけねえんだよ！責任者出せ！！」

ルイスは両手を兵に掴まれている。

必死に暴れて逃れているが逃げ出せる気配はない。

「隊長！」

兵が前から走ってくる。

その兵はルイスの一步前を歩いている兵の前まで行って敬礼をした。

「どうした？一体…」

「それが…」

「はつきり言え！」

「は、はい！実は捕虜の数が多く、牢が開いていないのです！」

それを聞いてルイスはニタツと笑う。

「ほれ見ろ。やっぱ俺を牢に入れるなって神様が言っただよ」

「…仕方がない。相部屋でも構わん」

「え！？」

兵はルイスの言葉に全く耳を傾けず、部下に命令した。

部下の兵はルイスを連れて行って牢に入れた。

「ちよっ、俺一人じゃねえと安心して寝れねえから！暴れちゃうか

ら!!」

「黙れ! 犯罪者の分際で:!!」

「あっ! てめえ、今俺の事犯罪者つつたな。こっち来やがれ! 三秒でのしてやる!!」

「全く: 静かに出来んのか」

牢の奥から男の声がしてそちらを振り向くと、記憶に新しい人物がいた。

「あんたは:」

数秒の沈黙が流れる。

ルイスはあっ、と言って何かを閃いたように目を見開いた。

「○※△・★||???!」

「それは何と読むんだ: 覚えていないなら誤魔化すな」

「覚えてるよ:」

ルイスは男の前に座る。

「教官: だろ?」

ルイスが入れた牢にはマリク・シザースがいた。

ルイスを除いた一行はウォールブリッジ内の一室で休んでいた。

「ルイス…大丈夫かな」

エリーが心配して言う。

それには誰も確信を持って大丈夫とは言えなかった。

「ヤバいで…もしかしたら拷問とかされてんのとちゃうん…」

「ええ！？拷問！？」

「何も聞き出す事なんて無いのに拷問する必要はないと思うが…」

「「そ、そっか」」

部屋にまた重い空気が立ちこめる。

「けど、簡単に出してもらえとは思えんな」

そう言ったのはフェザントだ。

別に一緒にいる必要はないのだが、流れでここにいるらしい。

「じゃけど儂が心配なのは…」

その時部屋にコンコンという音が響く。

そして、扉からデールが入って来た。

「殿下は落ち着きを取り戻された。君達が懸念していた捕虜の扱いに関しては一とまず保留となった。彼らはしばらくこの砦に拘留する」

「…わかり——」

「駄目！！！！ぜったいたい駄目！！！！」

怒鳴ったのはエリーだった。

その場にいる全員が驚いてエリーを見た。

「せめて…せめてルイスだけは！！」

「それは駄目だ」

「そこを何とか…！！」

「いくら頼まれても駄目だ」

「むう…」

「エリー…気持ちはウチも一緒や」

二人は泣いて抱き合う。

フェザントはデールの肩に手を置いて言った。

「あんな可愛げな少女達が泣いて頼んでるのに駄目なのか？」

「…：君達は今後は殿下のお側から離れてもらう」

デールが言うには付いて来るのは勝手だが、特別扱いはしない、要するに自由にしろということだ。

「なくんか、予想外の展開になっちゃったね」

「ホントだよ。折角嘘泣きまでしたのに…」

「薄情なおっさんやったな」

そこにシェリアが入ってくる。

悪口を言っていたエリーとメイリはデールが帰って来たのかと思い、体を強張らせたが、シェリアの姿を見て安心した。

「シェリアか：驚かせないでよ」

「心臓止まるかと思ったわ：」

「え？ 私何かいけない時に入ってきた？」

「いや、こっちの話」

パスカルがベットから降り立ちシェリアの前に出る。

「あつ、シェリアお疲れ♪ 負傷者の救護は終わったの？」

シェリアは無言で頷く。

それを見てメイリはシェリアに言う。

「パスカルのテンション正直ついていけへんやろ？」

「え？ いえ、そんな事は：」

「気にせんでエエよ。皆そう思っとるから」

「：メイリとパスカルって仲が悪いのか？」

「「そんなことは無いよ（あらへんよ）」」

「そんな事はどうでもいいとしてこれからどうする？」

フェザントが珍しく、もう一度言おう、珍しく真面目な顔で言った。
アスベルが口元に手を添えて考える。

「デール公のあの口ぶりだと俺はもうここにいてはいけないのかも
しれないな：」

「違うって、君がどうしたいのか聞いてんの」

「俺は…」

「ラントへは…戻らないの？」

シェリアが悲しそうな目で見て尋ねる。

アスベルは俯いて目を閉じる。

「今のラントに…俺の居場所はない。知ってるだろ？」

「でも、ちゃんと話し合えば…」

「話し合うまでもない」

アスベルは語気を強めて言う。

「俺はラントの領主にはふさわしくなかったんだ」

「そんな…事…」

「諦めえや、シェリア」

メイリが会話に割って入る。

そして先程パスカルが座っていたベッドに座る。

「アスベルは追放されたんか知らんけど、今ここにおるんは自分の意志でや。何言っても無駄や」

「でも…」

「…そんな気になるんなら一緒に来ればいいやん」

「えっ？」

シェリアは思わず声を出す。

「それ賛成。シェリアと一緒にだと楽しいもん！」

「という事じゃけどどうする？」

「…良いんですか？」

その言葉に全員が頷く。

「でも勝手に救護組織を抜けちゃって良いの？」

沈黙。

パスカルの一言で一瞬にして場の空気が凍った。

負傷者の手当ての為にここに来ているのに勝手に単独行動をして良いのだろうか。

「というよりこれから何処に行くかも決めてないのにどうするの？」

沈黙。

パスカルの度重なる指摘により全員言葉を失う。

そこで口を開いたのはアスベルだった。

「俺は…このままリチャードの軍に加勢したい」

「ほんなら行く場所はバロニアで決定でエエとして…」

沈黙。

行き場所が決まったのは良かったものの、シェリアの事がまだ決まっていなかった。

次に口を開いたのはフェザントだった。

「じゃったら救護組織ごとバロニアに連れて行けばえんじゃねん？
どうせバロニアが戦場になるんじゃないやえさ」

『そ、それだ！！！！』

何の事だかわかっていないソフィ以外の声がハモる。
フェザントの名案に誰も反対しなかった。

しかしこれは後でわかる話だが、救護組織は何も言わなくてもバロニアに行くつもりだったらしい。

オリジナルチャット——————似てるけど……——————

(メイ) 「フェザン—」

(フェ) 「フェザン？何じゃそれ？」

(メイ) 「ただのあだ名やから気にせんでエエよ」

(フェ) 「そうかー、ならメイリはメイメイじゃな。なんかマイマイに似てるな！」

(メイ) 「：やっぱフェザントって呼ぶわ」

(フェ) 「そっか、そりゃ残念じゃなあ。で、何の用だったの？メイメイ」

(メイ) 「わざとやってる？」

(フェ) 「何が？」

(メイ) 「：メイリって呼んでくれん？」

(フェ) 「そうかあ…残念じゃな」

オリジナルチャット——————独特だよね——————

(エリ) 「ねえねえ、フェザント！」

(フェ) 「どうしたの？」

(エリ) 「フェザントってさ。若いくせに『儂』とか『くじゃ』と
かって何かその…」

(フェ) 「年寄りに思える？」

(エリ) 「うん、何でそんな喋り方なの？」

(フェ) 「これはな、方言といってな。地域によって違うんじゃないけど……メイリもじゃろ？」

(エリ) 「確かに……なら『儂』って言うのは？」

(フェ) 「……何でじゃったっけな」

(エリ) 「あら……」

一行は外に出る。

すると兵が何列かに並んでいて、その前にリチャードとデールが立っている。

一行がその後ろに並ぶと目の前の兵が振り返り言った。

「デール公からの伝言です。アスベル様御一行の参戦を認めるとのことです。ただし、扱いは本体ではなく、遊撃隊にするとのことでした」

「わかりました。公に全力を尽くすとお伝えください」

アスベルが敬礼すると、兵も敬礼し前に向きなおした。

「遊撃隊って…」

「要するに好きにやれってことでしょ」

「それはええんじゃけど…エリーとメイリがおらん」

「「え———?」」

ここはウォールブリッジのどこかにある牢。

そこに人影が二つ。

エリーとメイリだ。

「ここまではバレなかったね」

「この調子でいけるとエエな…」

二人はルイスのいる牢に向かっている。

ルイスがどこにいるかは知らないがとりあえず向かっている。

「…でさあ…」

「「！ この声は…！」」

二人は急いで声のした方に走った。

その牢の中を見ると、向かい合って座るルイスとマリクがいた。

「「ルイス…！」」

「お？ よお、どうしたんだ？ こんな所で」

「い、今出してあげるから…！」

「アカン！ 鍵がない…！」

「何やってんだお前ら…」

慌てふためくエリーとメイリに、呆れるルイス。

ルイスは立ち上がりエリーとメイリの前に立つ。

「お前らこれからどうするんだ？」

「えっと、リチャードの軍と一緒にバロニアへ…」

「そっか、頑張れよ」

そう言ってルイスは柵越しに二人の頭に手を置く。

「頑張れって…ルイスは？」

「俺か？ まあ、もうちょっとこん中でのんびりしとくわ」

「でも…」

「お前らは俺の代わりにリチャードを助けてやってくれ」

ルイスは笑いながら言う。

「じゃっ、頼んだぜ」

「わかった！」

「行ってくるわ！」

「行っってらっしゃい」

ルイスは二人を見送るとまたマリクの前に座る。
マリクは目を閉じて笑いながら言った。

「信頼しているのだな」

「まあな、あいつらは……」

ルイスは二人の行った方をもう一度見る。

「仲間であり、友達だからな」

第18話 友への想いを友へと繋ぐ(後書き)

(フェザント)

「ルイスが捕まってるから今日は儂じゃな」

(雪龍)

「フェザントって何弁なの？」

(フェザント)

「一応岡山弁じゃ」

(雪龍)

「フェザントの言葉でわからないことがあれば気軽に聞いてください」

(メイリ)

「それにしても今回から急に方言使い始めたやろ。何でや？設定盛らんでエエねん。方言キャラはウチだけでエエんや」

(雪龍)

「何言ってるのこの子！？」

(フェザント)

「別に今回からじゃないんじゃけど…」

(メイリ)

「いや、今回から多用し始めたやろ。ウチは知ってんで」

(フェザント)

「まあ、皆の雰囲気慣れたからかもしれないなあ」

(メイリ)

「フェザン…」

(フェザント)

「メイメイ…」

(メイリ)

「…ごめん」

(雪龍)

「メイリを倒した!?! まあ、次回もお楽しみに!」

第19話 いざバロニア城へ

「よーし！どンドン行くでえ！！」
「おー！！」

メイリとエリーの二人は言葉通りどンドン進んでいく。
只今ルイスを除く一行はバロニアに向かっている。
フェザントもリチャードが心配だとかで付いて来ている。

「あのさ、二人とも…」

アスベルが二人を呼び止める。

二人は振り向く。

「何やの？手柄立ててルイスを出してもらおう思ってたのに」

「そうだよ。早くしないとルイスが餓死しちゃうよ」

「しないと思うが…」

「二人には言っただけで農らは遊撃隊なんよ」

「…え？」

遊撃隊とは戦況に応じて味方の援護などをする部隊の事だ。
前回は言ったが要するに好きにすればいいのだ。

「なら余計良いやん！」

「私達だけで動いていいなら手柄立てやすいしね」

「…ポジティブだな」

二人はまたどンドン進んでいった。

オリジナルチャット———重要だよ———

(パス) 「ねえねえ、シェリアー」

(シェ) 「どうしたの？パスカル」

(パス) 「ソフィがいらないんだよ。どこにいるのかなあ？」

(メイ) 「ソフィならアスベルの後ろに隠れとるで」

(パス) 「あつ、ソフィ、触らせてよ」

(ソフ) 「…だめ」

(パス) 「えゝ、何で？」

(メイ) 「あんたの場合第一印象が悪かったんが原因やろ」

(シェ) 「そうなの？」

(ソフ) 「『だいいちいんしょう』？」

(メイ) 「最初に会ったときに受けた感じの事や。悪かったやろ？」

(ソフ) 「うん」

(パス) 「ガーン！そんなあ…」

(ソフ) 「メイリはアスベルを助けてくれたから大好きだよ」

(メイ) 「ありがとな！ソフィ」

(パス) 「メイリがソフィに触ってる…ガクッ」

(シェ) 「パスカルに止めを刺した…」

一行はバロニアの一步手前まで来たが、そこには兵が並んでおりバロニアへは入れそうになかった。

「あちあ、どうするの？バロニアに入れないんじゃないでしょうか？
いよ？」

パスカルが頭を抱えて悩む。

その時エリーが何かに気付いて近寄る。

そこには洞窟があり入り口には兵が一人立っていた。

「ねえねえ」

「ん？何だ？貴様は」

「私達遊撃隊なんだけどさ、王都に入れなくて困ってんの。どこから入れる？」

兵は遊撃隊と聞いて何か閃いた。

「もしかしてアスベル様ですか？」

「いや、アスベルはあっち」

エリーは向こうにいるアスベルを指差す。

それに気付いたアスベルが近付いて来た。

「どうしたんだ？エリー」

「この人からどうしたら王都に入れるか聞いてたの」
「どしたん？」

皆も近付いて来た。

全員に先程アスベルにした説明をする。

「なるほど。で、どうすれば入れるんや？リチャードも入ったんやろ？」

「先程入られたが…」

「どっから入ったんや？」

「それは…」

「教えれんのか？」

「デール公に特別扱いすると言われておりまして…」

「ええけえ、教えてや。な？」

「しかし——」

フェザントは兵の胸倉を掴んだ。

「じゃけえ、教えろ言うところが！！聞こえんのかポケエ！！！」

「で、殿下はこの中に行かれました…！」

フェザントは兵を離し、振り返る。

「こん中じゃって。さ、行こうや」

オリジナルチャット————表と裏————

(エリ) 「さっきのフェザント、すごい迫力だったね…」

(フェ) 「そうか？」

(アス) 「ああ、かなり驚いた」

(メイ) 「普段はポケエってしとんのかな」

(フェ) 「ポケエ」

(アス) 「本当にしてるな…」

(エリ) 「大人しい人ほど怒ったら怖いんだよ？」

(メイ) 「ならエリーにも気をつけなアカンな」

(アス) 「確かな。エリーは大人しいし」

(フェ) 「儂と同じか？」

(エリ) 「そう言われると…なんかやだ」

(メイ) 「今の地味に酷いな」

「ちやうて！これはそっちゃって！！」

「えっ！？こっちでしょ？」

二人は仕掛けに頭を悩ませていた。

ブロックを溝に落として道を作るという仕掛けだ。

難易度はそれほど高くはないと思う。

「…リチャード君は通ってわざわざブロックを持ち上げたんじゃないやろうか」

「どういう事？」

フェザントの呟きにパスカルが尋ねる。

「だって、ブロックが全部上にあったまんまじゃったろ？」

「んー、ブロックを落とさずに進んだとか？」

「どうやって？」

「溝を進んで」

「なるほど！その手があったか！！」

エリーとメイリはようやく道を作れたようだ。

「次行こう！」

一行は階段を上る。

その上った先にはリチャードが一人立っていた。

「リチャード！」

「アスベル…来たのか」

リチャードは振り返って言った。

リチャードの足元には何人もの兵が倒れている。

「見ての通りだ。待ち伏せを受けて部下が全員やられてしまった。
何とか僕だけが残ったが…」

「この先は危険だ。後の事は俺達に任せてもらえないだろうか」

「それはできない。僕は何としても自分の手で叔父と決着をつけた
いんだ」

アスベルは少し考える。

「ならばせめて俺達を同行させてくれないか」
「…良いだろう」

リチャードは頷いて言った。
だがその時、リチャードは腹を抱えて蹲った。

「くっ…やめろ…出て…来るな!!」

「大丈夫か!? リチャード!」

「やっぱどつか悪いんとちゃうん?」

「もしかしてウォールブリッジの時の怪我が!?!」

「いや…セルディクに盛られとった毒か」

全員フェザントの方に向く。

真面目そうな顔をしている。

「…ああ、叔父は依然毒を盛っていた。だが、それが上手くいかなかったため今度は直接殺しにかかったんだ」

リチャードは最後にこう言った。

「…この借りは必ず返す! 僕の命を狙った事を後悔させてやる…!!」

「リチャード…」

リチャードは立ち上がり振り返る。

「…もたもたしてはいられない。さあ、行こう」

そう言い、リチャードは城に向かった。
アスベル達はその後を付いて行った。

第19話 いざバロニア城へ（後書き）

（雪龍）

「はぁ、ルイスがいないとすごいやり辛い…」

（メイリ）

「せやけどウチと」

（フェザント）

「儂がいるじゃんか」

（雪龍）

「目の上のこぶが二つで…両目にこぶが…」

（メイリ）

「それどういう事やねん!!」

（ルイス）

「まぁ、やめろよ」

（フェザント）

「おっ、ルイス！」

（雪龍）

「どうしたの？」

（ルイス）

「本編で出番がないから出ようかと」

（雪龍）

「ごめんね。もうちょっと待ってよ」

（ルイス）

「俺主人公なのに…」

（雪龍）

「いや、だから君は——」

（エリー）

「待って！それ以上言わないで!!」

（雪龍）

「何で？」

（エリー）

「ただでさえ出番がないのにこれ以上傷ついたら何しでかすか分かんないよ…」

（ルイス）

「それどういう事だよ…」

（雪龍）

「エリーの言う事にも一理ある」

（ルイス）

「おい!!」

第20話 バロニア城より

ルイスとマリクは牢の中でのんびり(?)していた。

「しっかしあれだな。暇だな、獄中生活って」

「オレも初めて牢に入ったが…確かに暇だな」

牢の中はまた静かになる。

その時、ルイスは何か思いついたように立ち上がった。

「一緒に脱獄しようぜ！」

「…！ 一体どうするつもりだ？」

「乗ってくれんのか？」

ルイスはニヤツと笑った。

「この城どないなっとなねん！」

メイリは怒鳴っていた。

「どうしたの？メイリ」

「もう嫌や！！」

メイリは壁に向かって乱射しまくる。

それをなんとかアスベルとパスカルの二人掛かりで止める。

「何があっただんだ！？」

「壁失くしたら一気にセルディクン所に行ける筈や！！」

「要するに広すぎて歩くの疲れたの？」

「ちやうちやう、歩くのメンドなってん」

「殆ど一緒だよ」

パスカルが珍しく的確かつ冷静にツッコむ。

「それにしても本当に広いね」

「そうじゃな、リチャード君、後どれ位？」

「もう少しだ」

リチャードは一言で答えると先頭を歩きだした。

「リチャード、お前は特に狙われているんだから後ろに…」

「僕は大丈夫だ。それより早くセルディクの所へ…」

「！ 危ないリチャード！！」

アスベルがリチャードを押し飛ばす。

すると、リチャードのいた所に槍が刺さる。

「この武器はまさか…」

アスベルが槍の飛んできた方を見る。

そこには長い金髪後ろで括った眼鏡の女性がいた。

「ヴィクトリア教官…！」

「アスベル、今すぐ殿下をこちらに渡しなさい。そうすれば命までは取らないわ」

そう言った瞬間ヴィクトリアは横にジャンプする。

メイリがヴィクトリアに向けて弾を放ったのだ。

「こんな所まで来て大将渡す思うてんのか？」

「それに8対1じゃけえこっちの方が圧倒的に有利だと思うが」

フェザントはそう言ってどこから弓を取り出した。

「フェザントは弓で戦うんか？」

フェザントは右手の親指をピンと立てる。

ここまで来る間に、何度も魔物モンスターと戦ったが、フェザントは戦っていなかったのだ。

「じゃないとこんな物騒な物出さんよ」

「それもそうやな」

メイリはクスッと笑って再度ヴィクトリアの方を向く。

「悪いけど退いてくれへんか？」

「それは無理な話よ」

「気が引けるけど、こっちは8人全員で行きます」

エリーも槍を構え、臨戦態勢に入る。

「あなた達は何か勘違いをしてないかしら。そっちは8人だけど…」

ヴィクトリアの後ろから続々と兵が現れる。

「こっちは20人よ」

「…な、何や！あんた、卑怯やで！！8対20でどないすればエエねん！！」

「…お、落ち着け、メイリ、ここはひとまず深呼吸せえ」

「ヴィクトリア教官！何故こんな事を」

「私はもう教官ではないわ」

「叔父の親衛隊か…！」

リチャードは細剣を素早く抜く。

全員それぞれの武器を構える。

「一人につき二人ずつがノルマって事で」

「私はあの人と戦う！」

エリーがヴィクトリアを指差して言う。

「駄目よ、エリー！あの方は多分一番強い…」

「大丈夫シエリア。私頑張る！」

「いや、頑張るとかそういう問題じゃなくて…」

「ほんならウチも混ざるわ」

メイリはそう言ってエリーの横に並ぶ。

「それならエエやろ？」

「でも……」

「やるならとことんやれよ！！」

そう叫んだのはフェザントだった。

それにエリーとメイリの二人は頷いて答える。

「さて、ノルマ三人になったけど儂が五人……いや、十人やるから皆ノルマ二人じゃ」

「それってどういう……」

アスベルが何かを言おうとした瞬間、フェザントは自分の目の前に魔法陣を展開させた。

「一気に片づける！」

フェザントは弓を魔法陣に向ける。

「闇を運ぶ暗黒の矢よ、仇なす者を虚空へ連れ去れ！！」

魔法陣に向けて矢を放つと、矢は魔法陣に溶けるように消えて、魔法陣が黒く輝きだす。

「クレードルアロー！！」

魔法陣から幾つもの黒い矢が放たれ、兵達を貫いた。

「十人抜きクリア！」

周りを見てみると、アスベル、リチャード、ソフィは大丈夫そうだが、シェリアとパスカルが結構苦戦していた。
フェザントはシェリアを助けに向かった。

多分パスカルならなんとかなると思ったのだろう。

「それどういう事？」

パスカルの眩きは気にしない方向で。

「誰かあたしにかまって〜」

エリー&メイリサイド

「やるならとことんやれよ!!」

フェザントの叫びに対し、二人は一度だけ頷いた。

「あなた達は殿下とどういう関係？」

「友達よ（や）！！」

エリーがヴィクトリアに向かって走る。

メイリは後ろから夜鷹の爪跡、ホークネイル悪運の連鎖の順にヴィクトリアへ弾を放つ。

ヴィクトリアはそれを避けるが、避けた先にはエリーが槍を構えていた。

「やっ！閃鋭突！！」

ヴィクトリアはエリーの攻撃を全て躲した。

「ストライダースピア！」

「きやつ！」

突き攻撃をなんとか槍で受け止めるが、エリーは後ろに吹き飛ばされてしまう。

「燃やして燃えろ、聖なる炎！ボムロック！」

ヴィクトリアの前後から炎の弾が飛んで行く。

前から来た炎の弾は防いだが、後ろからの炎の弾は防げず、モロにくらう。

「くっ、ウィンドキルスパア！！」

「うわっ！！」

メイリはヴィクトリアの攻撃を全てくらい倒れる。

「メイリ！」

「こっちは大丈夫や！」

「そろそろ終わりよ」

ヴィクトリアは地面に槍を付ける。

すると、槍の先に岩が集まりまるで隕石のように固まる。

「行けええ！たあ！！」

岩を投げ上げる。

そしてエリーに三連続の攻撃を見舞う。

最後の攻撃の後、岩がエリーの頭上に落ちて来る。

「自然には逆らえな…い！？」

ヴィクトリアは後ろを振り向いて驚く。

エリーが岩を槍で突いて砕いていたのだ。

「一発逆転！！」

エリーは両手で槍を持ち、地面に突き刺す。

「一気に決めるよ！」

ヴィクトリアのいた地面が山のように盛り上がり、ヴィクトリアは空中に飛ばされる。

エリーは槍を地面から抜き、縦に構える。

「行くぞー！」

エリーはジャンプし、ヴィクトリアと同じ高さまで来る。

めいおうそうぶせん
「冥王槍武閃！！」

一気に振り下ろし、ヴィクトリアを地面に叩きつける。
叩きつけられた衝撃でヴィクトリアは気を失った。

「どんなもんだ！エッヘン！」

エリーが終わった頃には、他の所も勝負はついていた。

「すごいぞ！エリー！」

「ええ、かっこ良かったわよ」

「ありがとう」

アスベルとシェリアの言葉にてれたのかエリーは頭を掻く。

「よし！この勢いで叔父を…セルディクを倒そう！」

ルイス&マリクサイド

「おい、全然駄目じゃねえか」

「お前は何も出来んくせに偉そうだな」

「この作戦はアンタの術があつてこそこの作戦だからな。アンタに頑張ってもらわないと」

ルイスとマリクは必死に脱獄しようとしていた。

ルイスの作戦は、マリクの？術で牢を壊してしまおうという、作戦とは到底言えないものだった。

「フォトンブレイズでは弱過ぎて駄目だったし、サイフォンタングルは当たりすらしなかったし…」

「オレも牢相手に戦うのは初めてだからな」

「威張って言うなよ！！」

二人は結局脱獄を諦めたそうだ。

第20話 バロニア城より（後書き）

（雪龍）

「聞いてよ皆！アクセス数が20000を超えたよ！！」

（ルイス）

「それって凄いのか？」

（雪龍）

「わかんない。けど何か凄そうじゃん」

（メイリ）

「まあ、そうやな」

（エリー）

「皆様これからよろしくお願いしますね」

（雪龍）

「では、次回もお楽しみに」

（フェザント）

「オリ技紹介は次回します」

（雪龍）

「活動報告にはルイスのキャラが壊れまくった豹変ボタンがあるよ」

第21話 偽王は滅びる

「やっとここまで来れたか」

リチャードが扉の前で振り返る。

それを見て全員頷く。

準備は万端だ。

「よし！行くぞ！」

リチャードは扉を勢いよく開けた。

中には王座に座った金髪オールバックの男——セルディクと3人の騎士がいた。

「リチャード！よくもここまで……！」

「王都は我が軍勢により完全に包囲されています。あなたはもう終わりです」

「貴様…本当にあのリチャードか？」

セルディクは武器を下ろして尋ねる。

「何を当たり前のことを」

リチャードが剣を抜いて切っ先をセルディクに向け言い放つ。

「父上の敵を取らせていただきます！！」

セルディクはそれを聞いて鼻で笑い、武器をリチャードに向ける。

「今度こそ兄の後を追わせてやる。王位にふさわしいのはこの私だ！！」

セルディクがそう言うのと周りにいた3人の騎士が一斉に走ってくる。騎士はそれぞれアスベル、ソフィ&パスカルコンビ、エリー&メイリコンビが受け持った。

セルディクと相対しているのは、リチャード、シェリア、フェザントの3人だ。

「落ちろ！リリジャス！」

シェリアが詠唱を終えるとセルディクの頭上から雷が落ちる。

セルディクはそれを躲し、リチャードに近付く。

「雷神吼破！」

手に雷を纏わせリチャードに向かって突き出す。
リチャードが躲すと、先程リチャードのいた場所に電気が溜まっていた。

「行けっ！」

フェザントがセルディクに向けて一本の矢を放つ。

「二発！」

今度は二本同時に放つ。

しかし、速さが違う。

速いほうの矢を躲して安心していると、遅い方の矢がセルディクの方に向きを変えて突然速くなる。

それに反応できずに、二本目の矢はセルディクの左手に刺さる。

ライズアップ
「輝蒼天涯！」

そして、次は一気に地面に向けて三本放つ。

地面に放った矢は、セルディクの足元から出て、セルディクの体を持ち上げる。

ヴァイオレット
「刺矢墳塵！！！」

最後に大量の矢を空中にいるセルディクに向けて放つ。

セルディクは自らの武器で必死に防ぐが、矢は肩や足を掠める。

「くっ！」

「この技で沈め！翠緑の暴風！」

「まさかっ……！！！」

「アベンジャーバイト!!」

リチャードはセルディクが地面に付く寸前に術を発動する。
風の牙がセルディクを噛み砕く。

「やったか!？」

「いや…まだだ」

セルディクはゆっくりと立ち上がる。

「貴様らをガキだと思って少し油断していた。だが、もう先程のよう
に上手くいくと思うな!」

セルディクは武器を振り上げる。

「爆焰焼破!!」

武器を振り下ろすと、フェザントに向かって炎の衝撃波が飛び出す。
フェザントは躲す事ができず、直撃してしまう。

「ぐっ!」

「紡ぎしは寛容、その輝きに名を与うる、ピクシーサークル!」

フェザントを光が包む。

すると、体中にあった傷がみるみるうちに治っていく。

「あの娘…治癒術が使えるのか。面倒だな」

セルディクは素早くシェリアに近付く。

「これで終わりだ！魔王！爆焰破あ！！」

武器に炎を纏わせシェリアを二度斬りつける。

シェリアは防御できず、吹き飛ばされてしまった。

「きゃあっ！！」

「あっ…」

フェザントは口をぽっかりと開け、弓を落としてしまう。

「お前…」

フェザントの周りを黒い気が漂う。

「女の子を傷つけるとは…男として最低じゃな…！！」

フェザントは腰を落として拳を構える。

「沈めてやる！」

フェザントはセルディクに駆け寄り腹を一発殴る。

「カハッ！」

「まだまだ終わりじゃねえで！」

その後も数発殴り最後に蹴り飛ばす。

そして背中にかけている矢を掴み、黒い気を矢に集中させる。

「はあああああ！！！」

フェザントは蹴り飛ばしたセルディクに向けて勢いよく矢を投げる。矢はただの矢ではなく、黒い気の影響で速度がかなり増していく。

「アウエイクンスピリッツ！！！」

黒い気を纏った矢はセルディクを貫いた。

「ふう…はっ、シェリア！」

フェザントは急いでシェリアの下へ走り抱え起こす。そして、ポケットからアップルグミを出し、食べさせる。

「まだだ…」

「！！！」

フェザントは驚いて振り返る。

数メートル先に倒したと思っていたセルディクがふらつきながらも立っていた。

「まだ私は…死ねないのだ…！！！」

だが、セルディクは一步前に進んだ所で膝をついてしまう。アスベル達も敵を倒したようで、セルディクを見ている。

「ようやく王位を手に入れ、これからという時に…」

「王座は王を選ぶ…」

リチャードは膝をついているセルディクの目の前まで来て言った。

「貴方は選ばれない存在だった。それだけの事です」

リチャードはしゃがみ込みセルデイクの肩を掴む。
一同に緊張が走る。

「死ぬ前に理解できて良かったですね。叔父上」

ドスッ！

という鈍い音と共にセルデイクの腹から大量の血が溢れ出す。

リチャードが剣を引き抜くと、セルデイクは操り人形の糸が切れた
様に前に倒れた。

恐らくもう息は無い。

リチャードは立ち上がる。

そして何かを思い出したように倒れているセルデイクを見下ろす。

「おっと忘れていた。これは父の分です」

そう言ってリチャードはもう動かないセルデイクの背中を突き刺す。
当然の事ながらピクリとも動かないし声も出さない。

ただただ血が溢れ出るだけ。

見ていられなくなり、シェリアとエリーとメイリは顔を手で覆って
いる。

パスカルはソフィの目を手で覆い、自分は強く目を瞑っている。

「リチャード！もうやめろ！」

アスベルが言うと、リチャードは剣をセルデイクから抜き、鞘に納
める。

「これでやるべき事はやった。同じ場所で倒れた父の無念も少しは
晴れるだろう…」

その時、アスベル達の後ろからデールと数名の兵が入ってくる。

「どうやら見事に本懐をお遂げになられたようですね。おめでとうございます」

デールは深々と礼をする。

「デール、外の首尾は？」

「内通していた兵が城門を開き、味方を無傷で王都に入れる事ができました。抵抗が続けている兵の数は多くありません。まもなく制圧できる筈です」

最後にデールはこう言った。

「これで：終わりましたな」

アスベルはその言葉を聞いて思った。

そうだ、これで終わったんだ。

俺の役目はこれで終わったんだ：。

だが、リチャードはデールの言葉に、いや、と言い否定した。

「終わりじゃない。これは始まりだ。今日ここからウィンドル王国の新たな歴史が始まるんだ」

リチャードは振り返る。

「そうだろう？」

その時のリチャードの眼は優しく全てを包むような眼にも見えたが、

冷たく全てを突き刺すような眼にも見えた。

「はっー！」

デールは慌てて片膝をつく。

それにつられて後ろの兵とアスベル達も片膝をつく。

ソフィは無理やりパスカルにしゃがむ様な体勢にされたが。

「まずは戴冠式だ。僕が王位に就いた事を内外に広く知らせめなれば」

ルイス&マリクサイド

「はあ、今頃あいつら何してんのかなあ…」

「恐らくバロニア城には着いているだろうな」

「ああもう！暇だ！さっさと出しやがれクソッ！！」

ルイスは牢をガンガンと蹴る。
蹴っているうちに足が痛くなってきたので止めた。

「たくよお、俺達このままずっとこの中で暮らすとかねえよな？」
「……………」

「おい、何か答えてくれよ。頼むからなんか答えてくれよ！」
「少し静かに出来んのか」

「何それ！何でそんな急に冷たくなったの！？もう出してくれよお。
限界だよ。ストレスでどうにかなっちまいそうだよ…」

その時、ルイスの心からの叫びが通じたのか牢の扉が開いた。

「ほら、さっさと出る。釈放だ」

「…マジで？本当の本当に？」

「本当だ。ウソでこんな事はしない」

ルイスは感激のあまり少し泣きそうになっている。
だが、マリクは少し怪訝な顔をしている。

「…どうしてオレ達をここから出す気になったんだ？」

「そんな事どうでも良いだろ。ああ、日光が恋しい…早く外に出たい」

「答えろ」

兵ははあ、と溜め息をつき言った。

「リチャード殿下…いや、国王からの命令だ」

「！ 国王って事は…」

「どうやら王都奪還に成功したようだな」

「流石だな！」

ルイスは早く外に出たいので走って外に出た。
マリクも後を歩いていく。

「さて、俺達もバロニアへ行きますか」

「ああ、そうだな」

二人の男がバロニアへ向かった。

バロニアの路地裏――――

そこに無線機を耳に当てている男がいた。

「もしもし、聞こえていますかー？」

『聞こえている。一体どうした』

話している相手は声からして女の様だ。

「いやさあ、セルディクがやられちゃったっぽいんだよねえ」

『：そうか。だがあの男がやられた所で我々の計画に影響はない』

「さっすが！クールだねえ」

『貴様はその後も奴の監視をしておけよ』

「ああ、分かってるよ」

そう言って男は無線機を切った。

「メンドクセエな：ここは一発接触してみつか？でもそんな事したら後でどやされるしなあ：」

男は路地裏を歩きながらブツブツ呟いている。
傍から見たらかなり怪しい。

「たかが一人に振り回されちゃって。なんかバカみてえ」

男はそう言うとニイツと笑った。

「でもあのメンバーにはいなかったな：アイツ。代わりに失敗作がいたけど」

男は路地裏から出ると姿を消した。

第21話 偽王は滅びる（後書き）

（雪龍）

「ではオリ技説明しますか」

ボムロック

【B技／？2／威力…420／クリティカル率…120／ヒット数…2】

有効特性…火傷，人間

使用者…メイリ

炎の弾で敵を挟み撃ちにする術。

詠唱は『燃やして燃えろ、聖なる炎』

クレードルアロー

【B技／？4／威力…720／クリティカル率…150／ヒット数…10】

有効特性…猛毒，爬虫類，妖魔

使用者…フェザント

魔法陣に矢を放ち、幾つもの（10発）矢を放つ術。

因みに敵が一匹の場合、矢はその一匹に全て行く。

二匹の時は五本ずつ。

詠唱は『闇を運ぶ暗黒の矢よ、仇なす者を虚空へ連れ去れ』

めいおうそうぶせん
冥王槍武閃

【秘奥義／威力…2000／ヒット数…4】

有効特性…衝撃，無機物

使用者…エリー

槍を地面に突き刺し、相手の地面を盛り上がらせて浮かせ、その後槍で地面に撃ち落とす秘奥義。

因みにエリーの秘奥義発動時の台詞は『一発逆転!』

秘奥義中の台詞は『一気に決めるよ!行くぞー!冥王槍武閃!』

(雪龍)

「はい、という訳でオリ技紹介終了」

(メイリ)

「今回のは?」

(雪龍)

「次回のお楽しみに取っておきます」

(フェザント)

「しかしあれじゃろ。クレードルアローが秘奥義じゃと思っとった奴は少くないじゃろ」

(雪龍)

「そうそう、前回書いてたら急に良いのが浮かんできてさあ。急遽変更した訳だよ」

(フェザント)

「儂の知っとる中では一人には目論見がバレとったけどな」

(雪龍)

「とりあえず、次回からは『ラント奪還編』です」

(ルイス)

「ようやく俺が活躍できるぜ!」

(雪龍)

「では、お楽しみに」

第22話 帰還

「なあなあ、部屋何処だっつたっけ」

「確か一番奥だ」

ルイスとマリクは部屋の手前まで来る。

中からパスカルの声がする。

という事は部屋はここで合っている。

「よし、開けるぞ」

ルイスはドアノブに手を掛ける。

だが回そうとしない。

「どうしたんだ？」

マリクが心配しルイスに声をかける。

ルイスはロボットののようにゆっくりと顔をマリクの方に向ける。
顔はかなり汗だくだった。

「な、何があったんだ？」

「ひ、ひ、開いてくれない？」

「どういう事だ？」

マリクは怪訝な顔をする。

「いやさ、緊張してきた」

「ドアを開けるだけなのに何故緊張するんだ」

「仕方ねえじゃん！久し振りに会うんだぜ！？」

「……一日ぶりだろ」

結局マリクがドアを開く事になった。

だがマリクもドアノブに手を掛けた所で固まる。

「やはりお前が開けろ」

「んでだよ！！てめえも緊張してんのかよ！！」

その頃中では。

「な、何だ？」

「大声出して…誰やねん」

普通に聞こえていた。

「儂が様子を見て来るわ」

フェザントがドアを開けた。

「「うおあっ！！！」」

「な、何！？」

突然ドアが開いた事に驚いたルイスとマリク。
突然大声を出されて驚いたフェザント。

「…ルイス？」

「よ、よお」

沈黙。

空気が重い。

出来る事なら今すぐにもエスケープしたい。

「あれ？教官？何故ここに？」

「お前達には一つ大きな借りがあるからな。オレも同行させてくれ」
「教官のお力をお借りできるのはとても心強いです」

アスベルは敬礼をする。

するとソフィも真似して敬礼し言った。

「よろしく…教官」

「…やれやれ、この分だと教官で定着してしまいそうだな」

「俺にとって教官はずっと教官ですから」

「アスベル…」

「それではさっそくラント領へ向かいましょう」

「あり？何で？」

この場で何も説明を受けていないルイスとマリクは何故だか分からない。
特にルイスは驚いていた。

アスベルはラントから追放されたにもかかわらずラントへ行こうと言うのだ。

「そういえば何も説明してなかったね」

そう言ってエリーが説明を始めた。

エリーから説明を受けてルイスとマリクは大体分かった。

ラントの領民がウィンドルを離れ、ストラタへの正式編入という意見を主張している者がいるという事。

リチャードがラントへ侵攻し、ラントが戦場になるかもしれないという事。

だからヒューバートに交渉の席に着いてもらうためにラントへ説得しに行くのだという事らしい。

「成る程。だったら急がねえとな」

一行は急いでラントに向かう事にした。

オリジナルチャット————二度は無いよ————

（エリ） 「ルイスおかえり！」

（ルイ） 「おう、ただいま」

（フェ） 「しかし良かった。捕虜が処刑されるかもしれんて聞いて皆ヒヤヒヤしとった」

（ルイ） 「別に俺悪い事してねえんだけど…」

（エリ） 「いや、思い切りリチャード殴ったでしょ」

（マリ） 「そんな事をしたのか」

（メイ） 「でも今殴ったら即死刑やで。国王やもん」

（ルイ） 「危なかったな…」

（エリ） 「あの時点でも殴ったらいけないんだけどね」

（ルイ） 「…自重します」

船の甲板に立ち海を見ているマリク。

そこにアスベルとルイスがやってきた。

「教官、どうしたんですか？こんな所で」

アスベルの声にマリクは振り返る。

「今までの騎士生活を振り返っていたのさ」

「例えば？」

「…オレの手で守った命と奪った命…どちらが多かったのだろうかとな」

「守る命と奪う命…」

マリクは手を顎に当て目を閉じ言った。

「騎士になるという事は守る命よりも奪う命の方が多くなるのだと今更気付いた」

マリクも騎士になる前はウィンドルの国民を、人々の命を守ろうとしたのだろう。

だが、現実はそうではなかった。

「命の重さは数では測れない。だが、オレが奪った命にも守りたかった命があったはずだ」

騎士になってから日々剣を振るい、血を浴びてきたのだろう。
だがそんな事は望んでいなかった。

「その償いにと彼らを守るために戦ってもまた誰かが不幸になる…」

そんなのは皆同じの筈だ。

それでも国の為にと剣を振るうしかなかったのだ。

「この業からいつになったら抜け出せるのだろうか…」

「…いつかその答えは出るのでしょうか」

「出ねえだろ」

ルイスがキツパリと言う。

アスベルとマリクはルイスの方を見る。

「幸せな人間がいたらどっかに不幸な人間がいる。世の中の全員が
幸せになるのなんて不可能だ」

「だが…」

「だからその分幸せな奴は苦勞しなくちゃなんねえ。不幸な奴は努
力をしなくちゃなんねえ」

ルイスは少し笑って言った。

「それが人間ってもんだと思っぜ。俺は」

ルイスは踵を返し、歩き始める。

「ま、こんなのただの綺麗事かもしれねえけどな」

ルイスは船内に入って行った。

アスベルもその後を追う。

マリクはもう一度海を見て思った。

（ルイスの様に考える事ができていたら…もしかしたらお前を失わずに済んだかもしれないな…）

マリクは今更タラレバを考えても仕方ないと首を振り、自分も船内に戻った。

一行は船から降り、東ラント街道を通りラントの門の前まで来ていた。

「門が閉じられてるね」

パスカルが少し不安になって言う。

「頼めば開けてくれるわ。私はいつもそうしてたもの」

「俺達はな。ただ、アスベルはあいつらに顔を知られてる可能性がある」

「そっか：門を通らずに入る方法ってないの？」

「そんなのあったら……あ」

ルイスは水路を見て気付いた。

「入れるぜ。誰にも気付かれずに、な」

ルイスは着いて来いと言って水路から中に入って行った。

他の者もルイスに続き水路から入った。

水路から一行は領主邸に行った。

ヒューバートは恐らく書斎にいるだろうと、一行は書斎に入って行った。

「：これは予想外の来客ですね。面会の約束をした覚えはありませんが」

書斎の椅子に座っていたのは、青い短髪に黒い縁の眼鏡、青を基調とした軍服を着た青年。

それは確かにヒューバート・オズウェルだ。

「ヒューバート、話があって来た。無条件に勧告を受け入れろとは言わない。だがせめて交渉の席に着いてもらえないか？このままでは輝石クリアスの流通が滞り、ウィンドル国民の生活に深刻な影響が出るんだ」

最後に頼む、ヒューバートと言うと、ヒューバートは呆れたように

腰に手を当てた。

「新国王陛下はあなたを遣わせば僕が撤退勧告に応じるとでも思ったのでしょうか？」

「俺がここへやって来たのは自分で志願したからだ」

「だとしたらあなたの見通しは甘過ぎますね」

「ヒューバートてめえ、随分嫌味を言うように…じゃねえや。偉そうになりやがって！」

全部言ってから訂正するルイス。

その後10秒ほど睨み合いが続いた。

だが、それは外からの爆発音と悲鳴で止めざるを得なかった。

第22話 帰還（後書き）

（雪龍）

「今回は全てフェザントです」

矢響 しきよう

【A技／？1／威力…100／クリティカル率…100／ヒット数…1】

有効特性…射撃

矢を放つ技。

台詞は『行けっ！』

連叉 れんさ

【A技／？2／威力…130／クリティカル率…120／ヒット数…2／ニュートラル】

有効特性…射撃，植物

スピードの違う二本の矢を放つ技。

遅い方の矢は敵を追跡し、突然速くなる。

台詞は『二発！』

輝蒼天涯 ライズアップ

【A技／？3／威力…300／クリティカル率…150／ヒット数…3／上下ステイック】

有効特性…射撃，衝撃

地面に矢を放ち、敵の足元から出し敵を浮かせる技。

因みに名前の元ネタは『奇想天外』

刺矢墳塵 ヴァイオレット

【A技／？4／威力…410／クリティカル率…210／ヒット数…8／上下ステイック】

空中にいる敵に容赦なく矢を放つ技。

空中にいないと当たらないので輝蒼天涯などで浮かせないといけな
い。

名前の元ネタは『獅子奮迅』

アウエイクンスピリッツ

【秘奥義／威力…2000／ヒット数…7】

有効特性…打撃，妖魔

敵を数発殴り最後に蹴り飛ばし、黒い気を纏わせた矢を投げつけ貫
く秘奥義。

因みにフェザントの秘奥義発動時の台詞は『沈めてやる！』

秘奥義中の台詞は『まだまだ終わりじゃねえで！はあああああ！！』

アウエイクンスピリッツ！！』

（雪龍）

「実は今回から人気投票始めます！」

（ルイス）

「一人最大7回まで。同じキャラには3度まででお願いします」

（メイリ）

「必須の所は絶対に答えてな！」

（フェザント）

「目次下リンクから行けるけん」

（エリー）

「たくさんのお票待ってまーす！」

（ルイス）

「一票も集まらなかったらどうする？」

（雪龍）

「∴集まると信じよう」

第23話 ウィンドル軍侵攻

外からの悲鳴が部屋にまで聞こえてくる。

全員が外を気にしていると、ドアから茶髪で眼鏡を掛けている男――レイモンが入ってくる。

「少佐！緊急事態です！ウィンドル軍が突然攻めてきました！」
「はあ！？」

ルイスが思わず声を上げる。

ルイスだけではなく、他の者も驚いている。

「ウィンドル軍の勢いは凄まじく、味方は既に市街地まで押しこまれています！」

「どういう事やねん！」

「戦争を止めるために来たんじゃないの！？」

メイリ、エリーと驚きの声を上げる中、ヒューバートが何かを分かったように腕を組み、なるほど、と言った。

「そういう事でしたか。僕を説得するふりをして軍勢を引き入れていたとはね」

「違う！俺はそんなつもりじゃ！……」

「ここま小馬鹿にされるといっそ小気味いい位ですよ」

「違うつってんだろ！！」

ルイスはヒューバートに向かってそう叫ぶと、窓に向かって走った。

「何をする気だ！？」

「止めに行くんだよ！」

ルイスは窓のサッシに上りそのまま外に飛び降りた。
いつも思うが何故窓からなのだろうか。

ドアでは駄目なのだろうか。

「…全軍に第三種迎撃態勢を指示！なんとしても持ち堪えろ！！」

レイモンは敬礼をして部屋を出て行った。

それを見送ってヒューバートも外に向かう。

「ヒューバート、信じてくれ！俺は何も知らないんだ！！」

「それが本当だとしたらあなたは惨めな使い捨ての駒に過ぎないと
言う事ですよ」

ヒューバートはドアを強く閉めて出て行った。

残された一行には数秒の間沈黙が続いた。

それを破ったのはシェリアだ。

「……どうするの？」

シェリアは少し俯きアスベルに尋ねた。

「…俺達も外に出よう。状況を確認しないと！」

オリジナルチャット—————残念な人達—————

(フエ) 「リチャード君…」

(シェ) 「何でこんな事に…」

(パス) 「も、もしかしたらリチャードじゃないかも!」

(シェ) 「ウィンドルの軍勢って言ったのよ? リチャードじゃないわけ——」

(フェ) 「おお! 確かにそうかもしれない!」

(パス) 「でしょでしょ!!」

(マリ) 「おい、シェリア!」

(シェ) 「どうしたんですか? 教官」

(マリ) 「こいつら、もしかして!」

(シェ) 「ええと!」

(メイ) 「頭弱いねん。要するにバカや」

(シェ) 「遠慮ないわね!」

兵達の怒号が飛び交う。

ウィンドルの兵がストラタの兵を斬ると別の兵がウィンドルの兵を斬る。

ラントが戦場になっている。

たくさんの血が流れている。
その様子を見てルイスは齒軋りをする。

「何でこんな事を……!!」

ルイスは戦場に向かおうと走り出す。
すると前方にリチャードがこちらに向かって歩いて来るのが見えた。

「ストラタの少佐を説得できたのかい？」
「リチャードッ!! てめえええ!!」

ルイスはリチャードに向かって走り出す。
そして、手の届く範囲まで近付くと殴りかかる。
だが、それは簡単に躲される。

「どうやら様子を見に来て正解だったようだね」
「何がだよッ!!」

ルイスはリチャードを足払いし倒す。
そのままりチャードの上に乗る拳を構える。

「何でこんな事しやがった……!!」
「アスベルには伝えていたが聞いてないのか？ ラントを攻めると」
「だけどころならねえ様に俺達がヒューバートを説得しに来たんだろうが!!」

「これは君達のための戦いでもあるんだ。故郷を取り戻してあげると約束したじゃないか」

「こんな事してラントを取り戻せても嬉しかねえんだよ……!!」

ルイスが拳を振り下ろす。

だが、リチャードの顔面に拳が触れる前に風のようなものがルイスを襲った。

ルイスは何が起こったか分からないうちに吹き飛ばされる。

ルイスが地面に激突すると同時にアスベル達が領主邸から出てきた。

「ルイス!!」

「君がどう思っているにもラント侵攻は実行したよ」

「リチャード君……!」

アスベル達は全員リチャードの方を向く。

ルイスも体を起こす。

「僕に逆らう者は容赦しない。思い知らせてやらないとね」

「ふざけんなよ……てめえ最近そればかりじゃねえか……!!」

ルイスはよろよろと立ち上がる。

フェザントが肩を貸す。

「今のてめえのやり方はやり方は間違ってる!!」

「……どうやらラントを攻め落とす前に君と話をつける必要があるようだね」

ルイスが拳を構える。

他は皆武器を構える。

「シエリア、エリー、皆と一緒に街の人々を安全な場所に誘導してもらえないか」

アスベルが小声で呟くように言う。

そして振り返り言った。

「俺達が止めるから早く！戦いが本格化してからでは遅い！」
「……わかったわ。行きましようソフィ」

二人は頷き、シェリアはソフィの手を引いていこうとする。
だがソフィは首を横に振る。

それをシェリアは無理やり連れて行こうとする。
マリク、メイリ、パスカルも行く。

「ルイスもう一度聞く。僕の何が間違っているって？」

「力に頼って恐怖で縛るやり方は何も解決できねえ」

「そんなやり方じゃリチャード君が求めとった平和は手に入らんで」
「わかってくれ、リチャード。昔のお前に戻ってくれ！」

上からルイス、フェザント、アスベルが順にリチャードに訴えかける。
る。

リチャードは目を閉じ、そうか、と言った。

アスベル達はわかってくれたのか、と安心したがしかし、

「本気なんだね。君達も僕に逆らうのか。所詮は君達も…」

リチャードは目をかっと開き、剣を抜く。

そしてアスベル達に切っ先を向けると、風が切っ先に集中し刃の様
になってアスベル達を襲う。

それを見てヒューバートが懷から武器を取り出し、変形させて風の
刃を防ぐ。

風の刃は受け止められたものの、その衝撃に耐えきれず膝をついて
しまう。

「ぐっ…」

「ヒューバート！」

アスベルはヒューバートに駆け寄る。

「なんて凄まじい闘気だ……本当にあのリチャードか？」

「くらええええ！！！」

ルイスはリチャードに駆け寄る。

幾度も風の刃が来るが全て躲し、近付いていく。

今度こそルイスの拳が触れるかと思ったが躲され、代わりに背中に刃を突きつけられる。

「ヤッベエ……」

「終わりだ！！！」

リチャードは剣を振り下ろす。

だが、刃はルイスに触れる事はなく金属音が響いた。

「大丈夫か！ルイス！」

アスベルの剣がリチャードの剣を防いでいたのだ。

リチャードは一旦離れ、その代わりにヒューバートとフェザントがアスベルの近くに駆け寄る。

「こうなったら全員纏めて死ねえええ！！！！！」

「だめ！！！」

その時リチャードに向かって花の様に綺麗な紫が飛んで行った。

第23話 ウィンドル軍侵攻（後書き）

（雪龍）

「今回の皆の立ち位置が大変だったんだよね…」

（ルイス）

「皆気付いてるかもだけどずっと玄関の前にいたからな」

（雪龍）

「そういう描写が無いから余計分かり辛いつていうね」

（ルイス）

「急いで俺を動かして原作の位置と合わせたよな」

（雪龍）

「ところで人気投票はストラタに行くまでにします！」

（ルイス）

「ストラタに着いたら打ち切るのか」

（雪龍）

「皆さん！……まだ続けますよ！」

（ルイス）

「投票よろしく！」

（雪龍）

「次回もお楽しみに」

第24話 止めるための刃（前書き）

最近ルイスが自己中になってる気がする…。
やっぱ作者に似るものなのかな…。
途中おふざけが過ぎたような気もするし。
真面目な展開が苦手なのかな。

まあ、第24話スタートですっ！

第24話 止めるための刃

その場にいる全員が声のした方を見る。

そこにはリチャードに向かって跳んでいるソフィがいた。

リチャードがソフィに気付く、剣でソフィの攻撃を防ぐと激しい金属音が響いた。

「どおけええええ!!!」

リチャードは目を見開き剣を持っている手に力を込める。

ソフィは危険だと思ったのか軽い身のこなしで後ろに移動する。

「ソフィ! 何故戻ってきた!？」

アスベルが怒鳴る。

ソフィはアスベルの言葉を見無視し、一言こう言った。

「守る!」

そう言ってソフィはリチャードに向かって駆け出す。

途中リチャードが風の刃を出して攻撃してきたが、全てリズレットで防ぐ。

だが4発目ほどで耐えきれず空中に逃げる。

着地したのは噴水の中だった。

するとその時ソフィのてが光り出しその光が全身も包む。

「この光は……あの時の……!!」

アスベルはその光を何度か見た事があった。

最初に見たのは七年前、妙な魔物に襲われたときにソフィが発していた。

次に見たのはこの間の実地任務での事だ。

この時も妙な魔物に襲われたときに、今度はアスベルが発したのだ。その後自由に光の力を使えるようになった。

「こ、これは…!？」

ヒューバートは自分の手を見る。

手から光が発せられ、その光がソフィに向かっていく。

「また貴様か……」

リチャードが剣を構える。

「またしても貴様が立ち塞がるのか!!」

リチャードは剣を突きだし、風の刃をだす。

ソフィはそれをジャンプして躲す。

風の刃は噴水に当たり噴水が粉々になる。

ソフィはリチャードの後方に着地し大きな光を発する。

「守る!あの時の様にはさせない!!」

アスベル、ルイスはその言葉に驚いた。

————あの時の様にはさせない

ソフィは確かにこう言った。

ソフィには記憶が無かったのに。

七年前のあの時の事は知らない筈なのに。

「まさか……でもソフィは…」

二人が困惑する中、ソフィとリチャードは拳と剣を交わらせた。

その瞬間大きな光が放たれ、ソフィの体が先程とは反対側にある噴水まで吹き飛ばされる。

ソフィは苦しそうに倒れる。

リチャードはゆっくりとソフィに近付く。

「また……あの時と同じように……!!」

アスベルは七年前の事を思い出していた。

あの時は自分が非力なせいでソフィを失ってしまった。

「死ねええええ!!」

リチャードが剣を振りかぶる。

そのまま振り下ろしてしまえばあの時と同じようにまた…。

そう思うとアスベルは走り出していた。

「やめろおおお!!!」

アスベルはすぐさま抜刀し、リチャードの脇腹を斬る。

ルイスはそれを見てはっとした。

今までルイスは剣を抜いていなかった。

それはリチャードが友達であり、友達に剣を向けるのは友達として最低だと思っていたからだ。

「裏切ったな……!!」

リチャードは俯いて言う。

「僕を……」

リチャードの左目がギロリと紅く光る。

「裏切ったなああああっつ……!!」

リチャードが大声で叫ぶとリチャードの体から黒い何かが放たれる。
そのリチャードの後ろからルイスが斬りかかる。

リチャードはそれに気付き横に跳び躲す。

「すまねえな、リチャード。自分であんな事言っというて言い訳に聞こえるかしんねえけど……」

「……冗談でも友達に刃を向けるなんて真似すんじゃないぞ!!」
ウォールブリッジでリチャードに言った言葉が甦る。

ルイスは鼻で笑って続けた。

「別に冗談でお前に刃を向けてんじゃないぞねえんだ。お前が嫌いだからでもねえ。むしろ……」

ルイスは笑って言った。

「大切な友達だから……お前を止める為に!俺は刀を振るんだ!!」

「なんかスゴイ音せえへんかった？」

メイリがマリクに問う。

マリクは領主邸の方を見て言った。

「アスベル達に任せていれば大丈夫だろう。それよりも今はこつちだ」

「そうそう、ルイスもいるんだし！」

マリクに続いてエリーも笑いながら言う。

メイリは不安になりつつも心の中で、全員が安全であるように祈った。

「あわわわ、どーしよう！」

「どうしたの！？」

「街の人達がどこにいるか分かんない！」

「せやから今捜してんねんやろが！！」

「あっ、そっか」

相も変わらずどんな状況でも空気をぶち壊してしまうパスカルだった。

パスカル称号…空気ブレイカー

「いや、いらないから!」

リチャードは剣を構えてルイスに向かって走る。
ルイスも刀を構えて迎え撃てるようにする。

「風神剣!!」
きょうふうせん
「響風閃!!」

ルイスは風を纏った突きを横に開店して躲し、その勢いでリチャードの腹を一閃する。

ルイスの一閃は風を起こしそのままリチャードの体を吹き飛ばした。

ルイスは完全に入ったと思いリチャードの方を見る。

だがリチャードの腹に傷は無く、服が少し斬れているだけだった。

「なっ!？」

「来たれ妖魔の牙! リープウィル!」

リチャードから日本の黒いレーザーの様なものが放たれ、ルイスから体力を奪いリチャードの下へと戻っていく。

「雷斬衝!」

アスベルは横からリチャードに雷を帯びた剣を振り下ろす。
するとリチャードに纏わっていた黒い何かが無くなり、それなりのダメージを受けているようだった。

「斬り裂け! 闇の刃! ダークスリヴァー!」

フェザントから黒い刃が二つ弧を描きリチャードに放たれる。
刃はリチャードの下で交差し、リチャードを斬り裂いた。
その後も各々が攻撃を繰り返す。

リチャードはかなり体力が無くなったが、また左目が紅く光る。

「雷神剣!」

フェザントにリチャードの剣が襲いかかる。

「生かしはしない!」

リチャードは剣を後ろに引く。

「鮮血よ散れ、薔薇のように！」

何度も何度もフェザントを突く。

最後にリチャードは紅い薔薇をフェザントの背後に具現化させる。

「ブラッディ・ローズ！！」

最後に薔薇と共にフェザントを散らせた。

ヴァーテクス・ローズに似ていたが、先程の技は明確な殺意が籠っていた。

フェザントが力尽き倒れる。

「フェザントッ！！」

「次はお前だ！！」

今度はルイスに狙いを定める。

「ちいっ！火弾衝！」

一振りで火球を出し、リチャードにぶつける。

リチャードはよろめきながらも術の詠唱を始める。

「来たれ安息なき剣、連なるは悲痛！レストレスソード！！」

ルイスの上空から幾本もの黒い刃が振る。

全ては躲しきれず剣でいなすものの、全てはそう上手くいかずルイスの体を斬り裂いていく。

「衝皇震！」

アスベルがリチャードに向かって一閃する。

だがそれは躲され、代わりに剣が振り下ろされる。

アスベルは剣で受け止めるが、剣に罅が入ってしまう。

（ここに来て力が上がった!?）

アスベルは剣を鞘に納める。

ここからは帯刀技しか使えない。

抜刀術を使ってもすぐに折れてしまうだろう。

「フレアショット！」

ヒューバートの銃から小さな火球が何発も放たれる。

あまりダメージは与えられないがリチャードに隙が生まれる。

「アストラルベルト！」

ソフィがアスベルを真似た様に光を刃にして振る。

リチャードはそれを剣で受け止める。

「はっ！潜身脚！裂震虎砲！！」

アスベルはリチャードを足払いし蹴りあげた後、虎の咆哮でリチャードの体を吹き飛ばす。

吹き飛ばした先には刀を構えたルイスがいた。

「響風閃！！」

ルイスの一閃にをまともに受け、リチャードは吹き飛ばされそのまま倒れた。

「ごめん…リチャード…」

第24話 止めるための刃（後書き）

（ルイス）

「毎度の事ながら戦闘って難しいよね」

（雪龍）

「うんうん、難しい。どうしても上手くできないよね」

（ルイス）

「安心しろ。どんな時でも上手くできてない」

（雪龍）

「か、辛口デスネ……とりあえずオリ技紹介です」

きようふうせん
響風閃

【B技／？3／威力…350／クリティカル率…80／ヒット数…4】

有効特性…斬撃，植物

使用者…ルイス

素早く横に一閃しそのまま風と共に吹き飛ばす技。

（ルイス）

「ん？今回一つだけだったか？」

（雪龍）

「フェザントのはオリ技じゃなくて敵キャラのだし良いかなって…」

（ルイス）

「そういうもんなのか。ま、次回もお楽しみに」

（雪龍）

「次回の投稿は結構遅くなります。スイマセン」

（ルイス）

「そういう事は早く言えよっ!!」

（雪龍）

「投票も待ってまーす」

第25話 甦った記憶（前書き）

遅くなると言いつつそうでもなかったですね。

第25話 甦った記憶

「ぐっ…うう…」

リチャードは苦しそうにしながらも立ちあがろうとする。

「くっ…この…!」

リチャードはやつとの思いで立ち上がる。
だがかなりフラフラとしている。

「オオオオオ!!」

リチャードの体からまた黒い何かが発せられる。

今度のは先程より大きい。

それを見た瞬間ソフィからも同じ程度の大きさの光が放たれる。

そして黒い何かと光がぶつかり激しい衝撃が地を駆ける。

兵達やシェリア達は何があったかも分からずにただ吹き飛ばされそうになる。

それを必死に何かに掴まり踏みとどまる。

「おおおおおお!!!!!!」

「はあああああ!!!!!!」

二人の叫びに呼応するかのように二つの力は大きくなっていく。
二つの力は均衡していた。
だが、

「はあああああああ!!!!!!」

ソフィの光が増し、黒い何かを抑える。

そして完全に消し去るとリチャードの体のみが吹き飛ばされた。

「ぐあっ！……くそ……お、おのれ……！！」

「そのお怪我では無茶です、陛下！」

デールが数人の兵を引き連れリチャードに駆け寄る。

そしてデールが兵達に命令を出した。

「全軍に告ぐ！撤退だ！」

兵達は急いで他の戦っている兵にその命令を伝えに行く。

残った兵はリチャードに肩を貸し、ラントから出て行った。

「皆！大丈夫！？怪我はない！？」

シェリアが駆け寄り尋ねる。

「フェザントの傷が一番深い……治してやってくれ」

アスベルがそう言うと、わかったと言いフェザントに駆け寄った。

「ソフィ、大丈夫か？」

アスベルが尋ねるがソフィは返事をしない。

どうしたのか気になっているとゆっくりと振り返った。

「…平気」

その言葉を聞いてアスベルは胸を撫で下ろす。

「…わたし、思い出したの。小さな頃の…皆の事、思い出したの」

治療をしていたシェリアはその言葉に驚きソフィを見る。

アスベルも、ルイスも、ヒューバートも、エリーも。

全員がソフィを見る。

「ヒューバートは…大人しいけどしっかりしてて、いつも皆を気にかけていた」

「エリーは…皆の事を大切に思っていて、皆のお姉ちゃんみたいだった」

「シェリアは…体が弱いのに負けずにいつも元気だった」

「ルイスは…少しやんちゃだっけど、わたしをいつも助けてくれた」

「そしてアスベルは…優しくて、強くて、わたしを…皆を守ってくれた」

ソフィは最後に全員の顔を見て言った。

「また…会えたね」

その言葉が全員の胸に響いた。

もう二度と会えないと思っていたソフィにまた会えた。

昔と同じ、花の様な少女に。

「…ああ」

アスベルがそう言うのと皆思い思いに声を掛けた。

「少佐！ご無事ですか！」

レイモンが庭に入ってくる。

何かの報告だったらしく、ヒューバートが何かを言うと、レイモンは敬礼して走って行った。

それにヒューバートも着いて行く。

「……結局俺は守れなかった…」

アスベルは空を見上げて悔しそうにする。

家は燃え、道は割れ、川は血で少し濁っている。

「そんな事ない」

ソフィが小さい声で呟くように言った。

「アスベルはわたしを守ってくれた。小さい頃と…同じ」

アスベルは微笑みソフィの頭を撫でる。

「ちょっとだけだけど思い出せて良かった…」

ソフィは少し俯く。

「良かった…筈なのに。なぜだろう…なんだか…不安なの。このまま色々な事を思い出していくのが怖い…」

「ソフィ…」

「思い出すが、怖い…か…」

ルイスがそう言うマリク、パスカル、メイリの三人が走ってきた。そこでルイスの意識は途切れた。

アスベル、ソフィ、メイリの三人はラントの裏山の花畑に向かった。ルイスが倒れた後、アスベル、ソフィ、マリク、パスカル、メイリの五人で砦の様子を見に行った。

その時ソフィが花畑に行きたいと言ったのだ。

マリクとパスカルは先に帰り三人で行く事にした。

何故メイリがいるのかというと

「ウチメツチャ花好きやねん」

だそうだ。

三人は森を抜け、花畑に到着した。

「何やココ！メツチャキレイやん！」

花を見た途端メイリははしゃぎ出す。
だがソフィは少し浮かない顔をする。

「わたしとアスベル、ここで会ったんだよね」

「え？そうなん？」

「ああ、子供の時も今回もここで出会ったんだ」

「わたし、アスベル達を助けた後どうしていたんだろう……」

アスベルの頭に思い出したくない記憶が甦る。

あの時あの場にソフィはもういなかった。

「アスベル達に会う前はどうしていたんだろう……」

ソフィは空を見上げた。

「どこで何をしていたんだろう……」

「考えると……不安になるの……」

ソフィは振り返る。

「思い出さない方が良くから思い出せなくなってるんじゃないのかな……」

「……思い出した過去が嫌なものだとも限らないだろう？」

「せやで、マイナス思考はアカン。そんな考え方しとってもエエ事ないねん。笑顔が一番や」

「……うん……」

ソフィは頷く。

それを見てアスベルとメイリは少しホッとした。

「もし過去に何かあったとしても過去なんて問題じゃない。大事なのは今なんだ、ソフィ」

「今……」

「そろそろ家に戻ろう。皆が心配している」

「うん……」

ラントの広場では傷ついた兵達の手当てがされていた。
アスベル達はそれに近づく。
するとバリーが前から歩いて来た。

「何か手伝う事はあるか？」

アスベルはごく普通に尋ねた。
だがバリーは何も言わずアスベルの横を通り過ぎて止まる。

「……自分達の事は自分達でやれますから。肝心な時にいなくなっていたお方に頼るほど俺達は愚かではありません。頼るならヒューバート様を頼ります」

そう言うバリーは少し早足で行ってしまった。

「バリーさんは…誤解してるんです……」

「アイツ何も知らんくせに…シバいたろか……!!」

メイリは怒ってバリーの下へ行こうとするがアスベルに止められる。

「バリーは俺が七年間王都へ行ったきりだった事も含めてああ言っただ……俺がずっと不在だったのは事実だしな。立場をわきま

えず自分の事だけ考え行動していた」

アスベルは目を閉じる。

「俺は…ラントにいない方が良いのかもしれないな……」

「またいなくなってしまうの…？もしかしたらヒューバートだっていなくなるかもしれないって言うのに…」

「どういう事だ！？シェリア」

シェリアが言うには、ヒューバートのやり方がストラタ本国によく思われていないらしい。

そのせいで本国へ召還命令が出されたのだと言う。

「……ちよつとヒューバートの所へ行ってくる！」

（…また皆…離れ離れになってしまうの…？）

「……………ん…ん、あ？」

「！ やつと起きたか」

ルイスが目を覚ますとシェリアを除く一行がいた。

「えーと…：皆して人の寝顔見てたの？」

「そうじゃなくて起きるのを待っていたんだ」

「…何で？」

「話すと長くなるんだが…：…」

先程アスベルはヒューバートに真相を確かめるために会いに行った。本国から召還命令が出されたのは本当だった。

ヒューバートは一度戻ったら二度と帰ってこない可能性がある。だがヒューバートがラントにとって必要だと思ったアスベルは、信書を持ってストラタへ行き命令の撤回を頼む事にしたのだった。

「成る程な。じゃ、さっさと行きますか」

「大丈夫なのか？まだ体が…：…」

「俺は大丈夫だよ。それよりフェザントの方が大怪我だったろ」

「俺は傷の治りが速えんよ」

そう言っつてフェザントは服を捲る。

確かに傷は塞がっていた。

「なら行こうか」

一行は灼熱の砂漠の国、ヒューバートの第二の故郷——ストラタへ行く事になった。

第25話 甦った記憶（後書き）

（ルイス）

「みてみんなにユーザ登録したって本当か？」

（雪龍）

「本当。いずれルイスの絵をアップすると思うから」

（ルイス）

「期待せずに待っとくよ」

（雪龍）

「そう言うと思った……次回は「第26話 仲直り」です」

（ルイス）

「次回のタイトル出すなんて初めてじゃねえか？」

（雪龍）

「次回はこれしかないと思って」

（ルイス）

「成る程な。だけど次回は殆ど原作と同じだからもう良いんじゃないかね？」

（雪龍）

「駄目だよ!!」

（ルイス）

「……何で？」

（雪龍）

「あのシーン好きだから」

（ルイス）

「……そうか」

（雪龍）

「次回もお楽しみに」

第26話 仲直り

一行は灼熱の砂漠の国、ヒューバートの第二の故郷——ストラタへ行く事になった。
の筈が。

「彼女の身柄は私が預からせてもらっている」

「何やねん、アンタ。今シェリア捜しとんねん。邪魔すんなや」
「厭らしい目付きしやがって。変態」ボソッ

ルイスが斜め下を向いて聞こえないように言う。
だが、レイモンにはちゃんと聞こえていた。

「厭らしい？私のどこが厭らしいと……」

「あれ？聞こえてたのか。目は悪いけど耳は（無駄に）良いんだな」

ルイスの挑発に乗らずにレイモンは一度咳払いをする。

「……言い過ぎたわ。レイモンさん、さっきの話はどういう意味？」
「彼女は重要機密を盗み聞きしていたんでね。ほんのお仕置きですよ」

「へえ、シェリアは今どこにいます？」

「教える訳ないでしょう。それでも彼女の罪を許してはあげますよ。条件付きですが」

レイモンは少し笑みを浮かべる。

それを見てフェザントがクスクスと笑いだす。

「何がおかしいのですか？」

「いや…ただの思い出し笑いじゃけえ…気にせんで…ププッ」

何故このタイミングでなのかは分からないがただの思い出し笑いだったので、レイモンは仕切り直して言った。

「彼女を助けたいならストラタ行きをやめてもらいたい」

「ちよっと！人質に取ったって事！？」

パスカルが少し強く言う。

「シェリアいじめる人…許さない」

ソフィも拳を構える。

他の者もそれぞれ武器を構える。

「私と事を構えるのはよした方が良いですよ。あの娘を無事に助け出したいのならね」

「くっ……！」

全員武器をしまう。

それを見てレイモンはまた少し笑みを浮かべる。
するとやはり――――

「プッ」

「ちよっ、あかんで。今そういう空気ちゃうねんから」

「じゃけど…思い出し笑い…ププッ」

やはりフェザントが思い出し笑いをした。

「…信書を渡してもらいましょう。早くしないとあの娘が魔物の餌

になってしまいますよ」

「なるほど。あなたはそういう手できましたか」

レイモンが驚いて振り返る。

そこには青い髪に青い軍服の青年がいた。

「少佐……！」

「シェリアはどこです？ 言いなさい！！ 言わない場合この卑怯な脅迫の事実を本国に知らせなくてはならない」

ヒューバートはそれだけではないと続けた。

「あなたは……上官である僕の書いた信書を奪い取ろうとした。さあ……どうしますか？」

「くそっ……ここまでかっ！」

レイモンは懷からナイフを取り出す。

それを見てヒューバートは構えるが、レイモンはなんと自分の腹を刺した。

そして崩れるように倒れた。

「ななな、何しとんねんコイツ！ ど、どないすればエエンや！？」

「レイモン！ 早まった真似を……。レイモンの事は僕がなんとかします！ 皆さんはシェリアを！」

アスベルは齒軋りをする。

「くそっ！ シェリア……何処へ連れて行かれたんだ！？」

一行はラント中を捜しまわった。
しかしシェリアは見つからない。

「アスベル、もしかしたらラントにはもういねえんじゃねえか？」
「どういう事だ？」

「確かに、これだけ探していないとなるとそうかもしれんな」

マリクが顎に手を当てて言った。
ルイスはその言葉に頷く。

「それにさっきレイモンが言った言葉」
「そういや『早くしないとあの娘が魔物の餌になってしまいますよ』
とか言っとったな」

「そう、こんな街中に魔物を連れ込んだら間違いなく騒ぎになる。
って事は外に…」

その時ソフィが何かに気付いたのか突然走りだし、何かを拾った。

「クロソフィの花……枯れてる」

そう言って持ってきたのはクロソフィの花の押し花だった。
見るからに随分古そうだ。

「おしばなって？」

「花を石と重しで挟んで乾かし思い出の花などを保存しておくんだ」

その言葉にアスベルはハツとした。

七年前、シェリアにクロソフィの花をあげた事があった。

（まさか……！）「皆！シェリアはこっちかもしれない！」

アスベルが言うそっちと言うのは西ラント道の方だった。

オリジナルチャット————同族嫌悪？類は友を呼ぶ？————

（エリ）「さっきのレイモンって人大丈夫かなあ？」

（メイ）「ほっとけばエエねん」

（エリ）「で、でも！」

（マリ）「エリーは優しいんだな」

（エリ）「そういう訳じゃ……」

（パス）「ちよつとちよつと！今はシェリアでしょ！」

（メイ）「せやで、それにああいう腹立つ奴はしぶといねん」

（エリ）「そういう……もののなの？」

（メイ）「そこにおる奴がエエ例や」

（パス）「あたし！？いや、照れるなあ」

(マリ) 「いや、褒めてないだろ」

(メイ) 「こういう天然な所がたまにイラッと来んねん」

(マリ) (メイリも天然な所があると思うんだが……)

一行は西ラント道の小屋辺りまで来ていた。
そこで一行が目に見たものは

「シェリアーツ!!」

今にも魔物に襲われそうなシェリアと、その魔物を操っているのか
ストラタ兵がいた。

全員武器を構えて魔物へと向かっていった。
勝負はあっけなくついた。
もちろん一行の勝利で。

「な、何者だこいつら!」

ストラタ兵が逃げようとする。
しかしそれをルイスが剣を突き付けて止めた。

「後で少佐様にお説教されろ」
「くそ……」

他のストラタ兵もマリクやメイリが捕まえている。
シエリアが安心して一行の下へと走る。

「ふう、危なかったね」
「シエリア、大丈夫？」
「うん……ありがとう、皆」

アスベルは一步前が出る。

「あ、ありが……」
「どうして無茶な事をしたんだ!!」

突然アスベルが怒鳴った。
それには全員驚いた。

「どうしてって……それは成り行きで……」
「成り行きで!? 俺達が間に合わなかったら死んでいたかもしれないんだぞ!」
「私だって好きで捕まったんじゃないわ! 人の気も知らないで怒鳴らなくても良いじゃない!」
「ま、まあエエやん。無事やったんやし……」
「「「よくない!!」」」

メイリがもの凄いスピードで後ろに下がる。

「どれだけ心配したと思ってるんだ！」

「それはこっちの台詞よ！そもそもアスベルが心配で様子を見に行ったらそこに……」

「大体再開してからずっとよそよそしい態度で……」

「……アスベルが悪いんだから。全部アスベルが悪いんだから！！」

シエリアの目から一粒の雫が落ちる。

「いつだって勝手にいなくなって……どうして七年間、一度も戻ってきてくれなかったの？」

雫は一つ、また一つと増えていき、シエリアの頬を伝った。

「待ってたのに……ずっと待ってたのに……！」

袖で目を擦る。

だんだんと袖が濡れていく。

「会いに行きたかった……でも迷惑なんじゃないかって……そう思ったら、行けなくて……」

「ごめん……騎士になるまでは帰れない。そう思ってた……」

「良いねえ、幼馴染み」

「だな」

パスカルとマリクが少し茶化す。

「からかわないで！！アスベルみたいな鈍感な奴、どうでもいいんだから！！」

「…ぷっ……」

アスベルは思わず笑う。

別にフェザントの様に思い出し笑いではない。

「そうそう、シェリアはこうでなくちゃ」

「こ、こうって…！な、な……」

「シェリア、そろそろ良いんじゃないか？」

「そうだね。もう肩の力抜いて良いと思うよ」

ルイスとエリーが続けて言う。

「…良かったよ。シェリアが全然変わってなくて」

アスベルは少し頬を赤くして俯く。

「それに…上手く言えないが…無事で良かったよ」

「アスベルが一番心配してたもんな」

「シェリアが連れて行かれた方向が分かったのもアスベルのおかげやしな」

パスカルが二人の顔を覗き込む。

その横をソフィが通りアスベルとシェリアの間に行く。

「けんか終わった？」

「けんか…：ああ、うん、終わった。なあシェリア」

「え？…ええ、終わったわ」

「じゃあ…ともだち？」

「ああ」

「ええ」

「じゃあ友情の誓い……」

アスベルとシェリアの手を取り握らせる。

「いやゝ、青春だねゝ」

「茶化したらアカンやろ」

「よし、それでは無事に解決した事を報告しに帰るとするか」

一行はラントへ戻った。

今度こそストラタへ向かう事が出来るだろう。

幼馴染みであり、ともだちである少女と共に。

第26話 仲直り（後書き）

（雪龍）

「さて、そろそろ人気投票終わっちゃいますよ」

（メイリ）

「ウチの人気はどん位なん？」

（雪龍）

「まだそれは言えないね」

（メイリ）

「まあ、エエわ。それより可愛いウチの絵はまだなんか？」

（雪龍）

「あ、たぶん、メイリは書かないよ」

（メイリ）

「何でや!？」

（雪龍）

「女性キャラ書くの苦手なんだよね」

（メイリ）

「どういう事やねん! ウチも書かんかい!!」

（雪龍）

「自分、画力、皆無」

（メイリ）

「知るか! エエから!」

（雪龍）

「あ、ケータイでご覧になられている方に質問です」

（メイリ）

「おい」

（雪龍）

「ケータイでも挿絵が見れるのかどうか教えてくれませんか？」

（メイリ）

「おい…」

（雪龍）

「それでは次回もお楽しみに」

（メイリ）

「無視すんなやあああああ！！！！」

第27話 おやつは300ガルドまで！（前書き）

今回はストーリーに何の影響もないオリジナル話です。

第27話 おやつは300ガルドまで！

一行は灼熱の砂漠の国、ヒューバートの第二の故郷——ストラタへ行く事になった。
の筈が。

「って前回もこれだったろ！！」

ここはまだラント。

一行はストラタへ行くための準備をしていた。

「何で昨日の内にやっとかねえんだよ！」

ルイスが準備をしている女子たちに行った。
するとパスカルが近付いてきた。

「だってバナナがおやつに含まれるか分かんなかったんだもん」
「いや、遠足か！」

パスカルはそう言いつつ鞆の中に大量のバナナを詰めている。

「結局持つて行くのかよ……」

「ねえねえ、カニタマは？」

「それはストラタに行ってシェリアに作ってもらった方が良いと思うぞ？」

「わかった」

そう言ってソフィは鞆の中に大量のカニタマを…

「って、話聞いてたか!？」

「だってパスカルもしてるよ？」

「あれは……真似しちゃいけないんだ。悪い人だから」

「悪い？パスカルは敵なの？怖いの？」

「……誰か助けてくれ」

その後ルイスはソフィに丁寧に説明した。

これでルイスもそうだが、ヒューバートも安心だろう。

次に近付いてきたのはシェリア。

「どうした？焼き鳥丼もストラタで作った方が……」

「ええ!？……じゃなくてルイス達はもう準備出来てるの？」

「俺とマリクは出来てる。アスベルは道具を買いに行ってる」

それを聞いてシェリアはまた準備を進めた。

次に近付いてきたのはメイリ。

「ウチな、今チーズケーキか、プリンかで迷ってんだけど、どないすればエエと思う？」

「どっちも鞆で持ち運んだらグツチャグチャになるだろ」

「そやな……だったら焼きまんじゅうで……」

「それもだろ!!」

メイリは結局焼きまんじゅうを手で持って行く事にしたらしい。
最後はエリー。

「ルイス、ホイコーローっておやつに……」

「ホイコーロー!？入らねえしおやつじゃねえし!」

「え!？ホイコーローだよ!？おやつでしょ!」

「違うから!てかそれもストラタで作ってもらえよ!」

ルイスはそこで何かに気付いた。

「もしかしてお前らがしてる準備って……」

「「「おやつ」「お」」」

「何でだよ!?!」

とりあえずルイスは必要な物だけ持って行けと言って、フェザントの下へ向かった。

彼もまだ準備が出来ていない。

「入るぞー、フェザン…ト……」

「zzz……」

「準備はどうしたああああ!?!?!」

「おうっ!?!」

見事な張り手が鞆の前であぐらをかいて寝ていたフェザントに炸裂した。

フェザントはその勢いで後ろに倒れた。

「いたた……何するんよ」

「何でテメエは寝てんだよ!?!」

「何持って行きやええか分からなかったんよ」

「着替えとかだろ!?!」

「え? おやつは……」

「もうそのネタは良いんだよ!?!」

そこに丁度道具を買いに行っていたアスベルが帰ってきた。手に持っている袋にはたくさんさんのグミやボトルなどが入っていた。

「やっとまともなのが来てくれた……」

「え？ どうしたんだ？」

ルイスはこれまでにあった事をアスベルに話した。
それを聞いてアスベルは驚く。

「ま、まさかお前、カレーを……？」

「いや、レトルトだから大丈夫だ！」

「何を根拠に言ってるの……！」

アスベルも先程までの者達と同じだった。
結局まともなのはルイスとマリクだけ……

「教官も鯛茶漬を持って行くって……」

いや、ルイスだけだった。

「ちょっと皆こっち来い!!」

全員ルイスの下に来る。

「お前らに言いたい事がある」

ルイスは大きな紙を壁に張る。

そこには色々書かれていた。

「その壺! 持って行って良いおやつは300ガルドまでだ」

「そんなんじゃないの? としか持って行けないじゃん」

「鞆がパンパンになるまでおやつ持ってってどうすんだよ!」

全員ぶーぶー言いながらも鞆から300ガルド分になるまで取りだす。

するとおやつ（食料）が山のように積まれた。

「どんだけ持って行こうとしてたんだよ……」

「その式は?」

「持って行くのは着替えや洗面用具など本当に必要な物と少しの大切な物だけ!」

「えー、あたしの発明品とかは?」

「却下」

これに反対したのはパスカルだけだった。

パスカルは鞆から鳥の様なカラクリを出した。

「……何これ?」

「全自動魚取り器」

「何でそんなもん持って行こうとしたの!？」

「いや、船の上って暇だからさ」

ルイスは一度深呼吸し自分を落ち着かせ続けた。

「その参! 各自グミやボトルを持っておく事。以上だ」
「ルイス先生!」

手を上げたのはフェザントだった

「先生じゃないけど……どうした?」

「防寒具を持って行った方が良いでしょう?」

「いや、ストラタはかなり暑いらしい。逆に薄着の方が良いんじゃないか?」

「わかりましたー」

「よし、他に質問は? 無いなら行くぞ」

誰も手を上げない。

もう無いのだろうか。

「よし、なら行くか。向こうに着いてから忘れ物した、とか行っても取りに帰れないからな」

その言葉に全員反応した。

―――10分後

「ちゃんとこれあるよね？えーと、後は……」

「危ない危ない、これを忘れる所だった！」

全員が荷物チェックを始めてしまった。

それを見てルイスは言った。

「……準備は早めにしような」

結局出発は次の日になった。

第27話 おやつは300ガルドまで！（後書き）

（雪龍）

「人気投票は次回の投稿と同時に終了させていただきます」

（ルイス）

「そういや今回が初めてのオリジナルの話だよな」

（雪龍）

「それなのにふざけ過ぎでしょ」

（ルイス）

「自分で言うのかよ」

（雪龍）

「次回こそはストラタなんで！」

（ルイス）

「お楽しみに」

今更気付きましたが、アスベル達って一度ストラタへ行こうとして
ましたね……。

なのに今準備してるって……。

その矛盾点についてはツツコまず優しく見て見ぬふりしてください。
本当にすいませんでした。

第28話 昔の話

一行はようやくストラタ息の船に乗ることができた。
今ここは甲板の上。

アスベルは先程ラントでヒューバートから貰ったお守りを見ていた。

「……一体何が入っているんだ？」

感触からして中には粉状の物が入っているだろう。
だがこういうお守りには大抵輝石クリアスを入れるのだ。

「それにどこかで見た気がするんだが……」
「どうしたの？アスベル」

後ろからシェリアが話しかける。
アスベルは振り返る。

「このお守りの事を考えてたんだ」
「ヒューバートから貰った物よね？」

「ああ、だがどこかで見た気がするんだ……」

その時アスベルは何かを思い出し、ポケットに手を突っ込む。
そして出したのはこの前拾った押し花だった。

「これこの前拾ったんだが……」

そう言って押し花を差し出す。
シェリアはそれを受け取り、眺める。

「失くしたと思ったらアスベルが持ってたのね……良かった」

「それ、あの時のクロソフィか？」

「え！？あ、うん……いい、いけない？」

シェリアは突然慌てる。

それを見てアスベルは微笑んだ。

「……子供の頃の思い出は私の宝物なの」

シェリアは海の方を見る。

「皆いなくなって私一人になってしまっただけからはその思い出だけが支えだった……」

その時ルイスが甲板に出ようとドアを開けた。

そして、アスベルとシェリアの良い雰囲気を見て反射的に隠れてしまった。

二人には気付かれていない。

「またこうして一緒にいられる日が来るなんて思わなかったから……」

（何の話してんだ？告白じゃなさそうだけど……）

「あ、アスベルだけの事を言ってるんじゃないわよ！？ソフィの事もよ！？」

（そんな慌てなくても……てか、そんな事言ったら流石のアスベルも……）

「……わかってるよ」

（違う意味でわかってねーよっ！）

ルイスは思わずにつけそうになる。

「俺も皆に再会できて本当に良かったと思ってる」

「……ちっともわかってないわよ。アスベルは……」

（シェリアにも言われてんじゃないかねーか）

シェリアの呟きはアスベルには聞こえておらず、何故か類すには聞こえていた。

恐るべし地獄耳。

「ルイス、何やってんの？」

「！！！！」

ルイスは首がもげるのではないか、という程の勢いで振り返る。そこにはエリーがいた。

急いでエリーの口を塞ぎ隠れる。

アスベル達には気付かれていない。

エリーは苦しいのか、もしくは別の意味でか、顔が真っ赤だ。

（ちょっと何すんの！？）

（あれ見ろ。あれ）

ルイスはアスベル達を指差す。

（アスベルとシェリア……まさか告白！？）

（ではなさそうだが良い雰囲気なのに違いはねえ）

（んー…そうだね）

二人は黙ってアスベル達を見ていた。

すると二人は船内に入って行った。

特にこれといった会話も無かった。

「ふー、焦った……」

「てか何で覗き見してたの？」

「いや、外出たらたまたま見ちゃったんだよ」

「何してるんだ？」

二人が振り返った先にはマリクが腕組みをしていた。

「あつ、教官」

「ちよつとした世間話だよ。世間話」

「そうか」

「あつ、そうだ！騎士学校時代のアスベルの話してよ！」

エリーがそう言うのとマリクは目を閉じる。

「アスベルは毎日のように故郷の友達や弟の話をしていたな」

「へえ……」

「他には？」

マリクは目を開けて海を眺める。

そして思い出す。

「水中訓練の時だ……」

「すいちゅうくんれん？」

「水中でも慌てず素早く動けるようにするための訓練の事だ」

「で、その時何があったんだ？」

あれは今から三年ほど前の事だ。
アスベルは常に優秀でな。トップの成績を誇っていたんだ。

「へー、アスベル優秀だったんだ」

そして水中訓練の時の事だ。

その日は町の外の少し広めの川で訓練をする事になっていたんだ。
だが、生憎天気が悪くてな。川も少し荒れていた。

その日の訓練は中止にして帰ろうとした時だ。

突然アスベルが川に飛び込んだんだ。

「えっ、どうして!？」

「話の途中なんだから少し静かにしてろよ……」

「あっ、ごめん。つい興奮しちゃって……」

続きを話すぞ。

その時の場は騒然となってな。

急いで救助しろ、と生徒どころかオレ達まで慌ててしまってたな。
その時アスベルが川から顔を出し、岸まで泳いで行ったんだ。

オレは何故突然飛び込んだのか尋ねたんだ。

そしたらアスベルはこいつを助けるためです、と言って腕に抱えていたものをオレ達に見せたんだ。
それが何か分かるか？

「えーと、子供とか？」

いや、モンスター魔物だ。

「「魔物!!?」」

と言ってもピヨピヨだがな。

それを見てオレ達は驚いたさ。

その時のアスベルが何と言ったと思う？

「何て言っただ？」

こいつが危なかったから……守りたかったんです。俺に守れる命を見捨てたくなかったんです。

アスベルはそう言った。

その時のアスベルの表情は忘れる事は出来ないだろうな。

「……………」

「どうした？」

「いや、アスベルらしいと思ってな」

その時アスベルがくしゃみをしながら船内から出て来た。

「あっ、ルイスとエリーと教官、こんな所にいたんですか。そろそろ着きそうなんで降りる準備をしてください」

「わかった」

そう言うとエリーとマリクは船内に入って行った。

「ルイスも早く……」

「ん、ああ、すまない」

ルイスは先程の話を聞いて思った。

アスベルが変わっていなくて良かった、と。

第28話 昔の話（後書き）

諸事情によりイラストを消去しました。

（ルイス）

「次回もお楽しみに」

第29話 ストラタに到着（前書き）

今回ヴェスペリアメンバーが名前だけ出演です。

第29話 ストラタに到着

「ふうん、ここがストラタの港か。ここから首都のユ・リベルテまでどれ位で行けるのかなあ？」

パスカルが手を頭の後ろに回し、少しウキウキしている。
やはり初めて来る地というのはテンションが上がるのだろう。

「失礼。あなた達は首都まで行くつもりなのか？」

青年が話しかけてくる。

アスベルがその青年と何かを話し始めた。
ルイスは横にいたエリーに話しかける。

「あの人誰なんだ？」

「分かんないけどこの人ってのは間違いなさそうだね」

「ウチの焼きまんじゅう知らん？」

「船に忘れたんじゃないかねえの？」

メイリがキョロキョロと周りを見ているとフェザントとソフィが歩いて来た。

二人とも何故か笑っている。

「どうしたんだ？」

ルイスは気になったのでソフィに聞いた。

フェザントに聞いても訳のわからない事を言われそうだったから。

「えっとね、船の中で二人で焼きまんじゅうを食べたの」

メイリの肩がピクツとなる。

「どこにあっただ？」

「椅子の横に置いてあったの」

「勝手に食ったら駄目だろ」

「フェザントが、メイリのだから大丈夫って」

フェザントが急いでソフィの口を塞ぐ。

しかしもう遅かった。

「ソフィ……ちょっとあっち行っといてくれるか？」

「うん、わかった」

ソフィはルイス達と共に下がって行った。

メイリの後ろに鬼が見えた。

「最後に言い残す事はないか？」

「え、あつと……その……」

食べ物への恨みは恐ろしい。

皆も気をつけようね。

「今首都へは行けないそうだ」

アスベルの言葉に全員驚く。

折角ストラタに来れたのに、ユ・リベルテに行けないとは。

「一体何があったんだ!？」

「何でもロックガガンという魔物モンスターが道を塞いで通れないらしい」

「ロックガガン？」

「魔物？ たかが魔物だろ？」

ルイスの言葉に「いや」と反論したのはマリクだった。

「ロックガガンというのは超大型の魔物で、人間では相手にならないらしい。別名を『岩石獣』。だが……」

「だが、って……これ以上まだ何かあるのか？」

「ロックガガンは知能が高く、性格も大人しい為人に迷惑をかけない聞いたが」

全員がアスベルを見る。

「セイブル・イゾレの先で暴れ回っていて、危険だから軍が封鎖しているとしたか……」

「というかマリクはん、よおストラタの魔物の事なんか知った

な」

「ウィンドルに来る前、ストラタにいた事もあったのでな」

「つーか、どうするよ。俺達じゃ相手にもなんねえんだろ？」

「それにロックガガンはストラタ国民にとっても大切にされている。戦うのは国民全員に止められるかも知れんな」

一行に沈黙が流れる。

そして全員が計画していたかのようにアスベルを見る。

「とりあえずセイブル・イゾレに向かおう」

オリジナルチャット——————生きるための知識 part. 2 ————

(フェ) 「誰か水をくれえ……」

(ルイ) 「ならさっきマリクがやってたようにサボテンの中の水でも飲むか？」

(フェ) 「水なら何でもええ！あるなら貰う！！」

(ルイ) 「い、いや冗談……」

(フェ) 「頼む、枯れる」

(ルイ) 「どうなっても知らねえぞ……」

ザシュツ

(ルイ) 「…ほらよ」

(フェ) 「サンキュー！ごくごく……」

(アス) 「あれ温いし、緑臭いしで飲めたもんじゃないぞ！？」

(ルイ) 「だって冗談を本気にしちまうんだもんよ！アイツ何考え
てんだ！？」

(アス) 「そ、それより……」

(ルイ) 「フエ、フェザント……それ…不味いだろ…?」
(フェ) 「は? 何言うトン? ぼっけえ美味かったよ」
(ルイ) 「え…?」
(フェ) 「じゃけえ美味かったて。ありがとな」
(アス) 「フェザントの味覚って一体……」

?術研究市——セイブル・イゾレ

「ここまでは無事に来れたね。ロック何とかが出るのってこの先だっけ」

「ロックガガンな」

「それぞれ」

「町の人に何か聞いてみよう。何か分かるかもしれない」

それに反対する者はおらず、3チームに分かれて情報収集をする事になった。

？アスベル、ソフィ、シェリアチーム
？マリク、フェザント、エリーチーム
？ルイス、パスカル、メイリチーム
というチームなのは良かったのだが、このチーム割ではやはりサボるチームが出た。
それは

「やり、衣装ゲット！」

「あっ、ルイスだけズルイで！ウチもやるわ！」

「じゃあ、あたしも」

ルイス、パスカル、メイリチームだ。

彼らは今魔法カルタで衣装ゲットに励んでいる。

「えっと、アスベルにはユーリ、シェリアにはリタ、エリーにはエステルで良いか……ユーリとリタとエステルって誰だ？」

「ウチはこのジュデイスがエエ！」

「じゃあ、あたしは余ってるラピードだね。ワン！」

「俺は……カロールしかねえじゃねえか！！！」

結局ルイスは貰わなかった。

数時間後。

「えーと……お前達は何をしていたんだ？」

「「魔法カルタで衣装狩り」」

「何故にっ!?!」

「楽しそうだったからつい……」

何だかんだでルイス以外は皆ゲットした衣装を着たんだとさ。

第30話 ロックでガガン！

一行は研究所の前を通りかかった。

入口付近にはたくさんの人がストラタ兵に何かの抗議をしていた。少し聞いていて分かったが、人々は「ロックガガンを殺すな」という事を言っているようだ。

「うーん、本当にロックガガンって人気なんだね」

「これじゃ下手に手を出せないよ」

「ロックガガン保護の声は日増しに高まって来ている」

一人の年配の男性が話しかけてくる。

その男性にソフィだけは警戒してアスベルの後ろに隠れる。

「しかし一方で街道を通れなくて困っているからロックガガンを始末してくれ、という声もある。どちらも民衆の本音だ……」

「そりゃ軍も大変だわな」

「いずれにせよ、この状況に具体的な対策をせず放置すれば良くない結果しか生まないな」

ルイスは思った。

民衆の中にも冷静な考えを持つ者もいるのだなと。

「困ったな……急いでユ・リベルテに行かなければならないのに……」

「首都方面へ急ぐのか？それは生憎だったな。すぐにはこの状況は打開すまい」

そう言うと男性は去って行った。

（あの男……只者の気配ではなかったな）

マリクは男性の後ろ姿を見て思った。

恐らく一行の中でそう感じているのはマリクだけだろう。

「どうする？」

シェリアが尋ねる。

どうしようもないかもしれないが、何もしないという訳にはいかなかった。

「教官、ロックガガンというのはよほど危険な魔物モンスターなんですか？」

その言葉にマリクは首を横に振る。

「オレも見ただ事がないので大きいという事しか知らん。具体的な事は研究者達に聞くのが良いだろう」

「けどあの状態じゃ研究所には入れねえと思うぜ」

「まあ行くだけ行ってみたら？ 最悪逃げれば良いんだし」

その案に誰も反論せず一行は一応ユ・リベルテへと向かうことにした。

オリジナルチャット———どの位大きい？———

（ソフ）「ロックガガンってどの位大きいのかな？」

（メイ）「そやなあ……マリクはんよりは大きいと思うで」

(アス) 「いや、それは魔物なんだし……」

(ソフ) 「教官よりも大きいのか？じゃあ、あのサボテンとどっちが大きいかな？」

(メイ) 「あれより大きいと思うで」

(アス) 「だから魔物何だからその位は……」

(ソフ) 「じゃあ、海とロックガガン？」

(メイ) 「そろもうロックガガンやろ」

(アス) 「……それは大きすぎるだろ」

「あちいなあ」

「そだね」

ルイスとエリーは暑すぎて目が虚ろだ。

二人だけではない。

ソフィ、マリク、パスカル以外は皆死人の様だ。

「こんな状況でロックガガンに会って俺達大丈夫か？」

「大丈夫じゃないかもね」

「……揺れてる」

ソフィが立ち止まって言う。

「ああ、そうだな。目の前が揺れて見える」

「違う。地面が揺れてるの」

「ん？……本当だ」

ルイスは立ち止まってやっと気付いた。

他の皆も立ち止まる。

揺れは段々大きくなってくる。

「ロックガガンが暴れてる上に地震。ストラタって大変だな」

「……いや、もしかするとその二つには関係があるかもしれん」

「どういう事————うっ」

ルイスが尋ねようとする今度は砂嵐が吹き荒れる。

「皆！向こうを見て！」

シェリアが前方を指差す。

他の者は何とか目を開けて指差す方を見る。

「あ、あれは……！！」

「山が……」

「動いてる！？」

その言葉通り山が動いている、様に見えた。
しかしそれは山ではなかった。

何故ならその山から手の様なものが出てきたからだ。

「えっと……あれは生き物なの？」

「だとしたら……でか過ぎるだろ」

「あの大きさは流石に予想外だな」

「言ってる場合か！」

本当に山の様な生き物が頭と体を砂から出す。
それだけでも十分大抵の生き物より大きい。

「まさかあれがロックガガン……？」

そう、あの超下級の大型生物こそがロックガガンなのだ。
鋭い爪と牙、ごつごつした体、そしてその巨体。

『岩石獣』という二つ名は伊達じゃなかった。

「と、とりあえず逃げた方がええんじゃないね？」

「よし、逃げるぞ」

一行は全速力で来た道を逃げる。

しかしロックガガンも追って来た。

「何で！？何で着いてくんの！？」

「このままオレ達が逃げれば奴は町まで着いて来るかもしれない」

そんな事を言っている間にロックガガンは真後ろまで来ていた。
いくら本気で逃げようと歩幅が違い過ぎる。

ロックガガンが咆哮する。

そして次の瞬間、

「ちよっ、まさか……」

「食べられちゃう!!」

「「「わぁぁーっっ!!?」
「
「

一行の姿は砂漠から消えていた。

そしてロックガガンは地中に潜った。

第30話 ロックでガガン！（後書き）

（雪龍）

「さて人気投票結果発表です！投票総数11票！投票してくれた皆様ありがとうございます！まずは選ばれなかった方々」

（全員）

『ゴクリ…』

ソフィ

ヒューバート・オズウェル

リチャード

マリク・シザース

パスカル

（ルイス）

「多っ！」

（雪龍）

「それだけ票が寄ってるって事だね。さて第五位！同率で三人！」

1票

シェリア・バーンズ

フェザント・エドセル

（雪龍）

「と」

フリーエ

（ルイス）

「ええっ！？パーティ以外!？」

(雪龍)

「いやゝ、流石ですねゝ。伊達にパスカルのお姉さんじゃないですね」

(エリー)

「続いては第二位！こちらでも同率で三人だよ」

2票

アスベル・ラント

ルイス・ラグゼリア

メイリ・アル・スロツテス

(ルイス)

「来たー!!！」

(雪龍)

「ルイスは第二位！本編の主人公と同率って凄いじゃんか！」

(エリー)

「アスベルを選んだ理由があります。『やっぱり主人公だし、カッコイイから！みんなを守ろうとしてるのが憧れます』だそうです！」

(雪龍)

「さて、第一回『TOGa』キャラクター人気投票第一位は……」

3票

エリス・ライレージ

(エリー)

「やったあ!!！」

(雪龍)

「第一位はエリーです！主人公を抜いて一位だよ！」

(エリー)

「皆ありがとう！」

(雪龍)

「これからエリーが主人公で行っちゃおう？」

(エリー)

「行っちゃおう！」

(ルイス)

(勝手に話進めてる……)

(雪龍)

「投票してくれた皆様、本当にありがとうございました。これから
も『TOGα』をよろしくお願いします！」

(ルイス)

「という事で次回も」

(エリー)

「お楽しみに」

第31話 ロックガガンを救え！

ここは——どこだ？

何か臭いな。

ベタベタしてるし。

「…イス…きろ」

俺達確か信書を渡しにユ・リベルテに行く途中でロックガガンに呑み込まれて…。

そうか、ここは天国か。

にしては汚いな…夢がぶっ壊れた…

「ルイス、起きろ」

誰だよ、もうちょっと寝させて…

「ルイス、起きろ！！」

「うわっ！！」

アスベルに突然大声で呼ばれた為、ルイスの意識が一瞬にして覚醒する。

ルイスは皆の様子を見ている。

ソフィは腹の辺りを擦っていて、マリクは顎に手を当て周りを観察している。

パスカルは何故かウキウキしており、対してシェリアは口に手を当て「何でこんな所に…もう嫌…」と言っている。

フェザントは岩らしきものを突いているし、エリーとメイリはかなり慌てている。

「ここはどこだ？皆仲良く天国に…？」

「いや、ここはロックガガンの腹の中だよ」

アスベルは苦笑して言う。

ルイスは「へえ」と大して驚かない。

「大変やルイス！」

「そうそう！私達食べられちゃったんだよ！？」

「うん、そうらしいな。アレだろ？ここは天国なんだろう？もうちょっと綺麗な場所を期待してたんだけどなあ……」

「私達まだ生きてるって…！」

「……何いいいい！！？まだ生きてんの！？じゃあここどこだよ！！」

「さっきロックガガンの腹の中だって言っただろ」

アスベルはまた苦笑する。

それに対してルイスはかなり焦り出す。

「どうすんだ！？こんな所ずっといたら胃液とかで溶かされるんじゃないか！？」

「せやねん！どないすればエエンや〜！」

「二人とも静かにしてくれん？」

フェザントが真剣な顔をする。

流石にこんな状況ではしゃげないのだろうか。

「皆も。こんな状況でこそ冷静にならにゃおえんじやろ。というところで……」

フェザントはポケットから大量のカードを出して言った。

「皆で落ち着いて魔法カルタやろうや」

その言葉にマリクとソフィを除く全員がずっこけた。

「何だよ!! 何でこんな状況で魔法カルタなんだよ!! てかどこで貰ったんだそれ!!」

「タルカさんに言ったら500ガルドで売ってくれたんよ」

「そんな事答えなくても良いんだよ!! って、聞いたの俺じゃねえか!!」

「ちよっ、ルイス落ち着いて!」

そう言った瞬間エリーの後ろに何かが降りて来た。

振り返って見てみるとメールパラサイトという気持ち悪い虫の魔物がいた。

エリーは顔が青褪める。

そして取った行動はというと、

「きゃあーっ!!!!!!!!!!」

自身の武器である槍を振り回した。

近くにいたルイスは何とか逃げたもののその場に残っていたら危なかっただろう。

「エリー!」

「きゃあーっ!!!!!!!!!!」

「落ち着けエリー!! もう倒したぞ!!」

「え...?」

エリーが涙目になりながらも足元を見ると、力尽き倒れている魔物がいた。

自分でも気付かない間に倒していたのだ。
恐るべしエリークオリティー。

「エリーって虫が苦手だったのね」

「けどこの前普通にビーと戦ってたぞ？」

「小さいのは大丈夫だけど大きいのは無理……」

エリーの苦手なものを知った瞬間だった。

オリジナルチャット——————苦手なものは苦手——————

(シエ) 「エリーって大きい虫が苦手だったのね」

(エリ) 「うん、あとスライム系みたいにベトベトしてるのも嫌いなんだ……」

(ルイ) 「でもクイーンスライムとは普通に戦ってたじゃんか」

(エリ) 「アレも本当は嫌だったの！」

(シエ) 「大変ね……」

(ルイ) 「あ……シエリア、後ろに……」

(シエ) 「な、何……!？」

(ルイ) 「お化けが……!!」

(シエ) 「いやああああーっっ!!!!!!」
タタタッ!

(ルイ) 「シエリアは怖いのが昔から苦手だよな」

(エリ) 「それにしてもここ暗いよね」

(ルイ) 「そ、それを言うなよ! 気にしないようにしてたのに!」

(エリ) 「ルイスって黒色は好きなのに暗いのは苦手だよね……」

あまりにも広過ぎる。

そこはロックガガンの腹の中。

暑くはないのだが、地面が滑って歩き辛い。

そんな時に小屋を見つけたので皆で勝手に邪魔させてもらっている。

何故こんな所に小屋があるかは疑問だが…。

「うーん、誰か居ると思ったんだけどなあ」

「ん？何だコレ」

ルイスが拾ったのは四つ穴が開いた笛だった。

「何でこんな所に笛が？」

「とりあえず持って行こう」

パスカルがドロボウの様な発言には誰一人としてツツコまず、笛は持って行く事にした。

マリクは床に散らばっている紙を拾った。

「誰かが残した記録日誌の様だな……ここに書かれた記述が確かならロックガガンが暴れた原因はエリーが倒した魔物にあるようだ」

「どういう事？教官」

「奴らはロックガガンを苦しめている寄生虫らしい」

「ということは、寄生虫を全部倒せばロックガガンは大人しくなるって事？」

「恐らくな。寄生虫の親玉は紫色らしい。そいつを倒せば全ての寄生虫を根絶できるそうだ」

その時エリーは思っていた。

（え…まだあんなのがいるの…？）

そんな事を考えているとも知らずマリクは書かれてある事を話し続ける。

「それと先程拾った笛は、吹けばロックガガンを呼び寄せる事ができるそうだ」

マリクは紙から目を離し顔を上げた。

「最後にこう書かれてある———」

「『『これを見た人よ。私に代わってロックガガンを救ってほしい』」

第31話 ロックガガンを救え! (後書き)

(雪龍)

「本日、9月8日テイルズオブシリーズ最新作『テイルズオブエクシリア』発売です!!」

(ルイス)

「だけど?」

(雪龍)

「まだ買ってない!!」

(ルイス)

「予約すらしてねえもんな」

(雪龍)

「だって色々と忙しかったんだもん」

(ルイス)

「まあ、俺にとってはどっちでも良いんだけど」

(雪龍)

「しかしロックガガンから出れないとは思ってなかったよ」

(ルイス)

「前半遊び過ぎだろ」

(雪龍)

「なんかシリアスな感じって苦手な上にシリアスなシーンじゃなかったし」

(ルイス)

「言い訳は良いんだよ!」

(雪龍)

「ゴメンね。次回は出れるから」

(ルイス)

「本当だな?頼むぞ?」

(雪龍)

「任せろ！では次回もお楽しみに！」

第32話 お守りに守られて

一行はここから脱出する事を最優先として、その道すがら寄生虫と出逢ったら倒していくという事にした。

の筈だったのだが、何故か行く先々で寄生虫、メールパラサイトに
出逢ってしまい、その度にエリーが槍を振り回して薙ぎ倒した。
流石に危険なので次の戦闘では後ろに下がる事になったが。

「はあ、どこまで行けば外に出れるの？」

一行の中でシエリアに並んでここから出たいのはエリーだった。
一秒たりともこんな寄生虫の巣窟になど居たくない。

五匹ほど倒した後、一行は行き止まりに着いてしまった。

「もう嫌あ……早く出たい！」

項垂れるエリー。

しかしその横で何故かパスカルは嬉しそうだ。

「はあ、いつになったら出れるの？」

「もしかしたら一生の中で暮らす事になったりしてね」

「や、やめてよ、パスカル」

パスカルの縁起の悪い言葉にシエリアが青褪める。

そんな事はお構いなしにパスカルは続けた。

「もしそうになったら、アスベルがお父さんでシエリアはお母さんで
しょ」

アスベルとシェリアの目が合う。
そして気まずそうに二人とも目を逸らした。

「あたしとソフィとエリーが仲良し姉妹で、教官はおじいちゃん！」
「おじいちゃんだと!？」

「うんうん、ロックガガンの中の家族! 良いね」

「ちょっと待て。俺とメイリとフェザントは？」

そう言われてパスカルは考える。

「じゃあルイスとフェザントはいとこのお兄ちゃん！」

「随分適当じゃねえか…？」

「ほんでウチは何なん？」

「メイリは…隣の家のお姉ちゃん！」

「家族ですら無いやないか!!」

その時、マリクが何かに気付き、武器に手を掛ける。

「パスカル！」

パスカルがマリクの方を見ると、マリクが今にも武器を投げてきそうだった。

「ちよっ! いやだなあ、さっきのは冗談だって! そんな怒らないでよ」

「違う後ろだ！」

驚いて後ろを見ると、先程までとは違う色の寄生虫、パールパラサイトが現れた。

パールパラサイトは爪でパスカルに攻撃する。

反応が遅れて避けられないと思い目を閉じたが、銃弾で爪が弾かれる。

メイリが守ってくれたのだ。

「大丈夫か？ パスカル」

「う、うん、ありがとうメイリ！」

全員が武器を構えて臨戦態勢を取る。

「紫色の寄生虫……コイツが親玉か！」

「つてことはコイツを倒せばロックガガンが暴れなくなるんだな？」

「エリーは後ろで目を閉じてて」

「は、はい……」

エリーは言われたとおりに後ろに下がり、しゃがみ込んで目を閉じる。

知らない人が見ても何かに脅えているという事がよく分かる。

「さて、エリーの為にもさっさと終わらせるか」

「斬り裂け！ 闇の刃！ ダークスリヴァー！」

二つの黒い刃がフェザントから弧を描き地を駆ける。

二つの刃はパールパラサイトを斬り裂いた。

「この名を以ちて戒めを刻め！」

「^{レム}陵、其は崩壊の序曲を刻みし者！ 重圧！」

「咲き狂う空の生命よ！」

シェリア、マリク、メイリの三人が同時に詠唱を始め発動の準備をする。

「フラッシュティア!!」

「サイフォンタングル!!」

「エアーブルーム!!」

パールパラサイトの足を黒い沼が絡め取り、聖なる刻印による攻撃の後、そして銃弾が被弾して花の様に爆発する。

「アストラルベルト!」

ソフィが光子を剣の形に変えて一気に振る。

「ブレイクシュート
星屑の覇者!」

パスカル杖からレーザーが放たれ、パールパラサイトを呑み込む。ここまでの連続攻撃で既にふらふらになっている。

「行くぜ! 火弾衝!」

ルイスの剣から火の玉が放たれパールパラサイトを燃やす。そしてアスベルがとどめの

「崩雷殺!!」

で、パールパラサイトは息絶えた。

「エリー、終わったぞー」

「う、うん、わかった」

エリーはゆっくりと近付いて来る。

倒したというのにまだ怯えているのだろう。

「これで寄生虫は居なくなった訳だけど……どうすればここから出れるんだ？」

「早く信書を届けに行かないといけないのに……」

「……お守り、破れちゃった」

「え……？」

アスベルが手に握っているヒューバートから貫ったお守りを見ている。

お守りは布が破れ、中から何かの粉が出てきた。

「何だ？この粉」

「ちよつと見せてね……へ、へっくしゅん！」

「コシヨウか!？」

アスベルの言葉にその場にいる殆どの者（ソフィとフェザントを除く全員）が疑問を抱いた。

『何でお守りにコシヨウ?』

上手い事全員の声が重なる。

アスベルが考えていると突然地面が揺れ出した。

「一体何なんだ!？」

「まさか……」

一瞬浮遊感を感じ、何かに吸い込まれた。
いや、正確に言うとうき出された。

気付けば全員砂の上で寝ていた。

「……皆、大丈夫か？」

ちゃんと全員起きた事で大丈夫だった事は確認する事ができた。

「やっと出れたのか……コショウのおかげか？」

「ヒューバートから貰った物がこんな所で役に立つとはな」

「何でヒューバートはコショウなんかを渡したのかな？まさかエスパードこうなる事を予想してたとか！？」

エリーに対して全員が口をそろえて『それはない』と言った。
アスベルは考える。

そして何かを思い出したのか、あつと声を上げた。

「思い出した！これは俺が昔ヒューバートにあげた物だ！そう言えば輝石クリアスが見つからなかったからコショウを詰めたんだっけ……」

そう言い、アスベルは苦笑する。

「まさかまだ持っていてくれてたなんてな……」

「ストラタに行ってからアイツにはそれだけが支えだったのかも
しれねえな」

「輝石のお守りには持ち主を護る力があると言われている。まさか
コショウでも効力があつたとはな」

マリクの言葉に全員が笑う。

（ヒューバート、お前のおかげで助かったよ。ありがとう）

ラントのある方角を見て、アスベルは穴の開いてしまったお守りを
握りしめて静かに目を閉じた。

第32話 お守りに守られて(後書き)

(雪龍)

「やっぱり戦闘シーンって難しいですね。今回なんてすぐ終わっちゃいましたよ。難易度シンプルでももうちょっと強いですよ。頑張らないといけないなあ。そう言えば『テイルズオブイノセンスR』と『テイルズオブザヒーローズ ツインブレイブ』の発売が決まりましたね。『TOIR』に関しては新キャラがパーティインするそうで。今から楽しみです。それから……」

(ルイス)

「ちよっ、ストップ！一人で喋り過ぎだ！！何があったんだ！？」

(雪龍)

「最近何かグダグダじゃん。そのグダグダ感がここでも……」

(ルイス)

「大丈夫だって！ストラタ来る前までは殆ど真面目だったんだから！息抜きも必要なんだって！！」(何で俺こんなに必死なんだ……？)

(雪龍)

「そうだよ……どうせまたすぐに真面目モードに入るもんね！それまでは息抜きしてもいいよね！？」

(ルイス)

「そう言う事」

(雪龍)

「ということで次回もお楽しみに！」

(ルイス)

(……これで解決で良いのだろうか……？)

第33話 情報収集は旅の基本

一行はロックガガンの腹の中、もとい寄生虫の巣窟だった場所から脱出した後、そのままユ・リベルテへと向かっている。

途中でパスカルがバナナの木を見つけ、「本場のバナナだ！食べたーい」と言ってはしゃいでいたが、ユ・リベルテに行ったら買ってあげると言ったらすぐに落ち着きを取り戻した。

そんなこんなで一行はユ・リベルテの正門まで辿り着いた。

（かなりはしょったな……）

「おお！ここがストラタの首都か！初めて来たで」

どうやら初めて来たのはメイリだけではないらしく、マリク以外は心なしかウキウキしているように見える。（パスカルは誰がどう見てもウキウキしている）

「街に入ったらあんまし暑くなくなったな」

「そうね、少し涼しいわ」

「砂漠のオアシスみたいやな」

そんな時フェザントが宿屋から走ってこっちに来た。

……いつの間に行っていたのだろうか。

というより何故行っていたのだろうか。

「皆！宿屋ん中凄かったぞ！雪！雪だるまがあった！！」

「……それで？」

「へ？それだけじゃけど？」

フェザントの奇行にはいつも溜め息をつかされる。

そんなこんなで一行は、情報収集という名の自由時間に入った。
あ、アスベル、ソフィ、シェリア、マリクの四人は信書を渡しに行
った。

「……他の皆、何でサボってるの?」と思うのは少し待ってもらい
たい。

自由時間と言ったが、実はアイテムの調達などに赴いている者もい
る。

ルイスとエリーは道具屋へ、メイリは武具屋の下見に行っている（
良いのがあれば買う）。

残りのパスカルとフェザントには、「何でサボってるの?」と言っ
ていただいて構わない。

アスベルが部屋から出てくる。

大統領との話は終わったらしく、少し驚いているような顔だった。

「どうだったアスベル?」

「あ、ああ」

「どうした?」

「驚かないで聞いてくれ……大統領は俺達も一度会った事のある人
だった」

「ええっ!?!」

シェリアだけが声を上げる。

一瞬空気がシーンとなったのでかなり気まづくなってしまったが、アスベルはそんな事も気にせずに続けた。

「大統領は……セイブル・イゾレで会ったあの男の人だったんだ……！！」

「あの男の人？」

「成る程な。道理で只者ではない気がした筈だ」

「教官、気付いてたんですか？」（ていうかあの男の人って誰……？）

マリクは「いや、大統領だとは知らなかった」と返す。

シェリアは『あの男の人』を思い出していない。

ソフィは思い出そうともせず、ただアスベルの話を真剣に聞いていた。

「それで結果はどうだったんだ？」

「それは……」

いつも通り要約して説明しよう。

まず大統領はオズウェルにより間違った情報（ヒューバートが総督として資質に欠ける等の内容）を伝えられていたらしい。

そこでヒューバートに詳しく話を聞こうと思い、召喚命令を出したそうさ。

それでオズウェルは更に自分勝手にラントに積極的侵攻をするようにヒューバートに命令を出したのだとか。

要するに

「オズウェルってのはセコイ奴だったって事だろ？」

「ルイス！？それにエリーまで！いつの間にそこに！？というかア

アイテム買いに行ってたんじゃ……」

「宿屋に行っても誰もいなかったからこっちに来ました。以上です」

ルイスが珍しく敬語で言う。

……気分的にだろうか。（どんな気分？）

「まあ、続けてくれ」

その後、オズウェルは大統領に説教され、なんやかんやで部屋を追い出された。

ここから話は変わって？クリアス石の話。

今のままではストラタの？石の需要量に達しないらしい。

このままではどっちみちヒューバートが総督の座を降りる事になってしまう。

そうならないようにアスベルは、自分達がどうにかしてみせる、と行って話は終わった。

「あと、ロックガガンの事について感謝されたな」

「そうか、しかしそれほど大きな問題となると個人の力ではどうにもならないのではないか？」

「そういやストラタにも大？バルキネスクリアス石あったよな？何でウィンドルの？石が欲しいんだ？」

「うーん、それは大？石に何かあったと見て」

「間違いなさそうやな」

いつの間にかパスカル、メイリ、フェザントの三人が会話に入っていた。

何故ここにいるのかはルイス達と同じ。

「とりあえず地道に情報収集と行きますか」

「今度のはちやんとした情報収集だからな？」
「……バレたか」

一行は誰もサボらないように全員で情報収集へと向かった。

第33話 情報収集は旅の基本（後書き）

（雪龍）

「今回はお題の様なものを貰ったのでそれをします。アスベルの勝利後の台詞の『俺達は』に続くオリキャラ達の台詞を考えれば良いのかな？とりあえず5パターンだけやってみます」

《ルイス・エリー・メイリの場合》

（アスベル）

「俺達は…」

（メイリ）

「負けへんで！！」

（ルイス）

「負けねえよ！！」

（エリー）

「負けないよー！」

（アスベル）

「……うん、負けない」

《ルイス・メイリ・フェザントの場合》

（アスベル）

「俺達は…」

（アスベル&ルイス&メイリ）

「負けない！！」

（フェザント）

「でもさつき危なくなっただけ逃げたよな」

（ルイス）

「それは……逃げるが勝ちって言うだろ？」

《エリー・メイリ・フェザントの場合》

(アスベル)

「俺達は…」

(アスベル&エリー)

「負けない!!」

(メイリ)

「負けへん!!」

(フェザント)

「負けんけえ!!」

(エリー)

「二人とも! 共通語でお願い!」

《ルイス・エリー・フェザントの場合》

(アスベル)

「俺達は…」

(アスベル&ルイス&エリー)

「負けない!!」

(フェザント)

「幼馴染みてええなあ」

(ルイス)

「お前もやれよ!」

《最後、オリキャラ全員の場合》

(ルイス)

「行くぞ? 俺達は…」

(エリー)

「メイリ!さっきのカッコよかったよ!」

(メイリ)

「エリーもよかったで!」

(フェザント)

「儂はどうじゃった?」

(ルイス)

「こうなる事は大体予想できたよ……」

(雪龍)

「すいません、こんな感じで良かったでしょうか?」

(ルイス)

「全部失敗したな」

(雪龍)

「原作の方でも上手くいくパターンは少ないんだよ?」

(ルイス)

「……まあ良いや。次回もお楽しみに」

第34話 灼熱の砂漠

一行は宿屋に戻って仕入れた情報の整理をしていた。

「えっと、要するに大^{バルキネスクリアス}？石の調子が悪いのか」
クリアス

「だからウィンドルの？石が欲しかったってわけか」

原因は分かったが解決策は浮かばない。

そんな中ソフィ、パスカル、フェザントは何やら絵を描いている。

「どうするかなあ……って何描いてんだ？」

「もうちょつと待って……出来た！」

パスカルは紙に描いた物を全員に見せる。

描いたあったのは青い大^{デュープルマル}？石、大蒼海石だった。

因みにかなり上手い。

「これを大統領に見せてきなよ。大？石の事で困っているなら詳しい仲間がいるから見てあげますよーって」

「詳しい仲間って？」

パスカルは笑顔で手を上げる。

「パスカル、大？石の事なんて分かるのか？」

「少し位ならね。前に文献でちらっと見たんだよね」

「パスカルってなんでも知ってるわね」

パスカルはその言葉に胸を張り

「へへ……何でも知りたくなっちゃう性分なんだよね」
「アンマルチア族やしな……」

メイリが小声で呟くが、誰も聞いていない、否、聞こえていなかった。

「まあ、行ってきたよ」

「ああ、ありがとう！行ってくるよ」

アスベルは紙を持って走って行ってしまった。
それを見てエリーは

「私達も行かなくて良いの？」

ごもつともである。

「あづいゝゝ……」

パスカルが早くも熱さにうだっている。

「大丈夫かパスカル？」

「全然……ない……」

「えーっと、何だって？」

突然声が小さくなって全然聞こえない。

ルイスは困ってメイリの方を見る。

メイリは面倒そうに耳をパスカルに近付ける。

相槌をしていることからちゃんと聞こえている事がわかる。

メイリは全て聞き終え、ルイスの方に向き直る。

「大丈夫なのか？」

「パスカルの言葉通り言うと『全然大丈夫じゃないよ……。暑くて喋るのが面倒になってきた』やって」

「……そんなので大丈夫なのか？」

というのもこれからパスカルには仕事があるのだ。

アスベルは大統領と交渉して、大蒼海石を調査する機会を得たのだ。大統領によると、大蒼海石の根元からアンマルチア族の遺構が見つかったそうだ。

しかし、ストラタにアンマルチア族に詳しいものがおらず困っていたのだ。

そこに丁度一行が来たという訳だ。

「けど良かったな。これでヒューバートの事は考え直してもらえらんだろう？」

「いや、まだ原因を取り除かないとな……」

「そうか……。と言う事で頼んだぞパスカル」

「……………」

「『頑張る』やって」

オリジナルチャット———皆で涼もう———

(フェ) 「フッフッフッ、これから皆は儂を敬うじやろうな」

(ルイ) 「暑くて判断力が鈍ってるからってそれは無いと思うぞ」

(フェ) 「余裕でいられるのも今のうちじゃ！わしはアイスクャン
ディーを持っている！！」

(全員) 『えっ！！？』

(メイ) 「た、頼む！それウチにくれへん？」

(エリ) 「あっ！メイリだけずるい！私も！！」

(アス) 「俺もだ！！」

(フェ) 「心配するな。全員分ある……これだ！！」
ドロドロ……

(エリ) 「あの…これ溶けてない？」

(フェ) 「あれ？ホンマじゃ。暑さには勝てんかったか……」

(ルイ) 「その位考えろよ！」

(マリ) 「仕方ないな。ここは一つ背筋も凍るような怪談話でも…
…」

(シェ) 「却下でお願いします！！」

しばらく歩くとアスベルが空を見上げた。

「しかし本当に暑いな…。汗も出ない」

「ええっ!? それって脱水症状じゃないの!?」

「違うよ…。それは…」

「何やねんお前!! ちゃんと喋らんかい!!」

と言いながらもメイリは一応通訳をする。

何だかんだ言ってメイリは優しいのだ。

「パスカルが言うには『大氣中に水の原素^{エレス}が無いから汗も出ないんだよ』やって」

「そ、そうなの…?」

エリーはやはり心配でアスベルの額を触ってみる。

「大変! 熱があるよ!!」

「周りが暑いんだから体温も上がるだろ」

「……なるほど」

暑い皆それなりに元気だ。

そんな様子をフェザントとマリクが後ろで見ていた。

「教官は暑くねん?」

「いや、暑いのは暑い」

「そうか……」

フェザントも中々に暑いのが苦手なようで元気が無くなっている。
その時フェザントは数メートル先にサボテンを見つけた。

「教官！あのサボテンで水分補給しよう！なっ？」

「街で貰った水があるだろう。それを飲め」

フェザントは渋々街で貰った水を飲む。

何気にサボテンの水が気に入ったようだ。

「はあ、若い奴は元気じゃなあ……」

「フェザント、お前何歳だ？」

「19……」

「十分若いだろ」

また戻ってアスベル達の方。

ルイスが振り返ったりして気付いた事がある。

「そう言えばシェリアとソフィは？」

「あの二人はデイスカバリーする為に走って行っちゃったよ」

そんな事を言っていると、そんな二人に追いついた。

人の形に固められた砂をデイスカバリーしていた。

因みにデイスカバリーはソフィの役目である。（ソフィがやりたいと言った為）

「ははは、ソフィは全然暑がったりしないんだな」

良く見たらソフィは全然汗をかいていない。

（あの服ってそんなに通気性良いのかな）

アスベルはそんな事を考えているとソフィは周りを見渡す。

ディスカバリー出来そうなものを探しているんだろう。

「ソフィ、はぐれるといけないから皆と一緒に行こう」
「わかった」

一行はまだこの暑い砂漠を進むのだった。

第34話 灼熱の砂漠（後書き）

（雪龍）

「皆さんお久しぶりです」

（ルイス）

「確かに遅かったな。何してたんだ？」

（雪龍）

「いや、執筆してたんだよ？それで火曜日にできて投稿しようと思
ったら……間違えて消しちゃったんだ」

（ルイス）

「そ、そんなことがあったのか……」（作者から負のオーラが…）

（エリー）

「えーっと、次回の後書きでオリジナル勝利の会話ネタをやるんで
今回は勘弁して下さい」

（雪龍）

「本当にスイマセン…」

（エリー）

「じ、次回もお楽しみに」（この人大丈夫かなあ…？）

第35話 変わってしまったリチャード

「しかし大きいな。やっぱ大翠緑石グローアムデと同じ、大？石なんだな」
「……それどういう事？」

フェザントがルイスに尋ねる。

「……いや、どういう事ってどういう事だ？」
「じゃけえ、さっきの……あれ？何じやったっけ？」
「もうお前訳分かんねえ」

ルイスが溜め息をつくとき、フェザントが笑いながらどこかに行ってしまう。

ルイスがフェザントの後ろ姿を見送っていると、何故かエリーが着いて行ってしまった。

「……まあここの敵位なら大丈夫か」

そう言ってルイスはその辺にあった石を蹴飛ばした。
その石は紅く光っていた。

「おおゝ凄い！これがストラタの大？石、大蒼海石か」

バルキネスクリアヂューブルマル

大蒼海石の前まで来るとパスカルが更に元気になった。
本当に魚類なのだろうか。

「でも何かくすんでへん？」

「うゝん、そうだね」

パスカルが大蒼海石の下に走って行く。
それをメイリが歩いて着いて行く。

「お待ちしております。貴方達が大？石を調査して下さる方達ですよね？」

金髪の男が話しかけてくる。
アスベルは一礼し、それに答えた。

「私はリバインと申します。では早速ですがよろしくお願いします」
「早速というより既にやっているのだが」

マリクが指差した方には、パスカルとメイリが興味深そうに大蒼海石を見ている姿があった。

「あゝなるほど。こうなってるのか」

「もう分かったん？ウチは何も分からんけどな」

分からないのも無理はない。
むしろ分かる者の方が少ないだろう。

「うん、見るからに壊れてる所があるからそれが辺に干渉してるんじゃないかなあ」

「ウチはよう分からんけど……どうするん？」

「えっと、こんな時には……これ！」

パスカルがポシエットから出したのはそれなりに大きなドリルだった。

一体どうやって入れていたのだろう。

「グルグルやって……!!！」

「お、おい、大丈夫なのか？」

「心配あらへんよ」

心配ない、と言われても心配せざるを得ない。

なんせ大蒼海石をドリルで掘っているのだから。

誰が見ても普通に壊れると思うてしまう。

「最後にガツとね!!！」

今度はドリルで掘った所をこれまたそれなりに大きなハンマーで殴った。

やはりどこに持っていたのか気になる。

「ちよっ、絶対壊れるだろ！あれ！」

「心配あらへんて、ルイス」

メイリが言った通り、大蒼海石は元の色を取り戻した。

「ふうー、適当にいじっただけなんだけど結果オーライだね」

「適当って……貴女は一体……」

とりあえずリベインは一礼し、仲間の下に歩いて行った。

「流石はアンマルチャ族の末裔、か……」

「いやあ、良かった良かった。これで一件落着だな……」

「て、敵襲ー！！」

そう上手くはいかない物で、ストラタ兵が急いで走ってきた。

「敵襲？どこのバカがそんな事……」

ルイスがそう言って入口の方を見ると、見覚えのある金髪の人物がドラゴンの様な魔物^{モンスター}、デイス・パテルというワイバーンに乗っていた。

いや、見覚えのあるなんてものじゃない。

その人物は

「リチャード…！？」

ウィンドルの現国王であり、アスベルやルイス達の親友だった。

「何でリチャードが…？」

「何か雰囲気が違うな……」

「リチャード！」

アスベルはリチャードに向かって走り出す。

リチャードが面倒そうに剣を振るわせると、アスベルに風の刃が飛んでいく。

「アスベル！伏せろ！火弾衝！！」

伏せたアスベルの上を火の弾が通過し、風の刃を相殺する。

「まったく、何やってんだよ。てか何で魔物に乗ってんだ？」

リチャードは全く表情を変えず、剣を振りかぶる。

その時、ルイスの前にソフィが「やめて！」と叫んで割って入った。

「う……駄目…これはリチャード……戦っちゃ…いけない……」

「危ねえ！！」

ルイスがソフィを引き寄せる。

直後、ソフィのいた場所が風の刃によって抉れた。

「邪魔をする気か…！」

リチャードが載っているのとは別のワイバーンがソフィに襲いかかる。

ルイスが刀で攻撃を防ぐ。

「リチャード！　どういう事だよ！」

リチャードは何も答えない。

そしてワイバーンを操り大蒼海石に近付いて行く。

「大蒼海石に何かする気か……！？　させねえぞ！」

ルイスがリチャードを追って走り出す。

走り出した直後、ルイスの脇腹に途轍もない衝撃が走った。
ワイバーンが突進してきたのだ。

「ぐっ……！」

「ルイス……！」

ルイスは数メートル吹き飛び、岩に激突する。
ワイバーンは尚、ルイスに向かって突進する。

「ヤッベエ……！」

ルイスは立ち上がろうとするが、手に力が入らない。

「マジかよ……！！！」

ルイスが内心かなり焦っていると、アスベルがワイバーンを斬りつける。

ワイバーンの軌道がそれ、地面に落ち、滑っていく。

「立てるか？　ルイス」

「……グミください」

アスベルはルイスにアップルグミを渡し、またワイバーンの方を見る。

当然先程の攻撃では倒せていない。

「ルイス・ラグゼリア18歳、復活！」

「ルイス：頭でも打ったのか？」

アスベルにしては少しきつい言葉だ。

「どっかのワイバーンのせいで頭どころか全身打ったよ」

ルイスはそう言い苦笑する。

そして立ち上がりアスベルの横に立つ。

「アスベル、先にリチャードを止めた方が良くないか？」

「そうは言ってもワイバーンをどうにかしないと行けないぞ」

誰かに手を貸してもらおうかとも思ったが、全員他の二体のワイバーンの相手をしており無理だった。

「つか、こんな時にフェザントとエリーはどこ行ったんだよ！」

「暇だからここの仕掛けで遊んでくるって言ってたな」

「あのバカ共！！」

ワイバーンの突進を二人共躲す。

ルイスはまたリチャードに向かって走り出す。

だがワイバーンを振りきれない。

「早くリチャードを止めに行かねえと……」

「焰、其は乱れ狂う龍神の咆哮！ 焦炎、バーンストライク！」

ワイバーンに向かって幾つもの火球が点から降り注ぐ。

「アスベル！ルイス！今の内に行け！！」

マリクの言葉を聞いて二人は一斉に走り出す。
だがワイバーンはすぐに持ち直し追いかけてくる。

「ッ！しつこい！」

ルイスが振り返った瞬間、ドゴオン、という音と共に砂煙が上がった。

その煙の中には人影が二つ。

「まさか儂達がおらん間にこんな事になるとは思わなかったな」
「ルイス！アスベル！行って！」

「良いタイミングで来てくれた！ありがとう！」

エリーとフェザントに麗を言って二人はまた走り出す。
そしてリチャードの下に着いて二人は驚いた。

リチャードが大？石から何かを吸い取っているのだ。

「何やってんだ！？」

「話は後だ！とりあえず止めよう！」

「もう遅いよ」

リチャードはそう言って二人を見下ろしている。
隣にある大？石は完全に色褪せていた。

「そんな……大？石から原素^{エレス}が無くなった……」

「何だって!?!」

研究者達が騒ぎ出す。

先程リチャードが吸い取っていたのは原素だったらしい。
用が終わったとでも言わんばかりにワイバーン達はリチャードの下に戻る。

「……貴様の顔を見ると……虫唾が走る……貴様がいる限り、安息の時間が訪れる事はない」

リチャードはソフィを睨む。

「いずれ決着は着けてやる……覚悟しておけ」
「待って! うっ……」

ソフィが腹を抱えて蹲る。

「駄目……リチャードは、ともだち……戦っちゃ、いけない……」
「ソフィ、とりあえず深呼吸して!」

何回か深呼吸をするとソフィの息が幾分か整ってきた。

「なあ、アスベル」

「どうした? ルイス」

「リチャードの事、あのまま放っておいたらマズイ気がする」

「でも、リチャードはともだち……戦っちゃいけない」

ソフィの言葉に全員黙る。

「なのになわたし戦おうとして……ごめんなさい」

「別にソフィが謝る事じゃない」

「ああ、俺達も皆同じ気持ちだ。ただ、戦う前に何故あんな事をしたのか確かめないと」

アスベルは立ち上がり、リチャードが去っていった方の空を見上げる。

「リチャード、もう元には戻らないのかな……。そんなの嫌だよ……」

「安心しろ。絶対俺が……いや、俺達が元に戻る」

「とりあえず大統領の下に戻ろう」

一行が遺跡を出て行くとする中、フェザントはリバインに呼び止められた。

「何か用か？」

「いや、用と言うほどではないんだが……僕達の下に戻って来ないか？」

「！ お前まさか……！！」

フェザントは弓に手を掛ける。
だがそれをリバインが手で制した。

「止めとけよ。失敗作には僕は倒せない」

「言っとくけど戻る気はねえけえ」

「だろうね。そう言うと思ったよ。けど、一つ覚えておくと良い」

リバインはニイツと笑う。

「実験はまだ続いているよ」

リバインは踵を返し、どこかに行ってしまった。

フェザントはその後ろ姿を怒りの籠った眼で見るだけだった。

第35話 変わってしまったリチャード（後書き）

（雪龍）

「投稿遅れてすいません！最近忙しいです！そしてこれからも忙しいです！」

（ルイス）

「今回は予定通りオリジナル勝利後の台詞行くぜ！」

《ルイス、ソフィ、シェリアの場合》

（ソフィ）

「ねえ、ルイスは何で真っ黒い服を着ているの？」

（ルイス）

「えっ、何となく好きだから、かな」

（シェリア）

「アスベルとは違って早かったわね」

（ルイス）

「何の事？」

《メイリ、エリー、マリクの場合》

（マリク）

「今日はお前達に偉人の名言を教えてやろう」

（メイリ）

「『戦場では勝った者が正義』っていうのは聞き飽きたで？」

（マリク）

「そうか……」

（エリー）

「えっと、もしかしてそれ言おうとしてたんですか？」

《ルイス、ヒューバート、フェザントの場合》

(フェザント)

「儂の歯ブラシは？」

(ヒューバート)

「知りません」

(フェザント)

「じゃあ儂のアイマスクは？」

(ヒューバート)

「知りません！というより何に使うんですか！？」

(ルイス)

「ヒューバート、フェザントの行動に一タツツコんでたら身が持たないぞ」

《パスカル、メイリ、マリク、エリーの場合》

(パスカル)

「ここは…こうして…」

(メイリ)

「ちゃうって！ここはこうや！」

(エリー)

「教官、あの二人は何をしているんですか？」

(マリク)

「バナナパイを自動で作る機械を作っているらしい」

(エリー)

「それって今する事…？」

（ルイス、エリー、メイリ、フェザントの場合）

（ルイス）

「俺達の武器は！」

（エリー）

「元気と！」

（メイリ）

「若さと！」

（フェザント）

「この弓と矢じゃ！」

（ルイス）

「いや、そう言う事じゃなくてだな……」

（雪龍）

「久々にアクセス解析見たらPVが50000、ユニークが10000を超えてました。これも全て皆様のおかげです！ありがとうございます！」

（ルイス）

「何か記念みたいなの無いのか？」

（雪龍）

「……要望があったらやるかも」

（ルイス）

「……もし要望があったらどんなのが良いか言ってくれ、ってこれ殆ど他人任せじゃねえか」

（雪龍）

「じ、次回もお楽しみに！」

第36話 弟とピエロ

「はあ、大統領に何て言うんだ？」

「ありのままを説明するよ」

一行に流れる空気が重い。

普段ならパスカルやフェザントが変な事を言って和ませたりするのだが、先程の事があってからテンションが低い。

一行は今大統領府の前まで来ていた。

（誰かこの空気を変えてくれ…！俺じゃ耐えきれねえ…！！）
「そんな時にはあたしにお任せっ！皆の気分を盛り上げちゃうよお！」

一行は声のする方を見るとそこには変な仮面をしたピエロの様な者がいた。

しかもフード付きのコートを着ており、このストラタではかなり目立つ格好だ。

そして全員こう思った。怪し過ぎる、と。

「今怪しいと思ったよねえ？人を見かけで判断しちゃ駄目なんだよ？」

「見かけっていうか仮面被ってて顔見えてないんだが」

「あははっ、そうだったねえ」

全員はこう思った。ますます怪し過ぎる、と。

このままスルーして行こうとしたが、ピエロに「待って」と止められた。

「あの、俺達急いでるんで……」

「そんな殺生なあ。あたしだって生きていくのに必死なんだよお」
「……何か関係あるん？」

メイリの言葉にピエロは数秒固まって、

「それは置いといて……」

「置いてっちゃうの!？」

エリーがツッコむがピエロはスルー。

ピエロは何も言わずに鞆からテニスボールほどの球を取り出した。

「さあ、寄ってらっしゃい!見てらっしゃい!」

(すごいマイペース……)

「アスベル、お前はオレ達がコイツに付き合っている間に大統領に報告して来い」

「わかりました」

マリクの言葉によりアスベルだけは何とか抜け出し大統領府に入った。

だが問題はここからだと思う。

街の中とはいえここはストラタ。もちろん暑い。

そんな中暑さが苦手なパスカルやフェザント達が芸を見ている間、暑さに耐えられるだろうか。

「まずは……それぞれそれえ!」

ピエロはジャグリングを始める。

回し始めいつの間にか球は一つ、また一つと増えていき最終的には十個ほどになった。

「おゝ！ 凄いねゝ」

パスカルのテンションが上がり出す。

ピエロはジャグリングを止め球を鞆にしまい、今度は細い剣と紙を取り出す。

そして紙を剣で斬る。

「次はこの剣を呑み込んでみせましょー！」

「ええ！？ そんな事したら危ないじゃない」

「もしもの事があったら応急処置だけでもお願いしますねえ」

ピエロは上を向き、剣を口に近付ける。

しかし仮面に当たって口に入らない。

何回もカツッ、カツッと当てていると痺れを切らして、

「ああもう！ この仮面ウザったい！！」

「！」「取っちゃうの！？」「」

ピエロが仮面を外し、地面に投げつける。

仮面は地面に当たり粉々に割れる。

シェリア、ルイス、エリーの三人は驚き、パスカルとフェザントは何故か感心している。

マリクは顎に手を当て見ていられないと目を閉じる。

「あの……ん？」

ルイスはピエロの正体を見て驚いた。

ピエロは女性だったのだ。

容姿はオレンジ色の髪で目にかからず、肩にかからず位の長さ。

そして額に初代主人公を思わせる赤いバンダナ。
更にポニーテール。

「あははは……。失敗失敗」

「皆、もう芸は終わったのか？」

アスベルがやってくる。

もう話が終わったらしい。

そしてその後ろには

「「「ヒューバート!？」」」

「げっ」

ラント出身三人は驚き、元ピエロはヒューバートを見るなり顔をひきつらせた。

「貴女もしかして……ライトルーンですか？」

「やっぱヒューだ……。逃げるっきゃない！」

「ちよっと!」

元ピエロ——ライトルーンはヒューバートの制止も聞かず、さっさと走って逃げてしまった。

「色々聞きたい事があるんだが……まず何でお前がいるんだ？」

出来る限り簡潔に説明しよう。

デュールマル

まずリチャードは大蒼海石ではなく、グローファンデイ大翠緑石の元素まで吸い

エレス

取り失踪。

それが理由でウィンドル軍は撤退。王都は混乱中。

ウィンドルは大変らしい。

「ここからがさっきの質問の答えだ」

そして、二つの大？石が狙われた今、最後の大？石も狙われるだろうと予想された。

そこでアスベルはフェンデルに向かい、リチャードを追跡せよ、と大統領から命令が出た。

しかもそれをストラタが全面的に協力してくれるのだ。
更に、ヒューバートと一緒に行くよう、大統領が命令したのだ。

「へえ、ストラタが全面協力ね」

「ああ、これから闘技島経由でフェンデルに入る。皆、良いか？」

全員頷く。

それを見てアスベルも頷く。

「よし、行く————」

「ちょっと待って下さい」

アスベルを遮りヒューバートが言う。

「皆さん、少し財布を確認していただいても良いですか？」

言葉通り全員財布の中を見る。

その時ルイスだけが「あっ」と声を出した。

「中身がなくなってる!!」

『え?』

「やはりそうでしたか……」

「ど、どうということだ?」

ルイスはかなり焦りながら、ヒューバートに尋ねる。
落とした覚えはない。ましてや誰かにあげた覚えもない。

「さっきのライトルーン……ピエロはスリなんです」

「何だって!？」

「まさかこんな身近に被害者が出るとは……」

「よし、今すぐ取り返しに行くぞ!」

「それは無理ですよ」

「何でだよ!」

ライトルーンは逃げ足がかなり速らしい。
被害が半年も前から出ているのにまだ捕まっていないのがその証拠だ。

「くっそく!あの野郎……覚えてろよ……!!」

「まあ全員分が盗られた訳ではありませんし、早くフェンデルに向
かいたい」

「……分かったよ。ならさっさと行こうぜ」

一行は一旦闘技島へ向かった。
もちろん船で。

闘技島行きの船上。

「ふう、まさかあんな所でヒューと出くわすなんて……」

ライトルーンは甲板で寝転がっていた。

日差しがやけに暑い。

「まだストラタ出たばかりだから暑いなあ。にしてもヒューはしつこいからなあ。案外ここまで追ってきたりして」

「誰がしつこいんですか？」

「ひゃあ!？」

ライトルーンは起き上がり後ろに飛び退く。

目の前にいたのは青い髪に、青い軍服の青尽くしの青年がいた。

「ライトルーン、貴女何故ここにいるんですか？」

「そ、それはこっちの台詞だよっ! あたしはやっとお金が溜まったからストラタを抜けただけだよ!？」

「港の者にも手配書が回っていた筈なんですが……何故乗れたんですか？」

「えっ? あははっ、企業秘密で教えらんないよ」

ライトルーンはニコツと笑う。

その時ライトルーンは誰かに後ろから肩を掴まれた。

「デメエ、俺の……」

「へ?」

「ガルド返せーっ!?!?!」

ライトルーンの叫び声が大海原を超えて、フェンデルまで聞こえた。
……その位大きかったという意味ですよ？

数分後、ライトルーンはルイスに縄でぐるぐる巻きにされていた。

「ヒューバート、コイツをさっさと牢屋でも物置でも良いからとり
あえずどっかにぶち込んでくれよ」

「……残念ながらここは僕の管轄内ストラタではないのでできません」

「そんな事言わずに……やっぱ良いや、ガルドさえ返してくれれば」

「乗船する時に使っちゃった♪」

「この野郎……っ！……！！」

その後、ライトルーンは更にグルグル巻きにされて、その辺にあった樽に押し込まれたそうだ。

第36話 弟とピエロ（後書き）

（雪龍）

「皆様、お久しぶりです」

（ルイス）

「もう二週間以上経ってんじゃないか」

（雪龍）

「すいません、こんなに遅れた理由は……活動報告見てください」

（ルイス）

「それはそうとヒューバートがやっと入ってきたな」

（雪龍）

「うん！更に新オリキャラ、ライトルーン」

（ルイス）

「あのスリ女……絶対ガルド返させてやる」

（雪龍）

「まあ頑張って。では次回もお楽しみに」

第37話 ルイス奮闘!

闘技島、それは戦士達の集う場所。
彼らは高みに挑み、強くなる。

故にそこには強者ばかり。

戦士たちは今日も強くなる為に挑み続ける。

そして今そこに一人の青年が挑んでいる――!!

「……………」

「頑張れー! ルイスー!!」

ルイスを除く一行（＋ライトルーン）が観客席で見ている。

「何でこうなったんだっけ……」

それは数十分前まで遡る――――

「ここが闘技島、ライオットピークか」
「何か暗くない?」

エリーは周りを見て少し不安になる。

ここにいる人間はゴツイ男ばかりだからだ。

「何だお前!!」

「ん? 何だ?」

一行は声のした方を見る。

そちらには武器を持ったフェンデル兵とパスカルがいた。

「パスカル何しとんのや?」

「あつ、メイリ、見てよこの武器……ってあれ?」

「フェンデル兵なら行ってもうたけど?」

「うーん……ちよつと見てこよーっと」

パスカルはメイリの手を引いて走り出す。

それをヒューバートが止める。

「軽率な行動は慎んでください。目を付けられたらどうするんですか」

「大丈夫大丈夫。遠くから見るだけだから」

そう言う二人は行ってしまふ。

それと入れ替わるように一人の男がやってきた。

そしてヒューバートと何か話して、紙を渡して行ってしまった。

「どしたん? 何かあったんか?」

「ええ……ストラタ軍の密偵が上官に疑いを掛けられ身動きが取れなくなつたようです」

「って事は潜入出来なくなつたんか?」

「別の方法を考えた方が良くありません」

そうこうしていると今度はパスカルとメイリがフェンデル兵に追いかけられてきた。

フェザントはそれを見てフェンデル兵の持っている武器に弓を放った。

弓の刺さった武器は使い物にならないだろう。

「ちょっと、あなた何をしているんですか！」

「いや、二人が痴漢に追われとったから……」

「どう見たって違うでしょ！」

「おい貴様！何てことしやがる！」

フェンデル兵がフェザントの胸倉を掴む。

「じゃってお前らが二人をストーキングしょーたから……」

「違う！奴らは我々の武器を持ち去ろうとしたのだ！」

「……そりゃあ二人が悪いな」

「その武器を壊したテメエが一番悪いんだよ！！」

フェンデル兵は拳を振りかぶる。

その時フェンデル兵が吹っ飛んだ。

「えーっと……ルイス、何をしているんですか？」

「あっ……ついやっちゃった」

「ついじゃないでしょ！兄さんからも何か言ってくださいよ！！」

「いや、リチャードを殴っちゃった位だし……」

「というかあたしもっかい見せてって言っただけなんだけど」

「女は捕えたか？」

見た目から少し位が高そうなフェンデル兵が歩いて来た。

区別するためにフェンデル上級兵と呼ぼう。

「貴様たち……例のスパイの関係者か」

「スパイ？何の事です？意味の分からない言いがかりは止めてくれませんか？」

「そうだ。俺達はこの猛者達に挑みに来ただけだ」

「ほう、あくまでシラを切るか。まあ良い。なんなら俺達が相手をしてやろうか？」

フェンデル上級兵は「だが」と続けた。

「ただ勝負するだけではつまらない。賭けをしよう」

「賭け？」

「我々が勝ったら話を全て聞かせてもらう。だが万一我々が負ければスパイは返してやろう」

「ああ良いぜ！その賭け受けてやるよ！なあ、ヒューバート」

「ええ、そうですね。どうせ僕達はここに挑みに来たんです。肩慣らしくらいにはなるでしょう」

「ふん、言っておけ」

そう言うフェンデル兵達は上に上がっていった。

ルイスとヒューバートの息の合い方はさすが幼馴染と言うべきだ。少し落ち着いた所で先程のフェンデル兵が走って帰ってきた。

「おい！黒髪！」

「呼ばれてるぞ！黒髪」

「黒髪はお前しかいないだろうが！！」

確かにこのメンバーの中に黒髪はルイスしかいない。

今思ったが一行の髪は少しカラフルだ。

目立って仕方ない。

「貴様が挑戦を受けろ！良いな！」

「はぁ？やだよ。このアスベル様が挑戦するんだから」

「俺なのか？教官の方が良いと思うんだが」

「オレはフェザントだと……」

「僕はヒューバートじゃと思っとった」

「ええい！うるさい！とにかくお前が挑戦しろ！でなければスパイは返さんからな！」

「お前にそんな権限あんの？」

凶星だったのかフェンデル兵は焦る。

「くっ……この頬の痛み、忘れてはいないからな」

「？」

そう言うのとフェンデル兵は走っていった。

何の事かと考えたが、先程ルイスに殴られたのを根に持っていたのだろう。

「ありやりや、ご指名受けちゃったね。どうすんの？」

ライトルーンがルイスに言う。

「ってか、いたんだね。」

「はぁ、しかたねえ。お前に奪われたガルドを稼ぐついでにやってやるか」

「殴るの自重するって言ったのになあ」

ルイスは刀を鞘に納めたまま魔物を殴る。

モンスター

闘技島という位だから腕の立つ者がたくさんいるのかと思ったら、ザコ敵ばかりだ。

「余裕過ぎ…。本当にここ闘技島か？」

さっきからスイカみたいなのやスライムが出てくるが全部軽くあしらっている。

そして四階。

出てきたのはフォシルリザード二体、ワイバーン二体、ウラガンドラゴン一体だ。

うん、言った所でどんなのか分かんないよね。

「そろそろ真面目にやるか」

ルイスは刀を抜く。

そして火弾衝でフォシルリザードを一体倒す。

「ここのも弱いな。もういっちょ！」

もう一体のフォシルリザードも火弾衝も倒した。

ルイスはワイバーンの攻撃を躲し、ワイバーンの横に回る。

「翔風輪！」
しょうふうりん

刃に風を纏わせ、打ち上げる。
そして空中で風による追撃がワイバーンを襲う。
ルイスは瞬時に刀を鞘に納め、もう一方のワイバーンに瞬突、利牙と打ち込んでいく。

「裂震虎砲！」

虎の咆哮でワイバーンを吹き飛ばす。
ワイバーンは地に落ちて動かなくなる。
次に先程打ち上げたワイバーンをもう一度標的にする。

「喰らえ！！！」

高速の居合——葬刃でワイバーンを斬り伏せた。
残るはウラガンドラゴンのみ。
ウラガンドラゴンは爪を振り下ろすが、ルイスは簡単に避ける。

「遅え！！！」

ルイスは先程と同じように鞘に刀を納めたまま攻撃し、葬刃で仕留めた。

「……ようやくか」

「ふん、下で野垂れ死ぬと思っていたんだがな」
「んな訳あるか。ってかそっち五人もいんの？」

先程のフェンデル上級兵とフェンデル兵が四人いた。
いや少し違う、先程より増えている。

「まあこっちも二人だけだな」
「そうですね」

ルイスの後方から現れたのはヒューバートだ。

「貴様！いつの間に！」
「さっきからですよ」

ヒューバートは眼鏡をクイツと上げる。

「やれんなよ、ヒューバート」
「誰に言ってるんです？こんな奴らに僕がやられる訳ないでしょう？」

「それもそうか」

二人はそれぞれの武器を構える。
これが闘技島の伝説となる、『黒と青の閃光』の始まりだった。

第37話 ルイス奮闘！（後書き）

（雪龍）

「今回の反省点」

（ルイス）

「何の事だ？」

（雪龍）

「まず一つ目、ルイスとヒューバート以外が空気に近かった」

（ルイス）

「なるほど、次は？」

（雪龍）

「二つ目、ルイスが強過ぎる」

（エリー）

「確かに一人であそこまで簡単に勝ち上がるのは難しいよね」

（雪龍）

「三つ目、色々都合悪くなったから途中でヒューバート乱入」

（ルイス）

「うんそうだな。ダメダメだな。はい、オリ技紹介ドーン」

翔風輪
しょうふうりん

【B技／？3／威力…310／クリティカル率…90／ヒット数…6】

有効特性…斬撃，射撃

使用者…ルイス

風を纏わせた刃で敵を打ち上げる技。

打ち上げた敵は空中で風の追撃を受け、回転しながら落ちる。

（雪龍）

「次回はカッコよく出来ると良いな」

（ルイス）

「頼むぜ？伝説とまで言っちゃったんだから」

（雪龍）

「頑張るよ！では次回もお楽しみに」

第38話

『黒と青の閃光』伝説

敵の後ろには縄で縛られている密偵らしき人物がいる。

「……行きますよ、ルイス」

「了解っ！」

二人はまず特攻する。

銃を持ったフェンデル兵（以後ドラグリーン）が二人に弾を放つ。
二人は違う方向に避ける。

「魔神剣！」

「フレアショット！」

ルイスは衝撃波を、ヒューバートは炎の弾を放つ。
倒すまではいかないまでもダメージを与える。

「響風閃！」

ルイスの風を纏った一閃でドラグリーン四人全てを切り裂く。
そこにヒューバートの

「ミスティアーク！」

放射状に放つ射撃でこれもまたドラグリーン全員にダメージを与える。

「ちっ！どけっ！！」

ドラグーンの後ろからゴツイ銃器を持ったフェンデル上級兵（以後

ジェネラル）が出てくる。

そしてヒューバートに向かって連射する。

ヒューバートは横に走って躲す。

「連射とは……厄介ですね」

「隙あり!!」

ルイスはドラグーンの後ろに回り込んでいた。

「炎烈牙!」

炎を纏った刀で切り裂き、蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされたドラグーンは倒れる。

「後四人!」

「そっちかア!!」

ジェネラルはルイスに照準を変える。

そして連射する、と思われたが――――

「スカーレット! アクアバレット!」

ヒューバートの攻撃がそれぞれジェネラルとドラグーンに炸裂する。

ドラグーンは倒れる。

「後三人です!」

「クソッ、テメエはあの黒髪を撃て! 俺とお前は青髪だ!」

片方のドラグーンはルイスに、もう一方のドラグーンとジェネラルはヒューバートに照準を合わせる。

そして一斉に放つ。

ルイスは横にステップして躲し、一気にドラグーンに駆ける。
ヒューバートは両刃剣を回転させ、防ぐ。

「そろそろ終わりにしようぜ!!」

瞬突、刹牙からの裂震虎砲で三体全員を吹き飛ばす。

そして攻撃がやんだ瞬間、ヒューバートは走り出す。

そして起き上がったドラグーンに弧月、虎牙破斬、深月と繰り出し

「散りやがれ!!」

「これで止めだ!!」

葬刃、流星でそれぞれドラグーンを倒す。

「「後一人!」」

「小賢しいッ!!」

ジェネラルが放つ連射をルイスは軽々と避け、ヒューバートは後退する。

「鳳襲空突!!」
ほうしゅうくうとつ

ジェネラルを斬り上げて、落ちてきた所を突きの衝撃波で吹き飛ばす。

ジェネラルは倒れずルイスを見る。

しかし視界にルイスはおらず、代わりに少し遠くにヒューバートが銃を構えていた。

「フレアショット!!」

炎の弾が炸裂しよろける。

「止めは頼みましたよ！ルイス！」

「任せろ！！」

「なっ！」

ルイスは視界から消えていた、正確にはしゃがんでいた。
そしてそこから――――

「翔風輪！！」

風を纏わせた刃で打ち上げる。

そして空中での風による追撃により――――

「フィニッシュだ」

「ふう、終わったな」

「ええ、そうですね」

「くっ……こんな筈では……」

ジェネラルは片膝を突き、ルイスを睨む。
それに気付き、ルイスは「おお怖い」と言う。

「さて、そういえば賭けがどうか言っていましたね。どうせなん
でその方を解放して頂きましょうか」

ジェネラルは一度舌打ちし、密偵の方を向く。
そして近付く。

縄を解くのかと思いきや、後ろに回り銃を密偵に向けた。

「何をする気ですか？」

「コイツをぶっ殺してやる……!!」

「止めておいた方が良い。決着が着いた後で再び武器を構えるのは
この掟に反します」

「えっ、そうなの……？」

ルイスは反射的に構えていた刀を鞘に納める。
しかし、ジェネラルは銃を下ろそうとしない。

「知った事か!!」

ジェネラルが言った瞬間、上の方から黒いローブを纏った人物が現
れる。

どんな顔かは見えないので分からない。

「何者だ貴様!!————」

一瞬だった。

ローブを纏った者が大剣でジェネラルを斬り裂いたのだ。
ジェネラルは声を上げる間もなく倒れる。

止めどなく血が流れ池のように溜まっていく。
恐らく既に絶命しているだろう。

「何て動きだ……全然見えなかった」

「ルイス、刀を鞘に納めないと貴方もあなりますよ」

「えっ……ああ……そうか」

やはり反射的に抜いていた刀を鞘に納める。

「それでアイツは何者だ？」

「ライオットピークを目指す猛者達の頂点にして目標とされる人物。
通称『黒衣の番人』」

「えーっと、あのフェンデル兵はこの掟に反したから制裁を受け
たって事か？」

「その通りです。ですが僕達には関係ないので普通に出来ますよ」
縄を解かれた密偵がこちらに走ってくる。

「お手数を掛けて申し訳ありません」

「構いませんよ。それより早速ですがフェンデルへ渡れるよう準備
して頂けますか？」

密偵は準備が出来たら船着き場に来るように言って、外に走って
いった。

「さて、俺達も行きますかね」

ルイスは飄々と言った。

しかし、これから行くフェンデルで彼らに数々の困難な出来事が
待ち受けている事など誰も知る由はない。

第38話

『黒と青の閃光』伝説（後書き）

（雪龍）

「うーん、微妙だなあ。こんなので伝説になるのかな」

（ルイス）

「良いんだよ。そんな事」

（雪龍）

「それもそうか。てか今回君とヒューバートしか出なかったね」

（ルイス）

「確かに。まあ次回からはアイツらの方が多めに出るから今回だけは勘弁してもらった」

（雪龍）

「そうなんだ……」（いつの間に…?）

（ルイス）

「まあとりあえず次回もお楽しみに」

第39話 フェンデル行きの船より

甲板の上。

エリーは海を眺めていた。

今更だが、一行はフェンデルに向かっている。

「な〜にしてるの？」

エリーに話しかけてきたのはライトルーン。

その隣にはメイリもいる。

「色々考えてたんだ。そういう二人は？」

「あははっ、あたしはちよっと酔っちゃってさあ。外の空気を吸おうと思って」

「ホンマならヒューやんが監視する筈なんやけど、ヒューやんが見当たらんかってん。せやからウチが来たんや」

「そっか」

ライトルーンはエリーの横まで来ると座った。

因みにヒューやんというのは言わなくても分かるだろうがヒューバートのことだ。

メイリはライトルーンを連れてくるとさっさと中に戻ってしまった。ライトルーンの監視をさり気無くエリーに押し付けたのだろうか。

「それで何考えてたの？」

「えーっと、実はね、私とルイス、それにアスベル、ソフィ、シエリア、ヒューバートは小さい頃から友達なんだ」

ライトルーンはそれを初めて知った。

以前ヒュバートから、ラントという所から養子に出された事と、そのラントに兄と友達がいた事は聞いていた。しかしそれがエリー達だとは知らなかった。

「けど皆バラバラになっちゃったんだ」

「……というと？」

「アスベルは騎士になる為に王都に行って、ヒュバートはストラタに養子に出されて、ルイスはラントにいたけどずっとユイゴスっていう人の所にいた。ソフィに至っては……」

そこで言葉が止まる。

ライトルーンがエリーの顔を覗き見ると、悲しそうな表情をしていた。

「別に言いたくなかったら言わなくても良いよ？」

「……ソフィはね、死んじゃったんだ」

「………はい？」

ライトルーンは理解が出来ない。

しかしそれが普通の反応だ。

今一緒に旅をしているのに死んでしまったと言われても、理解できる方が凄いと思う。

「でも今は一緒に旅してる。でもあの時確かに……」

「あ、あのー……ちょっと理解できそうにないからその辺り飛ばしてもらって良い？」

「……わかった」

エリーは一度深呼吸する。

「皆バラバラになってもう昔みたいに一緒にいる事は出来ない思
つてたんだ」

「なるほど、それで今一緒に旅ができて嬉しいんだね？」

「うーん……というよりさっき闘技島で思ってたんだけど、ルイスと
ヒューバートと一緒に闘ってたのを見れたのが一番嬉しかったなあ。
昔に戻れたみたいで」

「そうかそうか、エリーはルイスの楽しそうな姿を見るのが楽しい、
と」

「ち、違っ！そんなのじゃ／＼／＼」

ライトルーンは「わかったわかった」苦笑する。
対するエリーは顔を真っ赤にして声を荒げる。

「そ、そういえばライトルーンはフェンデルに何か用があるの？」

「へっ？ ああ違う違う。ヒューにさあ、監視されてんの。だから逃
げようにも逃げられないんだよねえ。折角ストラタから逃げるこ
とが出来たと思ったらこれだもんなあ」

ライトルーンが溜め息を吐く。

その時息が白くなっている事に気付いた。

「それにヒューってばいつつもしつこいんだよなあ。ま、どっちみ
ちフェンデル経由でウィンドルに逃げるつもりだったんだけど」

「何でウィンドルに？」

「ただ暑過ぎず、寒過ぎずで良い気候だって聞いたから」

エリーはライトルーンが面白い人だと改めて思った。

雪の結晶がエリーの手の上に落ちた。

時は少し戻ってこちらは船内。

メイリが中に入るとフェザントが弓でバッターのように素振りしていた。

「……何しとん？」

「え？ 素振りしょーんじゃけど」

「そんなくらい見れば解るわ！ 何で弓を振っとんのか聞いてんねん！」

それを聞いてフェザントは素振りを止めて、真剣な顔をする。

以外にも真面目な事を考えているのだろうか。

「弓の新たな可能性を模索しとったんよ」

フェザントに限ってそんな事ある筈が無かった。

「あのな、知っとるやろうけど弓はそんな使い方するモンやないねん」

「解っとるけど儂は弓と一心同体になりたいんよ」

「……もう好きにしい」

メイリは目を閉じてお手上げだと言わんばかりに両手を上げる。
そんな様子を盗み見ている者がいた。

（何なんだあの人は……怪し過ぎる……!!）

その人物とはストラタ軍少佐であり、アスベルの弟、ヒューバートだ。

ヒューバートはまだ二人（パスカルとマリクも）を信用しておらず、監視をしていた。

「ヒューバート、こんな所で何してるんだ？」

「わああああ!!!に、兄さんですか！驚かせないでください！」

「驚かせたつもりはないんだが……それで何してるんだ？」

「あの二人を監視しているんです」

それを聞いてアスベルは首を傾げる。

何かあったのだろうか、と思って見たりする。

「何で監視なんてしてるんだ？」

一人で考えてもどうにもならないので聞いてみる。

「……あの人が何者なのか解らないからですよ」

「あの人が……メイリとフェザントの事か？」

ヒューバートはええ、と頷く。

「そうだな……メイリは俺の恩人で、フェザントはリチャードの友達だ。それじゃ駄目か？」

「ええ、駄目に決まっています。もしかしたらメイリさんはパーティ内の誰かを狙う為に同行しているのかもしれない」

「メイリはパスカルの友達でもあるぞ？」

「あの人も信用できないんですよ！」

アスベルは苦笑する。

少し疑心暗鬼になりすぎではないだろうか。

「それにあのフェザントと言う人もおかしな行動ばかりして何を考えているのか読めませんし、リチャード国王の友達と言うのがまた……」

リチャードはアスベルやヒューバートの友達だ。

バルキネスクリアス エレス
だが大？石から原素を奪い、逃亡した今では、彼の友達と言うフェザントを信用するのは難しい。

「あの人は本当に信用できない……兄さんも気を付けてください」

ルイスは船内から外を眺めていた。

しかし海ばかりで変わり映えのしない景色に飽きかけていた。

「暇そうだな」

「：マリクか。まあ、こんな船の中じゃ大した事出来ねえし」

「なら話相手になってやろう」

「あたしも混ぜて〜！」

パスカルが飛ぶように走ってくる。

メイリがない所を見ると彼女も暇なのだろう。

「聞いてよ聞いてよく！さっき皆の為にフェンデルでも寒くないように携帯用の炬燵を作ろうとしたんだけどさあ。それを作る為にはクリアス？石が必要なんだけど無かったんだよ！」

前言撤回、暇ではなかったらしいがする事が無くなってしまったようだ。

「へえ、そうなのか。それは大変だったなあ」

「あ、ルイスってば興味無いでしょ！」

「そんなことあるよ」

「やっぱあるんだ」

二人の様子を見ながらマリクは昔の事を思い出す。

（……フェンデル、か。まさかここに戻ってくる事になるとはな）

「どうしたんだ？」

「少し昔の事を思い出していたんだ」

ルイスはマリクの『昔の事』というのに気になっていたが、深くは聞かなかった。

マリクがどこか悲しそうな顔をしていたからだ。

「……そろそろフェンデルに着くか？」

ルイスが外を見ると、雪が降っていた。

シェリアはソフィと外に出て雪を見ていた。
今思えばこんなにとくさんの雪を見たのは初めてかもしれない。
ウィンドルは一年を通して温暖で、雪は降っても積もるなんて滅多にない。

「寒いわね……ソフィ、平気なの？」

「うん、大丈夫」

シェリアは上着を着ているが、ソフィはいつも通りの格好で、当の本人が大丈夫でも見ているこっちが寒くなってくる。
以前ストラタの砂漠でも、全く暑そうな素振りを見せていなかった。

「ソフィ、これが雪よ」

ソフィは手を前に出す。

ソフィの手のひらに雪の結晶が落ちてきて溶けて消える。

「消えちゃった……」

「ここではこれだけしか降ってないけどフェンデルに着いたらもっとたくさん降ってるのよ」

と言いつつシェリアもそういう話を聞いた事があるだけなので、実際に見れる事に少しわくわくしている。

「そう言えばフェンデルってウィンドルの隣なのよね……私達世界を一周したのね」

「シェリア！島が見えてきたよ！」

ソフィの指さす方向にはうっすらとだが確かに島が見える。フェンデルに近付くという事はそれだけ寒くなってくる。

「もっと寒くなる前に中に入りましょ、ソフィ」

「うん、わかった」

20分後、一行が乗る船はフェンデルに到着した。

第39話 フェンデル行きの船より（後書き）

（雪龍）

「話自体は進んでないのにこの疲労感は何なんだろう」

（ルイス）

「まあ、メンバー全員出したしな」

（雪龍）

「うん、前回あまりにも他の人が出なかったから皆出してみたんだけど……」

（エリー）

「おかげで一話全部船の上だったね」

（雪龍）

「まあそういう時もある。その代りに色々すっ飛ばす時もあると思うよ」

（メイリ）

「ウチの出番があれば何でもエエで」

（ライトルーン）

「あたしは出番は良いからヒューから逃れたいなあ」

（雪龍）

「おいおい……」

（ルイス）

「そういや、お前この前また人気投票やろうかとか言ってたな」

（雪龍）

「聞いてたの!？」

（フェザント）

「止めといた方がええって。とりあえずやるとしても今はその時期じゃねえけえ」

（雪龍）

「そ、そうですね……」

(ルイス)

「まあ何はともあれ次回もお楽しみに」

第40話 港からベラニックにて

「ソフィ、寒くないか？」

「平気」

ソフィは頷く。

横からパスカルが手を伸ばして近付いてくる。

「あがが、寒いよ。ソフィにくつついて暖をとろうかな」

ソフィが瞬時にアスベルの後ろに隠れると同時にメイリがパスカルのマフラーを掴んで動きを止める。

「アンタは寒いのが平気やろ」

「ちよっ、メイリ！首しまって……」

今一行はベラニックへ向かっている。

正確にはザヴェートに向かっているのだが、この雪の中夜歩くのは危険なのでベラニックで一日泊まる事にしたのだ。

因みに大紅蓮石フォルブランニルの正確な場所は未だ不明。

少しベラニックまでの道のりの途中を見てみよう。

「なあ、やっぱさっきの所左だろ」

「うーん、でもこっちのような気がするんだよねあ」

一行は進むにつれてやはり道を間違えたと思ってしまう。

雪が降らなくなってきているのだから。

フェンデルで雪が降らない日等一年の内10日も無いだろう。

しかも地面の雪も溶けかけている。

一行はまたしばらく進む。
すると

「ここから先は立ち入り禁止だ!!」

「ほら。やっぱ道間違えたんじゃない」

何と砦に到着してしまった。

この砦を越えてしばらく行くとラントに行けるらしい。

「ラントか……心配だな」

「ならここ突破しちゃう？」

「それは無理だろ」

「フッフッフ、この砦を越えたいんすか？」

一行が声のした方に振り返る。

そこには何か全体的に黒いかめにんがいた。

「あ! ルイス風かめにんだ!!」

「違うだろ! 何だよ俺風って! 確かに黒いけど!」

「トータス! 1000ガルドあれば向こう側に送ってやるっすよ!
!」

一行は近くに集まり会議を始める。

(ねえどうすんのお? あたしはウィンドル行けるんなら行きたいんだけど……)

(貴方はウィンドルに着いた瞬間逃げるでしょ!)

（てかあんなグレたかめにんの言う事なんて信用できねえぞ）

（だよね。じゃあもう結論だしちやおうよ）

（結論は……）

《無視で！！》

一行はトータス言ってる黒いかめにんを無視して先程の分かれ道に向かった。

少し飛ばして分かれ道を左に曲がって少し行った所。

「ねえねえあの穴何なの？」

ライトルーンが指さして言う。

その方向には直径30m程の大きな穴があった。

「ありゃ、まだ残ってたか」

「流石にあの大きさの穴は簡単には消えへんで」

「二人はあの穴を見た事あるの？」

二人は声をそろえてまあね、と言って少し誤魔化す。

「しかしどうやって出来たのだろうか。兵器の実験でもしていたのか……」

「？石の力が暴走したんだよ」

「ええ、そんなだけでこんな大きな穴が出来るかなあ？」

「それが出来ちゃうんだよ」

パスカルがいつになく真面目な表情になる。

「フェンデルの火の？石はちょっと厄介だね。扱いが難しいんだ」

パスカルの説明の途中にこの辺りを見張っていたフェンデル兵が近付いて来る。

あらぬ疑いを掛けられても面倒と考え、一行は急いでベラニックに向かった。

オリジナルチャット————フェンデルの兵器？————

(アス) 「フェンデルとは大変なんだな」

(ライ) 「急にどったの？」

(アス) 「いや、雪がこんなにも降ったり、あんな大きな穴が開いたり」

(ライ) 「あの大きな穴……パスカルが何か知ってそうだったよねえ」

(メイ) 「察しがエエなあ」

(アス) 「もしかしてフェンデルの新しい兵器か!？」

(ライ) 「おっ、それは大変だねえ。こうなったら早くラントに……」

(ヒュ) 「行きませんよ」

(ライ) 「ありゃ……」

(メイ) 「ま、大丈夫か」

———忌憚の寒地　ベラニツク

「さて、今日は宿屋で情報を集めて明日に備えましょう」

と言う事で宿屋。

ここの宿屋は他とは違って劇場があるが今は使われていないそうだ。情報は全くと言って良いほど集められなかったので、今日はもう宿で休むことにした。

「ふいー、寒っ！」

「こんな寒い夜に外に散歩か？」

「ん？ああ、マリクか」

ルイスが外から帰ってくると、カウンターでマリクが一人で酒を飲んでいた。

マリク以外誰もいない所を見ると自分で作ったのだろうか。

「はあ、寒くて寝れないよ」

「……………」

そう言いつつ上からパスカルとソフィも降りてくる。

「何だ。別に宴をする気は無いんだぞ？」

「いやあ、寒くて寝れないんだよう。あ、そだ。教官お酒頂戴。温まるかも」

「別に良いが……ソフィは――――」

「ソフィは未成年だぞ」

「お茶で良いな」

こうしてルイス、ソフィ、パスカルの三人はカウンターに座り、マリクがその内側で酒を作っていた。

「ねえねえ！教官って教官になる前は何してたの？生まれた時から教官だった訳ではないでしょ？」

「あ、それは俺も知りたいな」

「……さあな、どうだったか忘れた」

マリクは教える気はないらしい。

「何してるんですか？皆さんお揃いで」

そこにヒューバートも入ってくる。

「教官に昔の事聞いたんだけど教えてくれないんだよねえ」

「それについては僕も気になります」

「……人に自慢できるような過去はオレにはない」

またこの表情。

船の中で『昔の事』とやらを思い出した時もこの表情をしていた。

「ぷはあゝ、あったかいらあゝ」

「パスカル!？」

「どうやら温まれたようだな。ヒューバート、こいつを部屋まで運んでくれ」

「何で僕が……というより酒を飲んで浮かれている場合ではないでしょう……」

色々言いつつもヒューバートはパスカルの手を肩に回し、部屋まで運んで行った。

「ねえ教官。わたしも眠れないの」

「ならいつものようにサイコロトークでもするか」

「そんな事してたの!？」

「ううん、今日は何か歌を歌って欲しいんだ」

ソフィが歌と言った時、ルイスは何かを思い出した。

七年前、シェリアがピアノを弾き、エリーが歌う。

ソフィはその歌を聴くのが大好きだった。

「……そうか。ではオレの十八番を歌うとするか」

「演歌とか歌うなよ?」

マリクはふっと笑って劇場の舞台に上る。

そして深呼吸をして、歌い出す。

彼の歌は、切なく、儂く、尊く、明るく、そして優しい歌だった。

「————……と、こんなものか」

歌い終わったマリクが下を見ると、ソフィが目を輝かせていた。その隣でルイスは寝てしまっているが。

「教官、今のは何ていう歌なの？」

「……何だったかな。この歳になると物忘れが多くてな」

マリクはソフィに部屋に戻るように言うと、ルイスを起こした。
ルイスは半分寝ながら部屋に行った。

（この歌はお前も好きだったよな……）

マリクは一生忘れれる事はないだろう、女性の名を呟いた。

「ロベリア……」

第40話 港からベラニックにて（後書き）

（エリー）

「今回はベラニックの宿屋での話を中心だったね」

（雪龍）

「ベラニックって面白いイベントが多いんだよね」

（ライトルーン）

「はい！皆様注目！」

（雪龍）

「おっ、ライトルーン頼んだよ！」

（ライトルーン）

「この前言っていたPV50000記念の話の内容を決めました！」

（雪龍）

「それは何かと言うと、『ベラニックでの劇』です！」

（ライトルーン）

「そこで皆様に聞きたい事がありまして。このメンバーで劇をするならどんな話が見たいですかあ？」

（雪龍）

「出来る限り童話でお願いします」

（エリー）

「と言う事で次回もお楽しみに！」

条件チャットその？〜？とは言ったものの？以降があるかはわからない！

―――逃げたら勝ち？―――（条件…戦闘を10回連続で逃走）

（ルイ）「……………」

（アス）「ルイス、どうしたんだ？」

（ルイ）「いやさ、最近俺達逃げてばっかじゃねえか？」

（フェ）「確かにな。これじゃ腕が訛るわ」

（ルイ）「そうだな。このままじゃフェザントの元気が有り余って鬱陶しい」

（メイ）「パスカルもや」

（アス）「でもな……ヒューバートが……」

（メイ）「『この辺りのザコに構っている暇はないんですよ』やろ？」

（フェ）「そんなあ」

（アス）「で、でも『逃げるが勝ち』って言うだろ？」

（メイ）「そういうことやないと思うんやけど」

―――ルイスの評価―――（条件…ルイスが自身の最強武器『天叢雲』アマノムラクモを装備する）

（ルイ）「はっ！たあっ！」

（マリ）「ルイス、中々様になったな」

（ルイ）「まあな、何たって俺のうd―――」

（エリ）「武器が良いもんね！」

（ルイ）「っておい！俺今腕が良いって言おうとしたんだけど！？」

(エリ) 「うーん：腕が良いかはともかくとしてやっぱ武器があつてこそそのルイスだよ」

(マリ) 「だそうだ。ルイス、お前もまだまだだな」

(ルイ) 「……へーへー、武器に頼らなくても良いようにこれからも精進しますよー」

————まさかの代用品!?!———— (条件…エリーが自身の最強武器『ゼロ・ブレイカー』を装備する)

(エリ) 「どうしょ! 私強い!!」

(シェ) 「確かに最近かなり魔物^{モンスター}を倒してるわね」

(ソフ) 「うん、エリー強い」

(エリ) 「えへへ、ありがと」

(メイ) 「エリー、ちょっとその槍貸してくれへん?」

(エリ) 「えっ? 何に使うの?」

(メイ) 「何かパスカルがドライバー失くした言うてな。似たようなん搜しとってん」

(エリ) 「私の武器って一体……」

————気にしてる?———— (条件…メイリが自身の最強武器『クラッシュセーブ』を装備する)

(メイ) 「華麗に撃ったで!」

(ルイ) 「おお、確かにメイリの射撃はスゲエよな」

(メイ) 「せやろ? いやあ、ルイスに褒められるなんて幸せやわあ」

(ルイ) 「銃といえどヒューバートも使ってたな」

(メイ) 「ちやうちやう。アレは剣のついでに銃があんねん。アレは邪道や」

(ルイ) 「そうなのか？」

(メイ) 「あんなのと同じにされたらたまらんで」

(ルイ) 「……何が違うんだ？」

(パス) 「あたしも銃使うよ？」

(メイ) 「それは杖のついでやろ」

(ルイ) 「だから何が違うんだ!？」

―――――天下一品―――――(条件…フェザントが自身の最強武器『クォータードラゴン』を装備する)

(ヒュ) 「あなたの弓捌きは見事ですな」

(フェ) 「じゃろ? 結構頑張ったんよ」

(ソフ) 「でも良く外してるよね？」

(フェ) 「あ、あれはわざとなんよ」

(ライ) 「へへ、わざとなんだあ。じゃあ今度から全部命中させてね」

(フェ) 「おう! 任せろ! 儂の弓は天下一品じゃけえな!」

(ヒュ) 「そこは弓任せなんですか……」

(フェ) 「えっへん!」

(ライ) 「威張る所じゃないよ?」

―――――通気性が良いだけだよね?―――――(条件…ストラタに10分滞在する)

(エリ) 「暑い。早く違う所に行かない？」

(ルイ) 「とは言ってもこんな砂漠のど真ん中でどこに行くっていうんだ？」

(アス) 「はあ……水分はこまめに取らないといけないな」

(ヒュ) 「皆さん情けないですね。そんな事ではストラタで生きていくなど到底不可能ですよ」

(ルイ) 「いや、ストラタで生きていく気なんてさらさら無いし」

(アス) 「にしてもヒューバートはそんな服を着てるのによく平気だな」

(ヒュ) 「え、ええまあ、ストラタの軍人たるものこの程度の暑さに項垂れているようではいけないなので」

(ライ) 「実は中何も着て無かったりして」

(アス) 「そうなのか？」

(ヒュ) 「ちよっ、そんな訳ないでしょう！ライトルーン！変な事を言うのは止めてください！！」

(エリ) 「そこまで必死だと余計なあ……」

(ヒュ) 「本当に違いますから！！」

————ある日のルイスの大参事———— (条件…フェンデルに10分滞在する)

(アス) 「寒いな……」

(ルイ) 「はあ、寒い日と言えばあの事件を思い出す」

(シェ) 「あの事件って？」

(ルイ) 「俺達がまだ小さい頃の話なんだけど、俺がラント邸に潜入しようとした時の話だ」

(エリ) 「そんなの数え切れないよね」

(マリ) 「どれだけ潜入したんだ……」

(ルイ) 「それでさ、その時は床を突き破って潜入する予定にしてたんだ」

(エリ) 「いや、それは駄目でしょ!」

(アス) 「そんな事あったかな……」

(ルイ) 「それで床突き破った所までは良かったんだよ」

(シェ) 「良くないわよ!」?

(ルイ) 「だけど出てきたのが丁度炬燵の中でかなりびっくりしたんだよ」

(ヒュ) 「そんな事があつたんですか!」?

(マリ) 「なんだ、ヒューバートは知らないのか?」

(ルイ) 「そりゃ知らねえだろ。そういう夢を見たって話だから」

(アス) 「なんだ夢か……」

(ルイ) 「まあ、起きたら本当に炬燵の中にいて脱水症状になりかけたけどな」

(エリ) 「それ笑い事じゃないよ!」?

(シェ) 「炬燵では寝ないようにしましょうね」

(エリ) 「って言うてる傍からフェザントとライトルーンが炬燵で寝てるんだけど……」

—————読者の皆様にお礼を—————(条件…特になし)

(ルイ) 「読者の皆様へ。こんな話を読んで頂きありがとうございます」

(エリ) 「ルイス、そんな堂々とカンペ読まなくて良いから。自然体で行こう!」

(メイ) 「さて、作者の思いつきで作られたこの小説もいよいよ中盤やな」

(エリ) 「そう言うのって終盤で言うものなんじゃないの?」

(フェ) 「というか重い突きって何の事？」

(メイ) 「思いつきな。何でも『テイルズオブグレイセスを普通にもう一周する位なら』って事で書きだしたんやって」

(ルイ) 「その情報どっから仕入れてきたんだ？」

(メイ) 「まあそんな事はどうでもエエやん♪」

(ライ) 「とにかく。今までこんな小説を読んでくれてありがとね！」

(フェ) 「本当にありがとう」

(メイ) 「ウチらの冒険はここからやで！」

(ルイ) 「その最終回みたいな雰囲気作るの止める!!！」

(エリ) 「そうだよ。こういうときはこう言うんだよ。せーのっ！」

(全員) 『これからも《テイルズオブグレイセス+α (TOGα)》

(この小説)≫をよろしくお願いします(よろしくな) (よろしくね)!!！」』

(ルイ) 「バラバラじゃねえかああああーっっ!!!!！」

条件チャットその？…？とは言ったものの？以降があるかはわからない」（後妻

（メイリ）

「色々カオスな部分があったけども楽しんでもらえたやろか？」

（ルイス）

「大丈夫さ。これは言っ飛ばせばオマケ。誰も文句は言わない…

…筈」

（雪龍）

「……で、ではこの辺で次回もお楽しみに！」

PV50000越え記念番外編！くもう既に60000越えてるが気にしない、

今回は色々崩壊してます。

それでも宜しければ。

後半僕の苦手な分野に挑戦しました。

PV50000越え記念番外編！　　もう既に60000越えてるが気にしない、

「依頼？何だそりゃ？」

ルイスが起きたのは午前9時を少し過ぎた頃。

いつもなら6時位に起こされるのだが今日は誰も起こしに来なかった。

ここはベラニックの宿屋。

ルイスは上から降りてくるといきなりアスベルに爽やかな笑顔で

「俺達に依頼があるんだってさ」

と言ってきた。

そこでルイスが言ったのが一番最初の台詞だ。

「せやねん！ウチらスターになるんやで！」

「メイリ、それは気が早いわよ」

よく見たら皆少し浮かれている。

「あー……依頼って何すんの？」

ルイスが目を擦りながら聞くと全員声をそろえて言った。

『劇だ……！』

「……劇？」

ルイスを除く一行は劇の準備に取り掛かっていた。
ルイスはと言うとその彼らをボーッと見ているだけだった。

「ちよっとー！ルイスも手伝ってよー！」

「えー、あー……劇っていうけどさ。一体何するんだ？てか俺達素人だぞ？」

「それについてはオレに任せろ」

渋い声で言って来たのはマリク。

何故か手には人形を装着している。

数年前によく見かけたあの芸人の様だ。

「芸に関してはオレが指導する」

「いや、アンタ出来んの！？」

「昔かじっていてな」

「何やってんだ……」

「だから安心して準備を進めろ」

そう言うときマリクは何処かに行ってしまった。
端から見ると怪しいおじさんにしか見えない。

「それで一体何の劇やるんだ？」

「えっとね、二つやるんだけど……。一つ目が『シェリ雪姫』。二つ

目が『眠れる森のエリー』だよ」
(何か色々パクってないか…?)

パクってません。

列記としたオリジナルです。(多少設定等を真似ています)

「……まあ良いや。俺はどっちに出るんだ？もしかして二つとも、なんて言わないよな？」

「二つとも出るのは教官とソフィだけだよ。と言ってもソフィはナレーションだけだ」

マリクとソフィは二つ出るんだ…。

「ルイスは『眠れる森のエリー』だよ」

『眠れる森のエリー』にはオリジナル組とマリク、ソフィの七人。
『シェリ雪姫』には原作通り。

では少し飛ばして劇に行こうか。

おっす、ルイスです。

今俺達は舞台裏で『シェリ雪姫』を見てたんだ。

にしてもヒューバートおもしれえなあ…。

途中ストラタの少佐だ、ってバレそうになった途端急に演技が白熱したんだもんな。

てか一番最後。

マリクのアシスト良かったなあ。

良いもん見れたわ。

…さて、俺も頑張るかな。

幕が上がる。

舞台にはドレスを着たエリーと、貴族の様な格好のフェザントがいる。

…俺の出番いつだっけ？

『今日とはある貴族、エリーの誕生日。街中からエリーをお祝いに来てくれました』

ソフィが台本を読む。

台本にはちゃんと振り仮名が振られている。

「おお、エリー！今日は何と魔女がプレゼントを持ってきてくれたそうぞぞ」

「ええ！？かの有名な魔女様が！？」

二人とも地味に演技が上手い。

そしてそこに魔女に扮するライトルーン登場。

「エリー様、あたしからプレゼントがございます」

うん、さっきフェザントが言ってたけどな。

『魔女は懷から木の実を取り出しました』

「エリー様、これを食べてみてください」

「これは何ですか？」

「これを食べると全身から力が湧いてきて、更にこの世で最も美しくなれるのです」

『エリーは魔女に言われたとおりに木の実を食べました』

皆、怪しい物は口に入れないように。

『するとエリーの体が石になってしまいました』

まさかの急展開！

エリーが固まっている。

『そこに一人の少女が現れました』

メイリが颯爽と登場し、ライトルーンに銃を向ける。

もちろん偽物だ。

「やいやいその魔女！今すぐその子を元に戻さんかい！！」

メイリの役は何なの？

「これはこれは我がライバルの銃士、メイリさんじゃないですか」

どんな設定だよ！！

「お前はここで終わりや！」

「フッフッフッ、あたしがそんな簡単にやられる訳が無いだろう？」

『魔女がそう言うと言とボンッという音と共に白い煙が周りを包みま
した』

「エリーを返してほしくば西のいばらの塔に来なさい！」

…これ別の話じゃね？

つと、俺の出番か。

「おうおうおう！！皆の衆！一体何があったんだ！！」

あの…シーンとするのとか止めて頂きたいんだけど。

この空気辛いんだけど！

てか俺どんなキャラだよッ！！

『静まり返った部屋の中にエリーを祝おうと何も知らない、空気の
読めないルイス王子が現れました』

俺の扱い酷くね！？

てか俺王子だったのか。

何かマントとかブーツとかやけに洒落てると思ってたんだよな。

「これはこれは。ルイス王子ではありませんか」

「そう！そのルイス王子だが何か？」

このキャラ本当何なんだよ！！

※ルイスは台本通りにやっています。

「実は魔女にエリーが石にされて攫われたのです」

「何と！それはいけませんな！直ちに軍を引き連れてエリーの下へ向かいましょう！！」

……本当にこのキャラ疲れるんだけど。

まあそれも後少しの我慢だ。

『場所は変わって西のいばらの塔。その入り口にはルイス王子と銃士メイリと軍人のマリクがいました』

軍引き連れてって言ったのに軍人一人だトーーーーおっ！！？
この王子駄目駄目じゃねえか！！

「よ、よし、マリクよ。このいばらを切り裂くのじゃ！！」

「御意！」

マリクは剣一（偽物）を抜き、いばらを斬ろうとする。

『しかしいばらは意思を持ったかのように動いてマリクを倒してしまいました』

「無念……」

何コイツ、全然使えなかったんだけど。

「私にお任せを」

そう言うときメイリは銃――（偽物）を出していばらに向ける。
バンバンッ、という効果音が鳴るといばらは消えてなくなる。
……これマリクいらなかったじゃん。

「では進みましょう」

「御意！」

何で俺が御意って言わねえといけねえんだ！？

※ルイスは台本通りにやっています。

「フッフッフッ、来たようですね」

「今度こそ決着や！」

何か関西弁になったり標準語になったり……キャラ定まって無いな。

「姐さん！頑張ってください！」

いつの間に姐さんになったんだよ。
てか俺もキャラブレブレだな。

『銃士メイリは魔女に簡単にやられてしまいました』

あれ？いつの間にかやられてる。

「おのれ…よくもエリーだけならずメイリまで……許さないぞ！」

ルイスは剣―（偽物）を抜き、ライトルーンにゆっくり斬りかかる。
ライトルーンは何もしなかった。

「ぐわー！やられた〜！」

ライトルーンってここで倒れるんだっけ？何か話が違うぞ？

『ルイス王子は見事魔女を倒しました』

どうすりゃいいの？

エリーもずっと固まってるぞ？

てかエリーが動いてくれたらこれ終わりなんだけど…。

（うう……ルイスとのキスシーンまで動いちゃいけないなんて……

／／／

うーん、何かエリー顔赤いんだけど…。

熱あんじゃないか？はっ、もしかしてそれで辛くて動けないとか！？

※ルイスは自分の事に限って鈍感です。

クソッ、一体どうすれば…。

ん？マリクが何かカンペを……。

（キスしろ。それで劇は終わる）

キス！？

そうか、キスで呪いのものが解けるんだな！！

でも『シェリ雪姫』とオチ被ってないか？

まあ良い！早くエリーを休ませる為にも！

『ルイス王子はゆっくりとエリーに顔を近付けて————』

「エリー！調子は大丈夫か！？」

「え？ああ……うん……／＼／＼」

あの後無事に劇は終わった。

そして幕が終わるとルイスはエリーをおぶって急いで舞台裏に連れて行った。

「わ、私は大丈夫だから……／＼／＼」

「そ、そうか。良かった」

30分ほど経っているがエリーは目を合わせられない。

「えっと……とりあえず何か買って来るわ」

「う、うん……／＼／＼」

ルイスは外に出て少し横に移動して壁にもたれ掛かって座った。

「……はあ」

ルイスが溜め息を吐く。

吐いた息が白い。

「まだ緊張してんな……」

ルイスはまだ高鳴っている胸を抑えて言った。

ルイスの頬は寒いせいなのか、それ以外のせいなのか赤く染まっていた。

そんな姿を見て楽しんでいる者の影が3つあった。

翌日

「いやあ、見事な劇だったよ！ありがとう！」

「いやあ、良いんだよう。こっちはこっちで面白かったし」

パスカルはそう言ってクルクル回る。
ルイス以外全員満足気だ。

「ルイス、どしたん？」

フェザントが声をかける。

「ああ、今更なただけどさ……」

ルイスは『眠れる森のエリー』の台本を取り出して言った。

「あの劇、森に行っていないし、エリー眠ってたわけじゃないよな」

「どういう事？」

「つまり俺が言いたいのはな————」

「劇をやる時はしっかり準備しろよ、ってこと」

PV50000越え記念番外編！もう既に60000越えてるが気にしない、

（雪龍）

「ルイスの野郎羨ましいいいいい！！！！！！」

（ライトルーン）

「落ち着いて落ち着いて」

（メイリ）

「せやで。アンタがモテへん事位皆知っとんねん。あんま叫んでるとキモさが増すで？」

（雪龍）

グサツ「うっ……」

（メイリ）

「今回はグダグダやったけどウチらはおもろかったで」

（ライトルーン）

「あたしも」

（雪龍）

「そう、それなら良かった……そう言えばルイスとエリーは？」

（ライトルーン）

「あっちでイチャイチャしてる」（ただ話してるだけだけど…♪）

（雪龍）

「あのやろおおおお！！！！！！」

（メイリ）

「次回もお楽しみに。次回は元の話に戻るで」

第41話 ベラニックから連絡港へ

一行はベラニックを散策している。

しばらく歩いていると、少し広い所で何かを拾っている少年少女を見つけた。

「何を拾っているんだ？」

「砂の粒ほどこかない？^{クリアス}石の欠片だ」

アスベルの呟きにマリクが答える。

「一体そんな物を集めて何に使うんでしょうか」

「あははっ、多分アレだよ。ストーブとかの燃料だよ」

「へえ……」

ルイスは少年少女に近付きしゃがみ込む。

「取れてっか？」

「ううん、あんまり」

「うちは宿屋だからお客の分も取らないといけないし」

宿屋と言うと昨日あの劇をしたところだろう。

「？石は流通していないのか？」

「この国は？石の産出量が少なく、そのほとんどを帝都に住む富裕層が利用している。人々の暮らしが困窮しているにも拘らず政府は動こうともしない……それがこの国の現実だ」

「大勢の人間を見捨てて一部の人間だけが贅沢してるってか。嫌な国だな」

「ウィンドルやストラタやったらそんな事ありえへんやろ？」

メイリの問いにアスベルが頷く。

ウィンドルでは？石が大量に取れる。

ストラタも大量とはいえないまでも国民が生活する上で十分な量ほどは賄えている。

故にこの少年少女達のように？石の欠片を集めているような者等滅多にいない。

「つくしゅん！にいちちゃん、寒いよう……」

「…熱があるな。後はにいちちゃんが集めるからお前は家に帰りな」

少年は少女の頭を撫でて優しく言う。

だが少女はまだ全然集まっていけないと渋る。

「大丈夫だって。いざとなったらストラティムの角を取ってくるから」

「ストラティム？」

「ココに来る途中におった魔物モンスターのことじゃな」

ストラティムは赤い鳥のように魔物で頭部には鋭い立派な角が生えていて非常に凶暴。

そして、その角には原素エレスがストラティムが食べた？石の原素が蓄積されるらしい。

この少年が倒せるほどやわな魔物ではない。

「む、無理だよ！にいちちゃん！やられちゃうよ……」

「平気だよ。何たってにいちちゃんは無敵だからな」

「バカか」

「あだっ」

ルイスは少年に軽く拳骨をする。
しかし思いのほか痛かったのか頭を抱える。

「お前みたいながきが勝てる訳ないだろ」

「なっ、何だとッ！」

「だから俺が取りに行つてやる。お前達は家に帰って待つてな」

そう言うところルイスは歩き出した。

「ちよっ、ちよっと！ルイス待つて！」

エリーが引き留めるがルイスは歩を止めない。

「ストラテイムの角なら私達たくさん持つてるよ！！」

「なぬっ？」

エリーが鞆から出したのは大量のストラテイムの角。
いつの間にとったのだろう。

「とりあえずこれだけあれば足りるでしょ？」

「え、でも……」

「良いから良いから。早く妹さんを休ませないと」

「う、うん！ありがとっ、お姉ちゃん達！ついでに黒いお兄ちゃんも！」

「お、おう」（ついでについて……）

その後、少年少女の母親からザヴェートで大？石の研究をしているらしいという事を聞いた一行はザヴェートに向かっている。
山岳トンネルを越え、吹雪の中を歩いている。

「本当に寒いな……」

「そうですね……」

「ルイスは寒くないの？」

「んー…よく分かんねえけど寒くねえな」

それを聞いてメイリは何かを思いついた。

「なあ、ルイス。ウチメツチャ寒いねん…。暖めてくれへん…？」

「暖めるって何するんだ？」

「そんなん決まってるやん。抱き合って暖をとるんや」

「ならパスカルと抱き合えば良いんじゃないか？パスカル寒いって言ってたぞ？」

（あれはソフィに抱きつく為の口実なんやけどな…）

ルイスが笑顔で返したため、メイリはそれ以上何も言えなくなる。
鈍感とは恐ろしいものである。

オリジナルチャット———何故？———

(シエ) 「ねえ、何でルイスは寒くないの？」

(ルイ) 「何でって言われてもなあ…。エリー、何でだ？」

(エリ) 「わ、私に聞かれても……」

(ルイ) 「だよな」

(ライ) 「ルイスは何故寒くないのか。教えてあげようか？」

(シエ) 「ライトルーンは知ってるの？」

(ライ) 「うん。まずあたし達人間には自己体温調節現象と呼ばれる不思議な力があってね。空気中に含まれる原素を取り込む事によって体温をわずかながら変化させる事が出来るんだよ」

(エリ) 「そ、そうなの？よく知ってるね」

(シエ) 「それにしても何でルイスだけに働くのかしら」

(ルイ) 「そうだな。そしてよくそんな嘘を思いつくよな」

(エリ&シエ) 「「え？」」

(ライ) 「あははっ、ばれた？」

(エリ) 「嘘、だったの？」

(ルイ) 「コイツの話は大体嘘だと俺は思ってる」

(シエ) 「そ、そうなんだ」

(エリ) 「ならルイスは何故寒くないのかな」

(ルイ) 「本当に謎だな」

(ライ) 「……………」

一行はザヴェートへの連絡港に着いた。

「ここから船に乗ればザヴェートへ行ける」

「はあ、また船か」

「今回の船旅は短い。暇を持て余すような事はないだろう」

「あなたは随分とフェンデルの事情に詳しいんですね」

ヒューバートが疑いの目でマリクを見る。

そしてマリクはと言うと不敵に笑って「おかしいか？」と返す。

「いえ別に。何故フェンデルの事情に明るいか気になっただけですよ」

「教官もいい年なんだし色々知ってても不思議じゃないよ」

「悪かったな。良い年で」

「誤魔化さないでください!!」

ヒューバートの怒鳴り声に驚き、周囲の人間が全員ヒューバートの方を向く。

「誤魔化してないよー! あたしは真正銘22歳のぴちぴちお姉さんだよー!」

「せやで! ウチかてまだ20歳や!」
はたち

「儂じゃって19歳じゃーッ!!」

「あたしも19歳だよ!」

「あなた達の年なんてどうでも良いんですよ!!」

どうでも良いと言われた四人は若干へこんで、固まって何かを語り始める。

しかしヒューバートは真剣な目でマリクを見据える。

そこにソフィが近寄ってくる。

「けんかはだめ」

「っ……………」

ヒューバートは何も言わず少し離れた位置に移動する。
アスベルとルイスはへこんでいる四人に近付いた。

「三人共、すまない」

「ヒューバートもまだ緊張してるだけなんだ」

「あたしは……気にしてないよ……あはは………」

「ウチは別にエエよ」

「儂なんて……どうでもええんよ」

「あたしも気にしてないから全然良いよ！」

パスカルとメイリは復活したが、残り二人はメンタルが弱いらしい。
少々面倒な奴らだと思おう方々もいるだろう。

「とりあえず船に乗ろうぜ」

ルイスはフェザントに、アスベルはライトルーンに肩を貸して船に
乗り込む。

他の者も船に乗り込んだ10分後、船はザヴェートへと出発した。

第41話 ベラニックから連絡港へ（後書き）

（雪龍）

「さて、突然ですが皆様に質問させてください」

（ルイス）

「ああ、あの事か」

（雪龍）

「実は最近『未来への系譜編』まで書こうか悩んでいるんです。というのも今書いてる本編が終わった後、オリジナル展開を考えているんですけど、そんな事してたらグレイセスの時代が終わってる気がするんです」

（ルイス）

「言いくいけど今の時代はエクス————」

（雪龍）

「そこで、皆様に質問です。正直、『未来への系譜編』読みたいですか？」

（エリー）

「そんな聞き方じゃ駄目だよ。と言う事で次の選択肢の中から選んでね」

？見たい！メツチャ見たい！

？オリジナルまでで十分だよ。君はよく頑張った。

？ああ？ テメエなんかに興味ねえよ！

（雪龍）

「……最後の何？」

（ルイス）

「はい、というわけで見たいか別に良いかの二拓で良いんでお願いします」

(雪龍)

「では、次回もお楽しみに」

第42話 帝都ザヴェートより

———鉄軌む重帝都 ザヴェート

ここはベラニックより吹雪いており、家の外にはフェンデル兵ばかりだ。

そして霧も濃い。

フェンデルは蒸気機関技術が発達した国である。

そして噴き出した煙が霧となって街を覆っているらしい。

と、この情報は全てヒューバートが言った事だ。

「へえ、やっぱヒューバートは物知りだな」

「仮想敵国の情報は可能な限り押さえておくのが常識です」

「仮想敵国って事は……フェンデルとストラタは戦争でもするんか？」

「その可能性は昔から常に検討されていますね」

ヒューバートの言葉にアスベルやルイス達は驚く。

もしかしたらウィンドルにも何か影響が出るかもしれない。

そんな事になってしまっは、王のいない王都は確実に混乱に陥るだろう。

「こんな所でいつまでも話していると兵に目を付けられるぞ」

「そりゃ困る。どっかの誰かさんが既に闘技島で目を付けられているからな」

「ルイスも入ってるやろ」

他人事のように言うルイスにメイリがジト目でツツこむ。

ルイスは目を逸らして口笛を吹きだす。

「とりあえず街の人達に聞きこみでもしようか」

「そうじゃな。まずは宿屋から聞きこみに……」

「外からに決まっているでしょう？」

「そんなぁ……」

フェザントをスルーして一行は聞きこみを開始した。
もちろん誰もサボらないように、全員一緒に。

……と思っていた矢先にフェンデル兵に囲まれた。
開始してからおよそ20秒で囲まれてしまうとは。

「お前達何者だ？フェンデル人ではないな？」

ヒューバートはストラタ軍の服を着ているのだが果たして大丈夫なのだろうか。

ヒューバートは一度舌打ちして武器を出そうとするが、マリクがそれを制する。

「オレ達はウィンドルの任務に出ていて今帰ってきた所だ」

「ウィンドルだど？そんな話が信用できるとでも思っているのか？」

「これが証拠だ」

そう言ってマリクが出したのは古びたカードだった。

「これが部隊証だ」

『!!!』

「確かに本物で間違いないが……」

「これで解っただろう？もう良いな」

マリクはその後淡々と続ける。

「さて、オレ達は総統閣下の下へご報告へ上がらなければならん」

「そ、総統閣下ですって!？」

今更ながら本当にマリクは口が上手いと思う。

詐欺師に向いているかも知れない。

「これ以上オレ達を足止めするなら貴官らの事を閣下に報告せざるを得なくなるが」

「そ、それだけはなにとぞ……オイ、撤収だ!」

フェンデル兵達は走って帰っていく。

そして全員の視線がマリクへ向いた。

「……はったりで言ってみたのだがどうやら信じてくれたようだな」
「おお、はったりじゃったんか! いやあ、すっかり信じてしまうたわ」

「俺もです。まさか部隊証まで用意しているとは。どこで手に入れたんですか？」

「こんな事もあるのかと以前から準備していたただけだ」

「準備、ね……」

ヒューバートだけは納得していないようだったが、他は納得していた。

「本当の事がいつバレるか解らん。調査を急ごう」

一行は聞きこみを再び開始した。

一行は少し広い所で集まった情報を整理していた。
宿屋の中とか暖かい所であれば良いのに。

「フエンドルが大？バルキネスクリアス石の研究をしているのは間違いなさそうだな」

「流石にどこでしてるかは分からなかったけどね」

「そう言えばアンマルチャ族に協力してもらってるって人もいたよね」

ライトルーンがそう言うのアスベルが頷く。

「その点も驚きだ。まさか今でもアンマルチャ族が実在してるなん

て」

「これはまずいよ。まずい、まずいまずい、絶対まずい」

「何がそんなにまずいんだ？ パスカル」

とうとう寒さで壊れてしまったのかと、真面目に不安になってしま
うリス。

しかし他の者はそんな雰囲気でないのは解りきっているので真剣に
パスカルの方を見る。

「フェンデルの大？ 石は他のと違って少し特殊でさ。簡単に原素が
取り出せないんだよ。理論的には可能んだけど技術的には困難
て言うかさ」

普段おちやらけている彼女がここまで物知りだと思っていなかった
他の全員（メイリを除く）は少なからず驚いていた。

「大？ 石で実験して失敗でもしちゃったら大変な事になるよ」

「……具体的には？」

「うーん、フェンデル全土が吹っ飛ぶくらいじゃ済まないだろうね」

「何故そんな事が言いきれるんですか？」

「ベラニックに行く途中にでっかい穴があったでしょ？ あれって？
石が暴発して出来たんだよ。しかもこんくらいの大きさの」

そう言ってパスカルは指で大きさを表現する。

その辺りに落ちている小石と同じ位の大きさだ。

「この程度であの大きさだよ？ 大？ 石だったらって想像しただけで
焦るよ」

「ねえ、パスカル。どうしてそんな事を知ってるの？」

「あの穴作ったの、あたしだもん」

そう言って頭を掻くパスカル。
しかし、そんな彼女に反して他の全員（メイリとソフィを除く）は
かなり驚いた。

「だから余計にまずいんだよ。その実験に使われてるのってたぶん
あたしの技術だから。闘技島で見たのもそうだったもん」

要するにこのまま実験を続ければフェンデルが吹っ飛ぶのは目に見
えているという事。

そんな事になれば今フェンデルにいる者どころか、隣国であるウイ
ンドルにも影響が及ぶだろう。

「実験に用いられているのはアンマルチア族の技術じゃなかったの
か？」

「何言ってるの？アスベル。あたしアンマルチア族じゃん」

『ええ!!!?』

新たな事実にはパスカルとメイリとソフィ以外は驚きを隠せない。
アンマルチア族はとにかく頭が良いという事だけは知っている。
パスカルは確かに頭が良いが、普段の様子からは考えられなかった。

「あれ？言ってなかったっけ？」

「ウチは前ボソツと言ったけど誰も聞いてへんかったわ」

「そうなんだ。ねえ皆、今からアンマルチア族の里に行かない？そ
こに行けば色々詳しい情報が手に入るかもよ」

「大？石の場所が解るかもしれないなら行くっきゃねえな」

「でもアンマルチア族の里ってここから近いの？」

「すぐそこってわけじゃないけど一応同じフェンデルにあるよ」

そこでルイスは一つ疑問が頭の中に浮かんだ。

「フェンデルで育ったのに何で寒がってたんだ？この位の寒さなら普通だろ？」

「どうせソフィにくつつく為の口実やろ」

それを聞いてルイスはなるほど、と納得する。

早速行こうという流れだったがヒューバートが「待って下さい」と止める。

ヒューバートはパスカルの前まで行き言った。

「何故、今までアンマルチア族だという事を黙っていたんですか？それとメイリさんもアンマルチア族なんですか？」

「ウチはちゃうよ。アンマルチア族は皆髪の色が途中から変わってんねん。ウチは緑一色やろ？」

「え？あたしは聞かれなかったから言わなかったただだよ」

ヒューバートはいらいらとしながらマリクの方にも目を向ける。

「あなたですよ。先程の演技はあまりにも堂に入りすぎていた。案外あれは真実だったんじゃないんですか？」

そして最後にフェザントの方を向く。

「あなたは一体何者なんですか？リチャード陛下の友達と聞いていますがそれだけではないんでしょう？」

「儂は……あの人と会う事になったら言うわ」

「それはどういう事ですか？」

「まあ良いじゃねえか。それよりも早くアンマルチア族の里に行こうぜ」

「良くありません！僕は怪しい人達と行動を共にしたくはありません！」

その言葉にマリクが一度溜め息を吐く。

「君の言っている事は正しい。オレの事はちゃんと話そう」

マリクは顎に手を当て昔を思い出す様に言った。

「オレはフェンデル出身だ。帰ってくるのは20年ぶりになるがな」

「やはり……。兄さん、それにルイス。これを聞いてもあなた達は彼らと行動を共にする気ですか？僕は隠し事をする人は嫌いなんです。こんな人たちと行くのはごめんだ」

「ヒュー、それならあたしも言っていない事がある。けど言っていない事が無い人なんているの？そんなの一々気にしてたら仕方ないよ」

「あなたは別に……」

「ここにいたぞお！！」

そう叫びながらフェンデル兵が大量にやってくる。

そして瞬く間に囲まれてしまった。

恐らく先程の事がバレてしまったのだろう。

「貴様は一体何者だ？マリク・シザースという男は既に死亡しているではないか！」

「なるほどな。そういう扱いになっていたか」

「貴様らの身柄を拘束する。全員集合！こいつらを捕えろ！」

「それは困るな」

そう言ってライトルーンが前に出る。

「皆はアンマルチア族の里まで走って。あたしはコイツらを止めるから」

「しかし僕は……」

「今はそんな事を言ってる場合じゃないでしょ！とにかく走れよッ！」

ライトルーンがそう叫ぶと全員走り出す。

ライトルーンはそれを見送るとどこからか本を取り出した。

「あははっ、さて、あたしも早く行きたいんだよね」

そしてその本を開いた。

第42話 帝都ザヴェートより（後書き）

（ルイス）

「今回は色々驚く事が多過ぎたな」

（雪龍）

「しかも長いし」

（ルイス）

「それにライトルーン……今までありがとな」

（雪龍）

「え？死んでないよ？」

（ルイス）

「本当に……ありがとうッ！」

（雪龍）

「死亡フラグ建てるの止めてあげて！」

（ライトルーン）

「次回もお楽しみに」

第43話 仲間だから

一行はザヴェートの外まで一気に走り抜けた。これもライトルーンが兵を足止めしてくれたからこそ出来た事である。

「はあ、はあ……ここまで来れば大丈夫だろ」

「だね。それよりこれからどうするの？」

「やっぱりアンマルチア族の里に行かない？ 丁度その方向に出てきたし」

ヒューバート以外はそれを了承した。

しかし、ヒューバートは「あなた達と行く気はない」の一点張りだ。

「何でそんな事言うのさ。ちゃんと話したじゃん」

「そうだよ。てか、まだそんな事言ってたの？」

「ですが……ってライトルーン！？ いつの間に!？」

「いやあ、十分時間稼いだからそろそろ良いかと思ったんだけど……君達遅くない？」

ライトルーンが陽気に笑うと、後ろの方からたくさんの声がする。振り返ると、大量のフェンデル兵が走って来ていた。

「ちよっ、ライトルーン！ 全然足止め出来てないじゃないですか！」

「時間稼いだのに君達が遅いからじゃん。あたしは知ーらないお先」

そう言うときライトルーンは走り出した。

その後を皆が走っていく。

「何であの人達となんか……」

「弟君、急いで急いで！」

パスカルはヒューバートの腕を掴んで引っ張る。

ブツブツ言いながらもヒューバートは捕まるわけにはいけないので走った。

オリジナルチャット———何かあるの？———

(ヒュ) 「皆さん、気を付けてください。くれぐれもはぐれないように……」

ヒュ (風が吹く音)

(ヒュ) 「ってあれ？誰もいない……全く、困ったんですね。あの人達には協調性は無いんでしょうか」

(ルイ) 「おっ、こんな所にいた。何やってんだ？」

(ヒュ) 「それはこっちの台詞ですよ。一体どこに行ってたんですか？」

(パス) 「どこについて……。弟君がどっか行っちゃったんじゃない」

(フェ) 「……」

(ルイ) 「そうだぞ。何も用が無いなら一人で離れるのはやめてくれよ。遭難したらやばいんだからな」

(ヒュ) 「それは僕の……」

(フェ) 「研究所……」

(ヒュ) 「え？何か言いましたか？」

(フェ) 「いや、何でもないよ」スタスタ

(ルイ) 「……何だったんだ？」

(ヒュ) 「さあ。あの子の考えている事は解りません。それより早

く行きますよ」

(パス) 「弟君、そっちじゃなくてこっちだよ」

(ヒュ) 「何言ってるんですか。こっちで合ってますよ」

(パス) 「違うよ。そっちは里じゃなくて研究所があるんだよ」

(ルイ) 「研究所って……まさかな」

「今、何か聞こえた……」

山頂辺りに来てソフィが呟いた。

途中、ヒューバートが道に迷ったり、パスカルが変な石を拾ったりと大変だったが、何とかここまで辿り着いた。

アンマルチア族の里まで後少しらしい。

「な、何か聞こえたってそんな……」

「雪男だったりしてね」

「いやー！ ツツツ！！！」

シェリアの叫び声がどこまでも木霊する。

静かになった所で後方から足音が聞こえた。

「……イノシシですか」

ヒューバートはたかがイノシシだと思い、背を向ける。
しかし、それはただのイノシシではなく、チムピオーンボアという
凶暴な動物だ。

その時、イノシシがヒューバートに向かって突進し始めた。

「ヒューバート！危ない！」

「え…？」

ヒューバートが振り返った時にはもう遅かった。
距離とスピードを考えると避けるのは不可能だ。
術の詠唱をする暇も無い。

（しまった…！！）

そう思った瞬間体が宙に浮き、横に倒れる。

ヒューバートが起き上がり目を開けると、パスカルが倒れていた。
脇腹から血が溢れている。

頭にある鋭い角に突かれたのだろう。

「パスカルさん…！？」

「弟君…大丈夫？」

自分の方が重症なのにも拘わらず、ヒューバートの心配をするパスカル。

ヒューバートは立ち上がり、パスカルに駆け寄る。

「パスカルさん！何で僕を庇ったりしたんですか！」

「何でって…仲間、だから…？」

パスカルは弱弱しい声で言った。
その言葉にヒューバートは目を見開く。

――何故そんな事を言うんですか。

――僕はあなたにあんな酷い事を言ったのに。

――それでもあなたは僕を仲間と…。

「全員身構えろ！この辺は奇行が厳しいせいで野生動物と言っても凶暴だ。背を見せたら襲ってくるぞ！」

「コイツはあたしにお任せを」

そう言ってライトルーンが全員の前に立つ。
手には本を持っている。

「アイツはあたしが相手するからパスカルが死なないように頑張つて」

「しかし一人で相手できるような相手ではないぞ」

「んー…じゃあ、教官は援護してよ」

「……解った」

二人でも不安が残るが、一人よりは数倍もマシだろう。
マリクはいつでも詠唱に入れるように構える。

「待っててくれたの？いやあ、優しいね」

そう言ってライトルーンは本を開き、ページをめくっていく。
そして鮫が書かれてあるページで止める。

「流動する水よ、唸れ！鋭鮫漠流」
えいごうばくる

波に乗って三匹の鮫が現れ、チムピオンボアに噛みつく。
そして、水となり弾けた。

「何だ今のは？？術……ではなさそうだったが」

「分析は後だよ。しっかり援護してよ？」

「…解った。焰、其は乱れ狂う龍神の咆哮！ 焦炎、バーンストライク！」

幾つもの火球が空からチムピオンボアに降りかかる。

しかし、少しダメージを与えただけで倒すまでは至っていない。

「飛び立て！豪散鳥」
へいさんちょう

ライトルーンが鳥が描かれたページを開く。

すると、放射状に鳥が飛んでいく。

さながら弓矢のように。

「陵、其は怒りの権化、その激情はすべてを揺らし葬る絶対なる破壊！爆壊、レ・ディスラプション！」
ごんげ

地面から二つの手が現れ、チムピオンボアを挟む。

その瞬間膨大なエネルギーがチムピオンボアの真下から放たれる。

「わーお、強力う！」

マリクの術でかなりのダメージを与える事が出来た。

「さて、ドンドン行くよお！！」

ライトルーンは熊のページを開く。
すると、チムピオーンボアを潰す様に上から熊が落ちてくる。

「その一撃は破壊の力」

熊は大きな腕でチムピオーンボアを何度も切り裂き、上空に投げ飛ばす。

「全身全霊の力を掛けろ！」

熊は右腕に力を込める。

「王魔熊掌拳！！」
おうまゆうしょうけん

チムピオーンボアが落ちてきた所を、熊が思い切り殴り飛ばした。
数メートル吹っ飛び、岩に激突したチムピオーンボアは動かなくな
った。

「ふう……あつ、パスカル大丈夫？」

「アカン！このままやと危ないわ！」

こんな寒い所で大怪我を負って大丈夫な訳が無かった。

体温は下がり、顔は青ざめ、早く暖かい所で休ませないとかなり危険だ。

「アンマルチア族の里はすぐそこや！そこまで行ったら休める！早
よ行こう！」

一行はアンマルチア族の里へと走り出した。

パ[°]スカ[°]ルはヒューバートが背負っている。

第43話 仲間だから（後書き）

おうまゆうしょうけん
王魔熊掌拳

【秘奥義／威力…2000／ヒット数…8】

有効特性…獣，打撃

使用者…ライトルーン

熊を呼び出し、爪で切り裂いた後、上空に投げ、殴り飛ばす秘奥義。因みにライトルーンの秘奥義発動時の台詞は『ドンドン行くよお！』秘奥義中の台詞は『その一撃は破壊の力、全身全霊の力を掛けろ！王魔熊掌拳！！』

えいこうばく
鋭鮫漠流

【B技／？3／威力…380／クリティカル率…80／ヒット数…

6】

有効特性…斬撃，水棲

使用者…ライトルーン

鮫を呼び出し、噛みつかせた後、水となり弾けさせる技。

呼び出す時の詠唱は『流動する水よ、唸れ』

へいさんちよう
豪散鳥

【B技／？3／威力…310／クリティカル率…120／ヒット数…

4】

有効特性…射撃，爬虫類

使用者…ライトルーン

鳥を呼び出し、放射状に弓矢のように飛ばし、攻撃する技。

呼び出す時の詠唱は『飛び立て』

（雪龍）

「今回はこれで終わりにします。次回もお楽しみに」

(ルイス)

「どんどん感想、或いは質問等ください」

第44話 真の友情、仮面の笑顔

「……ここは…?」

パスカルが目を覚ますとヒューバートが駆け寄ってくる。

周りを見渡すと見慣れた物が散乱していた。

散らかっている、というレベルではない、まるで嵐が通り過ぎたようだ。

「……あたしの部屋？」

「パスカルさん！傷は大丈夫ですか!？」

「へ？ああ、まだちょっと痛いかな」

パスカルはヒューバートに笑って見せる。

その笑顔を見てヒューバートは安心した。

「てか何であたしここで寝てたんだっけ」

「それは……」

ヒューバートはパスカルに淡々と説明をする。

ヒューバートが言うには、最初は宿屋で休ませようとしたらしい。

しかし、パスカルが寝言で

「部屋で……部屋で寝かせてえ……」

と言ってヒューバートから離れなかったそうだ。

仕方なく部屋まで運んだのは良かったものの、部屋が散らかりすぎている為、ヒューバートは部屋の掃除をしていたのだ。

「って片付いてる！？ちよつと！勝手に片づけないでよ！」

「片づけないと寝かせる所も無かったんですよ！」

「折角絶妙な位置に絶妙な物を置いてたのに！」

「あれは部屋ではなく物置でしたよ！」

「……何言い争ってんねん」

メイリが壁にもたれ掛かって言う。

様子を見に来たらこの様だ。

「パスカルは怪我人なんやからあんま大きい声出したらアカンやんか。ヒューやんもやで」

「「ス、スミマセン……」」

「まあ、そんだけ元氣があるってことやな。そういや、ヒューやん全然寝てへんやろ。休まへんの？」

「別に構いませんよ」

「何で寝てないの？」

「それは……」

「アンタをずっと看とったんや」

その言葉にパスカルは驚く。

パスカルはすっかり嫌われていると思っていたからだ。

「そ、その……パスカルさん、メイリさん、ザヴェートではすみませんでした。あんな事を言って」

「別にあたしは気にしてないよ」

「ウチも同じくや」

「それと、パスカルさん、先程は助けて下さってありがとうございます」

「いやあ、どうもどうも」

パスカルは少し照れた素振りを見せる。
そして何かに気付いて、ヒューバートの手を握る。

「あたし達もう友達だよね！」

「と、友達ですか？」

「おっ、エエやん。ならウチも混ぜてや」

「うん！もちろん！あたし達はもう友達だよ」

「……そ、そうですね」

ヒューバートは眼鏡をクイツと上げる。

頬が赤く染まって見えるのは気のせいだろうか。

「あ、そう言えば皆はどこに行ったの？」

「皆何かしらしとんとちゃう？」

「ぼ、僕は皆さんにパスカルさんが目覚めた事を伝えてきます！」

そう言うヒューバートは走って部屋を出ていく。

そんな後ろ姿を見てメイリは微笑んだ。

「……パスカル、ちゃんと面倒見てもらうんやで」

「？ 何の事？」

「何でもあらへんよ。さて、起きたんやから外行こうや。アンタがおらんとガウスはんに会えへんねん」

ガウスとはアンマルチア族の里長の事である。

先程会いに行こうとしたら、アンマルチア族を連れて来ないと話をさせないと門前払いを喰らってしまった。

「は〜い」

パスカルは軽く返事をして立ち上がる。
傷は少し痛むが、歩けないほどではない。
パスカルはゆっくりと外へ向かった。

「……まさかこんな所でお会いするとはねえ」

ライトルーンは一人で行動していた。

その時、ある人物と出逢った。

ライトルーンが話しかけたのは金髪の男性だ。

因みに一行も一度会っている。

これで解っただろうがストラタの研究者、リバインである。

「何処かでお会いしましたっけ？」

「安心して良いですよ。どうせ誰もいないですし」

「……そっか。今はライトルーンだったっけ？」

リバインの口調が突然変わる。

まるで被っていた仮面を脱ぎ捨てたように。

「その通りです。あなたはリバイン、で合ってますよね？」

「そうだよ。いやあ、相変わらず可愛いね。今何歳だっけ？」
「そんな事どうでも良いでしょ。こんな所までわざわざ何しに来たんですか？しかも一人？」

ここまで来るのは数人でも大変である。
それを一人で来るという、少し無謀な事をしてまで何をしに来たのか。

「何企んでんですか？ま、もうあたしには関係ないですけど」
「そんな事はないよ、ライトルーン。僕がここに来たのは寧ろ君に用件を伝えるためさ」

「今更あたしを使うんですか。やっぱあなた達は物好きですねえ」

「で、何の用ですか？」とライトルーンの表情が真剣になる。
リバインはその表情を見てニイッと笑う。

「ラグゼリアを大紅蓮石フォルプランニルに近付けな。それだけで良いから」
「……見つかったんだ。で、どこにいるの？」
「知らないの？君の居るパーティの黒髪だよ」
「ルイスが…！？」

リバインは笑顔で最後にこう言った。

「絶対殺すなよ？後々利用するんだから」
「……解ってますよ。ただ————」

ライトルーンは怒りの籠った声で言い放った。

「その嘘臭い笑いを浮かべるな。反吐が出る…！！」

ライトルーンは踵を返し、歩いて行った。

恐らくパーティの下に戻る頃にはいつもの笑顔に戻っているだろう。
あの偽りの、仮面の笑顔に。

「全く……反抗期かな」

リバインは気にした様子も無く、ある場所へ向かった。

第44話 真の友情、仮面の笑顔（後書き）

（雪龍）

「明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします」

（ルイス）

「さて、今回は突然伏線張り出したな」

（雪龍）

「意味不明な伏線だったよね」

（ルイス）

「逆に意味が解りやすい伏線ってあんの？」

（雪龍）

「まあ、今年もこんな感じでグツダグダです」

（ルイス）

「自分で言うな。てか、直そうとしろ」

（雪龍）

「出来る限り頑張る」（キリッ

（ルイス）

「ああ、頑張ってくれよ。では、次回もお楽しみに」

（雪龍）

「感想、質問等待着ってます」

第45話 フー姉さんⅡパスカルの姉Ⅱ担当者

一行は広場で集合し、今はガウスの所へ向かっている。
先程は門前払いを喰らってしまったが、パスカルが居る今ならちゃんと会って話をさせてもらえるだろう。

「おや、あなた達は確か大蒼海石デュープルマルの時にお世話になった」

ガウスの居る所の方向から来たのはリバインだった。

「確かりバインさんですよね？」

「ええ……皆さんはこんな所に何をしに？」

「それはこっちの台詞じゃって」

一行の前に出るフェザント。

声に少し怒りが籠っている。

「こんな所に何しい来たんな」

「少し大蒼海石の事でアンマルチア族の方々に相談がありました」

「一人ですか？」

周りを見てもリバイン一人しかない。

第一、ストラタではアンマルチア族はもう実在していないと考えている者もいる。

本当に見つかるか解らない、存在しているかも知解らない、しかも魔物モンスターは凶暴、そんな所に一人で来るのはおかしい、とその場にいる殆どの者がそう思った。

「一人ではありませんよ。ただ、途中で他の者は力尽きてしまいま

して」

「じゃあ帰りはどうするんだ？」

リバインにそう返したのはルイス。

まだ信じていないが、とりあえず聞いてみたのだ。

「アンマルチア族の方にホーリイボトルを頂いたのでそれを使おうかと」

「ふーん、何で来る時はそれを使わなかったんだ？ ストラタにも売ってんだろ」

「生憎ながら途中で全て使い切ってしまいましたね」

そう言うとりバインは一本ホーリイボトルを取り出す。

そして蓋を開け、中の液体を飲んだ。

「では、私はこの辺りで」

リバインは里の出入り口に向かって歩き出す。

これ以上は無駄だと思い、誰も追おうとはしなかった。

「おーい、チビツ子。ちゃんとパスカル連れて来たぞー」

「チビッ子ではありません。うちはポアソンです」

そう言って奥から出てきたのは地面に付きそうな位髪の長い女の子。先程一行を追い返したのはこのポアソンである。

「大体パスカル姉様。部外者を里に連れて来るのは掟破りですよ」
「さっきストラタの研究者がいた筈だが？」

ルイスの言葉をポアソンは普通にスルーした。
チビッ子と呼んだのを根に持っているのだろうか。

「そんな掟なんか別にエエやん。ウチがおった時から有って無いようなもんやんか」

「メイリさんは特別です」

「ところでばーさまは奥にいる？ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「ばば様はもうしばらく前から人前で話すのをやめております」

何故呼び方が統一されてないのだろう。
別に良いのだが。

「ばば様とお話したい時はうちを通して下さいな」

「まあ、あんたが将来の長だし今からばーさまの代理をやって準備しておくのも良いかもね。ならポアソンに頼むよ。あたし達を英知の蔵に入れて」

ポアソンはそれを里長に話しに行く。

パスカルが言うには英知の蔵とは、アンマルチア族の記録と知識を蓄えてある記録庫の事らしい。

ついでに言うとか色々やばい物があるらしく、前から入ってみたかつ

たそうだ。

「ばば様が言うには英知の蔵には長以外の者は何人たりと入ってはならぬ、だそうですよ」

「だからそれをどうにかしてって言ってるの。相変わらず固いな」
「パスカル姉様の方が柔らか過ぎるんです」

ポアソンが胸を張って言う。

11歳の女の子に22歳の女性がこんな事を言われるとは。

「ポアソン、フェンデル政府が大^{バルキネスクリアス}？石の実験を進めてんの知ってる？」

「もちろん知ってますよ。それがどうかしましたか？」

「どうかしましたか、じゃなくて。あれ放っておいたらまずいよ。実験をすぐ止めさせないと」

「うちやばば様の下には全て順調という報告しか来ていませんが」

パスカルは実験に自分の技術が使われている事を言った。

そして、それを続けていると、フェンデル自体が消し飛ぶかもしれない、という事も。

ポアソンはもう一度長に話しに行く。

今更だが、パスカル以外のパーティメンバーが空気並みに喋っていない。

「フェンデル政府のやる事にアンマルチア族が直接口を挟む権利はないそうです」

「なら誰が責任者なのかだけ教えてくれない？後は私達がその人に話を付けさせるから」

「その件を担当しているのはフリーエ姉様です」

「えっ」

「フーリエはんが!？」

「あ、お姉ちゃんだったんだ。そうかそうか。なるほど」

フェザントとメイリが驚く傍でパスカルは一人納得していた。

「それでお姉ちゃんはどこ？里にいるの？」

「しばらく前に里を出て今は自分の研究所を構えていますよ」

「へえ、そんな事になってたんだ。じゃ、場所教えて。ちょっと行ってくるから」

「その研究所って言うのはスニーク研究所か？」

「はい、確かそんな名前だったと思います」

フェザントの問いにポアソンが答える。

フェザントは「やっぱり」と呟く。

「フェザント、何でそんなこと知ってるんだ？」

「それはあの人……フー姉さんに会ってから話す」

「フー姉さんって前も言ってたけどもしかしてお姉ちゃんの事？」

フェザントは無言で頷き、踵を返して歩き出す。

ライスも歩き出そうとした途端、ライトルーンが呼び止める。

「何だ？」

「えっとさ、本当に実験止めに行くの？」

「当たり前だろ。急にどうしたんだ？」

「……やっぱ何でもない。行こっか」

ライトルーンは逃げるように走っていく。

ライスも少し違和感を感じたが、気のせいだろうと何も考えず皆の後を歩いて行った。

第45話 フー姉さんⅡパスカルの姉Ⅱ担当者（後書き）

（雪龍）

「年明けから凄い展開になってきてます」

（ルイス）

「ちょっと今の伏線を箇条書きにしようか」

（雪龍）

「そうしないと僕が忘れちゃいそうだしね」

・ラグゼリアの力とは？

・フェザントが『失敗作』

・フェザントとフリーエの関係

・ライトルーンとリバインの関係

（ルイス）

「とまあ、大まかな所はこの位か」

（雪龍）

「細かい所はもう少しあるけどね」

（ルイス）

「次回からもトンデモ展開満載だ！」

（雪龍）

「ではなく、次回はなんとコラボ回です！」

（ルイス）

「『Tales of Vesperia — 魔を断つ刀を持つ少年 —』のシンクとリタが来るらしいぞ」

（雪龍）

「こっちからもルイス達が行くと思います！」

（ルイス）

「メチャクチャに引っかけ回してくるぜ！」

（雪龍）

「うん、そして振り返りにあってくると良い。エターナルさん、何

か要望があつたら感想にお願いします」

(ルイス)

「では次回もお楽しみに！」

コラボ回！～過去ですか？いえいえ異世界です～（前書き）

口調間違ってたらすイマセン！

コラボ回！　過去ですか？　いえいえ異世界です！

ここはテルカ・リュミレースという世界のある宿屋。

「シンク！　出来たわよ！」

部屋に入ってくる茶髪の少女。

少女の名はリタ・モルディオ。

「出来たって何が出来たんだ？」

突然部屋に入って来られても大して驚かず普通に尋ねる茶髪の少年。
少年の名は先程呼ばれた通りシンク。

青いコートを着ており、すぐ手が届く所に刀が置かれてある。

「これよ！　名付けて時転魔導器」
トラベルプラスチック

リタは手に持っている機械をシンクに見せる。

機械と言っても箱に赤，青，黄のボタンが取り付けられている単調な作りのものだ。

その分中身は複雑なのだろうが。

「どういふものなんだ？」

「これを使えば過去や未来に行けるの。……たぶん」

「たぶんってどういう事なんだ？」

「まだ試した事ないから」

試作品の実験台になれという事なのだろうか。

「これでシンクの過去に何があったか解るかもしれないと思ったんだけど……」

「なるほどな……よし、やってみるか」

シンクは側に置いてあった刀、閻魔刀を掴んだ。

「どれが過去に行くボタンなんだ？」

「赤いやつよ。青が未来で黄色は元の場所に戻って来れるわ」

「解った」

シンクは機械の赤いボタンを押す。

すると、二人の体が一瞬だけ光り、次の瞬間にはその場から消えていた。

ここはエフィネアという世界。

時は少し遡ってユ・リベルテの宿屋。

一行は宿屋で休んでいた。

ルイスは一人部屋で、ベッドに寝転がっていた。

その時

「ルイス！これ着てみて！！」

「うおっ!!?」

突然入ってきたエリーに驚くルイス。
思わずベッドから落ちてしまった。

「……何してんの？」

「何してんの？じゃねえよ！ノック位しろよ！てかしてくれよ！してくだい!!」

「わ、解ったから。今度からするって」

未だにドキドキしているが、深呼吸をしてとりあえずエリーの持っているものを見てみる。

どこかで見た事のある黒い服、黒いズボン、黒い靴と何故かこれだけ黄色い腕輪を持っていた。

というより良くこんなに持てるな。

「それってカルタで貰った衣装か？」

「うん！アスベルから借りてきたの」

「へえ、それで何で俺にそれを着ろと言ったわけ？」

「似合いそうだから？」

（何故疑問形!?!）

「メイリとフェザントも着てるんだよ！」

「これをか…?」

その問いにエリーは横に首を振る。

とりあえず見た方が早いと、どこかに行ってしまった。

10分後。

「呼んできたよー！」

エリーがまたもノックなしで入ってくる。

しかし、今度はいつか来るのが解っていたのであまり驚かなかった。

「その格好何なんだ？」

今のエリーは純白のドレスを着ている。

エリー曰く、『気高き姫君』という衣装らしい。

「では、皆入って来てー！」

エリーが言うと、メイリ、フェザントの順番で入ってくる。

メイリは露出度の高さが目立ってしまう『真実の守護者』という衣装。

フェザントは赤いスカーフと首から下げている大きな鞆が特徴的な『凛々の明星の首領』という衣装。（しかも何故かりーゼントもどき）

解る人は解るだろうが、TOVのあの人達の衣装だ。

「どうかな！」

「どうかなっていうか……フェザントのって俺貰わなかった筈だけど」

「儂が貰って来たんよ」

「ああそう……」（何でわざわざ貰ってくるんだよ）

「じゃあルイスも着替えてね！」

「いや、俺は「外で待ってるからー！」……無視かよ」

エリーは言うだけ言って出ていった。
メイリとフェザントもその後続く。

「……これやんなかったら後が怖えよなあ」

ルイスは着替え始めた。

シンク&リタ side

二人は砂漠に倒れていた。
先に起きたのはシンク。

「おい、リタ。しっかりしろ」

「……ん、シンク……？ここ……砂漠？」

リタの意識が戻りシンクは胸を撫で下ろす。
そして少しして周りを見渡す。

砂漠、砂漠、砂漠、街、砂漠……

「リタ、街があるぞ」

少し遠いのはっきりと街が見えた。

「砂漠って事は……マンタイク？」

「かもな。とりあえず行ってみよう」

二人は街に付いて驚いた。

砂漠の中にあるにも拘わらず帝国並に繁栄しているのだから。
マンタイクも反映しているがここはその比ではなかった。

「結界が無い……!!」

ブラステイア

「ああ、というより魔導器自体見かけない。もしかしてかなり昔まで来てしまったんじゃないか？」

確かにどの位過去に行けるのかは聞いていない。

正確に言うとした本人であるリタですら解っていない。

そこまでは作れなかったのだ。

「ま、まずはここがどこなのか聞きましょう」

「そうだな」

二人は人にここが何処なのか聞いてみたが全く知らない場所で困惑した。

本当に大昔に来てしまったのだろうか。

「なありタ。一旦元の世界に戻らないか？」

「そうね」

リタがボタンを押そうとする。
その時シンクがある人物を見つけた。

「ユーリ…!?!」

「えっ？」

確かにそこに二人の良く知る人物がいた。

ただ、二人が知る”ユーリ”という男はもつと髪が長いのだ。

しかし、過去に居るのだから髪の長さが変わっていても可笑しくないと考えた。

「ユーリ！」

二人は”ユーリ”に駆け寄った。

ルイス達side

「ルイスメツチャ似合っとなで！」

「真っ黒でルイスらしいな！」

「カッコイイよ!」

「そ、そうか?」

ルイスの衣装は『黒衣の断罪者』というらしい。
三人に一斉に褒められた事で、こう言う事に慣れていないルイスは
かなり照れる。

「ユーリ!」

「ん? この声は……」

ルイスの耳に聞き慣れた声が届いた。

ルイスだけじゃない、他の三人にもちゃんと聞こえていた。

「リチャード!」

ルイスは振り返る。

さっきの声は紛れもなくリチャードの声だった。

しかし、そこにいたのは茶髪の少年と茶髪の少女、シンクとリタだった。

「「……誰だ?」」

「ユーリじゃないの!?!」

「リチャードやあらへん!?!」

「……あっ!もしかして!」

フェザントがシンクの前に立つ。

「リチャード君も衣装変えたんじゃない!にしても髪の色まで変える
とは気合い入ってるな!」

「えっと……すまない。君は誰だ?」

「またまたあ！服と髪の色変えても声までは変えれてねえもん！バレバレじゃって！」

（このカロルの格好した陽気な人は一体誰なんだ！？）

「ちよつとあんた達誰よ！コスプレ好きの集まりか何か！？」

堪らなくなつてリタは言った。

自分達パーティーメンバーそっくりの格好の者達が居れば、かなり怪しむのは仕方ない。

「……もしかしてシェリア？」

「は？」

「あ！言われてみればカルタで貰つてシェリアにあげた衣装がこんな感じだったよ！」

（コイツらシンクだけじゃなくあたしまで誰かと勘違いしてるみたいね）

「シェリア！？マジでか！？いやあ、最近の技術ってスゲエなあ。色々小さくできるんだな」

ルイスが言った瞬間、ピキッという音が聞こえた。

シンクは音の発生源が何なのか解っているらしく、少し青褪めている。

（それは禁句だ、ユーリもどき）

名前が解らないのでとりあえずユーリもどきと呼ぶ事にした。

「誰が小さいですって…？」

「え……？」

「それにさっきから聞いてれば誰かと勘違いしてるみたいだし…！」

「な、何だ…？」

「いい加減にしなさいよ！！」

リタはどこからか帯を出し、それを振り始める。

「天光満つる処に我はあり」

（こんな所でその術はマズイ！） 「リタ！ここは街中だぞ！」

ルイスを中心に魔法陣が展開される。

「黄泉の門開く処に汝あり！」

（暑さで頭が回ってない！） 「皆！逃げろ！」

魔法陣が天までルイスの頭上に何重にも重なって出来ていく。
そして一番上にある魔法陣からバチバチと雷鳴が聞こえてくる。

「出でよ！神の雷！」

リタがの詠唱が殆ど終わり、魔法陣が全て展開しきった時、ルイスだけは逃げ遅れていた。

「これで終わりよ！インディグネーションッ！！！」

リタの声と共に激しい落雷がルイスを襲った。

一撃必殺。まさにこの言葉が一番しつくりくる大技だった。
大技を喰らったルイスはプスプスと音を立てて焦げている。

「ふうー、これで解ったでしょ。あたしはシェリアじゃなくてリタ
！こっちはリチャードじゃなくてシンクよ！」

「解ったでしょ、ってシェリアと使う術が一緒じゃねえか」

そう、シエリアもインディグネーションが使えるのだ。
リタへの疑いがますます強くなってしまいそうだった。

「しぶといわね。もう一発いつとく？」

「いかねえよ！てか街中で術使うな！！」

あの後、六人は一旦宿屋に戻っていた。（シンクとリタは初めて来たのだが）

リタとシンクはルイス達に自分達の事を説明した。
ついでにルイス達も何故こんな恰好をしているのか説明した。

「なるほどなあ。未来から来たリチャード君とシエリアじゃったんか」

「何でそうなるのよ…！」

「すまん。コイツの事は気にしないでくれ」

「でもここはテルカ・リュミレースっていう世界じゃないし、”ぶらすていあ”なんてのも知らないよ？」

「俺達過去じゃなくて異世界に来てしまったんだな」

時転魔導器だけでも十分凄いのだが、まさか世界を越えてしまうと

は。

恐るべしリタの発明品。

「まあ、ここが過去ではない以上ここに居る意味も無くなった訳だ。帰ろうか、リタ」

「ええ、そうね」

「帰んのか？じゃあな。今度は街中で術使ったりすんなよ」
「しないわよ」

リタはルイスを一瞥した後、黄色いボタンを押す。
しかし、これで帰れるほど人生は甘くなかった。

「あれ？…帰れない？何で!？」

「多分なんやけどさあ」

メイリが機械を見て言った。

「その機械も魔導器ってやつなんやろ？ってことはそれもエアルっちゅうので動いんとちゃうん？」

「そうだけど一体何が言いたい…もしかして……」

「気付いた？」

「メイリ、何の事だ？」

メイリとリタ以外はまだ気付いていないようだ。

リタの頬に冷や汗が流れる。

「この世界にエアルは存在しーひん。ということはその機械は動かないのや」

「けどさっき術使ってたよね？」

「そりゃエリーかて術使えるやろ？それと同じように無意識にやろ

うけど原素^{エレス}を使って術を使ったんやと思うよ」

メイリの言葉に納得するエリー。
そこでエリーは何かを思いつく。

「ならその機械を原素で動くように改造すりゃええんじゃね？」
「まあ理屈的にはそうだけど、あたし原素なんて知らないからどうしようもないわよ」

「それなら一人、頼りになる奴がおるで！」

そう言ってメイリは部屋を出ていった。

数分後、メイリはパスカルと帰ってきた。

メイリの言っていた”頼りになる奴”とはパスカルの事だった。

「あたしパスカル、よろしくね！」

「俺はシンクだ」

「リタよ」

「おっ、メイリの好きそうなイケメンだ！」

「せやねん！イケメンに囲まれてウチ幸せやわあ」

「こんな奴で大丈夫なの：？」

「ふむふむ、この機械かあ」

パスカルは機械を舐めるように見る。

そして難しそうな顔をする。

「改造は出来るけどある材料が必要だよ、これ」

「材料って何なんだ？」

「ストラタサボテンと千切られたページだよ」

機械に全く無縁な単語が出てきて驚く六人。

幸いどちらもストラタで取れる物だ。

「どこにあるんだ？」

「千切られたページはセイブル・イゾレにあるよ。ストラタサボテンは……砂漠のどこかにある筈だよ」

「どこかってサボテンなら来る途中に結構あったぞ」

「あんな大きさじゃ駄目だよ。できればあれの五倍は欲しいね」

「「五倍!？」」

サボテンの大きさを知っている物なら五倍の凄さが解る。

今まで見てきた物でも80〜100?位の大きさだった。

その五倍となると4〜5m位となる。

「そんなのあんのか!？」

「無いならこんな事言わないよ」

「それなら捜しに行ってくる。サボテンとページだな？」

「行ってくるってお前セイブル・イゾレがどこにあるか知らねえだろ」

凶星を突かれシンクは固まる。

ルイスは仕方ないという風に溜め息を吐く。

「ここまで来て放っとく訳にはいかねえし手伝ってやるよ」

「そだね。私も手伝うよ」

「ほんならウチも」

「儂もじゃ」

「あたしも」

「……ありがとう。助かるよ」

シンクはルイス達に一度頭を下げる。

「なら手っ取り早く済ませる為に二手に分かれようか」

四人のチームがサボテン、三人のチームがページを取りに行く事にした。

チームは

ルイス、シンク、リタ、エリーチームと

メイリ、フェザント、パスカルチームになった。

因みに分け方はグーパー分けだった。

「よし！行こう！」

ルイス、シンク、リタ、エリーの四人は当てもなく砂漠を歩いていった。

普通のサボテンなら簡単に見つかるのだが4m以上のサボテン等見つからない。

黄○伝説並みに難しいかもしれない。

「ねえ、本当にあるのかな」

「パスカルは何処かにあるって言ってたけどさ。本当はどうか分かんねえな」

「もしないなら俺達はかなり困るんだが」

「ちよっと！ネガティブな事言わないでよ」

四人がそんな話をしていると数匹の魔物モンスターが現れた。

四人はそれぞれ武器を構える。

シンクはチラッとルイスの方を見た。

「ルイスも左利きなんだな」

「いや、俺は右利きだが刀を振る時だけは左手なんだ。てかルイスも”ってどういう事だ？」

「俺の知り合いも左利きなんだ」

「てかその格好のせいで余計本物に見えんのよ」

そんなこんな言っているとエリーが魔物に向かっていく。

「えいっ！やあっ！そこだっ！突撃い！！」

エリーは次々と魔物を倒していく。

「灼熱の軌跡を以って野卑なる蛮行を滅せよ！スパイラルフレア！」

リタの術が魔物を燃やしていく。

そのそばに居たルイスは

「ちよっ！熱っ！砂漠で炎系の術使わないでくれよ！紅蓮剣！」

「あんたも使ってんじゃない！ファイアボール！」

「だからそれも炎系だろ！炎烈牙！」

「二人とも舌嚙むなよ！紅蓮斬！」

「……何で皆して炎系の術と技使ってるんだろう」

正直な所エリーも使いたかったが、炎系の技を持っていなかった。戦闘が終わった後の三人は汗だくだったとか。

「はあ、はあ……ん、あれは……」

ルイスの約10m先に大きなサボテンが見えた。

「デケエぞー！」

四人はサボテンに駆け寄る。

ルイス達等比ではない位に大きい。

「リタ、メジャー持ってるか？」

「あるわよ、はい」

「ありがとう」

シンクはリタから借りたメジャーを使い、サボテンの大きさを測る。

「……3m82？」

「駄目かッ！！」

「そんな……」

「皆！あれ見て！」

エリーの指さした先には大きなサボテンがあった。恐らくこのサボテンより大きいだろう。

四人は次のサボテンの方に駆け寄る。

そして再度シンクがメジャーで大きさを測る。

「4m58?だ」

「よしっ！早く持って帰ろうぜ！」

ルイスはサボテンを根元から切り取る。

そして帰ろうとした矢先に魔物の群れが現れた。

先頭には大きな熊の様な魔物がいた。

「コイツ……強いぞ」

「ええ、見た感じヤバそうね」

「周りの奴は私とリタちゃんです。どうにかするからルイスとシンク君は真ん中の大きいのお願い！」

「了解！行くぞシンク！」

ルイスは魔物に向かっていく。

「喰らえ！翔風輪！」

風を纏わせた刃で斬り上げる。

しかし、重たくて持ちあがらない。

「疾走居合！」

目にも止まらぬ居合で魔物を斬り裂く。

魔物は大きな右腕でルイスを吹き飛ばした。

「ルイス！」

「大丈夫だ！それより氣い抜くなよ」

「ああ」

魔物が腕を叩きつけてくる。

二人はそれを躲す。

「裂壊桜！」

「太刀影！」

赤い衝撃波と黒い斬撃が魔物に襲いかかる。

熊は少しよろめいたものの大したダメージにはなっていないかった。

「全然喰らってねえな」

「翠緑の牙よ、その豪腕なる顎で全てを噛み砕け、アベンジャーバイト！」

シンクの術が風の牙で熊を噛み砕く。

「まさか使う術までリチャードとは一緒とは思わなかった！」

「そうなのか？」

ルイスは本物なのではないかと少し思ってしまう。

違うのは解っていてもだ。

「次で最後にしようかな」

ルイスは魔神剣を一発放つ。

「行くぜ！」

ルイスは右手を前に出し、炎の鎖を出現させ、魔物に巻きつける。

「次で詰みだ！この技で塵と化せ！」

剣を横に構える。

そして一気に斬り抜ける。

「紅蓮！」

炎の鎖を切り離す。

「爆鎖塵！！」

最後の掛け声と共に炎の鎖が大爆発を起こした。

「これでどうだ！？」

ルイスは魔物を確認する。

魔物はまだ立っていた。

「マジかよ」

「止めは任せろ！鳳凰天駆！！」

炎を鳳凰の翼のように纏い、魔物に向かっていく。
そしてすれ違い様に炎の翼で魔物を燃やす。

「これで決める！」

シンクは全身に炎を纏って魔物を斬り抜ける。

「緋凰、絶炎衝！！」

シンクの掛け声で地面から炎が噴き出し、魔物を焼き尽くした。魔物は倒れたまま完全に動かなくなった。

「スゲーな、シンク」

「そっちこそ」

二人はエリーとリタを確認する。
どうやら向こうも終わったようだ。

四人は宿屋まで戻ってきた。

千切られたページを取ってくるチームも帰って来ていた。

「よし、じゃあ早速始めるよ」

パスカルは機械と千切られたページと巨大ストラタサボテンを持って部屋から出ていった。

ここでは出来ないのだろうか。

数十分後。

パスカルが帰ってきた。

「これで原素で動くようになる筈だよ！」

パスカルはシンクに機械を渡す。

姿形は変わっていないがちゃんと使えるようになっていいるらしい。

「これでお別れだな」

「つつても半日も一緒に居なかったけどな」

シンクとリタがこっちの世界に来てまだ5時間程しか経っていない。

「ルイス、本当にありがとう。助かったよ」

「別に良いよ。やりたい事やっただけだ」

「それでもありがとう」

シンクは右手を差し出す。

ルイスも右手を差し出し、握手を交わす。

「じゃあな」

「ああ、元気だな」

握手をし終わったシンクは今度はリタの肩に手を置く。

そして黄色いボタンを押すと、二人の身体が光に包まれ消えた。

「行っちゃったね」

「ホンマに異世界から来とったんやな」

「そうじゃな」

「ま、無事に帰れて良かったんじゃねえか？」

「もしかしたらまた異世界に飛んでたりして」

「縁起でもねえ事言うなよ」

シンク side

二人は宿屋の一室に居た。

ちゃんと帰って来れたようだ。

「帰って来れて良かったな」

「そうね……」

シンクはリタの表情が暗いのに気付いた。

「ごめんね、あたしのせいでこんな事になっちゃって」

「ああ、そんな事か」

「そんな事って……」

シンクはリタの頭に手を置く。

「無事帰って来れたんだ。それで良いだろ？」

「そうだけど…。こ、今度こそはちゃんとしたの作るから！」

「いや、もう良いよ」

「え…？」

「わざわざ過去に行って調べなくても現在いま調べれば良いんだし、それに現在の俺いまにはリタがいるからな」

「そ、それってどういう…！？／／／」

「これからもよろしくな、リタ」

「え、ええ／／／」

テルカ・リュミレースでもエフィネアでもまだ冒険は終わらない。

コラボ回！　過去ですか？　いえいえ異世界です　（後書き）

（エリー）

「今回はシンク君とリタちゃんに来てもらったよ！」

（シンク）

「『Tales of Vesperia　―魔を断つ刀を持つ少年―』の主人公のシンクだ」

（リタ）

「リタよ」

（雪龍）

「今回エフィネアに来てどうだった？」

（シンク）

「え？　あ……楽しかった、です」

（ルイス）

「氣遣わせるなよ！」

（エリー）

「私は楽しかったよ」

（リタ）

「あたしはまあまあね」

（ルイス）

「今回本気でグダグダにならないように頑張ってたな」

（雪龍）

「珍しくね」　（キリッ）

（ルイス）

「常に心掛けろよ」

（シンク）

「……いつもこんな感じなのか？」

（エリー）

「う、うん」

(リタ)

「同情するわ」

(エリー)

「あはは……き、気を取り直して！エターナルさんの『Tales of Vesperia――魔を断つ刀を持つ少年――』。面白いので是非見てみてください。ついでに今後の『TOGA』もよろしくね」

(リタ)

「そっちがついでで良いの？」

(エリー)

「大丈夫大丈夫！では、次回もお楽しみに」

第46話 スニーク研究所より（前書き）

最近気になってるんですけど、フェザントの方言皆さん理解できてます？

自分でも書いてて何言ってるんだろうって思う時あるんですけど…。

「これどういう意味？」っていうのあったらいつでも言って下さい。

第46話 スニーク研究所より

一行はフェザントの案内で、スニーク研究所に辿り着いた。フェザントの道案内はいささか不安だったが、ちゃんと到着出来て良かった、と思ったのは恐らく全員だろう。

「ここがお姉ちゃんの研究所か。こんなに立派だとは思わなかったよ。やっぱりお姉ちゃんは凄いな」

「ここは元からフリー姉さんの研究所だった訳じゃねえんよ」

「……？」

「それも含めてフリー姉さんの所で話すよ」

パスカルは首を傾げる。

そんなパスカルのマフラーを引っ張る者がいた。ソフィである。若干息が出来なくなっただけで危なかった。

「パスカルのお姉さんってどんな人？」

「年はあたしの一つ上。昔っから何でもできる人でね。色んな事に手を出してたよ」

「へえ、フリーエさんってもしかして頭良いの？」

エリーのとんちんかんな問いに気温が少し下がった気がした。

一般的に言う”バカな人”が技術者集団であるアンマルチア族に居る筈がない。

”バカみたいだな”なら目の前に居るが。

「私より頭良かったりして——」

「エリーは一旦に静かにしような」

「まあ、お姉ちゃんなら話をすればわかってくれるよ」

そう言うパスカルはとても嬉しそうに研究所へと入っていく。
姉に会えるのが嬉しいのだろう。

「そう言えばここには大^{バルキネスクリアス}石はあるんじゃないか？」

「それだと話が早くて良いんだけどね。とにかくにもお姉ちゃんに会ってみたいと分かんないよ」

色々と聞く事が増えてしまった。

一行は研究所内へと入っていった。

研究所内は寒くなく、むしろ暖かい位だった。

もし研究所内が寒かったら研究する方もやってられないだろう。

「……ん？何だ？この箱」

一行は部屋を一つずつ見てフリーエを捜している。

ある部屋の中に赤い大きな箱があった。

研究所内にある物は危険だから触るな、と言われている。

しかし、人間というのはするなと言われた事ほどうなってしまう。

「バレねえだろ……」

ルイスはその箱に触れてみる。

それが思いの外軽く、簡単に動いてしまった。
その時だった。

《エネルギーサーキットヲ確認シマシタ。スタンバイモードニ入り
マス》

「な、何だ!？」

「皆!勝手に何も触ってないよな!？」

どこからか声がした後、歯車が回る音が聞こえてくる。

アスベルが周りを見ながら言う。

明らかにルイスだけ挙動がおかしい。

「……ルイス、何も触ってないよな？」

「へ!？あ、ああ、べ、別に俺は何も……」

「何や?この箱」

「そ、それには触っちゃ駄目だっ!!」

「え?ルイス、この箱何か知っとんの？」

「いやあ…その……」

「ルイス、ちゃんと言ってくれ」

「……はい」

《開放シマス》

またどこからか声が聞こえて全員焦る。

ルイスだけは今度こそ何もしていない筈だ、と思っている。
向こう側ソフィが何かを見ている。

「ソフィ、何見てんの？」

「さっきこれに触ったら声が出た」

二度目の声の原因はソフィのようだ。

その後、ルイスはしつかりはつきり嘘なく自分がした事を伝えた。
それでこの研究所の進み方が解ったのは言うまでも無い。

オリジナルチャット————疑心暗鬼って怖いね————

(アス) 「頼むからもう勝手に物を触らないでくれよ？」

(ルイ) 「悪かった。もう大丈夫だ」

ガタン プシュー チャリン

(アス) 「………ルイス？」

(ルイ) 「え？ いや、今のは俺じゃないぞ。てかこの音は————
——」

(メイ) 「おっ、エレスポットにセットしとったセージが出来とる
！さっそく貰っとこ」

(アス) 「なんだ、エレスポットだったのか」

(ルイ) 「普段から聞き慣れてる音でしょーが」

「しかし誰もいないね」

エリーが言った通り本当に誰もいない。
いるのは何故か魔物モンスターばかり。

「もしかしてここって生体実験でもしてんのか？」
「そう言えばお姉ちゃん生物が専門分野だったっけ」

その言葉にフェザント一人が反応したが、それに気付いたのはライ
トルーンだけだった。

「そう言えばさっき変な魔物が装置の中に入ってたな」

先程入った部屋に大きな装置があった。

その装置の中には大きな虎の様な魔物が入っていたのだ。
シェリア曰く、その魔物は捕まった、というより最初から装置の中
に居たように見えたらしい。

「フェンデルは生物兵器の研究をしていると聞いた事がある。ここ
はその施設なのかもな」

「その生物兵器ってのはアイツの事か…？」

全員がルイスの指差した方を見る。

その方向には先程装置の中に居た魔物、ヴェーレスがいた。

「こいつさっきの奴らより強そうだぞ！」

アスベルが言い終わる前にフェザントは弓を放っていた。
だがそれは簡単に躲される。

「コイツは殺さんで欲しいんじゃけど……良いか？」

「何でだ!？」

「頼む」

「……わーったよ」

「ルイス!？………わかった」

アスベルもルイスの表情を見て決心したようだ。

「獲物は眠れ! クラックビースト!」

「神聖なる雫よ、この名を以ちて悪しきを散らせ! ライトニングブラスター!」

「呪縛、其は絡みつく執念、バインドゴースト!」

「悪しき魂破滅を齎し、聖なる魂浄化せよ! セイクリッドブレイカー!」

「乱れ飛べ翠影! ウインドニードル!」

「煌めく光! フォトン!」

ヒューバートの獣の銃弾、シェリアの雷、マリクの鎖、メイリの光と闇のレーザー、パスカル風の刃、エリーの光がそれぞれヴェーレスに向かっていく。

動きが早く、少し掠りはしたものの殆ど躲される。

「まずはあの動きを止めねえとな」

ルイスはヴェーレスに向かって駆け出す。

「響風閃!」

ルイスの風を纏った一閃がヴェーレスの左足に炸裂し、転倒させる。

「裂壊桜！」

「アストラルベルト！」

転倒したヴェーレスにアスベルとソフィが追撃を加える。
しかしヴェーレスは何もなかったかのように立ち上がる。

「やっぱこれだけじゃ駄目か」

「獣には獣だよ。夕闇喰らう咎めの牙で噛み砕け！獅子嚇し！」
ししおび

ヴェーレスの頭上から獅子が落ちてくる。

そのまま踏みつけた後、鋭い牙で噛みついた。

「そして、飛び立て！豪散鳥！」

「行けっ！」

ライトルーンの鳥とフェザントが矢が同時に放たれる。

ライトルーンはそこで連続攻撃を終えたが、フェザントはまだ続く。

「連舞爪！」
れんぶそう

三本の矢を同時に放つ。

矢が飛行中に重なっており、爪のような形の力を纏って引っ掻いたような傷を与えた。

「暴雀武刃！」
アンチキラー

フェザントが標的を定めず、滅茶苦茶に矢を放つ。

しかし、その数本の矢は軌道を変えて全てヴェーレスに向かっていった。

この自由で勝手な様こそまさに傍若無人。

「天駆け急ぐ炎の結晶、ヒートクリスタル！」

天から比属性の結晶がヴェーレスに向けて降り注ぐ。

「沈めてやる！」

フェザントは普段の詠唱の構えをする

「蒼穹に瞬く流星を見よ、遙か彼方の栄光を見よ！」

ヴェーレスの頭上に大きな魔法陣が一つ展開される。

「撃ち碎け、八つの生命、一つの創世！」

大きな魔法陣の周りに、小さな魔法陣が八つできる。

「スペースエレメンツ！！」

八つの魔法陣から小さい流星が放たれ、大きな魔法陣から太陽を思わせる火球が落とされた。

ヴェーレスは火球に呑み込まれた。

「おいおい、自分で殺すなって言っと言ってやりすぎだろ」

「大丈夫。ヴェーレスは戦闘に特化した魔物。無駄にしぶとい」
「そういう事は先に言えよ」

火球が消えた後、その場にヴェーレスが倒れていた。
まだ立ち上がろうと動いている。

フェザントはヴェーレスに近付いていく。

「もう戦わんでもええ。無理するな」

フェザントが撫でるとヴェーレスは落ち着いた。

「まさかヴェーレスを倒してしまうなんてね」

「その声……フリーさんがいた」

フェザントが振り返った先にはパスカルの姉であり、一行が捜していた女性、フリーエがいた。

第46話 スニーク研究所より（後書き）

（雪龍）

「今回からオリ技紹介の説明部分を失くします。術技紹介見てください」

（ルイス）

「お前も読者様も二度手間じゃねえか」

セイクリッドブレイカー

【B技／？4／威力…880／クリティカル率…100／ヒット数…

5】

有効特性…衝撃，精神体

使用者…メイリ

獅子嚇し
ししおど

【B技／？4／威力…790／クリティカル率…150／ヒット数…

4】

有効特性…斬撃，猛毒

使用者…ライトルーン

連舞爪
れんぶそう

【A技／？2／威力…220／クリティカル率…80／ヒット数…

2】

有効特性…射撃，飛行，鳥

使用者…フェザント

暴雀武刃
アンチキラー

【A技／？3／威力…280／クリティカル率…80／ヒット数…

5】

有効特性…射撃，不定形
使用者…フェザント

スペースエレメンツ

【秘奥義／威力…3500／ヒット数…10】

有効特性…竜族，打撃，妖魔

使用者…フェザント

（雪龍）

「ふう…」

（ルイス）

「ふう…じゃねえよ！！二度手間だって言ってるだろ！！」

（雪龍）

「仕方ないよ。オリキャラ多いんだし、秘奥義三つずつだし……大変なんだよ」

（ルイス）

「なら余計にだろ！！」

（雪龍）

「ありゃバレた？因みに今回フェザントの第二秘奥義を早く出しちゃいました。今回はフェザントの過去が明らかになるかもしれないから丁度良いかなあっと」

（ルイス）

「誰も聞いてねえよ！！」

（雪龍）

「次回もお楽しみに」

（ルイス）

「お前は俺の話を聞けよッ！！」

第47話 失敗作の雉の過去

「フリー姉さん！」

「フェザント！？ 貴方何故ここに……それより無事で良かったわ」

フリーエがフェザントに微笑む。

「感動の再会の最中に悪いが聞きたい事が山程あるんだ」

そう言ってルイスはフェザントを見る。

フェザントはルイスの視線に気付いて頷いた。

「フリー姉さんの所まで来たんじゃけえちゃんと話すわ。儂の過去と正体を————」

フェザントの過去は決して華やかなものではなかった。

これは15年前、フェザントがまだ4歳の頃の話。

フェザントは研究所で暮らしていた。

その研究所というのは『スニーク研究所』である。

勿論彼は研究者として暮らしていた訳ではない。

モルモット
実験体として暮らしていたのだ。

と言っても鎖で繋がれていたりはされておらず、研究所内を自由に歩くのを許可されていた。

「なーなー、今日は何するん？」

「……おい、失敗作のくせに話しかけてくるな」

そう言って男はフェザントを蹴り飛ばした。

フェザントはいつもこの様に蔑んだ目で見られ、迫害された。

しかし彼は笑顔を忘れなかった。

そんな彼を研究者達はより気味悪がった。

「今日はおらんのんかなあ……。あ、おった」

フェザントは少女を見つけるなり走り出した。

その少女こそがフリーエである。

まだ彼女は8歳だった。

「フリー姉さーん！」

「えっ？ ちょっと、フェザント!？」

フェザントはタツクルの様な勢いでフリーエに抱きつく。

流石に相手がまだ4歳だった為、倒れたりはしなかった。

「フリー姉さん！ 今日は何して遊ぶ？」

「私いつもあなたと遊びに来てるわけじゃないんだけど……」

フリーエはアンマルチア族の科学者として研究の手伝いに来ているのだ。

だが、まだ子供なためすることはあまりなく、いつもフェザントと遊んでいる。

時は流れてフェザントが15歳の時。

フリーエはある研究室に呼ばれた。

そこは生物兵器を造っている所だった。

「教授、何か用ですか？」

「ああ、さっき会議があってね。失敗作についてやっと決まった事があるんだ」

「フェザントは失敗作なんかではありません。彼は一人の人間です」

「あれ…？君は知らないんだっけ？」

教授は少し驚いたふうによりエに言う。

フリーエには何の事だか解っていない。

「アレは人間じゃないんだ」

「え…？」

「この話を知らないって事は我々の実験の内容も知らないよね。君も立派な研究者だから教えてあげようかな」

フリーエは黙って話を聞いている。

「我々は人間と魔物モンスターの混合種を造る研究をしているんだよ」

「なっ…！？」

「賢い君ならもう解るよね？アレは————」

この先は聞きたくなかった。
頭の中を最悪な考えしか浮かばなかった。

「半分人間であり、半分魔物なんだよ」

「そん、な……」

「でさ、アレをやっと処分する事になったんだ」

「処分！？彼は……」

「もう決まった事なんだ。今更変える事は出来ない」

そう言う教授は笑顔で「もう行って良い」と言った。
フリーエは急いでフェザントの下に向かった。

「フェザント……！！」

「呼んだ？フー姉さん」

「へっ！？」

突然背後から呼ばれて驚くフリーエ。
背後に居たのに全く気付かなかった。
というよりいつから居たのだろう。

「フェザント、早くここから逃げて！」

「ん？何で？」

「良いから早く！じゃないと貴方は————」

「ああ、もしかしてやっと決まったんか」

「……え……？」

フリーエはキョトンとした顔をする。
対するフェザントは笑っている。

「いつか来ると思って何年も待ったんじゃけどやっと来たかあ」

「貴方自分の事知ってたの…?」

「そりゃあ自分の事位知っとるよ。儂の血は半分魔物で、失敗作じやけえ処分されるんじやろ?」

「何故そんな事を笑って平気で言えるの? 死んでしまうのよ!? 何もできなくなるのよ!?」

今度はフェザントがキョトンとした顔をする。

「儂の命は儂を造った研究者達之物。それをどうしようとアイツらの勝手じやろ?」

そこまで言うのとフェザントの頬に衝撃が走った。
フリーエの目に涙が浮かんでいる。

「貴方の命は貴方の物よ! 命を他人にあげるような事をしては駄目
!!!」

「そう言ったってどうすりゃええんよ…! 今更外に出たって外での生き方なんて知らん! それに半分魔物の儂がまともに生きていける訳ないじやろ!!!」

「なら貴方が人間に戻れるように研究する! 外での生き方も教えてあげる!!! だから今は命を守って!!!」

胸が熱くなってきた。

この感覚は一体何…?

前に居る女性ひとが泣いてる。

何で? 何でじゃったっけ?

儂は失敗作^{エドセル}。儂の命は研究者達の物？

いや、前に居る儂の大好きな女性^{ひつ}は儂に言った。

儂は、儂は――――

「儂は………生きとって、良いん……？」

「ええ、当然よ」

それから後の事はフェザントは良く覚えていない。
ただ必死に逃げた事は覚えている。
フリーエと別れてから雪山を必死に走った。

どのくらい走っただろうか。

周りにはもう雪は無いし、砦を越えたことからここはウィンドルの
どこかだが、そんな事はフェザントには解らない。
足はボロ雑巾のように汚れていて傷だらけだった。

「もう……無理、かな……」

「大丈夫か！？おい！返事をしてくれ！」

誰かがフェザントを抱え起こす。

その人はフェザントを抱えて走り出した。

フェザントが目を覚ました。

全く知らない天井、それに布団まである。
間違いなく研究所ではなかった。

「儂は……」

「おや、起きたかい？ お連れさんならもう行っちゃったよ」

恐らくここは宿屋だろう。

そしてこの人はこの女将だろう。

「代金ならお連れさんが払ったからいらないよ。まあ、今日はゆっくりにしていきな！ 明日からはまた代金払って貰うからね！」

そう言うと女将は部屋を出て行った。

「……フリー姉さん」

フェザントは部屋を飛び出した。

何年かかるか解らない、だが絶対にフリーエの下に戻ると決めた。

「まずはどこに向かえばええんじやろうか」

彼はとりあえず赴くままに歩き出した。

第47話 失敗作の雉の過去（後書き）

（雪龍）

「ちよつと報告があります。キャラ紹介の部分でフェザントとリチャードが出逢った時が、ラントから帰った後となっていました、二年前に変更しました」

（ルイス）

「設定ちゃんと考えとけよ」

（雪龍）

「申し訳ございませんでした」

（ルイス）

「今回のタイトル、『失敗作の雉』ってどういう事だ？」

（雪龍）

「ああ、あれは雉は英語で『フェザント』だからああいうタイトルになった訳」

（ルイス）

「何で雉？」

（雪龍）

「岡山の県鳥なんだって」

（ルイス）

「へえ……」

（雪龍）

「えー、次回からはまた原作沿いに戻ります。では、次回もお楽しみに」

（ルイス）

「感想も待ってまーす！」

第48話 火の？石の恐ろしさ

一行の間に重い沈黙が流れる。

「とまあ、儂はこんな感じ。本題は別にあるじゃろ？」

「……フェザント、お前はもう殺されても良いなんて考えてないよな？」

「当たり前じゃろ。儂は生きるって決めた」

「…そうか、なら良いんだ」

ルイスはフリーエに顔を向ける。

少し辛そうな顔をしているが、こちらも少し急いでいる。
あまり長い時間を使う訳にはいかない。

「あんな話の後で悪いんだがアンタに頼みたい事がある」

「……何かしら？」

フォルブランニル

「大紅蓮石の実験を止めてくれ」

「何故？」

「あの実験をあのまま続けると大変な事になるんだよ」

パスカルが割って入ってくる。

「あの研究は未完成なんだよ」

「言い掛かりをつける気!？」

「そうじゃないけど……」

怒鳴られて少し考え込むパスカル。

そして良い事を思いついたとばかりに手を叩いた。

「説明するより実験する方が早いかも。その辺に？石の欠片落ちて
ない？豆粒くらいの大きさで良いんだけど」

「あったよ」

「早っ」

ソフィが手を差し出す。

手のひらには赤い？石の欠片があった。

パスカルはそれを貰い、近くにある機械に入れる。

？石は機械の中の液体に浸かると原素を放出し始める。

「驚いた？火の？石の原素をここまで効率的に引き出せるのは画期的な事なのよ」

パスカルはフリーエの言葉を聞くが、作業をまだ続ける。

「ここからペチペチ、ビシツと」

「ちよつとパスカル、何を……」

フリーエが怪訝そうな目でパスカルを見る。

その時、パスカルが振り返る。

「皆！離れて！」

機械の中の？石が途轍もない量の原素を放出し始める。

このままだと爆発してしまう。

皆が離れていくが、一番近くに居るフリーエは気付くのが遅かった。

「危ない！お姉ちゃん！」

パスカルが叫んだ瞬間、？石が爆発し、ガラスの破片が飛び散る。

「大丈夫か？フー姉さん」

「あ、ありがとう」

フーリエを庇ったのはフェザントだった。

ガラスの破片が刺さり、背中から大量に流血している。

「貴方、怪我を…！」

「大丈夫じゃって。儂は人より傷の治りが早えけんこの位」

しかし、そんなフェザントをシェリアとエリーが強引に引っ張っていく。

二人曰く「全然大丈夫じゃないでしょ！」だそうだ。

二人はフェザントの治療に入った。

「……今のは何だったんですか？」

「火の？石はこれが厄介なんだよ。原素を抽出する時に一定以上の圧力を掛けると暴走を始めちゃうの。こうなると止められないよ。終いには周囲の原素濃度が極限に達してドン！！ってなるわけ。武器に使う位なら被害も知れてるけど大？石となるとシャレにならないよ」

ルイスにはいまいちピンと来ていなかった。

そんなルイスを見かねてメイリが近付いて耳打ちをする。

（要は原素を一気に取り出そうとしたら爆発を起こすっちゅうことや）

（ふむふむ）

（ほんで豆粒程度の？石であの爆発や。大？石やとんでもない事になんねん）

（成る程な）

これでルイスにも解った。

因みに最初のパスカルの説明で解っていなかったのはルイスだけだった。

ソフィでさえ解っていたのだ。

「パスカル……もしかしてあなたが研究を途中で放棄したのは……」

「うん、さっきに結果が見えたから諦めちゃった」

「結果が見えたっっちゃうか見てしもうた、の方が正しいやろうけど」

メイリはベラニックに行くまでに見た穴の事について言っているのだろう。

あんな物を作ってしまったからこそ研究を止めたのだ。

「だからお姉ちゃん、早く実験を止めさせないと！ 大事故が起きないうちにさ！」

「……できないわよ。そんな事」

「うーん、自分じゃ言い辛い？ だったら場所を教えて。あたしが代わりに言ってくるよ」

「あなた、私を馬鹿にしてるの……？」

フリーエが俯きながら呟くように言う。

握っている拳が震えている。

「何が先に結果が見えたから諦めたよ！ あなたが放棄した研究を完成させるのにどれだけ苦労したと思ってるの！？ 何でも軽々となしていつも私のやる事を真似して先に結果を出して！！ 私が必死に辿り着いた先にいつもあなたが先回りしてる！ その気持ち判る！？」

「お、お姉ちゃん……」

フリーエが言い終わるとアスベルが近寄ってくる。

「フリーエさん、俺達はどうしても大？石の所へ行かなければなりません。今、フェンデルの大？石は事故の危険以外にも重大な危機に見舞われているからです。大？石の原素が他の二つと同様にこのままでは消失するかもしれません」

「他の、二つですって……？」

「せやねん。ウチらは何としてもその危機を止めなアカンのや。せやから大？石の場所教えてくれへん？」

フリーエは口元に手を当てて考える。

「場所は私も知らないわ。実験の責任者なら知っているけど」

「その人なんて人？」

「フェンデル軍技術将校、カーツ・ベッセルよ」

「カーツ・ベッセルだと……？」

マリクが驚きの声を上げる。

「何、知り合い？」

「ああ、まさかこんな所で再びあいつと繋がるとは……」

「そのカーツと言う人は今どこに居るんですか？」

「軍の技術省は帝都にあるわ。ただし、彼がそこにいるかどうかは解らない」

「ありがとうございます。これだけ聞ければ十分です。俺達はそこに行ってみます」

「好きにすればいいわ。私には関係ない事よ」

フリーエはチラッとパスカルを見たが、すぐに視線をフェザントに向けた。

「フェザント、貴方には少し話があるわ」

「……聞かねえ方が良いっばいな。俺達は先に外に出てるから」

ルイスが言うと、フェザント以外の一行は外に出ていく。

「……貴方も行く気なの？」

「うん、大切な友達を会いに行かにはやおえんのんよ」

「！……そう、なら一つ約束をして。絶対帰ってくるのよ」

「…フリー姉さん、今も儂を戻す研究を続けとん？」

「ええ、でもまだ完成してないわ。ごめんなさい…」

フェザントはニコツと笑ってフリーエの手をとった。

「ありがとな」

「と、突然何よ」

フリーエの顔が赤くなっていく。

フェザントは気付いてないようだ。

「昔は殺されても良いと思っただけど今は違う。変わったのはフリー姉さんのおかげじゃ」

「私は別に……」

「じゃっ、行ってくるな！」

「えっ、ああ…気を付けるのよ」

突然話が飛んでいったことに少し驚きながらもちゃんと返すフリーエ。

フェザントは笑顔で手を振りながら走って行った。

彼は生物兵器の実験としては失敗作だったかもしれない。

だが、半分魔物だとしても、一人の人間としては失敗作などではないだろう。

第48話　火の？石の恐ろしさ（後書き）

（雪龍）

「今回は台詞が多くて困っちゃったよね」

（ルイス）

「いや、俺は知らねえよ」

（雪龍）

「次回はルイスが悪巧みをするそうです」

（ルイス）

「な、何だよ」

（雪龍）

「次回予告……的な？」

（ルイス）

「そうか、今回から始めたのか」

（雪龍）

「いや、次回からするかは分からない」

（ルイス）

「適当か！」

（雪龍）

「次回もお楽しみに。感想待ってまーす」

（ルイス）

「最近お前がよく強引に終わらせるよな……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5820r/>

テイルズオブグレイセス+α ～守る強さを炎と共に～

2012年1月13日20時45分発行